

岐阜県文化財保護センター

調査報告書 第116集

三枝城跡

2011

岐阜県文化財保護センター

み
三

えだ
枝

じょう
城

あと
跡

2011

岐阜県文化財保護センター



東尾根地区全景（東南東から、平成18年11月撮影）



北東尾根・北東山麓地区全景（北西から、平成20年10月撮影）



竪穴住居跡 SB1 完掘状況（北西から）



北東山麓地区出土遺物

序

岐阜県北部の飛騨地方は、豊かな山林と山あいを流れる数々の清流によって育まれた美しい自然のなかにあります。古くから高度な木工技術に基づいた木の文化を育むとともに、近隣の各地域との盛んな交流により独特の文化圏を築き上げたことが知られています。その中心都市である高山市には、国指定史跡の堂之上遺跡（縄文時代）、赤保木瓦窯跡（奈良時代）、高山陣屋跡（江戸時代）をはじめとする、数多くの注目すべき遺跡があります。

このたび、国土交通省中部地方整備局高山国道事務所による中部縦貫自動車道及び高山国府バイパスの建設に伴い、高山市上切町にある三枝城跡の発掘調査を実施しました。三枝城跡は、文献にも記録が残る戦国時代の山城跡です。今回は主郭東側を広範囲にわたって調査し、山城としての防御機能を高めるための曲輪の跡や投石用の飛礫とみられる集石を発見しました。また、山城の時代よりも古い時代の遺物の中には、平安時代の仏教系遺物も含まれ、当時、この地が信仰や祭祀に関係する場であったことも明らかとなりました。

本書は、平成18年度と平成20年度に実施した発掘調査の成果をまとめたものです。本報告書が埋蔵文化財に対する認識を深めるとともに、当地の歴史研究の一助となれば幸いです。

最後に、発掘調査及び出土遺物の整理・報告書作成に当たりまして、多大な御支援・御協力をいただきました関係諸機関並びに関係者各位、高山市教育委員会、地元地区の皆様に深く感謝申し上げます。

平成23年3月

岐阜県文化財保護センター
所長 高橋 照美

例　言

- 1 本書は、岐阜県高山市上切町に所在する三枝城跡（岐阜県遺跡番号21203-06090）の発掘調査報告書である。
- 2 本調査は、中部縦貫自動車道に伴うもので、国土交通省中部地方整備局高山国道事務所から岐阜県が委託を受けた。発掘調査及び整理等作業は、財団法人岐阜県教育文化財団文化財保護センター（平成21年4月に岐阜県文化財保護センターに改組）が実施した。
- 3 千田嘉博奈良大学教授の指導のもとに、発掘調査は平成18年度と20年度に、整理作業は平成19・21・22年度に実施した。
- 4 発掘調査及び整理作業の担当は、本書第1章第2節に一括掲載した。
- 5 本書の執筆は、第2章第2節は中澤正樹と相馬重典、第5章第1節は藤田英博、第5章第2節は小瀬忠司、第5章第3節・第4節は中澤が行い、それら以外は中澤と小瀬が行った。編集は小瀬が行った。
- 6 発掘調査における作業員雇用、現場管理、掘削、測量、景観写真撮影などの業務は、平成18年度には株式会社ユニオンに、平成20年度には株式会社太陽測地社に委託して行った。
- 7 遺物の写真撮影は、アートフォト右文に委託して行った。ただし、図版25末尾の古錢のみ小瀬が撮影した。
- 8 放射性炭素年代測定と出土人骨の同定は株式会社パレオ・ラボに委託して行い、第4章に掲載した。編集は株式会社パレオ・ラボによる結果をもとに小瀬が行った。
- 9 発掘調査及び報告書の作成にあたって、次の方々や諸機関から御指導・御協力をいただいた。記して感謝の意を表する次第である（敬称略・五十音順）。
石黒立人、岩田修、岩田崇、牛丸岳彦、大石崇史、大平愛子、押井正行、尾野善裕、久保智康、佐伯哲也、佐藤公保、上嶋善治、鈴木正貴、田中彰、谷口和人、寺門隆治、中井均、永井宏幸、長屋幸二、八賀晋、馬場伸一郎、久田正弘、藤田富士夫、南洋一郎、三好清超、吉朝則富、一宮市博物館、禅昌寺、高山市教育委員会
- 10 本文中の方位は座標北であり、座標は国土交通省告示の平面直角座標系第VII系を使用する。
- 11 土層の色調は、小山正忠・竹原秀雄2004『新版標準土色帖』（日本色研事業株式会社）による。
- 12 調査記録及び出土遺物は、岐阜県文化財保護センターで保管している。

目 次

序	
例言	
第1章 調査の経緯	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査の方法と経過	3
第2章 遺跡の環境	7
第1節 地理的環境	7
第2節 歴史的環境	8
第3章 調査の成果	13
第1節 基本層序	13
第2節 遺構	15
第3節 遺物	109
第4章 自然科学分析	146
第1節 北東尾根地区出土炭化物の放射性炭素年代測定	146
第2節 北東山麓地区出土炭化物の放射性炭素年代測定	152
第3節 北東山麓地区出土の人骨について	156
第5章 総括	157
第1節 三枝城跡の柴山出村系土器	157
第2節 三枝城跡で見つかった山林寺院跡について	162
第3節 三枝城跡の飛礮について	167
第4節 三枝城の構造について	172
引用・参考文献	178
写真図版	
報告書抄録	

挿図目次

第1図	三枝城跡の位置	1	第36図	東曲輪I断面(2)	68
第2図	調査前状況及び試掘坑の位置	2	第37図	堀切・堀切北平場	69
第3図	グリッドの設定	3	第38図	堀切断面	70
第4図	遺跡周辺の地質	7	第39図	堀切北平場断面	71
第5図	周辺の遺跡分布	9	第40図	東曲輪II西部	72
第6図	基本層序の位置	13	第41図	東曲輪II東部	73
第7図	基本層序	14	第42図	東曲輪II断面(1)	74
第8図	調査区全体図	40	第43図	東曲輪II断面(2)	75
第9図	調査区全城分割図(1)	41	第44図	S I 1~3	76
第10図	調査区全城分割図(2)	42	第45図	S D 1・S K 1	77
第11図	調査区全城分割図(3)	43	第46図	S K 2~4・S F 1~3	78
第12図	調査区全城分割図(4)	44	第47図	北東尾根地区概要	79
第13図	調査区全城分割図(5)	45	第48図	主郭下平場	80
第14図	調査区全城分割図(6)	46	第49図	主郭下平場断面	81
第15図	調査区全城分割図(7)	47	第50図	北東曲輪	82
第16図	調査区全城分割図(8)	48	第51図	北東曲輪断面(1)	83
第17図	調査区全城分割図(9)	49	第52図	北東曲輪断面(2)	84
第18図	調査区全城分割図(10)	50	第53図	北東曲輪断面(3)	85
第19図	調査区全城分割図(11)	51	第54図	北東曲輪断面(4)	86
第20図	調査区全城分割図(12)	52	第55図	北東斜面平場群	87
第21図	調査区全城分割図(13)	53	第56図	北東斜面平場断面(1)	88
第22図	調査区全城分割図(14)	54	第57図	北東斜面平場断面(2)	89
第23図	調査区全城分割図(15)	55	第58図	S A 1	90
第24図	調査区全城分割図(16)	56	第59図	S I 4~9	91
第25図	調査区全城分割図(17)	57	第60図	S F 4~8	92
第26図	調査区全城分割図(18)	58	第61図	S F 9~15	93
第27図	調査区全城分割図(19)	59	第62図	S K 5~17	94
第28図	調査区全城分割図(20)	60	第63図	S K 18~23	95
第29図	調査区全城分割図(21)	61	第64図	北東山麓地区概要	96
第30図	調査区全城分割図(22)	62	第65図	北東山麓平場断面	97
第31図	調査区全城分割図(23)	63	第66図	S H 1検出状態	98
第32図	調査区全城分割図(24)	64	第67図	S H 1検出面遺物出土状況	99
第33図	東尾根地区概要	65	第68図	S H 1完掘状態	100
第34図	東曲輪I・横堀・土塁	66	第69図	S B 1床面検出状態	101
第35図	東曲輪I断面(1)	67	第70図	S B 1内カマド跡(F 1)	102

第71図	S B 1 完掘状態	103	第87図	北東山麓地区包含層出土遺物（3）	144
第72図	S P 1～3、S Z 1～3、S K 24～30	104	第88図	北東山麓地区包含層出土遺物（4）	145
第73図	S K 31～37	105	第89図	北東尾根地区出土炭化物年代測定暦年 較正結果（1）	150
第74図	S K 38～40、S F 16、S I 10・11	106	第90図	北東尾根地区出土炭化物年代測定暦年 較正結果（2）	151
第75図	北尾根地区概要	107	第91図	北東尾根地区出土炭化物年代測定暦年 較正結果の比較	151
第76図	S K 41～52	108	第92図	北東山麓地区出土炭化物年代測定暦年 較正結果	155
第77図	東尾根地区出土遺物（1）	134	第93図	柴山出村系土器（遺物132）復元図	158
第78図	東尾根地区出土遺物（2）	135	第94図	柴山出村系土器関連資料の集成	160
第79図	東尾根地区出土遺物（3）	136	第95図	山林寺院跡の検出地点	163
第80図	北東尾根地区出土遺物（1）	137	第96図	飛礫集積の分布	170
第81図	北東尾根地区出土遺物（2）	138	第97図	三枝城跡関連遺構の配置	173
第82図	北東尾根地区出土遺物（3）	139	第98図	飛驒地域の山城の分布	176
第83図	北東山麓地区遺構内出土遺物（1）	140			
第84図	北東山麓地区遺構内出土遺物（2）	141			
第85図	北東山麓地区包含層出土遺物（1）	142			
第86図	北東山麓地区包含層出土遺物（2）	143			

表目次

第1表	調査体制	6	第18表	出土地点別遺物破片数一覧表（2）	122
第2表	周辺の遺跡一覧	8	第19表	出土地点別遺物破片数一覧表（3）	123
第3表	本書で用いる遺構略号	15	第20表	出土地点別飛礫数一覧表	124
第4表	検出遺構集計	16	第21表	遺物観察表（1）	125
第5表	検出造成地集計	16	第22表	遺物観察表（2）	126
第6表	東尾根地区的造成地	17	第23表	遺物観察表（3）	127
第7表	東尾根地区的検出遺構と掲載遺物	17	第24表	遺物観察表（4）	128
第8表	北東尾根地区的造成地	23	第25表	遺物観察表（5）	129
第9表	北東尾根地区的検出遺構と掲載遺物	23	第26表	遺物観察表（6）	130
第10表	北東山麓地区的造成地	29	第27表	遺物観察表（7）	131
第11表	北東山麓地区的検出遺構と掲載遺物	29	第28表	遺物観察表（8）	132
第12表	北尾根地区的造成地	37	第29表	遺物観察表（9）	133
第13表	北尾根地区的検出遺構と掲載遺物	37	第30表	北東尾根地区測定試料及び処理	147
第14表	遺構一覧表（1）	38	第31表	北東尾根地区放射性炭素年代測定及び 暦年較正の結果	149
第15表	遺構一覧表（2）	39	第32表	北東山麓地区測定試料及び処理	153
第16表	出土遺物破片数集計	109	第33表	北東山麓地区放射性炭素年代測定及び	
第17表	出土地点別遺物破片数一覧表（1）	121			

曆年校正の結果	153	第36表 飛礫の種類・加工法	168
第34表 北東山麓地区の遺物接合関係	162	第37表 飛礫分析結果	171
第35表 飛礫の重量別個体数	168		

写真図版目次

卷頭図版

図版 1

東尾根地区全景（東南東から、平成18年11月撮影）
北東尾根地区・北東山麓地区全景（北西から、平成20年10月撮影）

図版 2

竪穴住居跡 S B 1 完掘状況（北西から）
北東山麓地区出土遺物

巻末図版

図版 1

調査前状況（南から、平成16年12月撮影）
調査前状況（北東から、平成19年9月撮影、中央はウバガ平遺跡）

図版 2

東曲輪 I （上が南東）
堀切（北から）
横堀・土塁（北東から）
S I 1（北東から）
堀切（南から）

図版 3

東曲輪 II（北から）
弥生土器（遺物5・6）出土状況①（東から）
弥生土器（遺物5・6）出土状況②（北から）
S I 2（南西から）
S I 3（南から）

図版 4

北東尾根地区全景（東から）
主郭下平場断面（東から）
北東曲輪平場 c（北東から）

北帶曲輪（南西から）

灰釉陶器（遺物66・67）出土状況①（北西から）

図版 5

灰釉陶器（遺物66・67）出土状況②（北西から）

S A 1（北東から）

S I 4（北西から）

S I 7（東から）

S I 8（東から）

S I 9（南から）

北東斜面平場群（南西から）

北東尾根南斜面（東から）

図版 6

北東尾根南斜面（南から）

北東山麓地区平場①～③（東から）

図版 7

S H 1 全景（西から）

S H 1 - P 1 断面（東から）

S H 1 - P 2 断面（西から）

S H 1 - P 3 断面（東から）

S H 1 - P 4 断面（西から）

図版 8

S H 1 - P 5 断面（東から）

S H 1 - P 7 断面（東から）

S H 1 - P 8 断面（西から）

雁股鏡（遺物206）出土状況①（南西から）

雁股鏡（遺物206）出土状況②（西から）

須恵器托（遺物195）出土状況（西から）

北東山麓平場①からの眺望（西から）

S B 1 検出状況（北から）

図版 9

S B 1 床面検出状況（北から）

- S B 1 断面（東から）
- 図版10
- S B 1 - K 2 （西から）
- S B 1 内カマド跡（北東から）
- S B 1 内カマド跡遺物出土状況（北東から）
- S B 1 内カマド跡石組み（北東から）
- S B 1 内カマド跡煙道部（南から）
- S B 1 内カマド跡断面①（北東から）
- S B 1 内カマド跡断面②（北東から）
- S F16検出状況（南から）
- 図版11
- S F16断面（東から）
- S F16完掘状況（東から）
- S K35（南西から）
- 北尾根地区造成地断面（南から）
- 北尾根地区全景（南東から）
- 図版12
- 東尾根・北東尾根地区出土遺物
- 図版13
- 北東山麓地区 S B 1 出土遺物（1）
- 図版14
- 北東山麓地区 S B 1 出土遺物（2）、S K38出土遺物、包含層出土遺物（1）
- 図版15
- 北東山麓地区包含層出土遺物（2）
- 図版16
- 北東山麓地区包含層出土遺物（3）
- 図版17
- 北東山麓地区包含層出土遺物（4）
- 縄文土器・弥生土器破片
- 図版18
- 土師器破片
- 図版19
- 須恵器破片（1）、（2）
- 図版20
- 須恵器破片（3）、灰釉陶器破片
- 図版21
- 土師質土器、土師器（暗文土器）、古瀬戸系施釉陶器・近世陶磁器・輸入磁器、石織
- 図版22
- 砥石
- 図版23
- 飛礫 東尾根地区出土（1）、（2）
- 図版24
- 飛礫 北東尾根地区出土（1）、（2）
- 図版25
- 鉄釘・刀子・古錢
- 図版26
- S Z 1～3 出土人骨

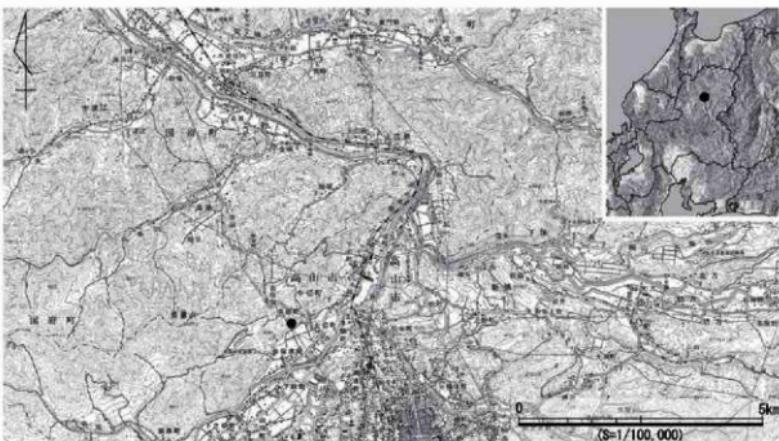
第1章 調査の経緯

第1節 調査に至る経緯

三枝城跡は、岐阜県高山市上切町の「城山」「古城山」と呼ばれる山中に位置する中世の山城跡である。北緯36度10分00秒、東經137度13分40秒の地点に当たり、中部縦貫自動車道高山インターチェンジの北側に隣接している。

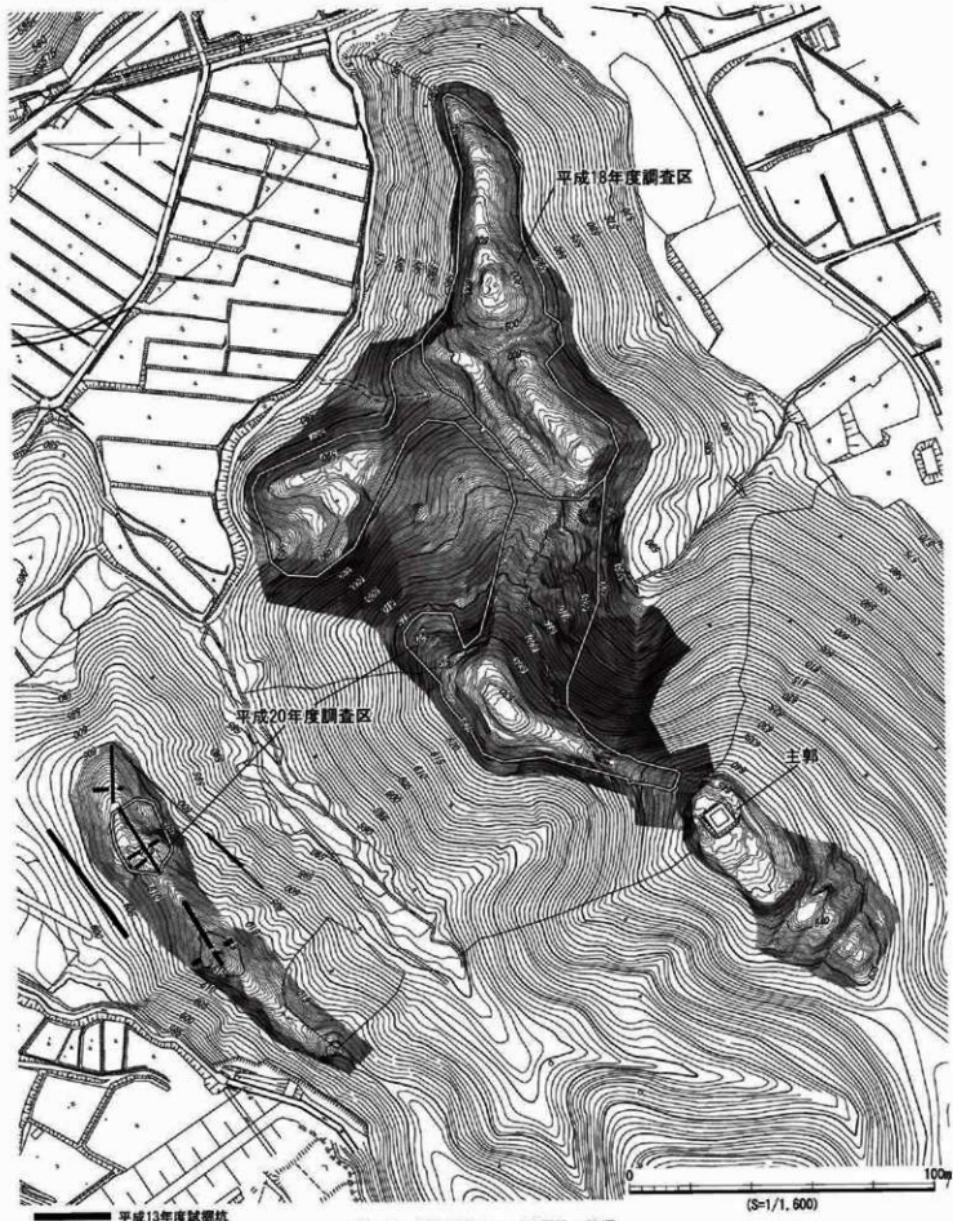
今回の発掘調査は、国土交通省中部地方整備局高山国道事務所による中部縦貫自動車道及び高山国府バイパスの建設に伴い実施したものである。三枝城跡は、岐阜県教育委員会により城館跡として遺跡地図に登録されるとともに、県内の中世城館跡等の遺跡の現状把握を目的に平成8年度から実施された岐阜県中世城館総合調査において調査対象とされるなど、その存在を広く知られた遺跡であった。そのため岐阜県では事業実施に先立ち、調査範囲確定のための試掘・確認調査を行うこととなり、岐阜県から委託を受けた財団法人岐阜県文化財保護センター（平成15年4月に財団法人岐阜県教育文化財団文化財保護センターに改組。平成21年4月に県教育機関として岐阜県文化財保護センター設立）が平成13年8月28日から12月14日にかけて実施した。その結果を受けて行われた平成13年度第5回岐阜県埋蔵文化財発掘調査検討委員会と平成19年度第1回岐阜県埋蔵文化財発掘調査検討委員会において、合わせて9,510m²の本発掘調査が必要であると判断された。本発掘調査は、国土交通省中部地方整備局高山国道事務所から岐阜県教育委員会が委託を受け、財団法人岐阜県教育文化財団文化財保護センター（現：岐阜県文化財保護センター）が実施した。

本書は、以上の経緯を受けて平成18年度と平成20年度に行った発掘調査成果の記録である。



第1図 三枝城跡の位置

2 第1章 調査の経緯



第2図 調査前状況及び試掘坑の位置

第2節 調査の方法と経過

1 調査の方法

本発掘調査は、平成18年度に東尾根地区3,400m²を対象として実施したのち、翌々年の20年度に、北東山麓地区・北東尾根地区・北尾根地区6,110m²について実施した。グリッドの設定等、基本的な方針については両年度で統一している。

グリッドの設定

平成18年度に平面直角座標系の座標に合わせた1辺10mのグリッドを設定した。20年度も18年度のグリッドを引き継いだ。

遺物の取り上げ等においては、10mグリッドを四分割して一辺5mの小グリッドを設定し、北東区=NE、北西区=NW、南東区=SE、南西区=SWの細分名称を与えた。

表土掘削

スコップ・ジョレン・ねじり鎌・根切り鉄等を用いて人力で行った。

遺物包含層掘削・遺構掘削

遺物包含層（以下、適宜「包含層」と略称）掘削、遺構検出、遺構掘削はジョレン・ねじり鎌などを用いて人力で行った。遺構掘削では、遺物の出土状況等の記録を作成しつつ、最終的に遺構埋土をすべて取り除いた。また、必要に応じて断ち割り調査を実施した。現場での遺構登録は検出順の通番とし、平成18年度は1番から、平成20年度は、北尾根地区では101番から、北東尾根地区と北東山麓地区では201番から番号を与えた。

遺構平面図・断面図実測

個別の遺構図の作成は、三次元測量・図化システムにより行ったが、断面図は手測りにより実施した。図面の縮尺は20分の1を基本としつつ、実測対象に応じてふさわしい縮尺を選択した。

調査区全体図

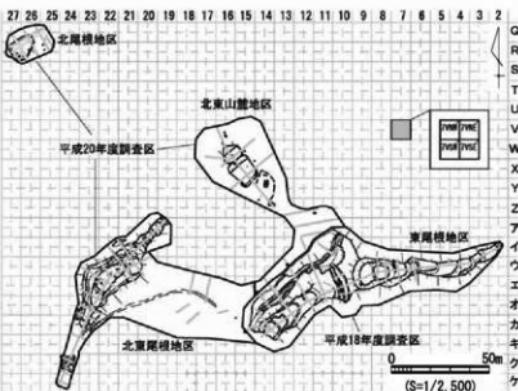
三次元測量・図化システムにより作図し、平成20年度に両年度の作成図を合成した。

写真撮影

1眼レフ35mmカメラ（リバーサル、モノクロ）、中判カメラ（リバーサル、モノクロ）、デジタルカメラで撮影した。遺跡全景写真は、ラジコンヘリコプターによる空中写真撮影による。

遺物取り上げ

包含層出土遺物、遺構内出土遺物の別なく原則として原位置取り上げとし、トータルステー



第3図 グリッドの設定

4 第1章 調査の経緯

ションによる三次元座標の測定を行った。

2 調査経緯

現地での調査経過は以下のとおりである（関係者の所属・肩書きは当時のまま）。

平成18年度

調査の実施に先立ち、現地において指導を受ける。

4月28日、指導調査員 千田嘉博氏（奈良大学）による現地指導。

5月25日、佐伯哲也氏（北陸城郭研究会）による現地指導。

第1週（10/3～10/6）

3日、草木除去作業開始。表土・遺物包含層掘削開始。

第2週～第3週（10/9～10/20）

遺物包含層掘削を続行。

13日、高山市立中山中学校2年生男子2名、職場体験学習。

第4週（10/23～10/27）

遺物包含層掘削を続行。トレンチ掘削開始。

第5週（10/30～11/2）

遺物包含層掘削、トレンチ掘削を続行。

30日、佐伯哲也氏（北陸城郭研究会）による現地指導。

第6週～第8週（11/6～11/24）

遺物包含層掘削、トレンチ掘削を続行。遺構検出、遺構掘削、遺構実測開始。

7日、中井均氏（米原市教育委員会）による現地指導。

11日、現地説明会を開催（参加者57名）。

17日、高山市立三枝小学校6年生42名、引率者3名、現地見学。

20日、佐伯哲也氏（北陸城郭研究会）による現地指導。

22日、ラジコンヘリコプターによる景観撮影実施。

第9週（11/27～11/29）

遺構検出、遺構掘削、遺構実測を続行。

27日、指導調査員 千田嘉博氏（奈良大学）による現地指導。岐阜県教育委員会社会教育文化課による完了検査。

29日、作業完了。

平成20年度

第1週（5/12～5/16）

12日、指導調査員 千田嘉博氏（奈良大学）による現地指導。

13日、草木除去作業開始。

16日、北尾根地区の表土掘削開始。

第2週（5/19～5/23）

19日、北尾根地区トレンチ掘削開始。

- 22日、北尾根地区の遺物包含層掘削開始。北東尾根地区・北東山麓地区の表土掘削開始。
- 23日、北東尾根地区・北東山麓地区的トレンチ掘削開始。高山市立三枝小学校3年生31名、引率者2名、現地見学。

第3週（5/26～5/30）

- 26日、三好清超氏（飛騨市教育委員会）来訪。
- 30日、北東尾根地区・北東山麓地区的遺物包含層掘削開始。

第4週（6/2～6/6）

- 遺物包含層掘削、トレンチ掘削を続行。

第5週～第7週（6/9～6/27）

- 10日、北尾根地区的遺構検出開始。
- 24日、北東尾根地区・北東山麓地区的遺構検出開始。
- 27日、北尾根地区、ラジコンヘリコプターによる景観撮影実施。

第8週（6/30～7/4）

- 遺構検出、遺構掘削を続行。
- 3日、谷口和人氏（飛騨教育事務所）来訪。

第9週～第10週（7/7～7/18）

- 遺構検出、遺構掘削を続行。
- 15日、岐阜県教育委員会社会教育文化課による北尾根地区完了検査。

第11週（7/21～7/25）

- 遺構検出、遺構掘削を続行。
- 23日、北尾根地区、国土交通省へ引き渡し。
- 24日、小学生向け発掘体験「タイムスリップ探検隊・飛騨」を開催（参加者17組35名）。

第12週～第13週（7/28～8/8）

- 遺構検出、遺構掘削を続行。
- 31日、澤村雄一郎氏、三好清超氏（飛騨市教育委員会）来訪。
- 6日、礎石建物跡SH1の掘削開始。

第14週（8/11～8/15）

夏期休業。

第15週～第18週（8/18～9/19）

- 遺構検出、遺構掘削を続行。
- 26日、墓SZ1の掘削開始。人骨採取。

第19週（9/22～9/26）

- 遺構検出、遺構掘削を続行。
- 22日、指導調査員 千田嘉博氏（奈良大学）による現地指導。
- 26日、八賀晋氏（三重大学）来訪。

第20週（9/29～10/4）

- 遺構検出、遺構掘削を続行。

6 第1章 調査の経緯

9月30日、10月1日、3日、高山市立国府中学校2年生4名、職場体験学習。

3日、田中彰氏他2名（高山市教育委員会）、森瀬一幸氏（岐阜女子大学）来訪。

4日、現地説明会を開催（参加者140名）。

第21週（10/6～10/10）

遺構検出、遺構掘削を続行。

10日、北東尾根地区・北東山麓地区、ラジコンヘリコプターによる景観撮影実施。

第22週（10/13～10/17）

遺構検出、遺構掘削を続行。

15日、佐伯哲也氏（北陸城郭研究会）による現地指導。

第23週～第24週（10/20～10/31）

遺構検出、遺構掘削を続行。

21日、佐伯哲也氏（北陸城郭研究会）縄張り図作成のため来訪。

27日、岐阜県教育委員会社会教育文化課による完了検査。

第25週～第26週（11/4～11/14）

遺構掘削を続行。

12日、堅穴住居跡S B 1の遺構掘削を開始。

第27週～第28週（11/17～11/28）

遺構掘削を続行。

28日、作業完了。

整理等作業と報告書作成

出土遺物整理作業と報告書作成作業は、当センター飛騨出張所（岐阜県高山市国府町名張字崎1425-1、平成21年4月に岐阜県文化財保護センター設立に伴い「飛騨駐在事務所」に名称変更）において行った。一次整理作業（遺物洗浄・注記）は平成18年度と20年度に、二次整理作業（遺物実測・分類等）と報告書作成は、平成19・21・22年度に行なった。

3 調査体制

発掘調査及び整理作業の体制は次のとおりである。

第1表 調査体制

職名	平成18年度	平成19年度	平成20年度	平成21年度	平成22年度
理事長	高木正弘	—	広瀬利和	—	—
副理事長	高橋宏之 中島正和（～11月） 伊藤克己（11月～）	伊藤克己 岩田重信	伊藤克己 吉田康雄	—	—
常務理事兼センター所長 (H21～：センター所長)	田口久之	田口久之	梅村恒男	後藤 滉	高橋照美
経営課長 (H21～：経営課長)	後藤智（～2月）	加藤美好	加藤美好	長屋忠司	長屋忠司
調査部長 (H21～：調査課長)	川部 誠	北村厚史	北村厚史	小谷和彦	小谷和彦
飛騨出張所長 (H21～：飛騨調査担当チーフ)	谷口陽一	谷口陽一	森下茂司	森下茂司	森下茂司
担当調査員	相馬重典 澤村雄一郎	小瀬忠司	相馬重典 野村和也 福井洋志	中澤正樹	小瀬忠司
整理作業員	上田里香 前堀裕美	堀添敬子 宮下真苗	清田洋子 村田明美	瀬戸幸子 袖村幸子	竹内真子 横山美喜子 脇瀬純子

第2章 遺跡の環境

第1節 地理的環境

三枝城跡は、高山盆地北西端の山中に位置する。南には川上川が北東に流れて沖積地を作り、東は高曾洞川が狭い沖積地を作る。高曾洞川をさかのぼり、寿美峠を経て瓜巣川沿いに下ると、国府・古川盆地となる。

当遺跡は、見量山（997m）から連なる尾根の最東端に位置し、主郭があったとされるピークは標高646mを測る。見量山南麓には、北東—南西方向に牧ヶ洞断層が通っている。この断層は、岐阜県の北部にある跡津川断層に平行に走る活断層の一つで、近くにも何本かのほぼ平行な断層が走っている。これらの断層の影響により、付近には特徴的な地形が見られる。高山盆地の北西縁、見量山を含む背後の山地との境界は牧ヶ洞断層とほぼ平行な直線状になっている。また、当遺跡の南側は急崖となっており、崩落土砂による崖錐も見られる。当遺跡のすぐ北側は高曾洞川支流の奥行きの広い谷（洞）になっており、小規模な氾濫原を形成している。この延長上、高山市前原町には同じような方向で直線状に谷が並び、断層活動との関わりが強く感じられる。

これらの結果、当遺跡は、氾濫原の中に南西から北東に延びる細長い半島状の地形に位置することとなる。山頂からは東から南西にかけての眺望がよい。乗鞍岳を正面に高山盆地東部を望み、高山盆地と国府・古川盆地間の主要路だった寿美峠が近いことは山城の立地として好適である。

地質的には、三枝城が位置する見量山や川上川氾濫原の基盤は濃飛流紋岩である。濃飛流紋岩は今から八千万年前から五千五百万年前、中生代白亜紀から新生代古第三紀の火山活動で作られたとされ、岐阜県東濃地方から大野郡白川村まで、県土の4分の1ほどの広範囲に分布している。今回の調査においても、比較的薄い表土の下にはいずれも濃飛流紋岩の地山がみられたほか、出土した飛礫の大半は濃飛流紋岩であったことが注目される。



第4図 遺跡周辺の地質
(上枝村史編纂委員会2000『上枝村史』を一部改変)

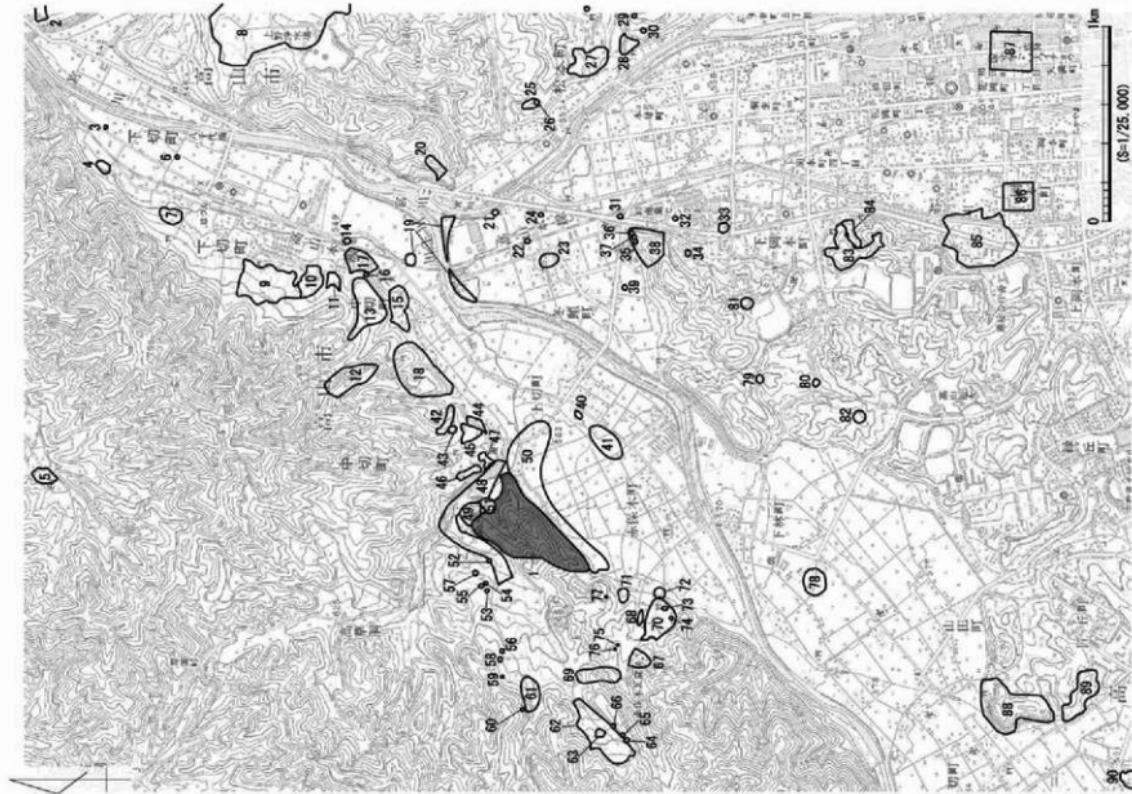
第2節 歴史的環境

三枝城跡周辺には、川上川左岸山麓を中心に多数の遺跡が分布している。まず、当遺跡と関わりの深い中世の遺跡と、当遺跡から良質の遺物が出土した弥生時代及び古代の遺跡のうち、調査内容が報告されているものを中心概観する¹⁾。

中世については、城館跡が中心となる。冬頭城跡（38）は、平成10年度に当センターが発掘調査を実施し、尾根上に簡素な切岸や削平地の防御施設を造る中世の城郭遺構を検出したほか、古墳時代の古墳3基も検出した²⁾。中切城跡（12）は、岐阜県中世城館跡総合調査（以下「総合調査」）³⁾によつて踏査がなされ、小規模な曲輪が確認されている。中山城跡（83）は三木良賴の娘婿の岡田豊前守が永禄年間に居城したとされ、総合調査によって山頂に平坦面が確認されている。山田紀伊守が居城したとされる山田城跡（88）は、総合調査では山頂の小規模な平坦面と南及び東側を遮断する切岸が確認されている。城館跡以外では、野内遺跡（50）のD地区を対象として平成16年度と17年度に当センターが実施した調査において、中世前期の四面庇建物跡を検出した。建物の柱穴から、箸状木製品が出土している⁴⁾。

第2表 周辺の遺跡一覧

番号	遺跡名	種別	時代	番号	遺跡名	種別	時代
1	三枝城跡	城館跡	中世	46	陸続本裏A地点遺跡	散布地	縄文
2	三川合戸遺跡	散布地	縄文	47	陸続本裏B地点遺跡	散布地	奈良、平安
3	湯の湯跡	散布地	古代	48	与鳥山1号地点遺跡	散布地	奈良
4	恵美庄廃寺跡	寺社跡	縄文、東町	49	ウバケ遺跡	集落跡	縄文、弥生、古墳、古代
5	後羽遺跡	散布地	縄文	50	野内遺跡	集落跡	縄文～中世
6	下切古墳	古墳	古墳	51	与鳥山2号地点遺跡	散布地	古代
7	下切芦屋遺跡	散布地	古墳	52	与鳥山3号古墳	古墳	
8	松本上野遺跡	散布地	縄文	53	与鳥山4号古墳	古墳	近畿代
9	下切遺跡	散布地	縄文	54	与鳥山5号古墳	古墳	
10	宮野B地点遺跡	散布地	縄文、弥生	55	与鳥山6号古墳	古墳	
11	中切宮C平塚跡	散布地	縄文	56	与鳥山7号古墳	古墳	
12	中切城跡	城館跡	古墳	57	与鳥山8号古墳	古墳	
13	中切上野遺跡	散布地	縄文、奈良	58	上ノ上1号古窯跡	生産遺跡	平安
14	中切上野古墳群	古墳	古墳	59	上ノ上2号古窯跡	生産遺跡	平安
15	中切王家古墳	古墳	古墳	60	上ノ上3号古窯跡	生産遺跡	平安
16	中切日向遺跡	古墳	縄文、弥生、奈良	61	佐久間地区遺跡	散布地	縄文
17	渡瀬(淡坂)古窯跡	散布地	縄文	62	上切原1号古窯群	古墳	
18	中切平野古窯跡	城館跡	中世	63	平塚遺跡	散布地	縄文
19	四十九郎庭跡	寺社跡	弥生、古代	64	平野1号古窯跡	生産遺跡	奈良
20	茂古古墳	古墳	古墳	65	平野2号古窯跡	生産遺跡	奈良
21	上ヶ見古墳	古墳	古墳	66	平野3号古窯跡	生産遺跡	奈良
22	東田古墳	古墳	古墳	67	(佐保大)～6号古窯跡	生産遺跡	奈良、平安
23	名脇遺跡	散布地	縄文、弥生	68	赤保大7号古窯跡	生産遺跡	平安
24	渡瀬田大塚	古墳	古墳	69	赤保大8号古窯跡	生産遺跡	奈良、平安
25	前平山後遺跡	散布地	縄文、弥生	70	赤保大遺跡	集落跡	奈良、弥生、古墳
26	前平古墳	古墳	古墳	71	赤保大木幡寺遺跡	散布地	縄文、江戸
27	前平遺跡	散布地	縄文、弥生	72	成田1号古窯	墓地	平安
28	上保遺跡	散布地	縄文	73	ミヨタ1号古墳	古墳	古墳
29	牧ヶ瀬古墳	古墳	古墳	74	ミヨタ2号古墳	古墳	古墳
30	馬場古墳	古墳	古墳	75	下山1号1号古墳	古墳	古墳
31	名脇王家古墳	古墳	古墳	76	下山2号2号古墳	古墳	古墳
32	下岡木者跡	散布地	縄文、奈良、平安	77	真言院御山古墳	古墳	古墳
33	下岡木(馬木)遺跡	散布地	縄文、弥生、平安	78	下林古墳	散布地	弥生
34	名脇竹の瀬遺跡	散布地	平安	79	竹ノ山1号地点遺跡	散布地	奈良、平安
35	名脇山1号古墳	古墳	古墳	80	竹ノ山2号地点遺跡	散布地	奈良、平安
36	名脇山2号古墳	古墳	古墳	81	中山1号古墳	生産遺跡	平安
37	名脇山3号古墳	古墳	古墳	82	中山2号古墳	集落跡	縄文
38	名脇城跡	城館跡	家町	83	中山3号古墳	城館跡	縄文
39	大崩尾土塹	古墳	古墳	84	下岡木本塚遺跡	散布地	平安
40	保谷上野跡	散布地	縄文	85	大曾根跡	散布地	平安
41	赤保木ぼた上1～7号古墳	古墳	古墳	86	飛騨郡分尼寺跡	寺社跡	古代
42	寺尾古窯跡群	古墳	古墳	87	飛騨郡分寺跡	寺社跡	奈良
43	上切原1号古墳	古墳	古墳	88	山田城跡	城館跡	平安
44	上切(徳本)遺跡	散布地	縄文、弥生	89	黒屋遺跡	散布地	縄文、弥生
45	足追遺跡	散布地	平安	90	打越遺跡	散布地	縄文、弥生



第5図 地図の遺跡分布
（国土地理院発行「飛騨古川」「町方」「三日町」「高山」をもとに作成）

弥生時代については、飛騨地域全般に言えることであるが、周辺での調査事例は少ない。しかし、赤保木遺跡（70）では、中期の住居跡が検出されたほか、出土遺物に内垣内式横羽状文甕や櫛描波状文を施す中部高地系の土器がみられる⁵⁾。また、当遺跡北側に隣接し、平成13年度と平成19年度に当センターが発掘調査を実施したウバガ平遺跡（49）では、弥生時代中期後半の住居跡や土坑から内垣内式土器の横羽状文甕や栗柄式土器の壺が良好な状態で多数出土している⁶⁾。

古代の遺跡は多い。発掘調査の行われた遺跡としては、赤保木1～6号古窯跡（67）がよく知られている。昭和48年度に高山市教育委員会によって実施された発掘調査により、1～4号古窯跡が飛騨国分寺の瓦を焼成した瓦窯跡と判明した⁷⁾。近隣には、よしま1～3号古窯跡（58～60）、赤保木8号古窯跡（69）など、灰釉陶器窯跡も分布する。古窯以外では、平成14年度から17年度にかけて当センターが発掘調査を実施した野内遺跡（50）B地区で検出した平安時代の集落跡が注目される。この集落跡では平安時代の鍛冶工房跡を多数確認したほか、墨書き土器・硯・腰帶具・綠釉陶器といった公的施設にかかる遺物が出土した⁸⁾。なお、野内遺跡ではC地区において、平安時代の水田跡も検出している⁹⁾。また、前出のウバガ平遺跡で検出した平安時代の土器焼成坑2基も注目すべき成果として挙げることができる¹⁰⁾。

次に、南北朝時代から安土・桃山時代にかけての飛騨地域の歴史についてまとめておく¹¹⁾。南北朝時代、飛騨は、南朝方の国司、北朝方の守護がそれぞれ置かれ、互いが相争う状態であった。南朝方から飛騨国司に任せられたのは、藤原氏系の公家である姉小路氏であった。姉小路家綱が建武年中に国司に任せられ、小島城を中心として北飛騨地域に勢力を伸ばした。その後、国司の職は弟の尹綱に受け継がれた。尹綱は、1411（応永18）年に古河（川）城で挙兵し、これに広瀬郷の広瀬常登入道も呼応した。結局、この挙兵は守護方の京極高数によって広瀬常登入道が討ち取られるなどして鎮圧された。この争乱の後、姉小路氏は、小島家（小島城）、小鷹利家（向小島城）、古河家（古河城）の三家に分裂した。嫡流の小島家ばかりではなく、小鷹利家も国司と称されることがあり、古河家の済維は1509（永正6）年に参議に列せられた。分裂はしたが、公家出身の国司が戦国時代を通じて勢力を維持することは稀であり、他に伊勢国司北畠氏、土佐国司一条氏があるだけである。

北朝方から1359（延文4）年に飛騨国守護に任せられたのは、京極高氏（佐々木道誉）である。その後、高氏の孫高詮が1395（応永2）年に出来、隱岐2か国の守護にも任せられ、京極氏は3か国の守護を兼ねることになる。京極氏は、守護代を送って南飛騨を中心に勢力を伸ばした。家臣の多賀氏、高山氏、三木氏が守護代として飛騨に派遣された。1411（応永18）年には、姉小路尹綱の挙兵を制圧したことにより、京極高光は幕府から石浦郷地頭職、江名子・岡本保を与えられている。応仁の乱後、1485（文明17）年頃には、飛騨での実権は守護代多賀兵衛四郎宗直が握っており、下剋上の風潮が飛騨にも押し寄せていたと言える。その後、三仏寺城を居城とした多賀氏が衰えると、南飛騨竹原郷から萩原郷の桜洞城に本拠地を移した三木氏が大野郡に進出した。三木直頼は1521（大永元）年に三仏寺城から瀧郷、三枝郷、大八賀郷を掌中に収め高山盆地への進出を果たした。

このように南北朝時代から南朝方の国司、北朝方の守護が並立した飛騨国であったが、1411（応永18）年の争乱や応仁の乱を経て、16世紀前半には次のような勢力図が出来上がっていた。益田郡桜洞城に居を構える三木氏、吉城郡高原郷の江馬氏、白川郷の内ヶ嶋氏、そして古川盆地と高山盆地の小

豪族たちであった。高原郷の江馬氏は鎌倉時代末までに地頭として高原郷に入り、勢力を張っていた。白川郷の内ヶ嶋氏は、14世紀末には越中砺波平野まで力を伸ばし、曲折を経て16世紀前半には本願寺勢力とも友好関係にあり、白川郷での勢力を充実させていた。これらに対して、高山盆地の小豪族は、久々野郷の一宮氏、江名子の畠氏、大八賀郷の鍋山豊後守、小八賀郷の大谷蔵人や森大隅守、中山城の岡本豊前守、三枝郷の山田紀伊守などであり、古川盆地では広瀬郷の広瀬氏、姉小路氏の家臣から勢力を持った牛丸氏などがあった。

戦国時代の飛騨国ではこのような諸豪族が合從連衡しながら勢力の拡充を図っていた。その飛騨も戦国時代の大きな流れの中では、周辺戦国大名の影響を受けないわけにはいかなかった。北の上杉氏、東の武田氏、南の織田氏がそれであった。江馬氏、三木氏はそれぞれ、武田氏、上杉氏と組みながら飛騨での勢力の拡充を図った。このような動きの中で、例えば江馬時盛は、1556（弘治2）年に吉城郡中央平坦部に駒を進め3月中旬小島・小鷹利・古河の国司三家を攻め落とした。また、時盛の子輝盛は、1561（永禄4）年に三木良頼（直頼の子）と組み上杉方に付いた。しかし、1564（永禄7）年4月に武田晴信の部将山県景昌の高原郷侵攻で投降した後は武田氏と組み、三木氏と対立した。同年中に武田の援軍を得て三仏寺城の三木氏を降らせ、三仏寺城を得ている。

ところで、これより少し前の時期のこととなるが、三木氏と「三枝」との関わりを窺わせる史料が1点残っている。南飛騨益田郡から大野郡に進出した三木直頼は、美濃大桑城の土岐氏から援軍を請われ、広瀬氏、姉小路氏、江馬氏からもそれぞれ百・二百の兵を得て、東美濃の加茂郡・可児郡あたりに出兵している。結果、米田島城・野上城など三城砦を落として罷り通ったとされている（『寿楽寺大般若経』の巻五百十一奥書による）。直頼の加勢が戦いに勝利をもたらし、直頼は、土岐氏から進物を送られた。直頼は、軍勢の帰陣後、1540（天文9）年10月、姉小路氏、広瀬氏に対しての礼のため、古川盆地を訪れ、その帰途、高山盆地での居城であった三仏寺城に戻る前に、「三枝」で「一両日休足」した。

古河まで昨日十三罷り帰り候。今日は逗留せしめ、明日は三枝まで帰宅致すべく候。一両日休足致し、八賀へ罷り通るべく候（『飛州志』所収「禅昌寺文書」天文九年十月十四日）

現在確認できる戦国時代の記録で三枝城に関わる可能性のあるものは、この1点のみである。

その後、江馬氏によって滅ぼされた姉小路の名跡を継いだ三木自綱（直頼の孫）は、永禄から天正年間に飛騨の諸豪族への支配を強めていった。自綱は高山盆地南西部に面する高台に松倉城を築城し、飛騨北部・吉城郡進攻の拠点とした。1582（天正10）年には、高原郷を中心に勢力を張っていた江馬輝盛を破るに至り、三木氏は白川郷を除く飛騨のほとんどを支配する戦国大名となつた。なお、飛騨を平定した後、三木自綱は松倉城を子の秀綱に譲り、自らは瓜巣の高堂城へ引退したとされる。

三枝城跡の東側には瓜巣街道が通っている。瓜巣街道は高山盆地と国府・古川盆地を最短で結ぶ峠道で、当時の主要道である（現在の主要道である宮川沿いの道は江戸時代に入ってから高山城主金森長近によって整備されたものである）。途中の寿美峠が高山盆地と国府・古川盆地を隔てる。寿美峠の高山盆地側には、三枝城をはじめ、冬頭城や中山城が、国府・古川盆地側には高堂城や広瀬城などがある。これらの城が、地形条件もさることながら、瓜巣街道・寿美峠の存在も意識して配置されたであろう事は想像に難くない。南飛騨から勢力を伸ばしてきた三木氏と北飛騨に勢力を持っていた江馬氏、一時期、互いの勢力の境界線となつたのが寿美峠であった。結果として三木氏の勢力が江馬氏

12 第2章 遺跡の環境

を上回る形で三木氏が国府・古川盆地に侵攻したが、三木氏と江馬氏の勢力のバランスによっては、三枝城が非常に重要な役割を持つことになったかもしれない。三枝城は、立地条件的には三木氏の北飛騨侵攻戦略の中で重要な拠点になる可能性があった城であったと言える。

(相馬重典・中澤正樹)

第2章 第2節 注

- 1) 第2表及び第5図は、岐阜県教育委員会2007『改訂版 岐阜県遺跡地図』をもとに作成した。ただし、公刊後に明らかになった情報を盛り込むための改訂を加えている。
- 2) 財団法人岐阜県文化財保護センター2000『冬頭城跡・冬頭山崎1号古墳・冬頭山崎2号古墳・冬頭山崎1号横穴』。
- 3) 岐阜県教育委員会2005『岐阜県中世城館総合調査報告書第4集(飛騨地区・補遺)』。以下の各城の概要の記述に当たっては、この文献に従う。
- 4) 財団法人岐阜県教育文化財団文化財保護センター2007『野内遺跡D地区』。
- 5) 赤保木遺跡の平成3年度調査については高山市教育委員会1993『前平山稜遺跡・赤保木遺跡発掘調査報告書』、平成16年度調査については財団法人岐阜県教育文化財団文化財保護センター2007『赤保木遺跡』に詳しい。
- 6) 岐阜県文化財保護センター2010『ウバガ平遺跡・ウバガ平古墳群』。
- 7) 高山市教育委員会1975『飛騨国分寺瓦窯発掘調査報告書』。
- 8) 財団法人岐阜県教育文化財団文化財保護センター2009『野内遺跡B地区』。
- 9) 岐阜県教育委員会・財団法人岐阜県教育文化財団文化財保護センター2007『岐阜県新発見考古速報2007』。
- 10) 前掲注6)同じ。
- 11) 南北朝時代から安土・桃山時代にかけての動向の記述に当たっては、主に以下の文献を参照した。また、文中の郷名・郡名は当時のものである。
 - ①上村木曾右衛門1746『飛騨国中案内』(岐阜県郷土資料刊行会1970『飛騨資料 飛騨国中案内(増補完本)』所収)
 - ②長谷川忠良1829『飛州志』(岐阜県郷土資料刊行会1969『飛騨資料 飛州志(付)飛州軍乱記 飛州千光寺記 飛州三沢記』所収)
 - ③岐阜県1969『岐阜県史 通史編 中世』
 - ④高山市1981『高山市史・上巻』
 - ⑤財団法人金森公頼研究会1986『飛騨 金森史』
 - ⑥吉岡勲ひか1987『図説 飛騨の歴史』郷土出版社
 - ⑦森本一雄1987『定本 飛騨の城』郷土出版社
 - ⑧岐阜県2001『わかりやすい岐阜県史』
 - ⑨佐伯哲也2005『飛騨国における中世城館の概要』『岐阜県中世城館跡総合調査報告書第4集(飛騨地区・補遺)』岐阜県教育委員会
 - ⑩谷口研語2007『飛騨 三木一族』新人物往来社

第3章 調査の成果

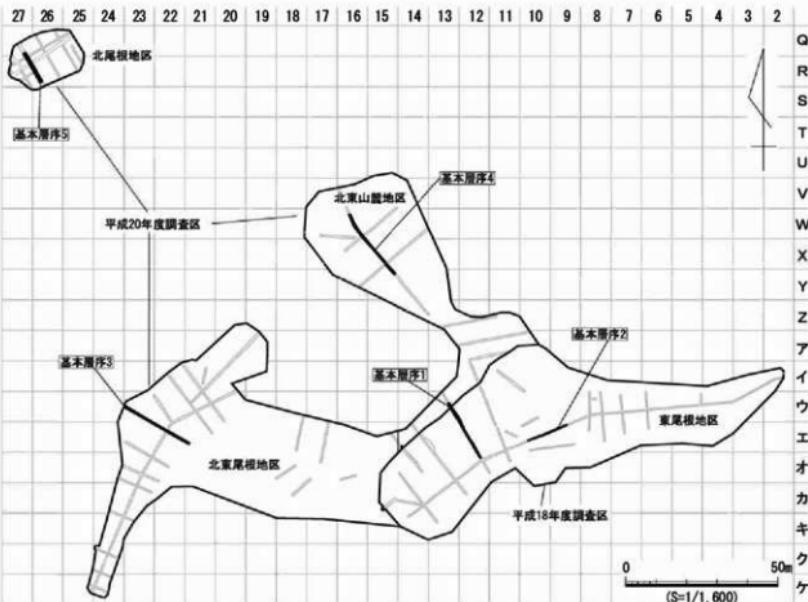
第1節 基本層序

調査範囲は調査前には山林で、近年の人為的地形改変は少ない。ただ範囲が広く、自然地形が起伏に富むことと、築城当時に堀切・曲輪等の人为的造成が行われたことにより、層序は一様ではない。

最上層はI層（腐葉土）、その下層に、流れ込みや崩れによって堆積したII層（遺物包含層）、さらに下層に、三枝城築城時点の旧表土や造成に伴う盛土・埋立土などからなるIII層が存在し、最下層が濃飛流紋岩の岩盤ないし岩盤が風化してきたシルトのIV層（地山）となるのを基本とするが、主にII層とIV層の間において地点間で相違がみられる。

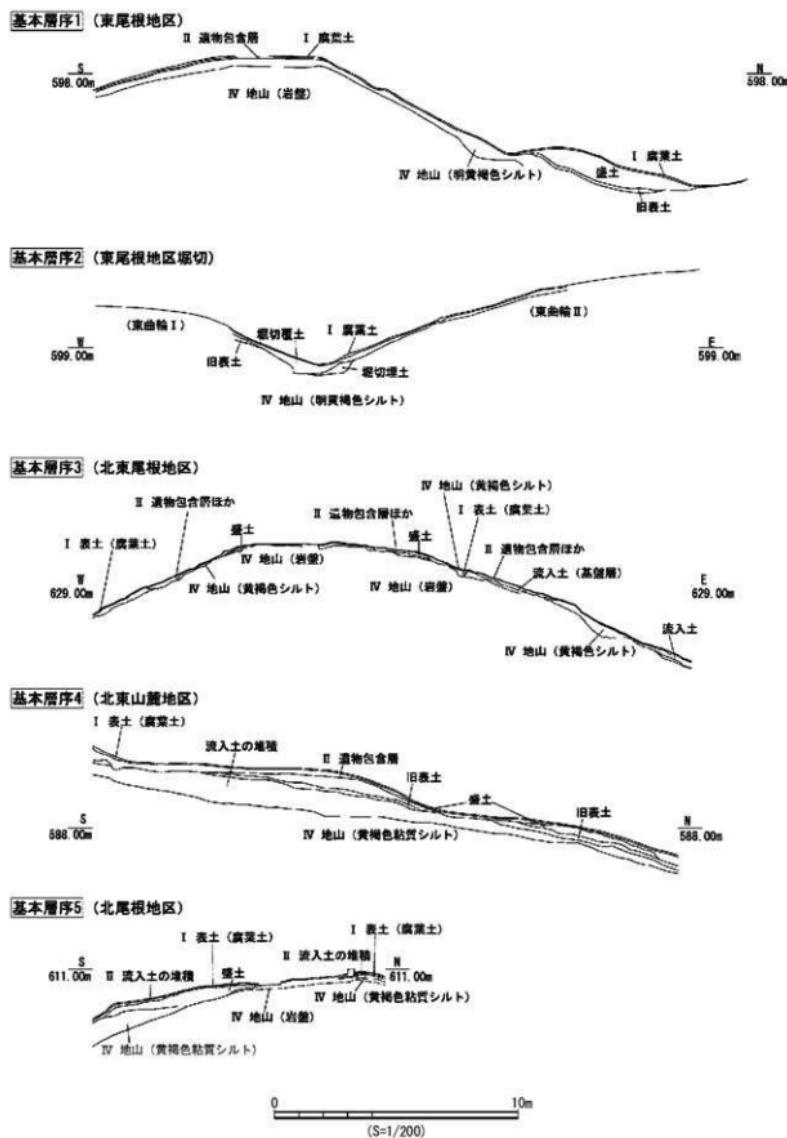
基本層序として5つの地点を選び図示する（第6図・第7図）。基本層序1は東尾根地区の曲輪である。薄いI層とII層の下はIV層（地山）であるが、北端部では地山の上に盛土などが残る。基本層序2は堀切である。旧表土層と地山層を削った堀切底から堀切斜面にかけて埋土や覆土が厚く堆積している。基本層序3は北東尾根地区の曲輪である、平場を広げるための盛土や、帯曲輪を設けるための地山削り込みがみられる。基本層序4は北東山麓地区である。谷状の地形のため盛土下に流入土が厚く堆積している。基本層序5は北尾根地区である。盛土により平坦面を造っている様子が窺える。

なお、本書では、各層内で土質に差違が認められる場合には「III b」のように英小文字を添えて細分している。これは現場での便宜的な措置であり、必ずしも地点間で対応するものではない。



第6図 基本層序の位置

14 第3章 調査の成果



第7図 基本層序

第2節 遺構

1 遺構の概要

今回の調査で検出した遺構の総数は89基である。形状や想定される機能から9種に分類できる。内訳は、柵跡1、竪穴住居跡1、礎石建物跡1、墓3、焼土堆積遺構16、集石遺構11、ピット3、溝状遺構1、土坑52である。それぞれの判断基準と本書で用いる略号は、第3表のとおりである。帰属時代を特定できるものは少數にとどまるとはいえ、縄文時代早期から、弥生時代前期、弥生時代後期、古代、中世を経て、近世以降に至る幅広い時代の生活痕跡を見出している（第4表）。

上記の遺構数は、9,510m²という広大な範囲を対象とした発掘調査としては多いものではない。しかし、調査範囲内には山城や山林寺院にかかる地形改変の痕跡が残っていることが明らかとなり、上記のほかに、堀切、土塁、それに曲輪を構成する平場など、人為的な造成地40か所を検出している（第5表）。それらも広い意味では遺構ではあるが、城郭研究においては城の曲輪やその構成要素を遺構略号を付した番号で呼ぶことは慣例となっていないうため、通常の遺構とは区別するのが合理的と判断した。本書では、それらは「堀切」「平場1」のように表記している。

遺構番号については、報告に当たり、新たに遺構種別ごとの通番を与えた。ただし、「遺構一覧表」（第14表・第15表）には調査現場での登録番号も併記した。遺構番号は、遺構種別ごとに、東尾根地区遺構→北東尾根地区遺構→北東山麓地区遺構→北尾根地区遺構の順に与えた。また、竪穴住居跡の床面で検出したカマド跡・ピット・土坑などの付属遺構や、柵跡の構成要素であるピット群、それに礎石建物跡の構成要素であるピットについては、遺構記号から独立した遺構であることを示す「S」を除き、ピット=「P」、土坑=「K」、焼土=「D」のように示した。例を挙げれば、SB1内のピット1号であれば「SB1-P1」のように表示した。それらは第4表の集計では除外している。

近代以降の生活痕跡等は遺構として扱わず、平面図ではケバ付き破線記号で上端平面形のみを表示し区別した。各々の遺構の寸法については、「遺構一覧表」（第14表・第15表）に明記した。遺構の深さは、遺構内のピットや土坑などの付属遺構を除いた箇所での計測値を記載してある。出土遺物についての、「出土地点別遺物片数一覧表」（第17表～第19表）並びに「出土地点別飛鏢数一覧表」（第20表）を参照されたい。人為的な造成地については、地区ごとに一覧表を作成し、寸法等を表示してある（第6表・第8表・第10表・第12表）。

以下、地区ごとに詳細を報告する。

第3表 本書で用いる遺構略号

遺構種別	略号	摘要
柵 跡	SA	柵を構成していた可能性があるピット（穴）列。
竪 穴 住 居 跡	SB	地面を竪穴状に掘り始めた大型の遺構。
礎 石 建 物 跡	SH	建造物の柱を支える礎石が規則的に並んだ遺構。
墓	SZ	墓穴の可能性がある遺構。
焼 土 堆 積 遺 構	SF	被熱土・焼土・灰が堆積した遺構など、火を使用した跡全般を含む。
集 石 遺 構	SI	人為的に石を集積した遺構。
ピ ッ ツ ト	SP	柱穴や杭穴の可能性のある穴。
溝 状 遺 構	SD	平面形が細長い溝状をなす遺構。
土 坑	SK	穴全般。ただし、墓穴・柱穴・杭穴の可能性のあるものや大型の竪穴を除く。

16 第3章 調査の成果

第4表 検出遺構集計

時代 種別	縄文時代	弥生時代	古墳時代	古代	中世	近世以降	不明	合計
樺跡					1			1
窪穴住居跡				1				1
礫石建物跡				1				1
基							3	3
焼土堆積遺構	1				3	1	11	16
集石遺構					9		2	11
ピット							3	3
溝状遺構							1	1
土坑		2					50	52
合計	1	2		2	13	1	70	89

第5表 検出造成地集計

地区 種別	東尾根地区	北東尾根地区	北東山麓地区	北尾根地区	合計
平場	15	18	3	1	37
堀切	1				1
横堀	1				1
土塁	1				1
合計	18	18	3	1	40

2 東尾根地区

(1) 東尾根地区的概要（第33図）

東尾根地区は、三枝城主郭から見て東方の尾根上に位置する。平成18年度に本発掘調査を行った。2イ・2ウ・3イ・3ウ・3エ・4イ・4ウ・4エ・5イ・5ウ・5エ・6イ・6ウ・6エ・7イ・7ウ・7エ・7オ・8イ・8ウ・8エ・8オ・9ア・9イ・9ウ・9エ・9オ・10イ・10ウ・10エ・10オ・10カ・11ウ・11エ・11オ・12エ・12オ・12カ・12キ・13オ・13カ・13キ・14オ・14カ・14キの各グリッド全域と、10ア・11ア・11イ・12イ・12ウ・13ウ・13エ・14エ・15オ・15カ・15キの一部を含む区域とする。東西に伸びる尾根に2つのピークを有し、標高は西のピークが604.6m、東のピークが602.4mを測る。また、山麓を下りきった平坦地からの比高は西のピークで35mを測る。西隣りには北東尾根地区が位置し、この地区で検出した曲輪の最上面（北東曲輪平場c）までは水平距離約138m、標高差26mを測るが、その間には急斜面が存在する。また、南斜面、東斜面、北斜面は山麓平坦地との間も急斜面となっている。ただし、北西側は、北東山麓地区を間に挟んで、比較的緩やかな傾斜で麓の平坦地につながっている。

東尾根地区では、2群からなる曲輪と、堀切、横堀、土塁、平場を検出した。曲輪は東西のピーク間にある堀切を境に西側を東曲輪I、東側を東曲輪IIとし、それぞれを構成する平場に西から順に英小文字を振った。そのほか、溝状遺構1基、焼土堆積遺構3基、集石遺構3基、土坑4基を検出した。

(2) 東曲輪I（第34図～第36図）

東曲輪Iは、連続する5つの平場（平場I a～I e）で構成される。

平場I aは14カを中心にして14キの北東端及び13カの西部にまたがって位置する。当地区の最西端、最高地に位置し、長軸7.6m、短軸7.2mの方形を呈する。西は急斜面に区切られ、東は中央部で1.3mの標高差を持って平場I bに隣接する。中央が最も高く周辺部に向かって緩やかに傾斜している。辺縁部は地山を削って傾斜を作った可能性がある。遺構は検出されなかった。

第6表 東尾根地区的造成地

名 称	長軸(m)	長軸方向	長軸尾根線関係	短軸(m)	立 地	中央標高(m)	上構	下構
東曲輪Ⅰ平場Ⅰa	7.6	NE-SW	尾根線上	7.2	小傾上	604.6	—	I b
東曲輪Ⅰ平場Ⅰb	7.0	NW-SE	直 交	5.2	尾根上	603.9	I a	I c
東曲輪Ⅰ平場Ⅰc	8.2	NE-SW	尾根線上	7.6	尾根上	603.1	I b	I d
東曲輪Ⅰ平場Ⅰd	10.0	ENE-WSW	尾根線上	8.0	尾根上	602.1	I c	I e
東曲輪Ⅰ平場Ⅰe	9.4	NW-SE	直 交	9.0	尾根上	600.5	I d	—
東曲輪Ⅰ平場Ⅱa	10.8	N-S	直 交	8.1	尾根上	601.7	II b	—
東曲輪Ⅰ平場Ⅱb	7.8	W-E	尾根線上	6.8	小傾上	602.4	—	II a・II c
東曲輪Ⅰ平場Ⅱc	8.3	N-S	直 交	6.0	尾根上	600.7	II b	II d
東曲輪Ⅰ平場Ⅱd	4.6	N-S	直 交	3.6	尾根上	599.6	II c	II e
東曲輪Ⅰ平場Ⅱe	8.8	W-E	尾根線上	6.1	尾根上	599.2	II d	II f
東曲輪Ⅰ平場Ⅱf	9.5	W-E	尾根線上	6.8	尾根上	598.5	II e	II g
東曲輪Ⅰ平場Ⅱg	5.4	ENE-WSW	尾根線上	5.4	尾根上	597.3	II f	II h
東曲輪Ⅰ平場Ⅱh	4.2	ENE-WSW	尾根線上	4.2	尾根上	596.0	II g	II i
東曲輪Ⅰ平場Ⅱi	7.6	ENE-WSW	尾根線上	6.2	尾根上	594.3	II h	—
堀 切	21.2	NNW-SSE	直 交	5.9	緩 部	597.9	I e・II a	堀切北平場
堀切北平場	26.2	NE-SW	平 行	4.0	斜面上	595.5	堀切	—
堀 壁	22.5	NE-SW	平 行	3.6	緩やかな谷	599.6	I a-e	土壘
土 壁	22.0以上	NE-SW	平 行	5.7	緩やかな谷	600.4	横堀	—

第7表 東尾根地区的検出遺構と掲載遺物

区 域	遺 構	掲 載 遺 物
東曲輪Ⅰ平場Ⅰc	SF3	—
東曲輪Ⅰ平場Ⅰd	SI1	飛鏢(38~43)
東曲輪Ⅰ平場Ⅱa	SI2 SI3	SI2:飛鏢(44~49) SI3:飛鏢(50~55)
東曲輪Ⅰ平場Ⅱb	SK4	—
東曲輪Ⅰ平場Ⅱc	SD1 SK1	SK1:赤生土器壺(5~6)
東曲輪Ⅰ平場Ⅱe	SF1 SF2	—
堀 切	SK2 SK3	—
上記以外の箇所(平場Ⅰa・Ⅰb・Ⅰc・Ⅰd・Ⅰe・Ⅱf・Ⅱg・Ⅱh・Ⅱi、堀切北平場、横堀、土壘)からは遺構検出なし		
包含層出土の掲載遺物		
調査文書種類不明(1~4) 赤生土器壺(7) 士師器高杯(8) 須恵器壺蓋(9) 須恵器壺身(10~11) 須恵器有台盤(12) 須恵器高杯(13~14) 水器器壺(15~16) 須恵器壺(17) 灰釉陶器鏡(18~24) 青磁碗(25~26) 古瀬戸系施釉陶器天目系茶碗(27) 古載(28~259~260) 石鐵(29~33) 砥石(34~37) 飛鏢(56~59)		

平場Ⅰbは13才にほぼ全城が含まれる。尾根線上に位置し、長軸7.0m、短軸5.2mの本体と、平場Ⅰaの北に帯曲輪状に延びる部分からなる。本体部分は東に向かって緩やかに傾斜し、中央部で0.8mの標高差を持って平場Ⅰcに隣接する。平場Ⅰb・平場Ⅰc間の斜度は、平場Ⅰa・平場Ⅰb間に比べて小さい。遺構は検出されなかった。

平場Ⅰcは13才を中心にして13才の東部及び12才の西部にまたがって位置する。尾根線上に位置し、長軸8.2m、短軸7.6mの舌状を呈する。中央尾根上が最も標高が高く、そこから東、北、南へ傾斜している。東は、中央部で1.0mの標高差を持って平場Ⅰdに隣接する。その斜度は、平場Ⅰb・平場Ⅰc間よりも小さい。平場Ⅰbとの境界付近から焼土堆積遺構S F 3を検出した。この遺構の使用年代は不明である。

平場Ⅰdは12才を中心にして12才の北西部、11才の西端部、12才の南東部、11才の南西端部にまたがって位置する。尾根線上に位置し、長軸10.0m、短軸8.0mの舌状を呈する。尾根線上に沿って、東側に緩やかな傾斜がみられる。また、南北を比べると南側がより大きく傾斜している。東は中央部で1.6mの標高差を持って平場Ⅰeに隣接する。この標高差は東曲輪Ⅰの中では大きいものの、斜度はそれほど大きくなかった。中央部は東曲輪Ⅰの中で最も傾斜が小さく、ほぼ平坦である。北側斜面に面した平坦部から、投石用の飛鏢を蓄えたとみられる集石遺構S I 1を検出した。

平場Ⅰeは11才南半部を中心に11才北端部、10才西端部、10才北西端にまたがって位置する。東曲輪Ⅰの最東端の平場である。尾根線上に位置しているが、北東部の様子は攪乱または崩落により窓い

知ることができない。残存部分は長軸9.4m、短軸9.0mの舌状を呈する。東に向かって傾斜し、東端付近に平坦部が存在する。東には堀切を挟んで東曲輪IIが位置する。遺構は検出されなかった。

平場I a～I eの土層断面観察では、人為的な盛土によって平坦地を拡大した痕跡を見出すことはできなかった。等高線を分析すると、北側は横堀に続く斜面との境界に明確な斜度の違いがみられるが、南側は等高線では曲輪内と曲輪外との境界で明確な斜度の変化がみられない。これは、意図的に北側の防御を意識してこうしたものと思われるが、南側も同様であったものが自然の風化の影響をうけて現状になった可能性もある。

東曲輪I 検出区域における主な出土遺物は、次のとおりである。須恵器壺(15)、灰釉陶器碗(18～21・24)、青磁碗(25)、天目茶碗(27)、石礎(32・33)、砥石(34・35)。三枝城が山城として機能する戦国時代に使用された可能性があるのは、砥石・青磁碗・天目茶碗、それに飛礫くらいにとどまり、主体を占めるのは平安時代の灰釉陶器である。

この区域は、戦国時代以前、灰釉陶器が使われていた頃に何らかの活動域になったことは確かであろう。また、飛礫の集積があることから、城郭の一部として機能していたことも確かであろう。しかし、曲輪上には飛礫の集積以外の遺構はなく、造成時期や使用時期については明言できない。

(3) 横堀・土塁(第34図～第36図)

東曲輪I の北側から横堀を、そのさらに北側から土塁を検出した。緩い傾斜の幅広な谷地形の、谷底付近を掘削して設けたものである。いずれも尾根線に平行して位置しており、北からの外敵の侵入に備えたと考えられる。

横堀は斜めに掘り込み、堀底が平坦な形状で、長さ22.5m、堀底の高低差3.1mを測り、北東に向かって傾斜している。堀底の幅は最大で1.7mである。東曲輪の平場の中で横堀との距離が最小となるのは平場I cであり、平場I c端部と横堀底との標高差は3.2m、同地点での横堀崖の斜度は、南側で41°、北側で43°を測る。横堀の造成に際しては、地山への掘り込みが明確で、中央部では地山層下部の岩盤への掘り込みも確認できる。

土塁は、横堀と平行して北側に位置している。広範囲にわたって、盛土の下に旧表土が検出されたことから、人為的に土を盛って造成したと考えられる。南側、堀底との高低差は最大で1.4mを測るが、北側自然斜面との高低差は0.6m程度である。これは、土塁造成前の自然地形が、土塁や堀切に向かって緩やかに傾斜していることに起因する。土塁は何回かに分けて土を盛り上げて造成され、盛土の断面が凸レンズ状になっている。南に平行する横堀との高低差を高めて防護機能を補完する役割を有していたと考えられる。造成に当たっては、横堀を掘って出た土が中心になっていると推測される。

土塁と堀切の北方は、東曲輪I と東曲輪IIを取り巻く斜面の中で最も緩やかな部分であり、麓の平坦地から北東山麓地区を経由した場合でも最も起伏のない経路となっている。よって、この地点に防衛施設としての土塁と横堀が存在することは、妥当であると言える。

この区域では、灰釉陶器碗(22)が出土しているが、戦国時代の遺物は確認していない。この横堀及び土塁は、人為的な造成によるものであることが明確であるものの、造成年代を示すものは何もない。

(4) 堀切・堀切北平場(第37図～第39図)

堀切は10ウ・10エ・10才にまたがる東曲輪I・東曲輪II間の鞍部に位置している。堀底は中央の標高が高く、中央に平坦面(標高597.9m)が存在している。平面形は三日月型を呈し、中央より北では尾根線にはほぼ直交する形で北北西-南南東方向に主軸が走るが、平坦面の南ではやや正南北方向に向かっている。長さ21.2m、最大幅6.0m、堀底幅は北端部1.7m、南端部1.2mを測る。平坦面と隣接曲輪との標高差は、西に隣接する平場I e 東端との間で2.4m、東に隣接する平場II a 西端との間で3.2mを測る。断面形状を見ると、堀底に向かって東西とも斜度 20° ~ 30° の斜面が伸びたのち、堀底付近で東側が 58° 、西側が 79° の急斜面になっており、堀底付近だけ見ると箱堀の様相を呈する。この断面形状は、堀切北部でも堀切南部でもほぼ同様の傾向となっている。

また、土層断面観察結果によれば、堀底付近の急斜面に挟まれた部分は、地山への人為的な削り込みであることが明らかである。一方、東西から堀底部に続く斜面は、人為的な削り込みがあったのか自然地形であったのか明らかではない。人為的な削り込みがあったとしても斜面形状を整える程度の小規模なものであろう。この堀切を山城の施設の一部と見た場合、2つの小ピークの鞍部という自然条件をうまく活用して構築されたと言える。なお、堀底の中央付近西端において土坑SK2を、南部西側斜面において土坑SK3を検出した。

堀切北平場は、10イ・10ウ・11イ・11ウにまたがって位置する。堀切北出口付近を中心北東-南西方向に三日月型を呈して広がっており、長さ26.2m、最大幅4.0mを測る。平坦面は緩やかに北東方向に傾斜している。土層断面の観察の結果、この平場は人為的な盛土によって造成されたことが明確になった。また、平場の造成と同時に、平場先の斜面に切岸も造成された。西側のトレーンチ9(J-J')では斜度 20° の自然斜面が 28° の切岸に改変され、東側のトレーンチ14(K-K')では 19° が 25° に改変されたことが確認された。先に述べた横堀・土塁と合わせて、東曲輪群への北側からの侵入に備えた施設であると考えられる。

(5) 東曲輪II(第40図~第43図)

東曲輪IIは、連続する9つの平場(平場II a~II i)で構成される。

平場II aは東曲輪IIの最西端、8エ・9ウ・9エにまたがって位置し、長軸10.8m、短軸8.1mを測る舌状を呈する。東曲輪群の中で唯一尾根線に沿って西に傾斜している。西は堀切に隣接し、中央部から堀底まで距離12.4m、標高差3.8mを測る。東は標高差0.7mをもって東曲輪IIの最高点にある平場II bに達する。南西端で投石用の飛櫓の集積とみられる集石遺構SI2を検出し、北東端でも同様の集石遺構SI3を検出した。SI2は東曲輪I・IIでは最大規模の集石遺構である。

平場II bは東曲輪IIの最高点、8ウ・8エにまたがって位置し、長軸7.8m、短軸6.8mを測る方形を呈する。中央よりやや北西寄りに東曲輪IIの小ピークがあり、そこから同心円状に緩やかに傾斜している。東は1.7mの標高差をもって平場II cに隣接する。この標高差は、東曲輪I・IIの中で最大である。大規模な人為的な造成の痕跡は認められなかった。北側斜面から土坑SK4を検出した。

平場II cは尾根線上、7ウと7エにまたがって位置し、長軸8.3m、短軸6.0mを測る舌状を呈する。さらに、II b面の北側に帶曲輪状に伸びる部分を有する。中央部が高く周辺部に向けて緩やかに傾斜する。帶曲輪状の部分は南西から北東に向けて緩やかに傾斜する。東は中央部で1.1mの標高差をもって平場II dに隣接する。平場北端と帶曲輪状の部分では、盛土によって人為的に平坦地を拡張した形跡が明確に認められる。平場II bから続く斜面際ににおいて、溝状遺構SD1と、SD1に切られた

状態で、弥生土器を含む土坑SK1を検出した。

平場II dは尾根線上、6ウ西半部に位置し、長軸4.6m、短軸3.6mを測る舌状を呈する。東に向かって緩やかに傾斜する。東は0.4mの標高差をもって平場II eに隣接する。平場II cに見られるような人為的な拡張の痕跡は認められない。遺構は検出されなかった。

平場II eは尾根線上、6ウと5ウにまたがって位置し、長軸8.8m、短軸6.1mを測る舌状を呈する。東に向かって緩やかに傾斜し、中央部で1.5mの標高差をもって平場II fに隣接する。2基の焼土堆積遺構SF1とSF2を検出した。

平場II eより東には、2イ・3イ・3ウ・4ウ・5ウの尾根線上に平場II f・平場II g・平場II h・平場II iと平場が続く。いずれも東に緩やかに傾斜する舌状を呈する。土層の観察からは盛土等の大規模な人為的造成は確認できないものの、それぞれの平場の内外で斜度が急変していることが明確であることから、尾根線上を緩やかに削平した可能性は残る。遺構は検出されなかった。

東曲輪IIにおいては、等高線を分析すると、東曲輪Iと同様に南側よりも北側に斜面との境界に明確な斜度の違いがみられる。これは、北側の防御を意識したものなのか、南側も同様であったものが自然の風化の影響をうけたのかは、はっきりしない。ただ、平場II cにおいて人為的な盛土がなされたのが北側だけであったことを念頭に置くなら、南よりも北側の防御を強く意識していたと捉えることができる。また、良好な眺望を確保でき、高山盆地を見渡すことができることから、監視所としての機能を持ったことが考えられる。さらに、当時、高山盆地と古川盆地を結ぶ主要道であった寿美峠への登り口は三枝城跡の北に位置しており、その監視場所としては好適地に当たる。

東曲輪II検出区域における主な出土遺物は、次のとおりである。縄文土器（1～4）、弥生土器（5～7）、土師器高坏（8）、須恵器坏蓋（9）、須恵器坏身（10・11）、須恵器有台盤（12）、須恵器高坏（13・14）、須恵器壺（16）、須恵器壺（17）、灰釉陶器碗（23）、青磁碗（26）、石礫（29）、砥石（36）、古銭（28）。三枝城が山城として機能する戦国時代に使用された可能性があるのは、砥石・青磁碗、それに飛鏃くらいである。縄文土器や弥生土器、それに坏蓋・坏身といった古墳時代の器種を含む須恵器が出土しているのが注目される。平安時代の灰釉陶器が主体を占めていた東曲輪I検出区域とは様相を異にしており、東曲輪II検出区域は、より古い時期から人々の活動域となっていたと判断される。

なお、曲輪平場上の遺構は集石遺構と焼土堆積遺構のみであるため、曲輪の造成時期や使用時期については手掛かりを得ていない。

（6）集石遺構

S I 1（第44図）

平場I d中央部北側で検出した。3.20m×1.20mの範囲内に44個の石が並んでいる。川原石が38個、山石が6個で、石材は濃飛流紋岩が中心である。山上において川原石がまとまって集積することは自然では起こりえないことであるので、平場I dから横堀に続く斜面を登る外敵への対策として、投石用の飛鏃を集めたものと考えられる。

なお、当遺跡の飛鏃については、第5章第3節において詳述しているので参照されたい。

S I 2（第44図）

平場II a南西端部及び堀切に続く斜面で検出した。上部平場付近の密集部と、下部斜面上の散在部

に分かれる。2.12m×2.00mの範囲内に、密集部と散在部を合わせて59個の石が並んでいる。川原石が56個、山石が3個で、石材は濃飛流紋岩が中心である。斜面下の堀切の外敵を狙うため、投石用の飛碟を集めたものと考えられる。

S 1 3 (第44図)

平場II a北東端部で検出した。1.20m×0.52mの範囲内に帶状に6個の石が並んでいる。すべて川原石で石材は濃飛流紋岩が中心である。曲輪北側の斜面を登る外敵への対策として、投石用の飛碟を集めたものと考えられる。

(7) 土坑・溝状遺構

S K 1・S D 1 (第45図)

S K 1とS D 1は、7ウ西半、平場II cの西端で検出した切り合う2つの遺構である。S D 1がS K 1を切っている。

S K 1は、全体形は窓えないが、本来の形状は長円形とみられる。深さは0.16mを測る。弥生時代後期の甕が2個体出土した(5・6)。東尾根地区では稀な出土遺物を伴う遺構である。調査区内では、ほかに当該期の生活痕跡が見つかっていないことから、当区域に集落が営まれたとは考えがたく、当遺構については墓の可能性を考えるべきであろう。

S K 1を切る溝状遺構S D 1は、長さ6.30m、最大幅0.92m、深さ0.15mを測る。東曲輪II cの盛土による拡張部分を通って北斜面に達しているため、盛土による拡張よりも新しい遺構であると言える。曲輪に伴う溝と考えた場合、東に平場II cの小ピークが、西に平場II bから続く斜面が位置し、水が溜まることが想定される位置にあることから、排水溝として掘られたと考えることができる。北端が平場II cの北側斜面まで延びており、水が円滑に流れようになっていることからも、そうした想定は妥当であろう。

S K 2 (第46図)

10エ北部、堀切底と西斜面との境界付近で検出した。遺物は出土していないため、時代や性格は不明である。

S K 3 (第46図)

10エ南部、堀切西斜面で検出した。堀切埋土により覆われていることから、堀切と同時代、もしくは堀切より前の遺構である。堀切の構築に伴って、遺構上部が削り取られた可能性もある。遺構の性格は不明である。

S K 4 (第46図)

8ウ北部、平場II bの北側斜面のトレンチ調査中に発見した。遺物は出土していないため、時代や性格は不明である。

(8) 焼土堆積遺構

S F 1 (第46図)

5ウ西部、平場II e東部で検出した。山城にかかる焼土であるとすれば、狼煙場や夜番の際の焚き火等が想定されるが、使用年代や用途を特定できる手掛かりを得てはいない。

S F 2 (第46図)

6ウ東部、平場II e中央で検出した。S F 1と同様、使用年代と用途は不明である。

S F 3 (第46図)

13カ北西端部、平場 I c 西部で検出した。他の焼土と同様、使用年代と用途は不明である。

3 北東尾根地区**(1) 北東尾根地区的概要 (第47図)**

北東尾根地区は、三枝城主郭から見て北東方向の尾根上に位置する。平成20年度に発掘調査を行った。15エ・16エ・16才・16カ・16キ・17ウ・17エ・17才・17カ・17キ・18ウ・18エ・18才・18カ・18キ・19Z・19ア・19イ・19ウ・19エ・19才・19カ・19キ・20Z・20ア・20イ・20ウ・20エ・20才・20カ・21ア・21イ・21ウ・21エ・21才・21カ・22イ・22ウ・22エ・22才・22カ・23イ・23ウ・23エ・23才・23カ・23キ・24ウ・24エ・24才・24カ・24キ・24ク・24ケ・25ケ・25クの各グリッドの全域と、15才・15カ・15キの各グリッドのうち、東尾根地区に含まれないエリアを指す。東尾根地区との間に明確な地形上の境界があるわけではないが、調査年度が異なることから、便宜上、このような地区分けを探っている。

当地区では、主郭から北東に続く尾根を中心とした東西19~25グリッドの範囲が中心的なエリアとなる。周囲は急斜面によって隔てられており、曲輪の最高点は、東曲輪群のピークとは26m、山を下りきった麓の平坦地からは60mの標高差がある。

この地区では18か所で平場を検出した。主郭下の急斜面上に2か所（主郭下平場）、小ピークを中心 に7か所（北東曲輪）、曲輪から北東の尾根先に続く斜面に9か所（北東斜面平場群）である。そのほか、柵跡1基、焼土堆積遺構12基、集石遺構6基、土坑19基を検出した。

(2) 主郭下平場 (第48図・第49図)

主郭下平場は24クに位置し、地山を削り込んで2段の平場が造られている。上段の平場1は平坦であるが、下段の平場2は、やや凹地となっている。これは、岩盤を削って上段に平場、下段に堀切を造ったのち、堀切を埋めて平場を広げるという手順を踏んだことに起因すると考えられる。トレンド1断面図（A-A'）によれば、上段の平場1を埋める6層が自然堆積層であるのに対し、下段平場2の凹地を埋める9層と10層が人為的に運び込まれた風化疊の層であることや、その9層との段差をなくすように上段の下端から7層と8層が敷き詰められていることが、そう考える根拠である。なお、7層と8層は色が黒く見え、過去の一時期、表土となっていた層と思われる。平場1では焼土堆積遺構S F 5・S F 7を、平場2では焼土堆積遺構S F 4・S F 6・S F 8を検出した。包含層からは古瀬戸系施釉陶器の縁軸小皿（72）が出土した。

主郭下平場は、西の背後に主郭が控えるため、西方から南方にかけての見通しは悪いが、北方から東方にかけての見通しはよい。山城の施設とみた場合、三枝城の東には冬頭城、三仏寺城、鍋山城などがあることから、検出した焼土堆積遺構は、それらの城との連携を図るために狼煙場との推定も可能である。

(3) 北東曲輪 (第50図~第54図)

北東曲輪は、連続する4つの平場（平場a ~ d）とそれらの南北を取り巻く帯曲輪（南帯曲輪・北帯曲輪）、それに平場aの西側斜面にある小平場（平場a 下小平場）からなる。

平場aは23カと23才にまたがる。主郭からの斜面と平場cをピークとするやせ尾根上の鞍部に位置

第8表 北東尾根地区の造成地

名 称	長軸(m)	長軸方向	長軸尾根線関係	短軸(m)	立 地	中央標高(m)	上隣接	下隣接
主郭下平場1	7.0	WNW-ESE	直交	2.8	尾根上	634.7	—	平場2
主郭下平場2	5.2	WNW-ESE	直交	3.5	尾根上	633.5	平場1	—
北東曲輪平場a	10.7	NNNE-SSW	尾根線上	5.2	鞍部	628.5	b	—
北東曲輪平場b	7.3	NNE-SSW	尾根線上	5.9	尾根上	629.4	c	a
北東曲輪平場c	18.2	NE-SW	尾根線上	8.1	小頂上	630.8	—	b+d+帶曲輪
北東曲輪平場d	11.1	NW-SE	直交	6.5	尾根上	629.2	e	ア
南帶曲輪	27.3	NE-SW	平行	2.1	南北向斜面	629.0	b+c+d	—
北帶曲輪	29.2	NE-SW	平行	3.4	北向き斜面	628.7	b+c+d	—
平場e 小平場	6.4	NNE-SSW	平行	1.6	北向き斜面	627.5	a	—
北東斜面平場ア	10.6	E-W	直交	2.8	尾根上	628.1	d	イ・ク
北東斜面平場イ	8.0	SE-NW	直交	2.6	尾根上	625.6	タ・ア	ウ
北東斜面平場ウ	6.2	NNW- SSE	直交	1.2	尾根上	624.1	イ	エ・オ
北東斜面平場エ	3.4	NW-SE	直交	1.0	尾根上	623.3	ウ	オ
北東斜面平場オ	5.0	NW-SE	直交	2.0	尾根上	621.6	タ・エ	カ
北東斜面平場カ	6.7	NNW- SSE	直交	2.6	尾根上	619.2	オ	キ
北東斜面平場キ	4.4	NW-SE	直交	1.8	尾根上	617.9	カ	—
北東斜面平場ク	4.9	WNW-ESE	直交	1.5	尾根上	626.5	ア	イ
北東斜面平場ケ	7.4	ENE-WSW	平行	2.0	北向き斜面	625.6	ア・ク	—

第9表 北東尾根地区の検出遺構と掲載遺物

区 域	遺 構	掲 載 遺 物
主郭下平場1	SF5 SF7	—
主郭下平場2	SF4 SF6 SF8	SF4: 鉄釘(77-78)
北東曲輪平場a	SF12 SF14	—
北東曲輪平場b	SK12	—
北東曲輪平場c	S18 SF10 SF13 SA1 SK5 SK6 SK7 SK8 SK13 SK16 SK17 SK18 SK19 SK20	S18:飛礫(102~105) SK18:古瀬戸系施釉陶器縦軸小皿(72)
北東曲輪平場d	S14 S17 SF9 SF11 SK21	S14:飛礫(89~95) S17:飛礫(100~101)
南帶曲輪	SK22	—
北帶曲輪	SK14 SK15	—
平場f 下小平場	S15	飛礫(96)
平場g 東下斜面	S16 SK9 SK10 SK11	S16:飛礫(97~99)
北東斜面平場ア	S19 SF15	S19:飛礫(106)
北東斜面平場イヘ	遺構検出なし	—
南斜面	SK23	—
包含層出土の掲載遺物		
須恵器壺蓋(60) 須恵器壺(61) 須恵器無台碗(62) 須恵器通(63) 須恵器腹(64) 灰釉陶器碗(65) 灰釉陶器瓶(66) 灰釉陶器壺(67) 土師質土器皿(68~70) 青磁碗(71) 古瀬戸系施釉陶器壺(73) 古瀬戸系施釉陶器卸目付大皿(74) 刀子(75) 鉄釘(76) 古鏡(79~83) 石鏡(84) 砥石(85~88)		

する。尾根線に沿って長方形を呈し、長軸10.7m、短軸5.2mを測る。北東に0.9mの標高差をもって平場bに隣接する。中央から南北に緩やかに傾斜しており、中央部分以外に平坦地は見られない。尾根線に直交するトレンチによる土層断面の観察の結果、北部は西側斜面に人工的な盛土をして平坦地を拡張していることが判明した。焼堆積遺構SF12・SF14を検出した。また、平場aの東側には準平場的な緩傾斜地があり、投石用の飛礫を蓄えたとみられる集石遺構S16を検出した。

平場a下小平場は23才・23才・23才・23才にまたがり、長軸4.4m、短軸1.6mの半円形を呈する。土層断面の観察では大規模な盛土や削り込みは確認されず、自然地形の可能性もある。投石用の飛礫を蓄えたとみられる集石遺構S15を検出した。

平場bは22才・22才・23才・23才にまたがり、平場aと平場cを結ぶ尾根線上に位置する。長軸7.3m、短軸5.9mの舌状を呈する。北東に1.4mの標高差をもって平場cに隣接し、緩やかに南西に傾斜している。尾根線に直交するトレンチによる土層断面の観察の結果、曲輪を拡張するための盛土は確

認できなかったが、地山層を削って平坦にした可能性はある。土坑SK12を検出した。

平場cは21ウ・22ウ・22エ・23エにまたがる。北東曲輪の中で最高点、尾根線上の小ピークに位置する。長軸18.2m、短軸8.1mの長方形を呈する。平場d、南帶曲輪、平場b、北帶曲輪に囲まれ、標高差は順に1.6m、1.8m、1.4m、2.1mを測る。尾根線に直交するトレンチによる土層断面の観察の結果、平坦地を拡張するための南北の斜面への盛土を確認した。ただし、盛土と流入土が混在するため、正確な拡張幅ははつきりしない。柵跡の可能性があるピット列SA1、焼土堆積遺構SF10・SF13、投石用の飛礫を蓄えたとみられる集石遺構SI8、用途不明の土坑SK5・SK6・SK7・SK8・SK13・SK16・SK17・SK18・SK20を検出した。

南帶曲輪は平場bと平場cの南東、20ウ・21ウ・21エ・22エ・22オにまたがって帯状に広がり、長さ27.3m、最大幅2.1mを測る。土層断面観察の結果、南部及び中央部では地山の削り込みによって斜面を平坦に造成していたことを確認したが、北部では地山への明確な削り込みは確認できなかった。平場cとの標高差は1.8mを測る。土坑SK22を検出した。

北帶曲輪は平場bと平場cの北西、22ウ・23ウ・23エ・23オにまたがって帯状に広がり、長さ29.2m、最大幅3.4mを測る。土層断面観察の結果、地山の削り込みと盛土によって平坦地を造成していくことを確認した。平場cのピーク直下では、盛土によって、幅1.5mの平坦地と、斜度39°の切岸を造り出している。盛土は3回に分けて行われており、1回目と2回目で平坦地を拡幅し、3回目で切岸を造成している。南北帶曲輪の中で盛土による造成が確認できたのはこの部分だけである。平場cへとつながる斜面で土坑SK19、平坦地で土坑SK14・SK15を検出した。

平場dは平場cの東、21ウを中心とし20ウ西部と21イ南部にまたがって位置し、長軸11.1m、短軸6.5mを測る。北東部はいびつな形になっており、平場アに1.1mの標高差をもって隣接する。尾根線直交のトレンチによる土層観察の結果、南東側にわずかに盛土を確認した。北西側の平場アに沈み込む部分は流入土が堆積し、不自然に地山最上層が薄くなっていることから、人工的に掘削されたと考えられる。焼土堆積遺構SF9・SF11、集石遺構SI7を検出した。なお、平場dと南北帶曲輪は、それぞれ独立した平場と解釈しているが、山城として機能していた当時はひとつなりの面を形成していた可能性もある。

北東曲輪検出区域で出土した遺物のうち、主なものを以下に挙げる。須恵器甕(63)、須恵器無台碗(62)、須恵器甕(64)、須恵器壺(61)、須恵器壺蓋(60)、灰釉陶器壺(67)、灰釉陶器碗(65)、灰釉陶器瓶(66)、土師質土器皿(68~70)、青磁碗(71)、古瀬戸系施釉陶器壺(73)、砥石(85~88)、石鏃(84)、鉄釘(76)。これらのうち、山城の時代と関連する可能性のある遺物は、土師質土器・砥石・青磁碗・古瀬戸系施釉陶器・鉄釘、それに飛礫くらいに限られる。須恵器や灰釉陶器が出土していることから、東曲輪と同様に、山城としての機能を持つ以前に人々の活動域となっていた可能性が高い。

飛礫の集積や人為的な造成を行った曲輪等が検出されたことから、山城の機能を果たした時期があった可能性も高いと判断する。ただし、人為的な造成が行われた時期は判明しない。また、平場が狭小なことや曲輪を構成する平場の平坦面上に建物跡がみられないことから、山城であったとしても、人々が生活するようなことは日常的には行われていなかつたであろう。

なお、北東曲輪の南東急斜面、18才・18カにおいて堅堀の可能性のある凹地を発見した。しかし、

土層断面観察の結果、それらには人為的な造成の痕跡はなく、すべて自然地形と判断するに至った。北東曲輪南東急斜面では、それら自然の凹凸を堅堀のように使って防御力を高めていたと考えられる。また、東曲輪方面から主郭下平場に向かって、南東急斜面を横切る通路を確認できた（第47図）。この通路は近年まで使われていたが、東曲輪から主郭に至るルートがほかに見出されないことから、山城当時から使われていた可能性が高いと考える。

（4）北東斜面平場群（第55図～第57図）

北東曲輪の平場dの北東に隣接し、尾根線上に階段状に連なる平場群を検出した。平場dに隣接するものを平場アとし、以下、平場アから北東に向かって平場イ・平場ウ・平場エ・平場オ・平場カ・平場キを、尾根線の北に平場ク・平場ケを確認した。土層断面観察の結果、平場ア・平場オ・平場カ・平場キ・平場クについては、斜面に盛土をして平坦地を作ったことが明確に確認できた。また、平場オについては、平坦部の上部の斜面の地山が削り込まれていることから、この部分から削り取った土が盛土として使われたことを推測できる。平場アにおいて、集石遺構S I 4・S I 9と焼堆土積遺構S F 15を検出した。また、平場ア付近の包含層から、刀子とみられる金属製品（75）、古瀬戸系施釉陶器の節目付大皿（74）が出土した。

この平場群を北東曲輪を補完する施設とみた場合、平場カ・平場キまで下ると、北東曲輪の平場c上では死角になって見えなかった北東山麓地区下の平地が監視可能となる。ここには寿美岬から高山盆地中央に向かう主要道が走る。また、尾根線の北に平場ク・平場ケがある一方で、南には平場を設けていないことからも、北東曲輪が北からの攻撃に対する防御をより重視していたと考えられる。

（5）柵跡

S A 1（第58図）

北東曲輪平場cの北部、21ウから22ウにかけて6基のビットが並ぶ。曲輪の縁辺部に位置していることと、それぞれの径が0.3m程度で共通していることから、柵を構成する一連のビットと考えた。ただし、最短のP 4・P 5間が1.20mであるのに対し、最長のP 5・P 6間が2.44mに達しており、間隔が揃っていない。検出面の標高は、東端のP 1が629.80mであるほかは、すべて630.00mと630.10mの間におさまっている。

同じ平場の南側にはこのような柵跡が見られないことについては、特に北への備えを強く意識しなければならない必然性があったという可能性がある。直下の北帶曲輪が柵の下だけ盛土の造成によって構築され切岸を備えていたことも無関係ではなかろう。ただし、平場cの南側が自然流失して柱穴が残らなかった可能性も排除できない。

なお、遺物はP 6から灰釉陶器片が1点出土したにとどまり、柵の構築年代を知る手掛かりは得られなかつた。

（6）集石遺構

S I 4（第59図）

21イ南端部、北東曲輪平場dの平場アに近い部分で検出した。地山上、1.66m×0.92mの範囲内に79個の石が密集している。当遺跡の集石遺構の中で最も多量かつ高密度である。石材は濃飛流紋岩を中心であり、川原石が59個、山石が19個、どちらか判別できないものが1個である。飛躍として使用するために意図的に集積したものと思われる。

北東尾根地区の中では東の見晴らしが最もよく、東曲輪方向からの通路、北東尾根先、北斜面のいずれの方向からの外敵侵入にも備えられる位置であることから、ここに飛縄を蓄えて防御の要としたと考えられる。

S I 5（第59図）

23才・24才・23才・24才の境界付近、北東曲輪の平場a下小平場で検出した。2.64m×1.36mの範囲内に散在する7個の石からなる。すべて川原石である。北東尾根地区の集石遺構の中で最も集積個体数が少なく、集積密度も低い。

S I 6（第59図）

23才・23才の境界付近、北東曲輪平場a東側の準平場的な斜面で検出した。3.12m×1.88mの範囲内に散在する16個の石からなる。内訳は川原石が13個、山石が2個、不明が1個である。検出地点は、東曲輪から主郭に至る通路に近接しており、飛縄を集積するには妥当な位置である。

S I 7（第59図）

21ウ南東部、北東曲輪平場d東部で検出した。14個の石が0.66m×0.64mの範囲内に集められており、S I 5やS I 6と比べると密集度は高い。山石が多く、14個中12個を占める。立地条件はS I 4と同様であるものの、山石が大半を占める点が異質である。曲輪上にある集石遺構の中で、山石が大半を占めるのはS I 7とS I 8に限られる。

S I 8（第59図）

21ウ中央部、北東曲輪平場cの東端部で検出した。38個の石が0.90m×0.78mの範囲内に密集している。それらのうち34個が山石で占められる。S I 7やS I 4と近接しており、立地条件としては飛縄の集積と考える妥当性はあるが、S I 7と同様、山石が大半を占める点は異質である。

S I 9（第59図）

21イ南西部、北東斜面平場アの南部で検出した。10個の石が1.34m×0.98mの範囲内に散在している。同じ平場に位置するS I 4が主に南部と東部からの外敵に備えていたのに対して、こちらは主に北側斜面側の外敵に備えていたと考えられる。

（7）焼土堆積遺構

S F 4（第60図）

24ク北東部、主郭下平場2で検出した。最大で厚さ0.14mの焼土が堆積しており、地山の岩盤にも被熱痕がある。主郭下平場では最大の焼土堆積遺構である。北東側に炭化物が散らばっていた。また、鉄釘の破片2点(77・78)も出土した。出土した炭化物を用いて放射性炭素年代測定を行ったところ、使用時期は15世紀中葉～16世紀前葉あるいは16世紀後葉～17世紀前葉の可能性が高いことが判明した。この年代は、次のS F 5とほぼ一致する。使用年代を前者とみた場合、山城の狼煙場であった可能性がある。年代測定についての詳細は第4章第1節を参照のこと。

S F 5（第60図）

24ク中央、主郭下平場1で検出した。最大で厚さ0.08mの焼土堆積がみられる。放射性炭素年代測定では、使用時期は15世紀中葉～16世紀前葉あるいは16世紀中葉～17世紀前葉との結果を得た。使用時期が前者の場合、山城としての時期と重なる。位置から推測して、狼煙場であった可能性もある。年代測定についての詳細は第4章第1節を参照のこと。

S F 6 (第60図)

24ク東部、主郭下平場2で検出した。最大で厚さ0.08mの焼土堆積が見られる。狼煙場か。

S F 7 (第60図)

24ク南西部、主郭下平場1で検出した。最大で厚さ0.07mの焼土堆積がみられ、地山の岩盤も被熱している。放射性炭素年代測定の結果、使用時期は15世紀代の可能性が高いことが判明した。位置から考えて狼煙場であった可能性がある。年代測定についての詳細は第4章第1節を参照のこと。

S F 8 (第60図)

24ク北西部、主郭下平場2の埋立土上で検出した。最大で厚さ0.06mの焼土堆積がみられる。狼煙場か。

S F 9 (第61図)

21ウ東端部、北東曲輪平場d東部のII b層上で検出した。焼土には炭粒を含み、厚さは最大0.03m。時代と用途は不明である。

S F 10 (第61図)

22エ中央西部、北東曲輪平場c南西部で検出した。焼土の厚さは0.07m。時代と用途は不明である。

S F 11 (第61図)

21ウ中央部、北東曲輪平場d中央部で検出した。焼土の厚さは最大0.12m。時代と用途は不明である。

S F 12 (第61図)

23オ中央南部、北東曲輪平場a北部で検出した。焼土には炭粒を含み、厚さは最大0.11m。時代と用途は不明である。

S F 13 (第61図)

22ウ東端部、北東曲輪平場c中央付近で検出した。円形に8個の石が並ぶ。底部中央に焼土がみられる。検出面から底までの深さは0.06mを測る。放射性炭素年代測定の結果、使用年代は17世紀末～18世紀前葉、あるいは19世紀前葉～20世紀前葉とみられることが判明した。山城の存続年代よりもかなり新しい時代の遺構である。山林に入った者が暖をとったり簡単な調理をしたりした名残であろう。年代測定の詳細は第4章第1節を参照のこと。

S F 14 (第61図)

23カ北西部、北東曲輪平場a南部で検出した。焼土の厚さは最大0.06m。時代と用途は不明である。

S F 15 (第61図)

21イ南西部、北東斜面平場アで検出した。小規模な焼土痕である。時代と用途は不明である。

(8) 土坑**S K 5・S K 6 (第62図)**

北東曲輪平場c東部で検出した性格不明の土坑である。近接するS F 13と同時期、近代以降の遺構の可能性がある。

S K 7・S K 8 (第62図)

北東曲輪平場cの南西端部で検出した2基の土坑である。北東曲輪最上面の端部という位置や形状からS A 1に連なる櫻の一部の可能性があると考えたが、S A 1との間には櫻を構成する柱穴は確認

できなかった。遺構内出土遺物もなく、いずれも用途不明の土坑と位置付ける。

S K9・S K10・S K11（第62図）

北東曲輪平場 a 東下の急斜面で検出した。柵を構成する一連の柱穴群の可能性を考えて掘削したが、S K10 と S K11 の断面形状から、これらが柵の柱穴と考えるのは無理があると判断した。いずれの遺構からも出土遺物はなく、性格不明の土坑と位置付ける。

S K12（第62図）

北東曲輪平場 b で唯一検出した遺構である。山城関連の建造物があってもおかしくないと思われる位置で検出したため、何らかの柱穴と考えて掘削を進めたが、周辺ではこれと関連する遺構を確認できなかった。遺構内出土遺物もなく性格不明の土坑と位置付ける。

S K13（第62図）

北東曲輪平場 c 北部で検出した。その平面形や位置から、S A 1 を構成する柱穴の可能性を考えたが、掘削の結果、柱穴としては不自然な断面形を確認した。性格不明の土坑と位置付ける。

S K14・S K15（第62図）

いずれも北帶曲輪上で検出した。帯曲輪上にあった何らかの建造物にかかる遺構の可能性はあるものの、性格不明と言わざるを得ない。

S K16（第62図）

北東曲輪平場 c の頂部で検出した。建造物が存在しても不自然ではない地点ではあるが、柱穴とは考えにくい形状であることから、性格不明の土坑と位置付ける。

S K17（第62図）

北東曲輪平場 c 南部で検出した。建造物の柱穴の可能性はあるものの、この付近ではほかに柱を据えた跡とみられる遺構は確認できなかった。性格不明の土坑と位置付ける。

S K18（第63図）

北東曲輪平場 c 中央部で検出した。埋土上部から古瀬戸系施釉陶器縁軸小皿（72）の破片 1 点が出土した。しかし、この破片と接合できる破片が主郭下平場からも出土しているため、斜面上方から流れ込んだものと判断する。遺構の性格は不明である。

S K19（第63図）

北東曲輪平場 c の北東端部、北帶曲輪に下る斜面で検出した。S A 1 の並びからははずれるものの、平場 c の盛土端部に位置しているので、建造物の柱穴の可能性は残る。ただし、この遺構とセットになる柱穴は確認できなかった。

S K20（第63図）

北東曲輪平場 c 西部で検出した。円形で垂直に立ち上がるその形状と、北東曲輪最上面の端部という検出位置から、S A 1 のような柵の一部の可能性があると考えるが、S A 1 西端の P 6 との間隔が広く、その間には柵の柱穴らしい遺構は確認できなかった。また、近接する S K 7 や S K 8 と関連する可能性も残るが、出土遺物もなく、性格不明の土坑と位置付ける。

S K21（第63図）

北東曲輪平場 d と北東斜面平場ア間の斜面から検出した。比較的深く、深さ 0.37cm を測る。近接する S I 4 にかかる建造物の柱穴とも考えるが、周辺では同様の遺構は確認できなかった。比較的新

しい杭や木根の可能性もあり、時代、性格とも不明である。

S K22 (第63圖)

南帶曲輪で検出した。検出時には、東尾根地区のSD1のように、上部に位置する曲輪から流れ下る雨水を円滑に斜面に流すための排水溝ではないかと考えた。しかし、境界までは延びず、溝ではないと判断するに至った。埋土に炭灰を含んでいるが被熱痕が見当たらないことから、火を使用した場ではなく、平場cなどから炭灰が流れ込んで溜まつたものであるとみられる。

SK23 (第63圖)

北東尾根地区の南斜面東端付近、東尾根地区との境に近い地点で検出した。周辺にはほかに遺構はない。時代や性格は不明である。

4 北東山麓地区

(1) 北東山麓地区の概要 (第64図)

北東山麓地区は、三枝城主郭から見て北東方向の山麓に位置する。平成20年度に発掘調査を行った。

10Z・11Z・12Z・12ア・13W・13X・13Y・13Z・13ア・13イ・14U・14V・14W・14X・14Y・14Z・14ウ・15U・15V・15W・15X・15Y・15Z・16V・16W・16X・16Y・17V・17W・17X・17Y・18Wの各グリッドの全域と、10ア・11ア・11イ・12イ・12ウ・13ウ・13エ・14エのうち、東尾根地区に含まれないエリアとする。

第10表 北東山麓地区の造成地

名 称	長軸(m)	長軸方向	長軸尾根線關係	短軸(m)	立 地	中央標高(m)	上隣接	下隣接
東北山麓平場①	13.0	N-S	尾根線上	9.0	小尾根上	591.5	-	平場②
東北山麓平場②	10.7	NE-SW	-	9.7	谷	590.2	平場①	平場③
東北山麓平場③	10.2	NE-SW	-	5.2	谷	588.2	平場②	-

第11表 北東山麓地区の検出遺構と掲載遺物

区域	遺構	掲載遺物
北東山麓平場① 第1調査面	SH1 SP1 SP2 SP3	SB1:土師器甕(115-118-120) 須恵器有台壺(121-122) 須恵器甕(124) 須恵器鉢(125) 糸文土器深鉢(128-129) 糸文土器種不明(130) 石鏡(131) SB-F1:土師器高杯(107) 土師器甕(108~114-116-117-119) 須恵器壺(123) 須恵器鉢(127)
北東山麓平場① 第2調査面	SB1 SF16 SK38 SK39 SK40	SB1-K1:須恵器甕(126) SK38:赤生土器壺(132)
北東山麓平場②	SZ1 SZ2 SZ3 SI10 SK24	—
北東山麓平場③	SI11 SK27	—
平場群南斜面	SK34 SK35 SK36 SK37	—
平場②~④斜面	SK25 SK26	—
平場群東斜面	SK28 SK29	—
平場③下斜面	SK30 SK31 SK32 SK33	—

当地区の南西には急斜面をはさんで北東曲輪が位置し、北東は、急斜面を経て麓の平地へつながる。南東は、ほぼ同じ標高で東曲輪の堀切北平場が位置している。当地区の中で特に注目されるのは、東曲輪群の北方、北東曲輪の尾根先急斜面下に位置する比較的平坦な谷状の区域である。この区域では、連続する3段の平場（北東山麓平場①～平場③）を確認した。東尾根地区や北東尾根地区の平場とは異なり、それらは山城の曲輪ではなく、古代の山林寺院に伴う造成地とみられる。

平場①では礎石建物跡SH1を検出した。さらに、礎石建物跡の断ち割り調査時に、ほぼ同一地点の下層において堅穴住居跡SB1を検出した。そのため平場①では、SH1検出面を第1調査面、SB1検出面を第2調査面とする2面調査の形を取っている。そのほか、ピット3基、墓3基、土坑17基、焼土堆積遺構1基、集石遺構2基を検出した。

（2）北東山麓平場①・平場②・平場③（第64図・第65図）

緩やかな谷状の区域に造成された3段の平場である。北に開いた谷は登るに従って幅広となり、登り切った小尾根では麓の平地との標高差は16mを測る。山間とはいえ集落や耕地からは、さほど隔たった地点ではない。

最上段の平場①は、14X・14Y・14Zにまたがる尾根上に位置する。自然地形を利用した造成地である可能性が高く、造成範囲を明確に特定することはできないが、概ね、長軸13.0m、短軸9.0mの平面規模を持つ。下段の平場②との標高差は1.3mを測る。この平場①のみ2面の調査を行った。第1調査面では、礎石建物跡SH1とピットSP1～3を検出した。

第2調査面では、特異な構造を持つ堅穴住居跡SB1を検出した。SB1は当遺跡で最も多くの遺物が出土した遺構である。SB1の南東では、縄文時代の焼練集積遺構とみられる焼土堆積遺構SF16を検出した。また、SB1に重なる形で、北東隅で土坑SK38を、南東隅でも土坑SK39を検出した。

平場②は、平場①から緩やかに下る谷の斜面に設けられた平場である。15Xを中心に、14X西端、15Y北部、16X東部、15W南部にまたがり、長軸10.7m、短軸9.7mの方形を呈する。緩やかに北西に傾斜している。その下段に位置する平場③は、16Wを中心に、16X北東部、15W西部、15X北西端にまたがる。長軸10.2m、短軸5.2mの長方形を呈する。平場②と同様に北西に傾斜しているが斜度は平場③の方が大きい。平場②との標高差は2.0mを測る。平場②から平場③にかけての土層断面の観察の結果、平場②・平場③とともに、斜面上端を削って斜面を平坦化し、さらにその土で盛土をして平坦地を拡大したことが明らかとなった。また、平場③は平場下斜面端部まで盛土層の下に旧表土層が認められるが、平場②では、平場③へとつながる斜面端部で盛土層の下の旧表土層が途切れ、地山層の上に直接盛土層が堆積している。のことから、初めに平場②下端から平場③上端にかけての部分を削ってその土を平場③に盛って造成し、その後、同様の手順で上段の平場②を造成したと推測できる。

平場②では、南東隅で墓SZ1～3と土坑SK24を、南西隅で集石遺構SI10を検出した。平場②と平場③の間の斜面からは土坑SK25・SK26、平場③からは土坑SK27、集石遺構SI11、平場②の東側斜面からは土坑SK28・SK29、平場③下の斜面では土坑SK30～33を検出した。平場②と平場③では平安時代を中心に多数の遺物が出土しているにもかかわらず、いずれの平坦部にも当該期の遺構らしいものはほとんどみられない。

戦国時代に属する可能性のある遺物がほとんど出土しなかったこと、切岸などの防御施設が全く確認されなかったこと、標高が低い谷地形のため麓の平地から容易に到達できて防御機能が薄いこと、眺望

も利かないことなどから、これらの平場が山城に関連する遺構である可能性はほとんどないと思われる。包含層からの出土遺物は圧倒的に須恵器が多く、なかには鉄鉢・托・火舎といった仏教にかかわる遺物がみられることから、これらの平場は古代の山林寺院の一部であった可能性が高いと判断する。なお、当遺跡で検出された山林寺院関連遺構を巡る問題については、次に述べる礎石建物跡と竪穴住居跡をも含め、第5章第2節において検証しているので、参照されたい。

(3) 硎石建物跡

S H 1 (第66図～第68図)

14Yの中央北半、北東山麓平場①の第1調査面で検出した。2列に並ぶ8基のピットで構成され、桁行(南北)3間、梁行(東西)1間の構造を探る小規模な建物跡である。桁行方向と梁行方向は直交する。建物の長軸である桁行方向は、北に対して5°東に傾く。P 6以外の7基のピットでは礎石を確認した。

柱間寸法は、桁行ではいずれも0.90m、梁行ではいずれも1.35mを測り、桁行柱間が3尺で梁行柱間がその1.5倍という極めて整った値を示す。0.90mは3尺、1.35mは4.5尺と解釈することができる。礎石上面の高さについては、東列の4つの礎石上面は標高591.55m前後でほぼ一致するのに対し、西列は北端のP 8のみ標高591.60mを測るものの、P 4とP 2では591.50m前後にとどまる。これについては、P 2・P 4の下層には深い下部遺構を持つ竪穴住居跡S B 1が存在することから、この区域の床面自体が沈下を起こした可能性も考えられる。礎石はすべて濃飛流紋岩を使用しているが、P 4の礎石のみ川原石で、残りは山石である。また、礎石周辺の5か所で、扁平な石を検出した。それらは周りに掘形を伴わないため、原位置を保っていない可能性があるが、建物に伴うものも含まれるとみられる。特にP 5とP 7の中間に位置する濃飛流紋岩の川原石は、大きさと形状からP 6の柱穴に据えてあった礎石ではないかと推測される。なお、この建物跡の検出面は「III f層」の層番号を与えたシルト層の上面であるが、この層は下段の平場②以下で同じ層番号で呼ばれている層とは同質ではあっても連続しない別層である可能性が高いことを付記しておく。

床面付近から43個体の鉄釘(207～249)と雁股鐵1個体(206)が出土した(第67図)。出土状況から判断して、鉄釘はこの礎石建物に使用されていた可能性が高い。礎石より東側に多くの個体が散らばっていることから、この礎石建物は何らかの理由で東側に倒壊する形で朽ちていったと考えられる。

各ピットから遺物の出土はなく、検出面で出土した鉄釘や雁股鐵からも年代推定にかかる十分な手掛かりを得るのも難しいことから、この礎石建物の年代について断言することは難しい。しかし、検出区域である平場①のみならず、下段の平場②・平場③においても、平安時代より新しい時期に属する遺物がほとんど出土していないことなどから、この礎石建物は、平安時代前期頃の祭祀や信仰にかかわる施設であった可能性があると捉えておく。この問題については、第5章第2節で改めて詳述する。

(4) 竪穴住居跡

S B 1 (第69図～第71図)

①建物の構造

14Yの北西部、北東山麓平場①の第2調査面で検出した。礎石建物跡S H 1の西列の礎石の断ち割り調査時に、III f層の下の地山(IV層)を竪穴状に掘り込む大型遺構を発見した。そのため、周辺をIV層上面まで掘り下げたところ、発見した遺構は1基の竪穴住居跡であることが判明した。これをS B 1と

呼ぶ。同時に検出した2基の土坑SK38・SK39と一部重なっているが、切り合い関係から、SK38より新しく、SK39より古いことも明らかとなつた。

平面形は整った隅丸方形である。検出面での規模は、長軸（南北）3.80m、短軸（東西）3.67mを測る。検出面から床面までの深さは最大で0.46mである。ただし、当遺構では、床面からさらに1.74mの深さの擂鉢状の掘り込みを検出しておらず、検出面から底面までの深さは2.20mに達する。この擂鉢状の掘り込みは長軸3.20m、短軸3.14mの平面形を持つが、住居床面の範囲内に収まることから、別遺構ではなく住居の下部構造と捉えるべきであろう。断面図を見ると床面からそのまま擂鉢状をなしてはおらず、床面の下0.25mに平坦面が存在する。ただし、この下段の平坦面は、後述するカマド跡とその周辺では認められない。

遺構埋土は、下部構造の部分を含めると11層からなる。現場担当者の所見によれば、このうち特に床面以下の層（5層～11層）については、人為的に埋めた層である可能性が高い。豊穴の成り立ちについては、以下のように推測できる。①まず、当時の地表面から擂鉢状に深く掘り込む。②次に、床面の平面形を隅丸方形とするため、住居床面の深さを決め、擂鉢状の穴の上端部を拡幅する。③同時に、床面の高さまで擂鉢状の穴を埋める。④最後に、床面を整え、カマド等を整備する。

工程③について補足すれば、SB1の5層と6層から土坑SK38に由来する弥生土器（132）の破片が出土したことから、床面拡幅の際に削られた土も擂鉢状の穴の埋め立てに用いられたとみられる。なお、床面の一段下に存在する平坦面については、作業を円滑に進めるための足場的なものと捉えることも、一旦、この下段面を床面としたのち、再度拡幅して新たな床面を設けたと考えることも可能である。

②付属遺構

SB1に付属する遺構として、カマド跡1基、土坑2基、ピット4基を検出した。

カマド跡（SB1-F1）はSB1の南西隅で検出した。土師器甕をはじめとする多数の遺物が出土したことと、残存状態が極めて良好なことで、特に注目に値する遺構である。支脚の立柱石だけでなく、袖部と天井部の石組も原形をとどめており、煙道部も先端部を欠くものの大部分が残っている。残存部の長軸1.05m、短軸0.81mを測り、床面から天井石上面までの高さは0.49mを測る。このカマドは、掘り抜いた地山面に直に築かれたものではなく、粘質シルトの敷土上に構築されている。敷土はSB1埋土7層と同一層であり、先に記したように、SB1下部の擂鉢状の穴を埋める工程の最終段階で床面を整えるために敷かれたものである。

カマド跡では11個の石が検出されたが、すべて濃飛流紋岩である。支脚の立柱石は長さ24cm、幅9cm、厚さ5cmを測る川原石である。立ったままの状態で検出され、下端9cmが床面下に埋め込まれていた。検出時に床面より上に突き出ていた部分のみ被熱していることから、原位置を保っているとみられる。立柱石の位置から手前側にかけての床面が被熱し、変色している。天井石は、長さ53cm、幅19cm、厚さ12cmを測る大型の扁平な山石である。下面は全面に被熱している。側面も上面も一部を除き被熱している。両袖の間に架けられた状態を保っている。南端、すなわち煙道部側には、固定のための小型の石1つが壁との間に挟まっている。

カマドの袖では、両袖とも4つの石が検出された。向かって左側の袖では、列状に4つの石が並ぶ。このうち開口側から数えて1つめと3つめの石は火床に埋め込まれている。開口側から2つめの石は床に接してはおらず、石と床との間隙には土が充填されている。なお、袖石ではこれのみ川原石である。

4つめの石は天井石の下に挟まっており、天井石を嵩上げして安定させることを目的としたと考えられる石である。ここでも石と床との間隙には土が充填されている。向かって右側の袖については、1つだけ原位置を保たず列から外れている石があるものの、残る3つの石に注目すると基本的な構造は左側袖と同じである。火床面に埋め込まれた2つの石の間に床に接しない石が1つあり、石と床との間隙には土が充填されている。ただし、天井石と接する部分には嵩上げ用の石が配されていない。これは、元々の袖石の高さが左側に比べて高く、嵩上げする必要がなかったためであろう。以上の袖石は、原位置を保っていない1つを除き、すべて内側、すなわち火床側が被熱している。ただし、被熱の度合いが均質ではないことから、石の内側についても、土で被覆することが部分的に行われた可能性がある。

煙道部はカマドの奥を半地下式に掘り抜いて構築されている。先端を丸くものの、開口部は火床面からは30cmを超える高低差を持っており、煙を斜め上方に導いて屋外に排出する構造を探っていたとみられる。

土坑は2基検出した（SB1-K1・K2）。SB1-K1はSB1床面中央で検出した大型の土坑である。長軸1.87m、短軸1.65m、深さ0.13mを測る。炭を多く含み、カマドで生じた炭の集積場であった可能性がある。SB1-K2はカマド脇に位置している。長軸0.44m、短軸0.42m、深さ0.52mを測り、断面形はラスコ状を呈する。カマドの使用に伴う貯蔵穴として使用された可能性が考えられる。

ピットは4基検出した（SB1-P1・P2・P3・P4）。このうちSB1-P4には扁平な石が据えられており、礎石として使用された可能性がある。これら4基のピットは屋根を支える柱穴の跡とみられるものの、配置に明確な規則性が認められない。そのため柱の並びについて合理的な解釈は困難であるが、P1・P4の位置に立てた2本の柱で屋根を支える構造であった可能性を指摘しておきたい。

③出土遺物

SB1からは、破片数で数えて483点の遺物が出土した。接合作業により実測可能となった大部分の個体を掲載した。その内訳は、土師器高壺1個体（107）、土師器甕13個体（108～120、ただし同一個体の可能性あるものを含む）、須恵器壺類3個体（121～123）、須恵器甕2個体（124・126）、須恵器鉢2個体（125・127）、縄文土器3個体（128～130、ただし同一個体の可能性あるものを含む）、石鐵1個体（131）である。また、当遺構に切られるSK38出土の弥生土器（132）の破片も出土している。

破片483点のうち、327点はカマド跡SB1-F1から出土した。特に土師器の甕（108～114・116・117・119）に良好な状態の個体が多い。いずれも胴部の長胴化が進んだ長胴甕である。通常の使用ではこれほど多くの甕を同時にカマドで使用することは考えにくい。住居廃絶時に寄せ集めたものであろうか。

須恵器では、有台壺（121・122）が全形を窺うことのできる残存状態良好な個体である。特に住居下部構造の10層から出土した122は、ほぼ完形品である。

④年代・性格

SB1の年代について、出土遺物から考えてみる。まず、上限については、出土した須恵器のなかに、底部外面の切り離しを回転糸切り技法によって行っている有台壺（121）がみられることに注目すべきであろう。次に、下限については、出土した須恵器に、無台甕・有台甕・有台盤など平安時代には主要な食膳具として定着することが知られる新出器種が全くみられないことに手掛かりを求めた

い。すなわち、出土須恵器からみた S B 1 の使用年代は、回転糸切り技法の普及より後、食膳具の基本器形が壺形から碗形に変化するよりは前、ということができる。この考察結果は、S B 1 では灰釉陶器が全く出土していないことや、土師器の甕が、胴部が長胴化した長胴甕で占められることにもうまく符合する。実年代についてあえて言及すれば、近隣遺跡における当該期の出土遺物検討結果を援用し、8世紀後期から9世紀初頭頃にかけての時期と捉えておきたい¹⁾。

なお、当遺構では3か所において放射性炭素年代測定を実施しており、下部構造内の炭化材は7世紀中頃～末、カマド立柱石下の炭化材は7世紀中頃～後半、カマド内の土師器甕中の炭化材は7世紀後半～8世紀後半の曆年代範囲を示した。これらはいずれも出土土器の年代観とは隔たりがある。詳細は第4章第2節を参照されたい。

S B 1 の性格については、カマドを備えることから、とりあえず住居としての機能を持ったとみることができる。しかし、S B 1 を単なる住居跡と捉えることには違和感を覚える。S B 1 にみられる深い下部構造が、床下からの湿気押さえといったような実用上の必要性のみから設けられたとは考え難い。例えば、鎮壇のような、祭祀儀礼上の意味を持ったと想定しても的外れではないであろう。確實に鏡櫃具と認められる遺物がみられないとはいえ、底に近い層から出土したほぼ完形品の須恵器有台坪（122）については、単に混入したとみるより祭祀儀礼に伴い埋納されたと捉える方がむしろ自然ではないだろうか。また、立地の点でも S B 1 は極めて特異である。集落から離れた山麓に単独で存在すること、のちに同じ地点に礎石建物が建てられたこと、以上の2点は通常の堅穴住居ではみられない立地上の特性であり、S B 1 もまた、礎石建物跡 S H 1 と同様、古代の祭祀や信仰にかかわる施設であった可能性があると考える。

（5）ピット

S P 1・S P 2・S P 3（第72図）

平場①第1調査面の北端付近、礎石建物跡 S H 1 の北方約3mにおいて検出した3基の連続するピットである。S P 1 には2つの、S P 2 と S P 3 には1つずつの扁平な川原石が置かれている。

検出面が S H 1 と同じであるため、S H 1 と同年代の遺構の可能性がある。石の上面の標高は S H 1 の礎石とほぼ一致するが、平面上の位置が S H 1 の規則的な礎石配列の延長上には当てはまらないため、S H 1 の一部とは考えにくい。しかし、S H 1 の関連施設の一部が残ったものと考える余地はある。

（6）墓

S Z 1（第72図）

14X西部、平場②の東隅で S Z 2・S Z 3とともに検出した。上面に3つの扁平な石が置かれており、それらを取り除くと長軸0.60m、短軸0.36mを測る橢円形の平面形が確認できた。

埋土から5～10mm程度の骨片が多数出土した。採取した骨片の中から比較的状態の良いもの4点を分析した結果、人骨と判明した。遺物は出土しなかつたため遺構の年代は不明であるが、次に述べる S Z 2・S Z 3 ともども、比較的新しい時代の墓と思われる。なお、S Z 1～3で出土した人骨についての分析の詳細は、第4章第3節を参照されたい。

S Z 2（第72図）

S Z 1 の南隣で検出した。長軸0.46m、短軸0.44m、深さ0.44mを測り、形状からは柱穴の可能性も考えられたが、埋土から2～5mmの骨片が出土したため墓と判断した。分析の結果、やや若い成人の人

骨と判明した。遺物は出土しなかった。

S Z 3 (第72図)

S Z 1 の北隣で検出した。埋土から、S Z 2 と同様に2~5mmの骨片が出土した。分析の結果、S Z 2 と同様、やや若い成人の人骨と判明した。遺物は出土しなかった。

(7) 土坑

S K24 (第72図)

平場②の東隅で検出した。検出位置がS Z 1~3に近接しており、それらと一連の遺構の可能性があるが、この遺構からは骨片は出土しなかった。時代や性格は不明である。

S K25・S K26・S K27 (第72図)

平場②・平場③間の斜面で検出した。S K27から須恵器が出土しているが、いずれも時代や性格は不明である。

S K28・S K29 (第72図)

平場群の東側に広がる斜面で検出した。いずれも出土遺物はなく、時代や性格は不明である。

S K30・S K31・S K32・S K33 (第72図~第73図)

平場③下の斜面で検出した。いずれも出土遺物はなく、時代や性格は不明である。

S K34・S K35・S K36・S K37 (第73図)

平場群の南側に広がる斜面で検出した。いずれも出土遺物はない。

このうちS K35は、長軸2.10m、短軸1.35m、深さ1.83mを測る大型の土坑である。南北断面は捕鉢状で底部付近では細長い先端が深く続く漏斗状を呈する。東西断面は南北断面同様に捕鉢状であるが、西壁のみ底面以外に2つの平坦面が階段状に存在している。平面形と合わせてみると、底部を北東方向にずらしながら3つの段階に分けて掘り進んだことが推測できる。規模・形状から、この遺構は縄文時代の陥穴であった可能性があると考えるが、今回の調査では、ほかに同様の土坑を確認しておらず、周辺に密集する様子が窺えないなど、疑問点も残る。

S K38・S K39・S K40 (第74図)

竪穴住居跡S B 1 の検出面である平場①の第2調査面で検出した。

S K38はS B 1 の東壁に切られる形で検出した。残存部分の平面形は直径0.60mの半円形を呈し、断面形は2層の埋土からなる2段構造となっている。この土坑で注目されるのは、埋土1層から弥生土器壺(132)が出土したことである。同一個体の破片はS B 1 埋土や周辺の包含層からも出土しているが、S K38の1層での出土密度が最も大きいことから、この弥生土器は、この土坑に属する遺物と考えられる。ただし、下段の2層からはこの土器の破片は出土していない。そのためS K38の下段、すなわち2層の部分は、S K38の1層の部分に切られた別の遺構である可能性も残る。なお、1層からは須恵器片8点、土師器片1点も出土している。

S K39はS B 1 の南東隅を切る土坑である。残存部分の長軸は0.53mを測る。切り合い関係から、S B 1 より新しく、SH 1 より古い遺構であることは明らかであるが、遺物は出土していない。

S K40については出土遺物がなく、時代や性格は不明である。

(8) 焼土堆積遺構

S F16 (第74図)

平場①の第2調査面において、S B 1の南東隅から1.4m南東の位置で検出した。平面形は長軸0.79m、短軸残存0.65mの楕円形を呈し、断面形は、底部が径0.28mの平底となる擂鉢状を呈する。200個以上の被熱した濃飛流紋岩の山石が詰め込まれていた。石のサイズは大小様々であり統一性はみられないが、拳大よりやや小さいくらいのものが多い。また、底に近い部分からは多量の炭化物が出土した。底面には、やや大型の扁平な石と角張った石が据えられていた。

以上の特徴から、この遺構については、当遺跡のほかの集石遺構とは性格・帰属時代とも大幅に異なり、縄文時代早期の焼練集積遺構と捉えてよいであろう。遺構内からは遺物は出土しなかったものの、付近の包含層とS B 1内から縄文時代早期の押型土器（128・129・133）が出土していることも、そうした推測の傍証となる。また、遺構内から採取した炭化材3点について放射性炭素年代測定を実施したところ、すべて縄文時代早期末に相当する推定年代を得た。年代測定に関しての詳細は第4章第2節を参照されたい。

（9）集石遺構

S I 10・S I 11（第74図）

S I 10は平場②の南隅で検出し、S I 11は平場③の中央で検出した。S I 10は扁平な川原石の集積であり、S I 11は山石の集積である。東尾根地区や北東尾根地区的集石遺構とは異なり、検出地点がいずれも見通しの悪い谷間の平場であることから、中世の山城にかかわる飛礫の集積とは考え難い。建物の礎石として使われた石を集めたものであろうか。

5 北尾根地区

（1）北尾根地区の概要（第75図）

北尾根地区は、25Q・25R・26Q・26R・26S・27Q・27R・27Sグリッドに位置している。北東尾根地区から谷を隔てて北に平行する尾根上のエリアで、他の地区からは飛び地になっている。

この地区は、高砂市が実施した三枝城全域の概要調査では「五ノ郭」と呼ばれており、山城関連の遺構が発見される可能性のある区域の一つとされていた²¹。今回の発掘調査では、人為的な造成を行った平場と土坑を検出したものの、山城の防御施設と考えられる遺構は検出されなかった。

（2）北尾根平場（第75図）

北尾根の尾根線の南側斜面に土を盛って造成した平場である。土層断面から読み取ると、まず、谷側と山側にやや厚く土を盛り、次にその間を埋めるように、数回に分けてほぼ水平に層状に土を突き固めて盛り、最後に全体にやや厚く土を盛って谷側に平坦面を広げている。盛土に用いられた土の由来については、頂上付近は表土の下に堆積層がなく、すぐに岩盤になっていることから、頂上付近を削って盛土に使ったことが考えられる。

平場北西部には巨石が1つ存在する。露出部分の高さ0.96m、底径1.36mを測る。前記の高砂市の調査以来、その存在が注目されていたが、調査の結果、地中では地山の岩盤と一体となっており、地山の一部分が風化されずに残った自然石であり、他所から持ち込まれたものではないことが判明した。

盛土から土師質の土器片が1点出土した（258）。小片であり、摩滅が進んでいるため弥生土器か土師器かもはつきりせず、造成された年代を知る手掛かりとはならない。また、今回の調査では、この平場とその周辺からは時代や性格がわかる遺構は検出されず、包含層からも状態の良い遺物が出土し

第12表 北尾根地区的造成地

名 称	長軸(m)	長軸方向	長軸尾根線関係	短軸(m)	立 地	中央標高(m)	上隣接	下隣接
北尾根平場	13.3	NE-SW	尾根線上	9.8	尾根上	609.8		

第13表 北尾根地区的検出遺構と掲載遺物

区 域	遺 構	掲載遺物
北尾根平場	SK44 SK45 SK46 SK47 SK48 SK49 SK50 SK51 SK52	—
北尾根平場外	SK41 SK42 SK43	—
包含層出土の掲載遺物		
不明土器(258)		

ていないため、この平場が、いつ何の目的で造成されたのかは不明とせざるを得ない。

北尾根地区を山城範囲内と考えた場合、北東側に広がる緩斜面は最も簡単に敵が侵入できるルートとなるため防御を固めるべきであるが、今回の調査では飛礫の集積や柵跡など、防御機能は一切見つからなかった。したがって、この平場をはじめ当地区全体については山城範囲外と捉えるのが妥当と判断する。

(3) 土坑

北尾根地区では12基の土坑を検出した。平場から外れた斜面で検出したもの3基(SK41~43) 平場で検出したものが9基(SK44~52) である。

SK41・SK42・SK43 (第76図)

北尾根地区南東部の斜面で検出した。遺物は出土していないため、時代や性格は不明である。

SK44・SK45・SK46・SK47・SK48・SK49・SK50・SK51・SK52 (第76図)

平場で検出した9基の土坑のうち、SK44のみ平場南東部に位置し、残る8基は平場南西部に位置する。遺構の密集する平場南西部は平場内では比較的斜度の大きい区域であり、遺構の分布密度と斜度との相関関係は薄いようである。この区域に何か特徴があるとすれば前記の巨石が存在していることくらいであるため、それらが巨石にかかる何らかの活動痕跡である可能性は排除できない。しかし、いざれからも遺物は出土せず、時代や性格は不明である。

第3章 第2節 注

1) 飛騨地域における古代土器の年代観を検討した文献に、財団法人岐阜県文化財保護センター2005『太江遺跡II』、同2009『野内遺跡B地区』などがある。

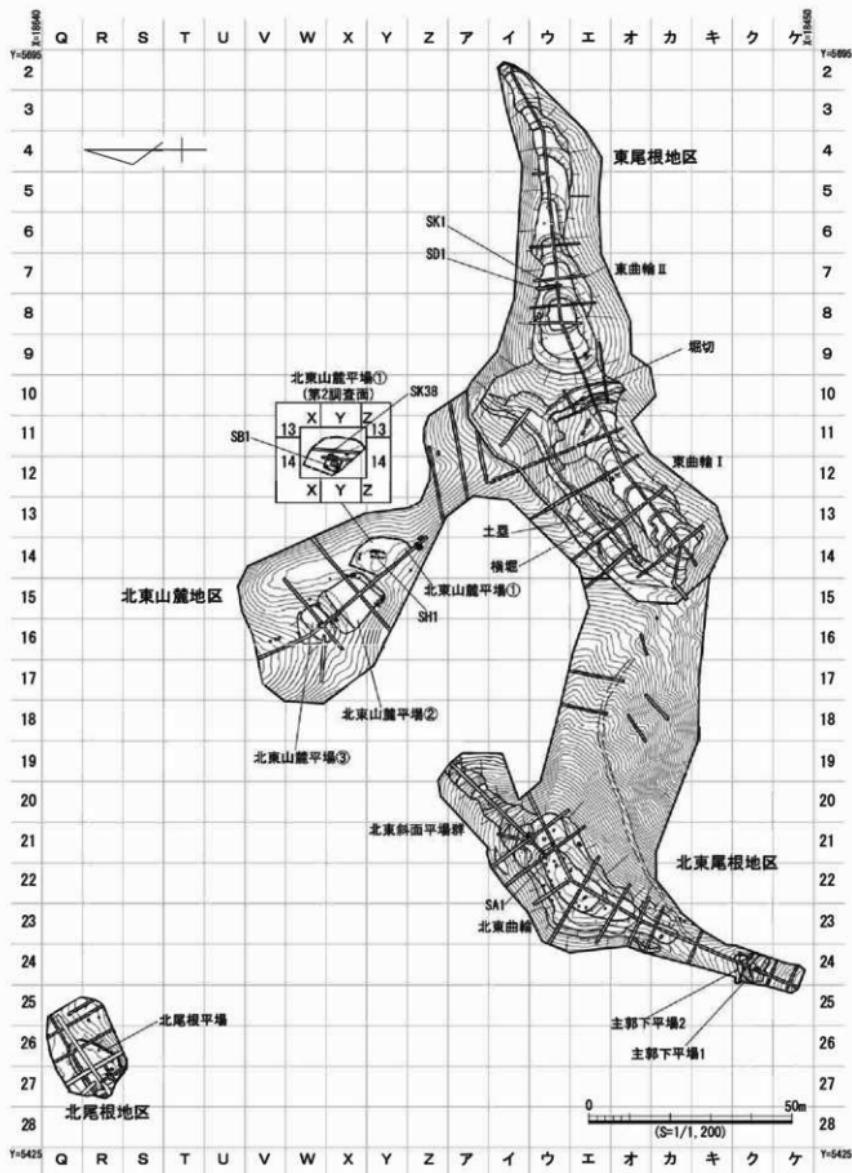
2) 高山市教育委員会1999『三枝城跡発掘調査報告書』ただし、当時は「五ノ郭」の発掘調査は実施されていない。

第14表 遺構一覧表(1)

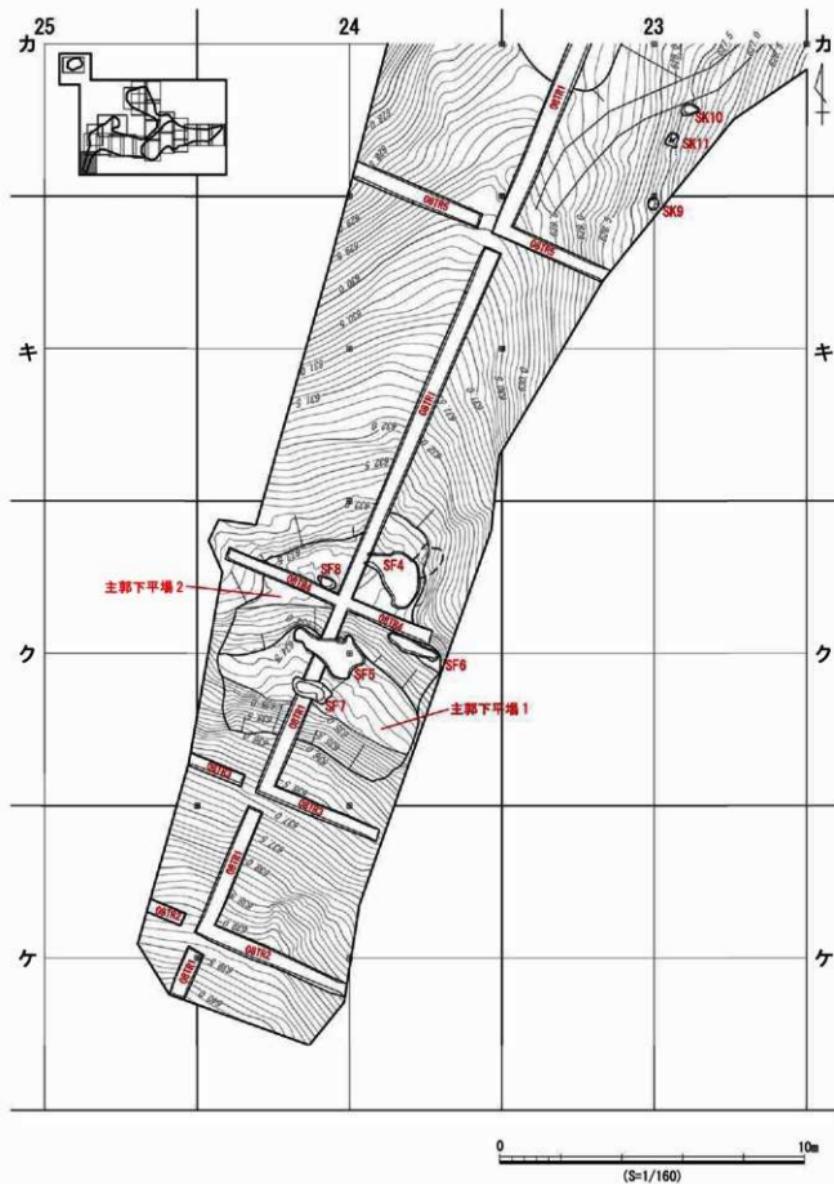
順位	遺構番号	登録番号	検出地区 地区	グリッド 細分		検出面	長幅(m)	短幅(m)	深さ(m)	出土遺物	時代 時期	特記事項
				東西	南北							
塙跡	SAI-1	北東尾根 平場c	21・22	ウ	Ⅳ	9.30	-	-	-		中世か	円～P6により縁を構成
	SAI-71	北東尾根 平場c	21	ウ	Ⅲ	0.30	0.24	0.10				
	SAI-72	北東尾根 平場c	22	ウ	Ⅳ	0.37	0.22	0.19				
	SAI-73	北東尾根 平場c	22	ウ	Ⅳ	0.36	0.25	0.17				
	SAI-74	北東尾根 平場c	22	ウ	Ⅳ	0.29	0.22	0.07				
	SAI-75	北東尾根 平場c	22	ウ	Ⅳ	0.29	0.28	0.06				
第六作部屋	SH1	北東尾根 平場c	22	ウ	Ⅲ	0.29	0.26	0.14	灰陶器1			
	SH1-1	北東尾根 平場①	14	Y	IV	3.90	3.67	2.20	圓文土器4、寄生土器5、土師器40、瓦也器29、石器11、剝片4	古代	SH1を切る、SH2に切られる放射性炭素年代測定実施	
	SH1-2	北東尾根 SH1内	14	Y	IV	残存0.05	0.05	0.49	土師器315、瓦也器11、剝片2	古代	住居のカット跡	
	SH1-3	北東尾根 SH1内	14	Y	IV	1.87	1.65	0.13	圓文土器1、灰陶器1	古代	放射性炭素年代測定実施	
	SH1-4	北東尾根 SH1内	14	Y	IV	0.44	0.42	0.52	灰陶器1	古代		
	SH1-5	北東尾根 SH1内	14	Y	IV	0.21	0.16	0.10		古代		
	SH1-6	北東尾根 SH1内	14	Y	IV	0.42	0.37	0.09		古代		
	SH1-7	北東尾根 SH1内	14	Y	IV	0.45	0.40	0.09		古代		
	SH1-8	北東尾根 SH1内	14	Y	IV	0.32	0.23	0.10		古代		
	SH1-9	北東尾根 平場c	7	ウ	IV	6.30	0.92	0.15	寄生土器42	SH1を切る		
溝状遺構	SH1	北東尾根 平場日c	5	ウ	IV	残存0.96	残存0.56	0.16				
	SH2	北東尾根 平場日c	6	ウ	IV	0.37	0.37	0.12				
東・土塙隣接構	SH3	北東尾根 平場日c	13	カ	IV	0.37	0.31	0.07	不明土器6			
	SH4	北東尾根 主跡下平場c	24	タ	IV	1.94	1.65	0.14	鉄釘2	中世か	放射性炭素年代測定実施	
	SH5	北東尾根 主跡下平場c	24	タ	IV	2.50	1.46	0.08		中世か	放射性炭素年代測定実施	
	SH6	北東尾根 主跡下平場c	24	タ	IV	1.79	0.49	0.08				
	SH7	北東尾根 主跡下平場c	24	タ	IV	1.34	0.61	0.07		中世か	放射性炭素年代測定実施	
	SH8	北東尾根 主跡下平場c	24	タ	Ⅲ	0.65	0.34	0.06				
	SH9	北東尾根 平場4	21	ウ	Bb	残存0.38	残存0.19	残存0.03				
	SH10	北東尾根 平場c	22	ニ	IV	1.10	0.48	0.07				
	SH11	北東尾根 平場c	21	ウ	IV	0.71	0.67	0.12				
	SH12	北東尾根 平場c	23	オ	IV	0.61	0.52	0.11				
礎石遺構	SH13	北東尾根 平場c	22	ウ	IV	0.28	0.22	0.06				近世以降 放射性炭素年代測定実施
	SH14	北東尾根 平場c	23	カ	IV	0.97	0.44	0.06				
	SH15	北東尾根 平場c	21	イ	Bb	0.26	0.18	0.04				
	SH16	北東尾根 平場①	14	Y	IV	0.79	残存0.45	0.41	圓文時代 塵封用筒埴輪 瓦型 火薬の瓦 瓦頭の上と瓦底部分から削取43、 瓦底部分1が丸土	古代か	瓦頭の瓦	
	SH17	北東尾根 平場①	14	Y	IV	2.70	1.35	-				
	SH18	北東尾根 平場①	14	Y	IV	0.61	0.38	0.15		古代か		
	SH19	北東尾根 平場①	14	Y	IV	0.50	0.30	0.17		古代か		
	SH20	北東尾根 平場①	14	Y	IV	0.53	0.37	0.09		古代か		
	SH21	北東尾根 平場①	14	Y	IV	0.54	0.40	0.07		古代か		
	SH22	北東尾根 平場①	14	Y	IV	0.60	0.58	0.18		古代か		
礎石建物跡	SH23	北東尾根 平場①	14	Y	IV	0.45	0.37	0.06		古代か		
	SH24	北東尾根 平場①	14	Y	IV	0.66	0.56	0.09		古代か		
	SH25	北東尾根 平場①	14	Y	IV	0.55	0.34	0.27		古代か		
	SH26	北東尾根 平場①	14	Y	IV	1.34	0.98	-	兔頭44	中世か	兔頭の集積	
	SH27	北東尾根 平場①	9	ニ	IV	2.12	2.00	-	兔頭59	中世か	兔頭の集積	
	SH28	北東尾根 平場①	9	ウ	IV	1.20	0.52	-	兔頭6	中世か	兔頭の集積	
	SH29	北東尾根 平場①	21	イ	IV	1.66	0.92	-	兔頭79	中世か	兔頭の集積	
	SH30	北東尾根 平場c下平場	23・24	オ	IV	2.64	1.36	-	兔頭7	中世か	兔頭の集積	
	SH31	北東尾根 平場c下斜面	23	オ	IV	3.12	1.85	-	兔頭16	中世か	兔頭の集積	
	SH32	北東尾根 平場c	21	ウ	Ⅲ	0.65	0.64	-	兔頭14	中世か	兔頭の集積	
土坑	SH33	北東尾根 平場c	21	ウ	Ⅲ	0.90	0.76	-	兔頭38	中世か	兔頭の集積	
	SH34	北東尾根 平場c	21	イ	Ⅲ	1.34	0.98	-	兔頭10	中世か	兔頭の集積	
	SH35	北東尾根 平場c下斜面	21	イ	Ⅲ	2.80	1.74	-				兔頭の集積とは考えがたい
	SH36	北東尾根 平場②	15	Y	Ⅲ	2.72	1.44	-				兔頭の集積とは考えがたい
	SH37	北東尾根 平場②	16	Y	Ⅲ	2.72	1.44	-				
	SH38	北東尾根 平場②	16	ニ	IV	残存0.16	残存0.16	0.25	寄生土器134、剝片1	寄生時代 初期	SH1に切られる	

第15表 造構一覧表(2)

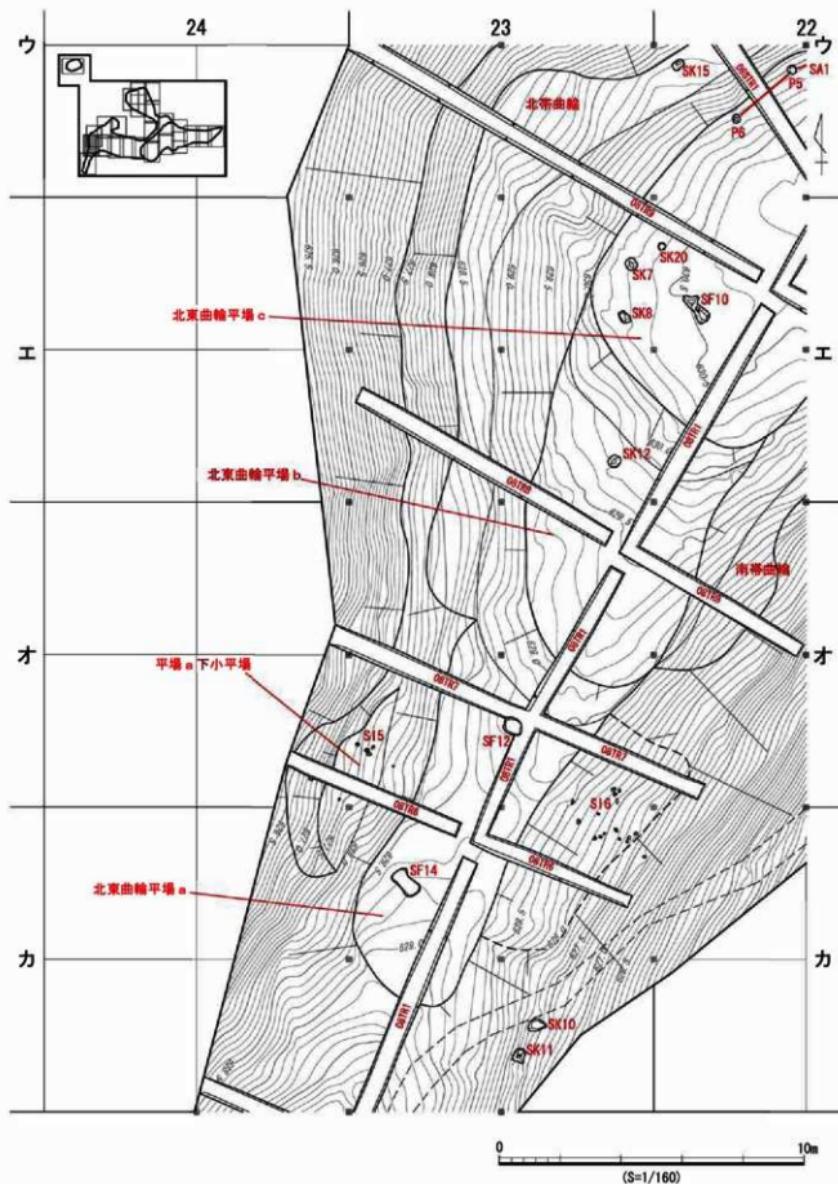
種別	造構番号	登録番号	施用地区		グリッド	検出面	長軸(m)	短軸(m)	面積(m ²)	出土遺物	時代	特記事項
			地区	部分								
土坑	SK4	11	北東尾根	平場d	8	ク	N'	-	-	残存0.23		
	SK5	205	北東尾根	平場c	21	ク	N'	0.53	0.32	0.15		
	SK6	202	北東尾根	平場c	22	ク	N'	0.51	0.35	0.12		
	SK7	218	北東尾根	平場c	23	エ	N'	0.39	0.36	0.14		
	SK8	219	北東尾根	平場c	23	エ	N'	0.32	0.28	0.10		
	SK9	259	北東尾根	平場c	23	キ	N'	0.42	0.36	0.20		
	SK10	257	北東尾根	平場c(東下斜面)	23	カ	N'	0.49	0.38	0.24		
	SK11	258	北東尾根	平場c(東下斜面)	23	カ	N'	0.48	0.48	0.07		
	SK12	228	北東尾根	平場c	23	エ	N'	0.44	0.41	0.10		
	SK13	206	北東尾根	平場c	21	ク	N'	0.30	0.17	0.13		
	SK14	213	北東尾根	北脊曲輪	22	ク	III	0.38	0.34	0.04		
	SK15	214	北東尾根	北脊曲輪	22	ク	III	0.41	0.29	0.09		
	SK16	215	北東尾根	平場c	22	エ	N'	0.30	0.30	0.09		
	SK17	216	北東尾根	平場c	21	ク	N'	0.38	0.27	0.06		
	SK18	266	北東尾根	平場c	22	エ	N'	0.18	0.15	0.06	古瀬戸式施設跡1	
	SK19	273	北東尾根	平場c	21	ク	N'	残存0.36	残存0.12	残存0.16		
	SK20	280	北東尾根	平場c	22	エ	N'	0.34	0.24	0.07		
	SK21	261	北東尾根	平場d	21	イ	IIb	0.25	0.18	0.37		
	SK22	276	北東尾根	南脊曲輪	21	エ	N'	1.12	0.90	0.14		
	SK23	243	北東尾根	南脊面	15	カ	N'	0.62	0.45	0.28		
	SK24	226	北東山腹	平場②	14	エ	N'	0.28	0.24	0.06		
	SK25	238	北東山腹	平場①~③斜面	15~16	エ	III	0.81	0.29	0.07		
	SK26	239	北東山腹	平場①~③斜面	16	エ	III	0.45	0.27	0.20		
	SK27	240	北東山腹	平場③	15	エ	III	0.99	0.69	0.10	復元跡2	
	SK28	236	北東山腹	平場斜東斜面	15	エ	N'	0.44	0.42	0.26		
	SK29	237	北東山腹	平場斜東斜面	15	エ	N'	0.23	0.19	0.12		
	SK30	256	北東山腹	平場③下斜面	16	エ	N'	0.73	0.49	0.06		
	SK31	258	北東山腹	平場③下斜面	16	エ	N'	0.25	0.18	0.04		
	SK32	287	北東山腹	平場③下斜面	16	エ	N'	0.85	0.45	0.05		
	SK33	288	北東山腹	平場③下斜面	16	エ	N'	0.68	0.50	0.16		
	SK34	291	北東山腹	平場斜南斜面	13~14	エ	N'	1.36	0.77	0.27		
	SK35	285	北東山腹	平場斜南斜面	14	エ	N'	2.10	1.35	1.83		
	SK36	290	北東山腹	平場斜南斜面	14	エ	N'	0.47	0.41	0.20		
	SK37	229	北東山腹	平場斜南斜面	11	エ	N'	1.32	0.67	0.35		
	SK38	296	北東山腹	平場④	14	エ	N'	残存0.40	残存0.27	残存0.40	共生土器17、土岸器1、復元跡8	共生時代 初期に切られる
	SK39	256	北東山腹	平場①	14	エ	N'	残存0.51	残存0.18	残存0.29		SB1を切る
	SK40	297	北東山腹	平場①	14	エ	N'	残存0.27	0.29	0.12		
	SK41	116	北尾根	平場外	25	エ	N'	0.38	0.30	0.09		
	SK42	112	北尾根	平場外	25	エ	N'	0.41	0.28	0.06		
	SK43	111	北尾根	平場外	25	エ	N'	0.45	0.35	0.07		
	SK44	115	北尾根	平場	26	エ	III	0.42	0.42	0.09		
	SK45	109	北尾根	平場	27	エ	III	0.30	0.28	0.06		
	SK46	104	北尾根	平場	27	エ	III	0.37	0.32	0.07		SK47を切る
	SK47	105	北尾根	平場	27	エ	III	残存0.46	0.44	0.11		SK46に切られる
	SK48	106	北尾根	平場	27	エ	III	0.38	0.24	0.11		
	SK49	107	北尾根	平場	27	エ	III	0.73	0.74	0.09		
	SK50	112	北尾根	平場	27	エ	III	残存0.40	0.45	0.05		
	SK51	116	北尾根	平場	26	エ	III	0.38	0.31	0.09		
	SK52	110	北尾根	平場	26	エ	III	0.54	0.37	0.06		
ピット	SP1	319	北東山腹	平場①	14	エ	III	0.64	0.32	0.10		
	SP2	323	北東山腹	平場①	14	エ	III	0.31	0.24	0.06		
	SP3	322	北東山腹	平場①	14	エ	III	0.31	0.23	0.05		
塗	S21	225	北東山腹	平場②	14	エ	N'	0.40	0.35	0.20	大群人骨出土	
	S22	235	北東山腹	平場②	14	エ	N'	0.45	0.44	0.44	大群人骨出土	
	S23	234	北東山腹	平場②	14	エ	N'	0.45	0.33	0.06	大群人骨出土	



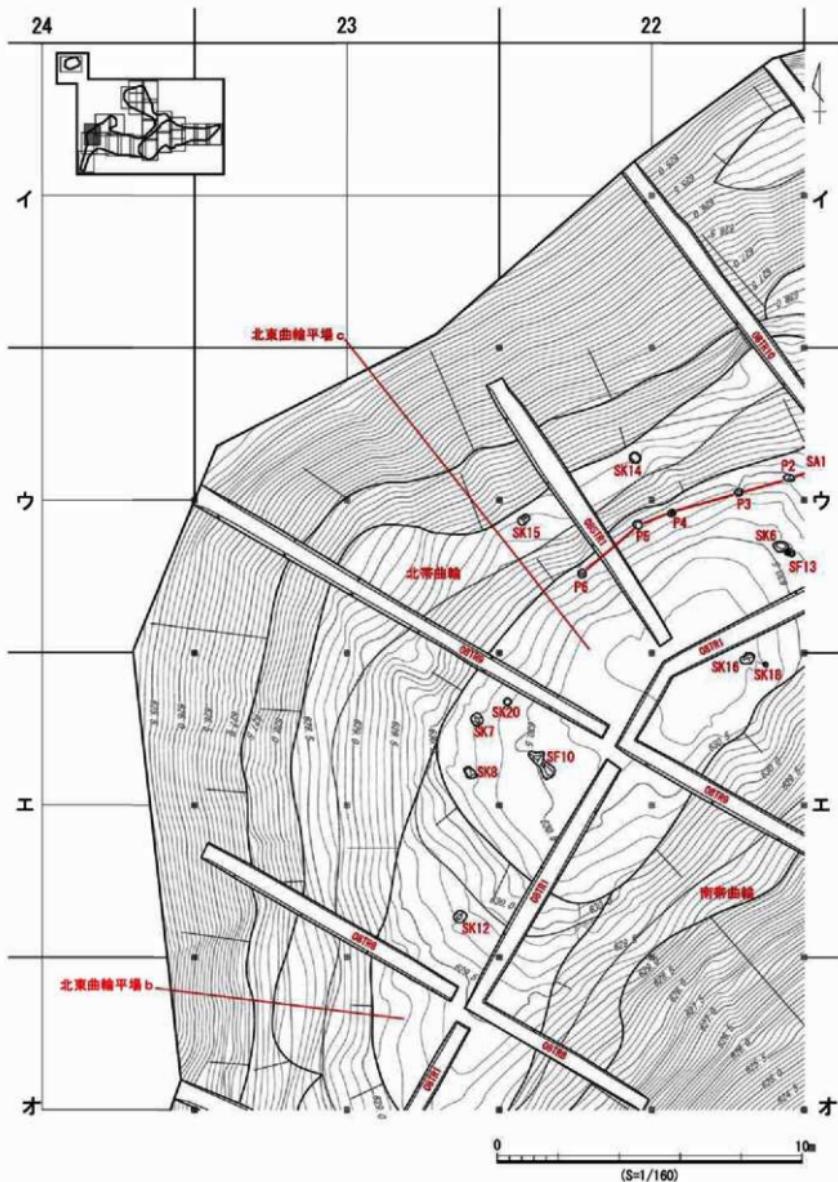
第8図 調査区全体図



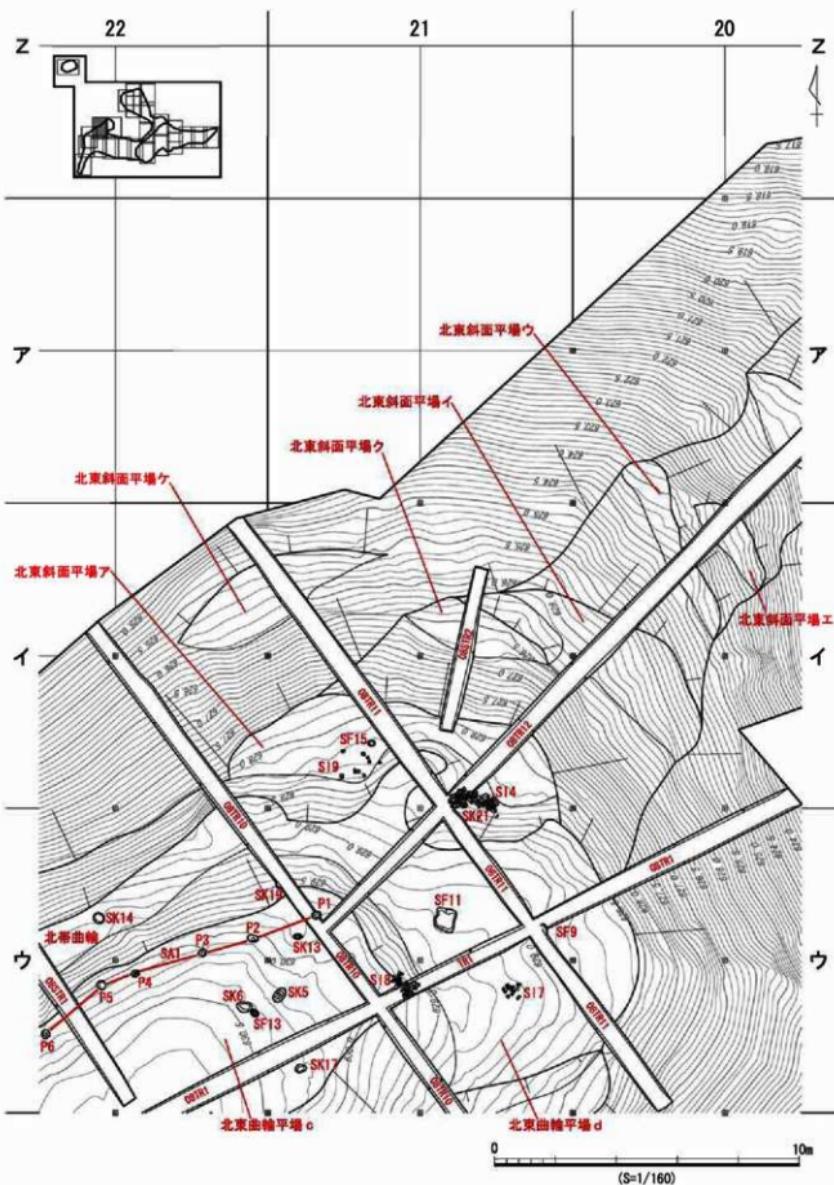
第9図 調査区全域分割図（1）



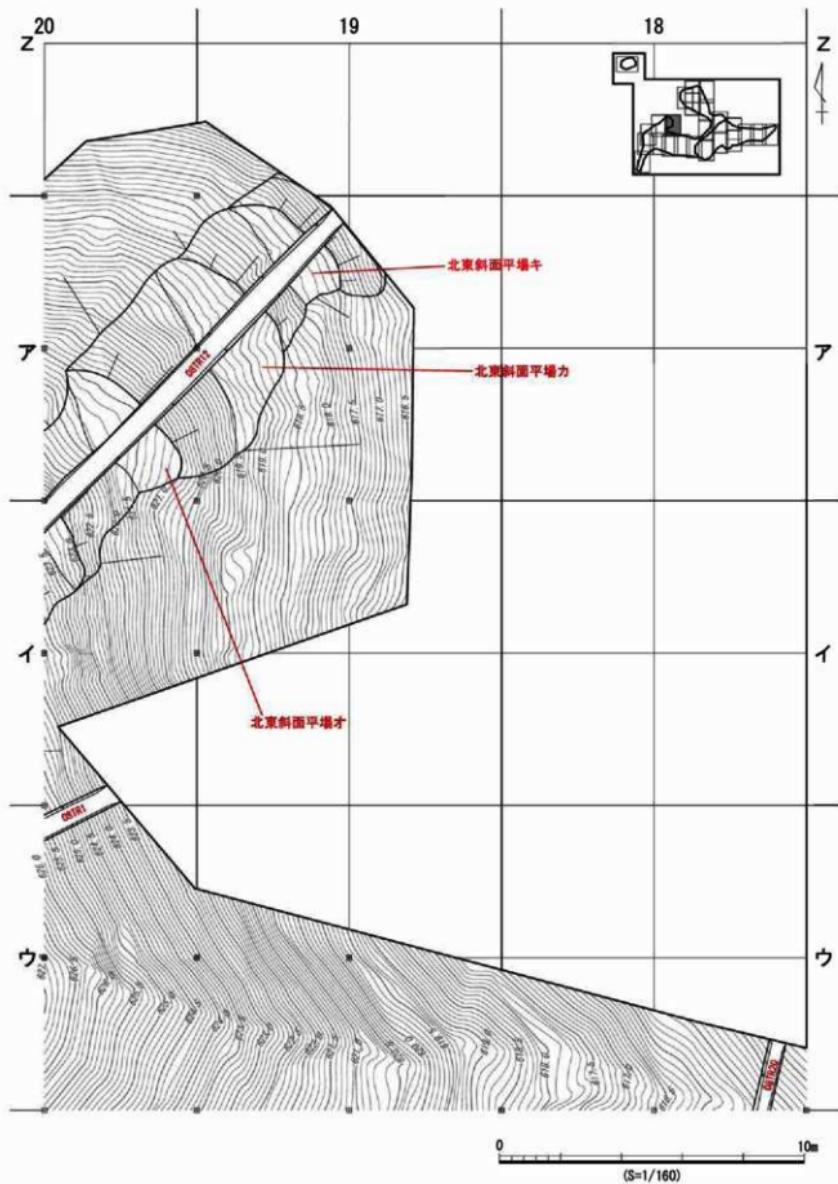
第10図 調査区全域分割図（2）



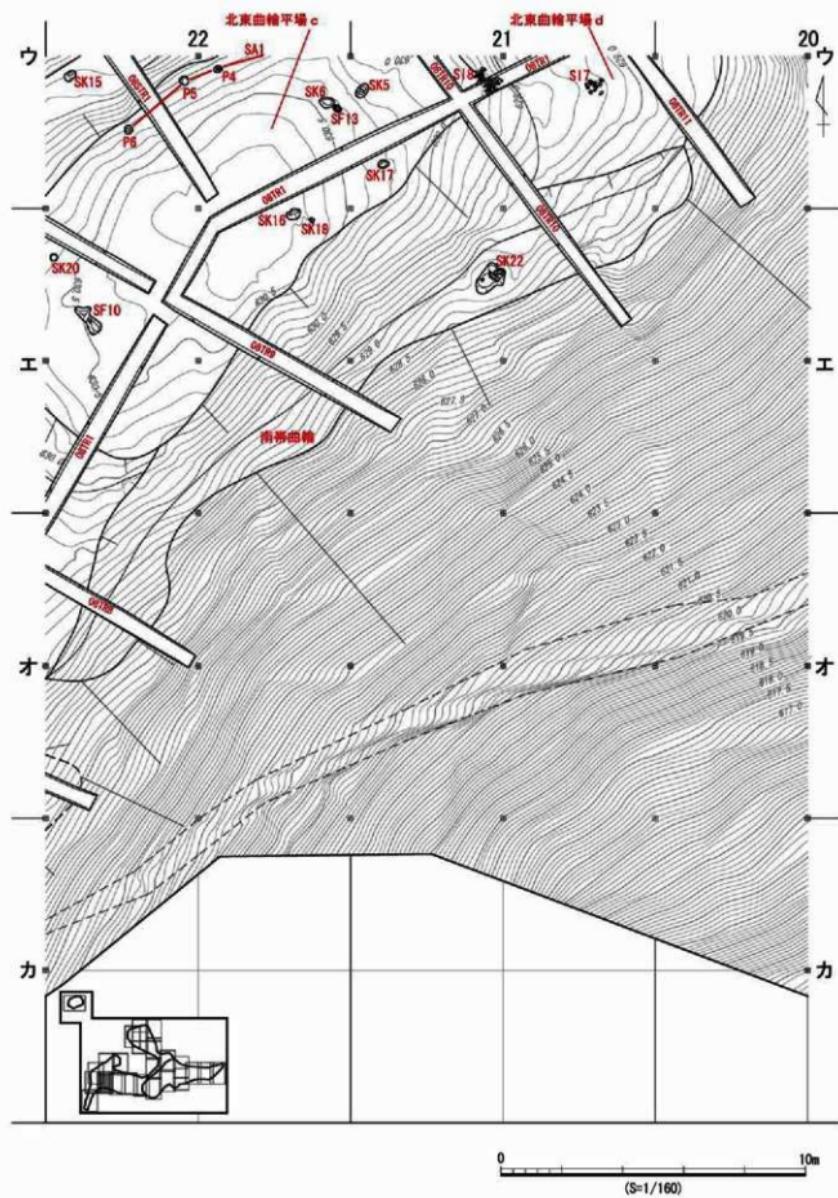
第11図 調査区全域分割図（3）



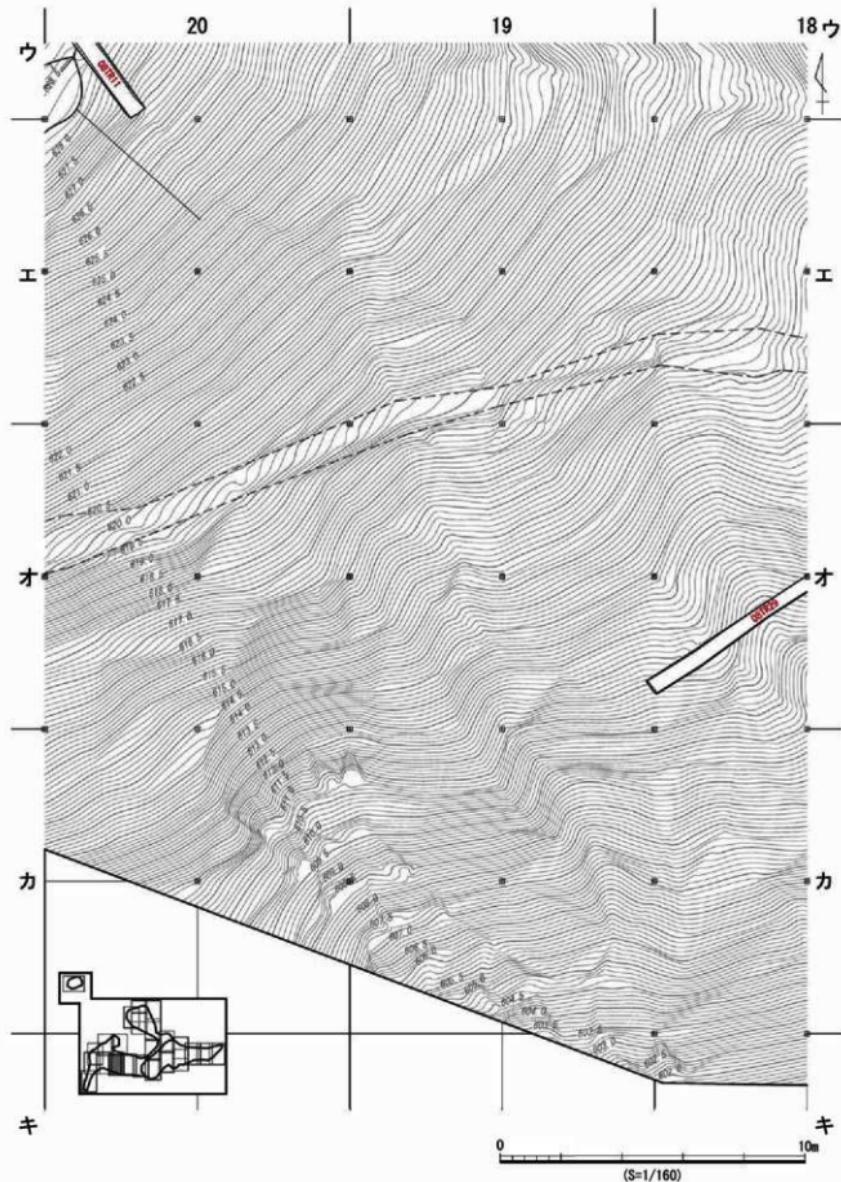
第12図 調査区全域分割図（4）



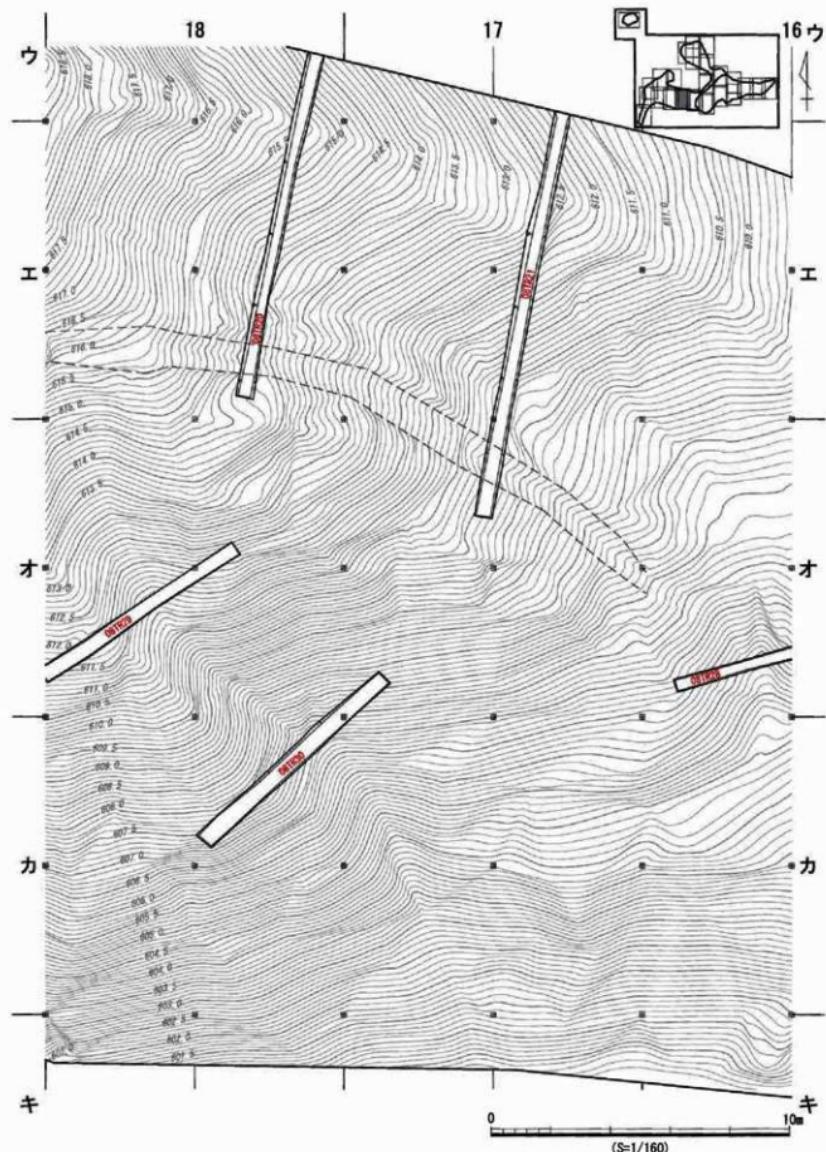
第13図 調査区全域分割図(5)



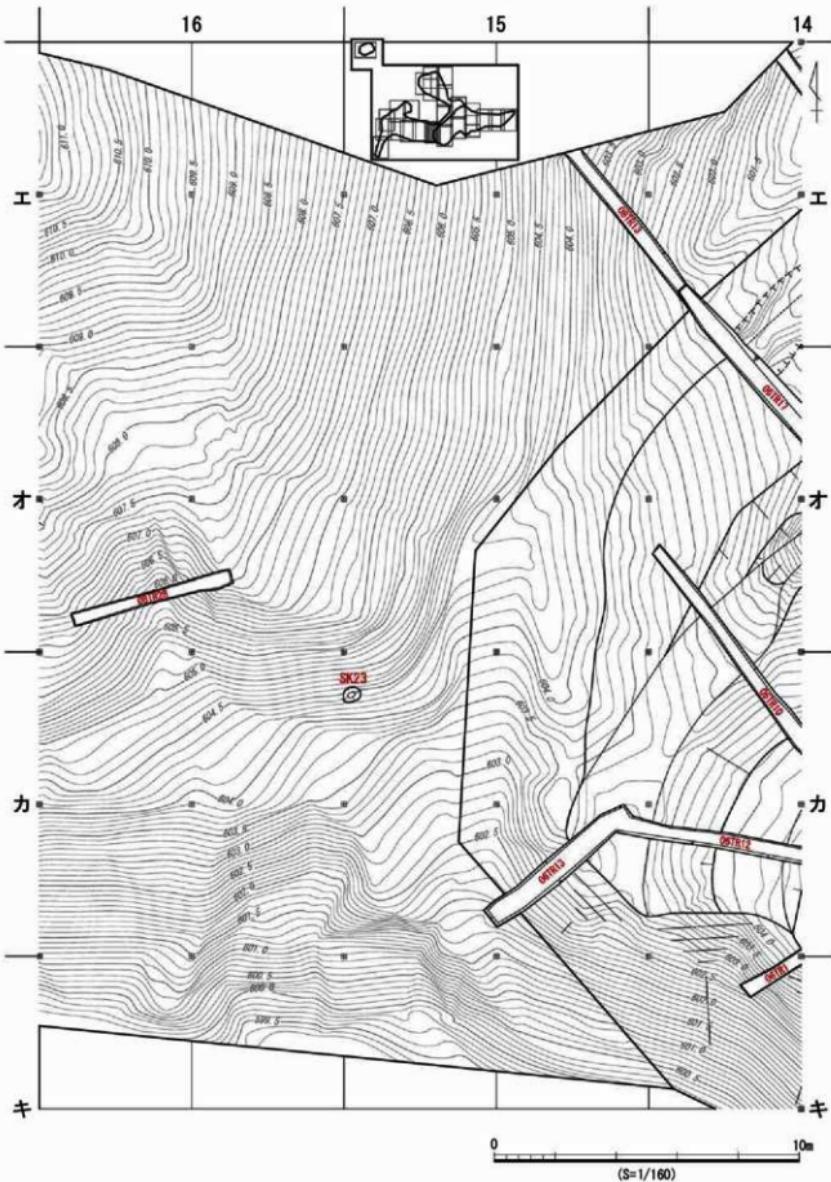
第14図 調査区全域分割図（6）



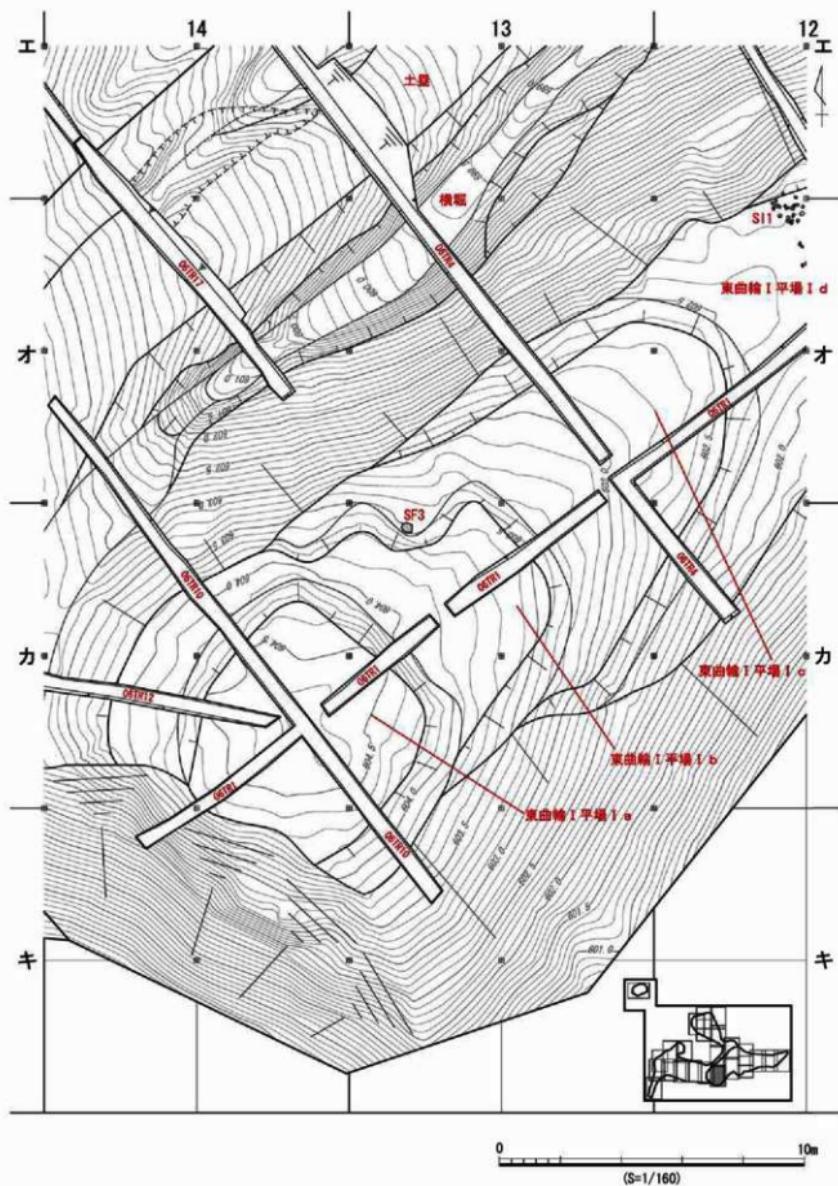
第15図 調査区全域分割図（7）



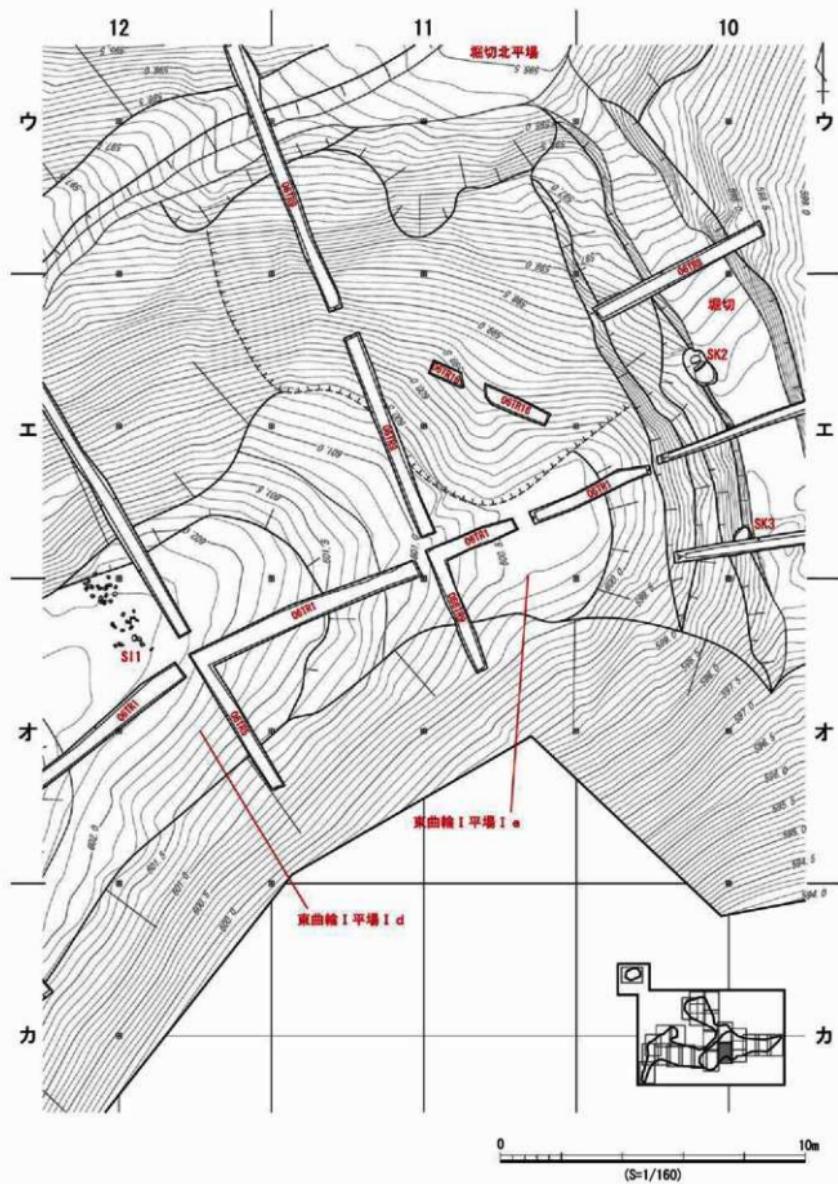
第16図 調査区全域分割図(8)



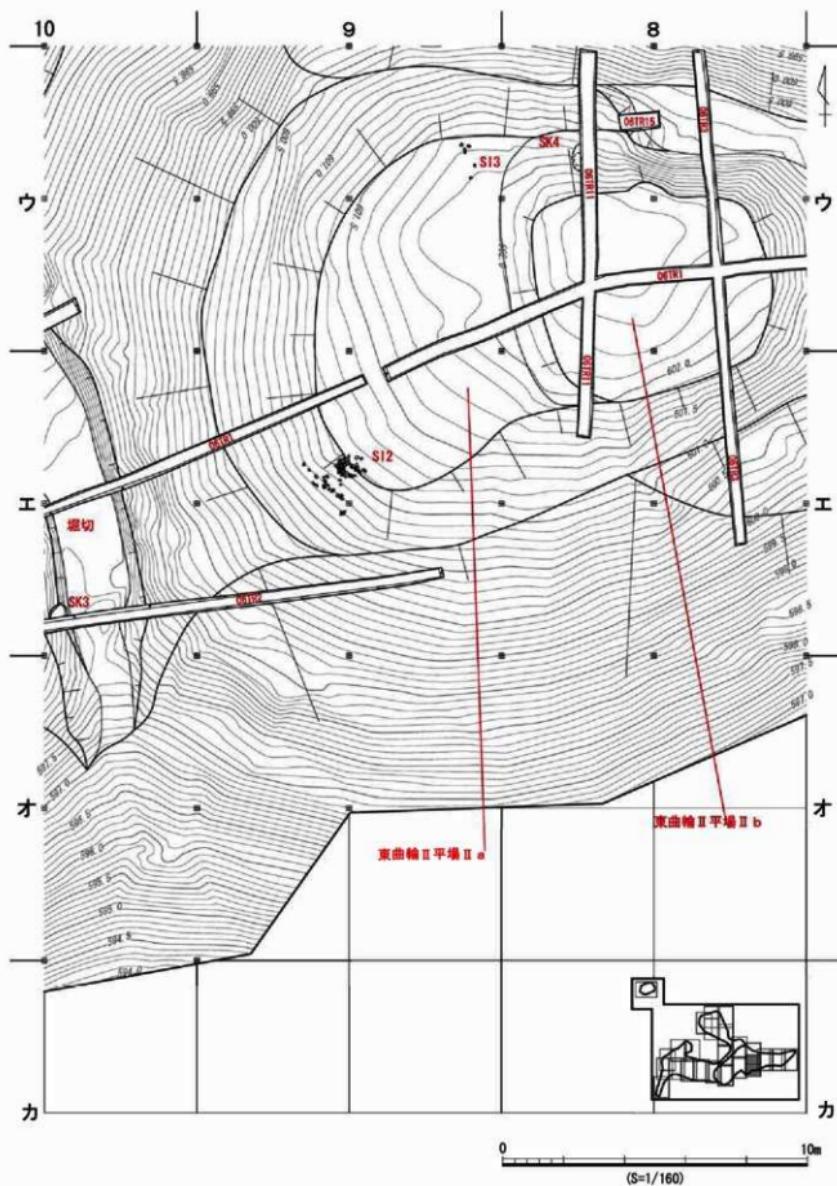
第17図 調査区全域分割図（9）



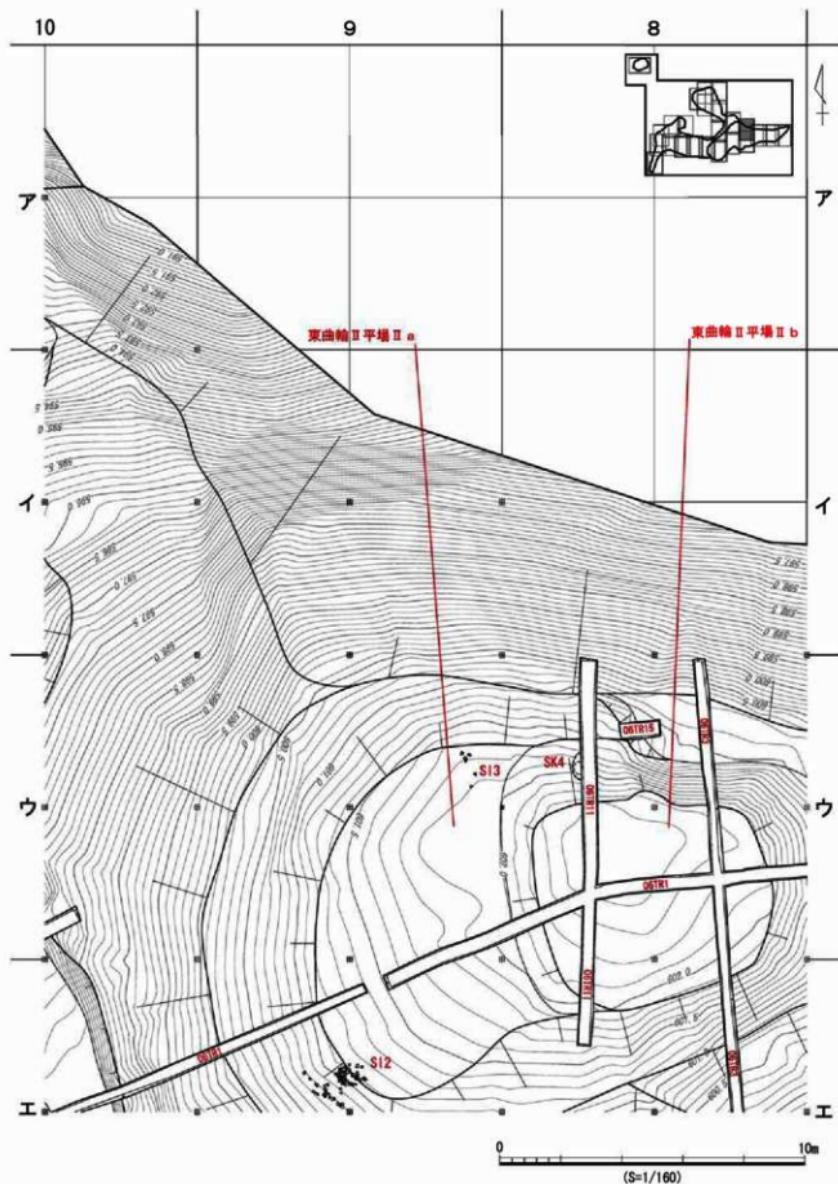
第18図 調査区全域分割図(10)



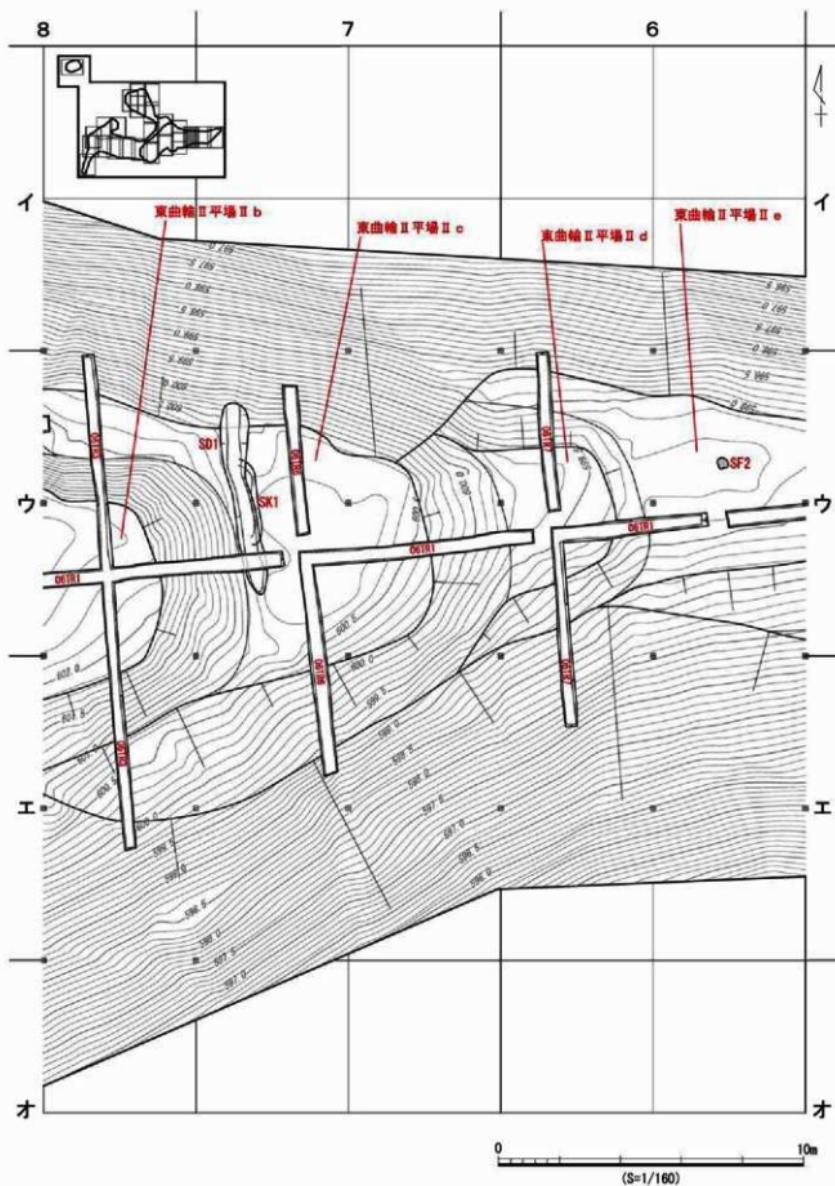
第19図 調査区全域分割図(11)



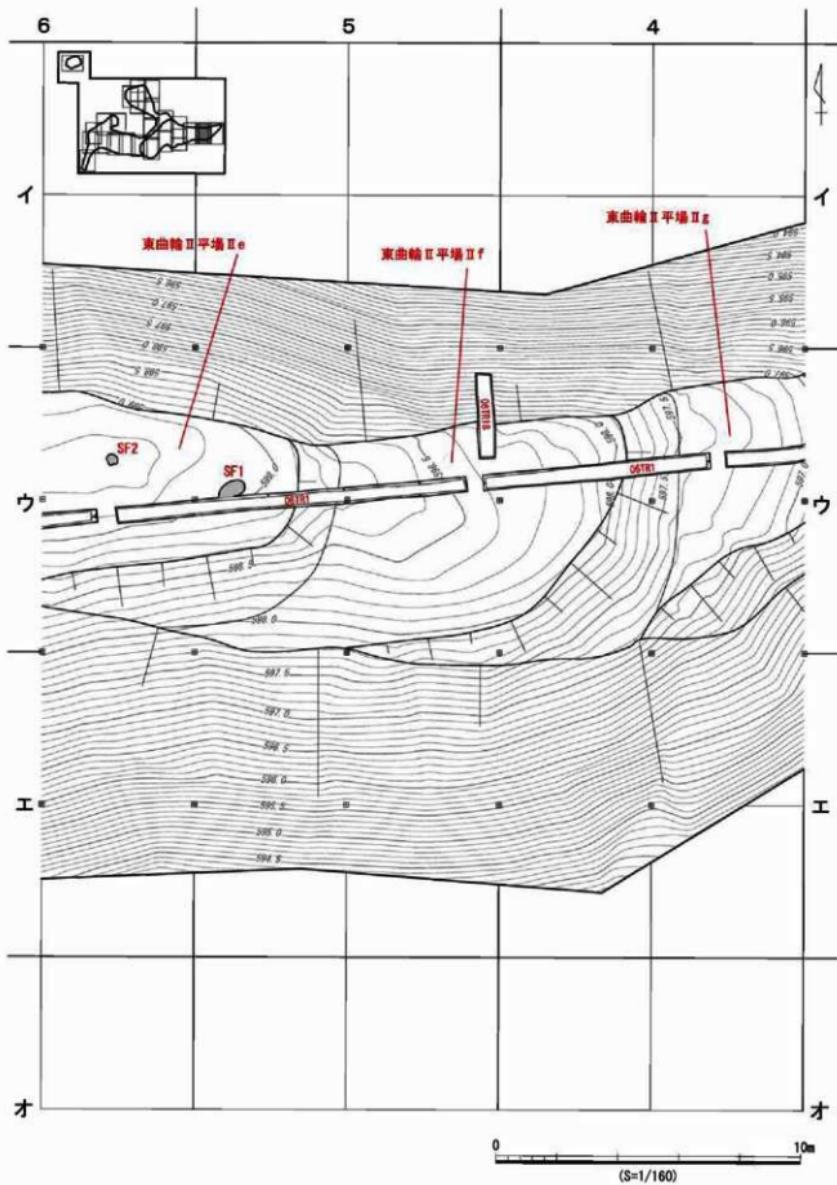
第20図 調査区全域分割図 (12)



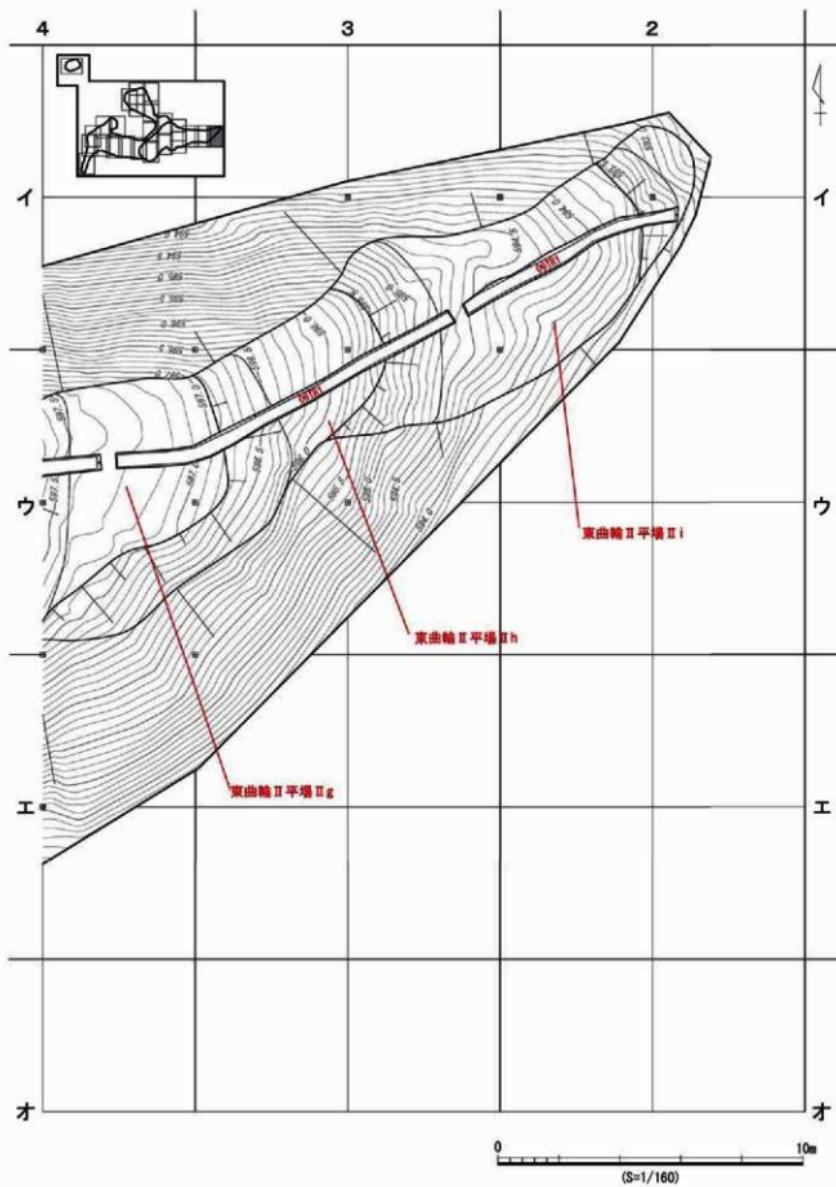
第21図 調査区全域分割図 (13)



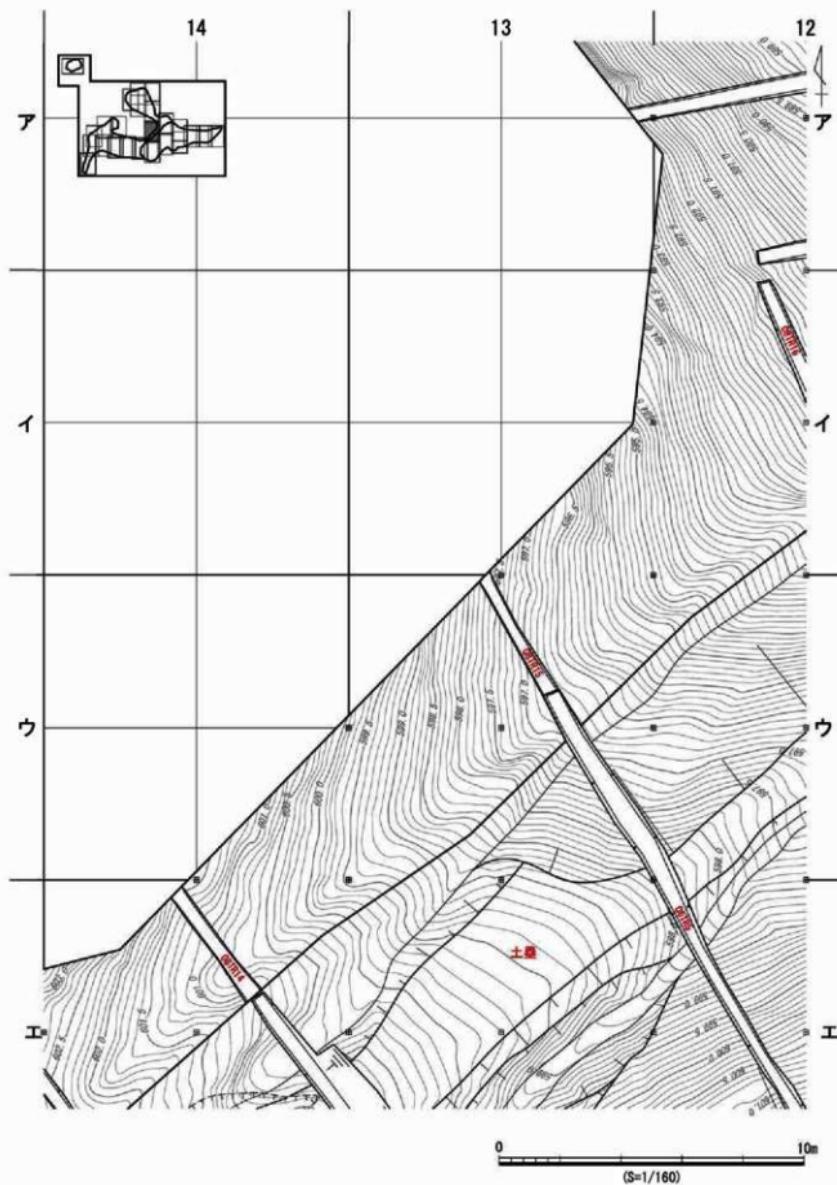
第22図 調査区全域分割図(14)



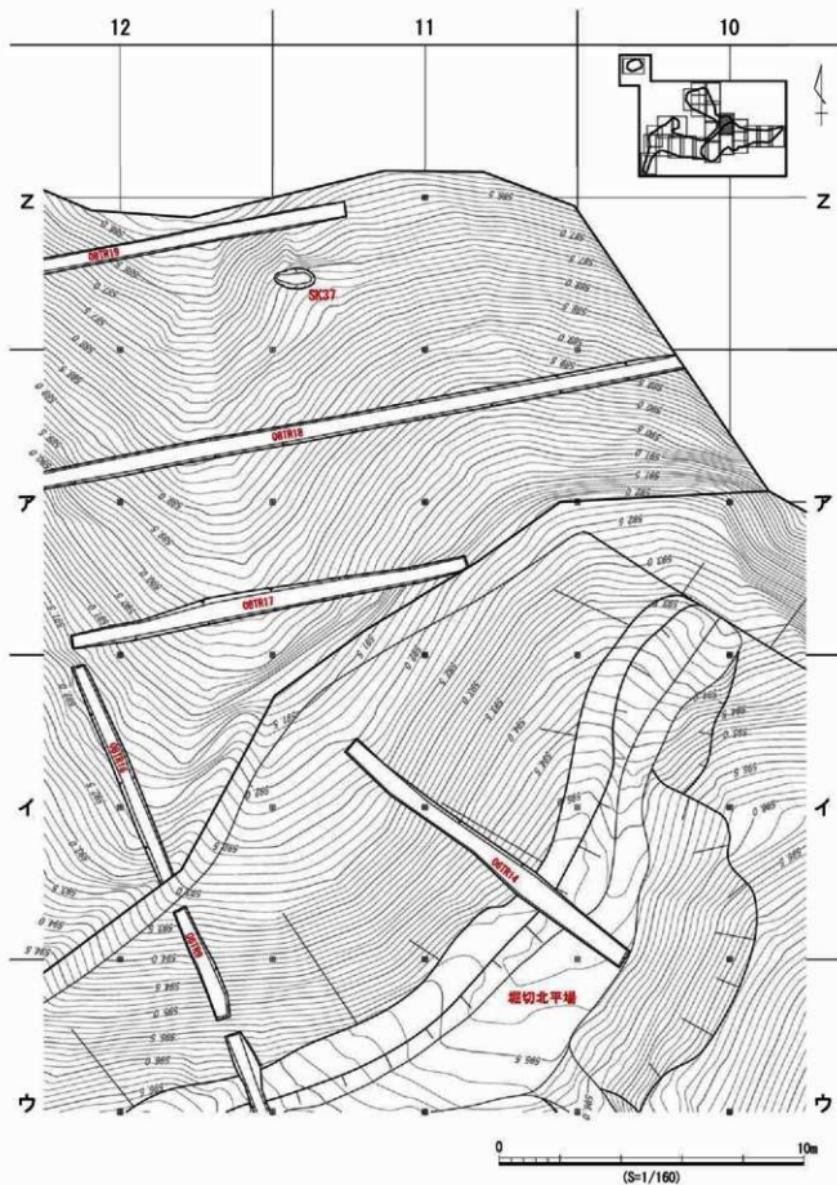
第23図 調査区全域分割図（15）



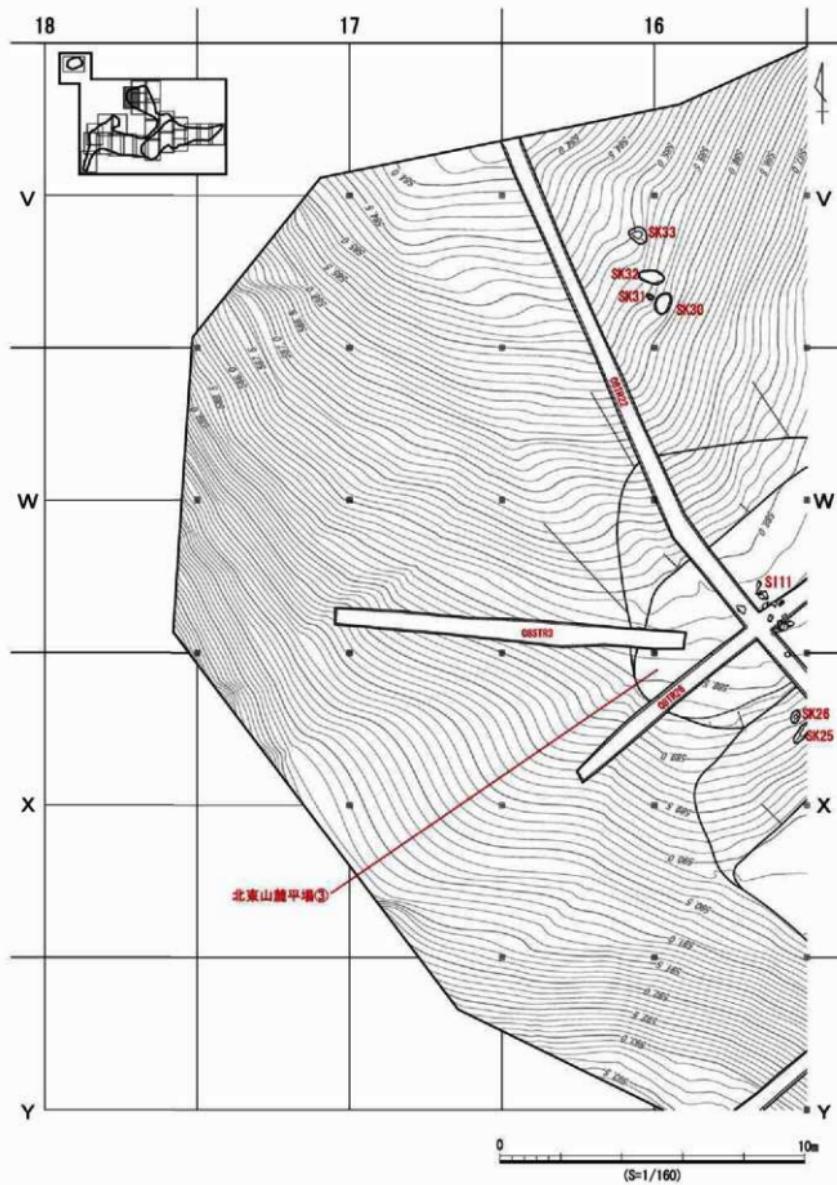
第24図 調査区全域分割図 (16)



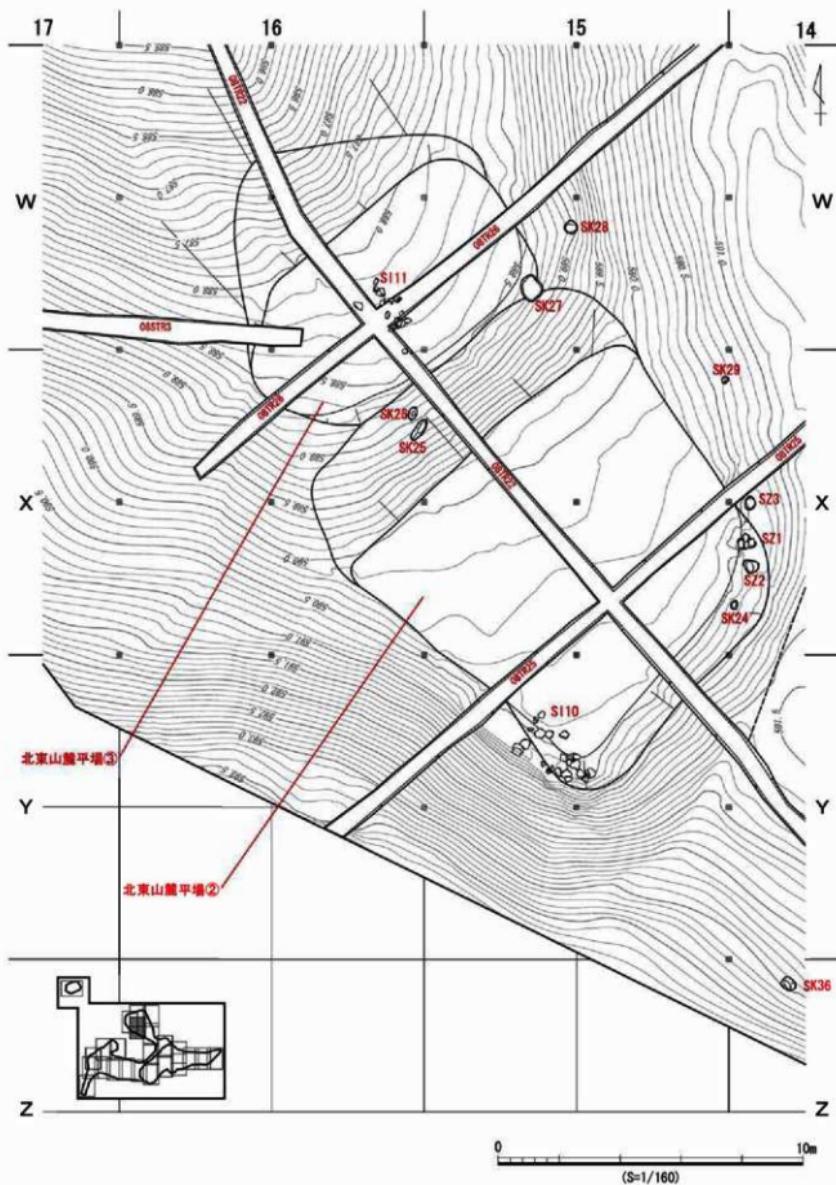
第25図 調査区全域分割図 (17)



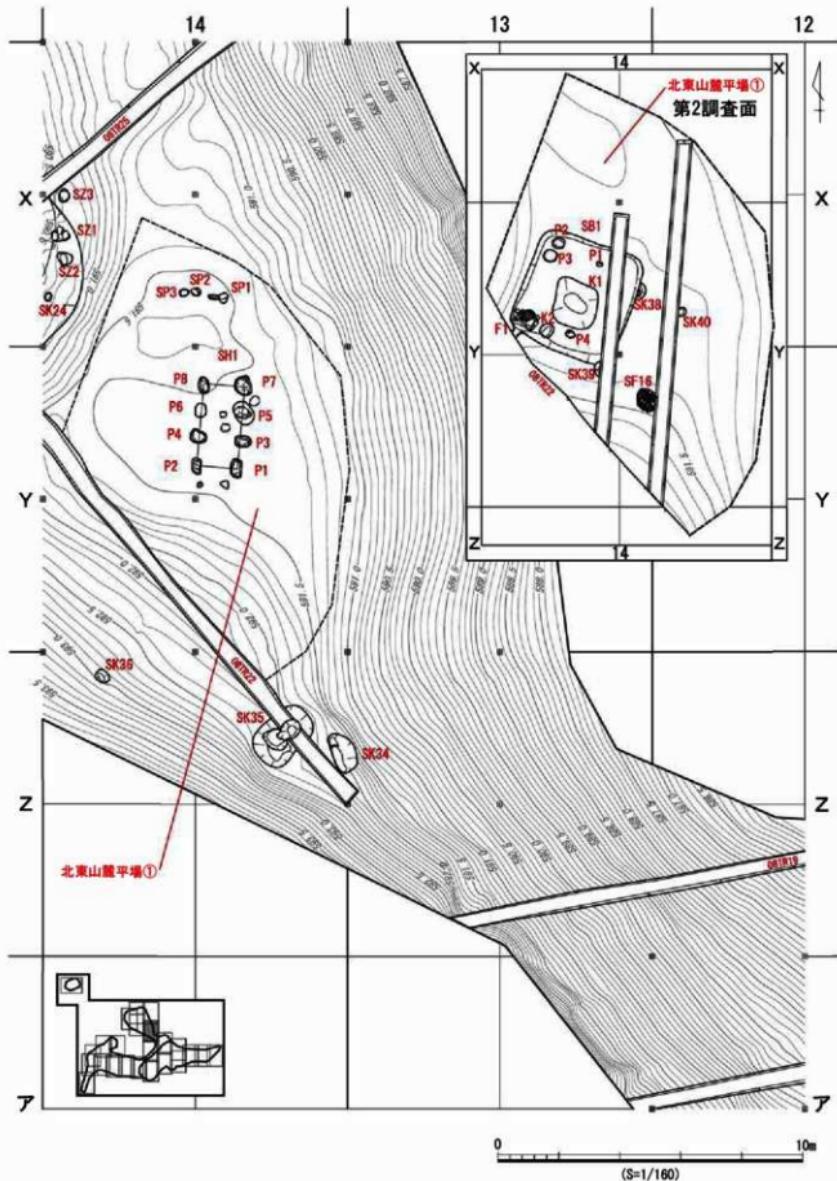
第26図 調査区全域分割図(18)



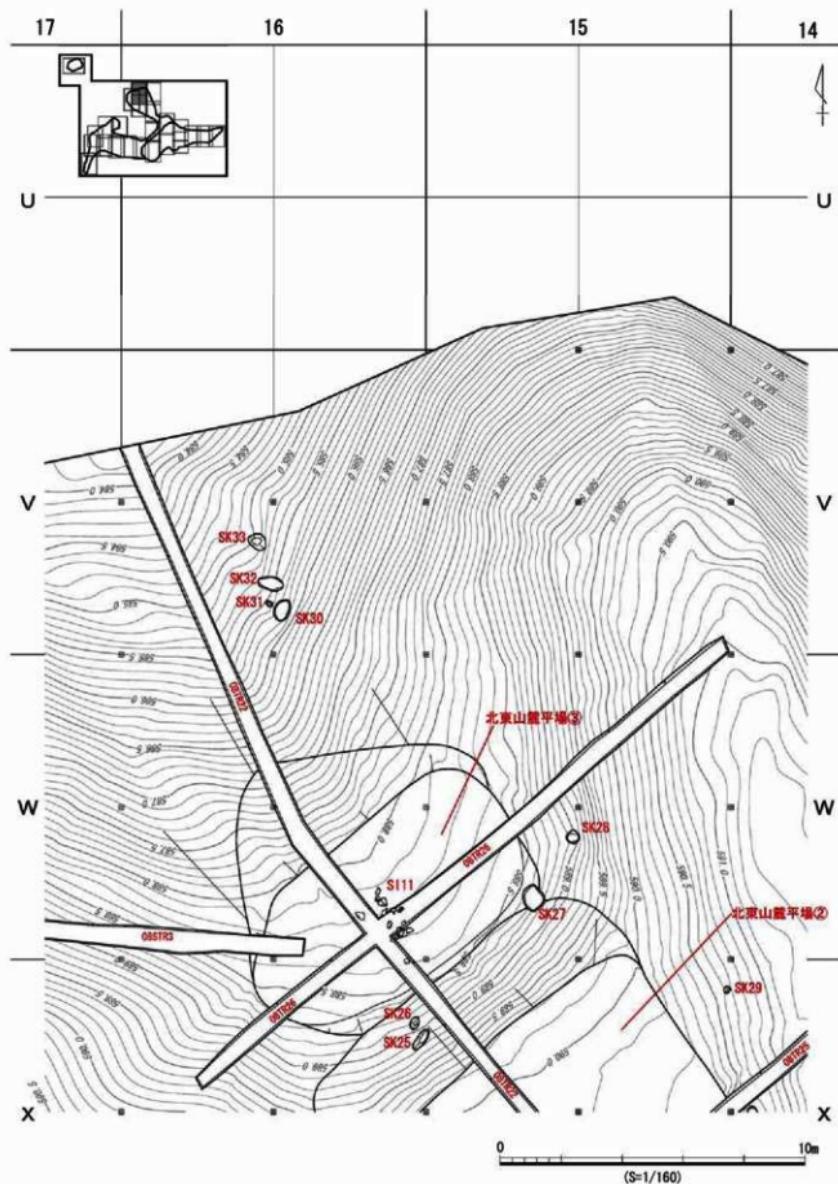
第27図 調査区全域分割図（19）



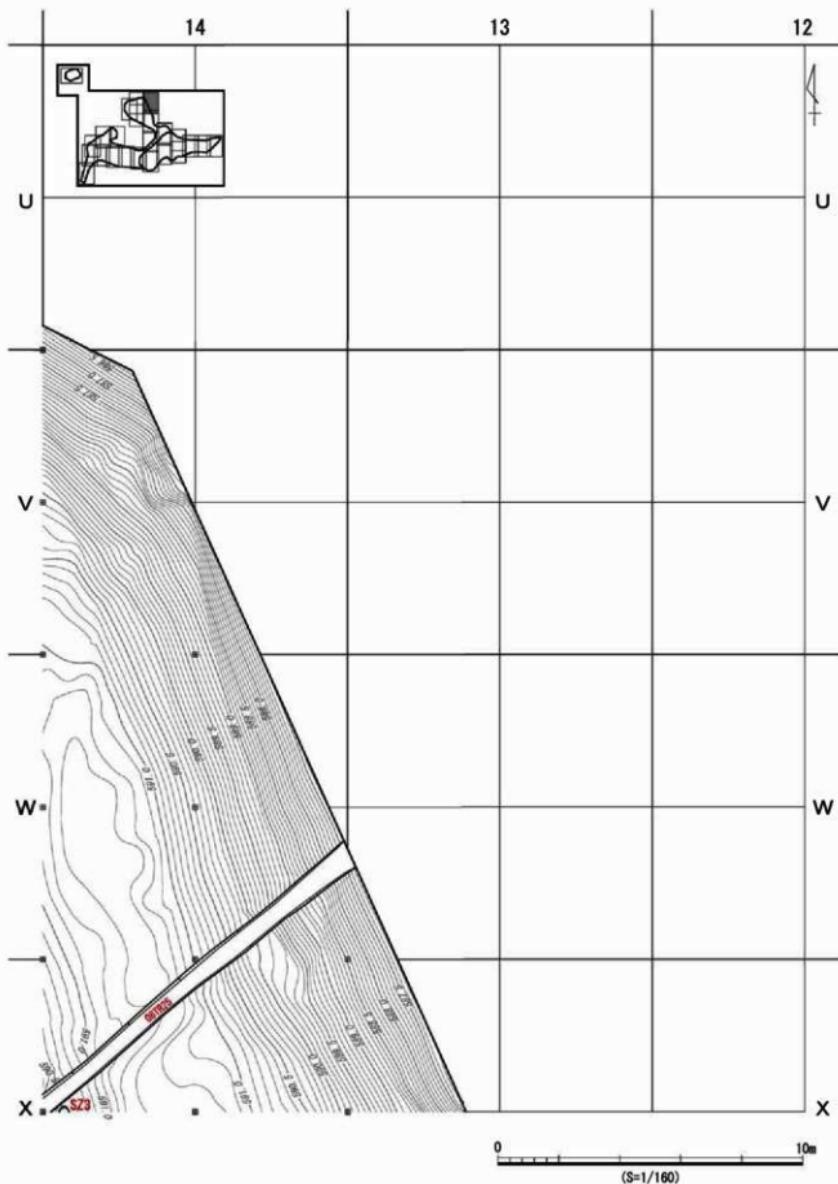
第28図 調査区全域分割図 (20)



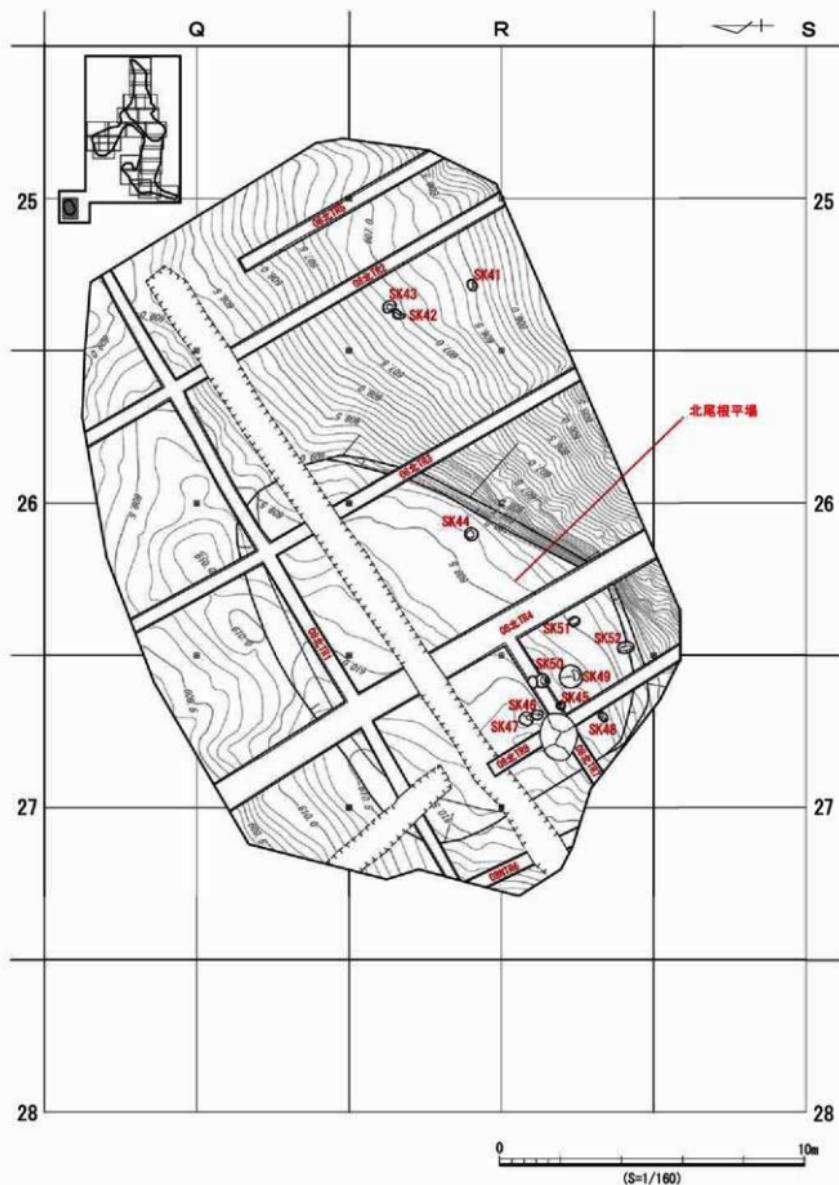
第29図 調査区全域分割図(21)



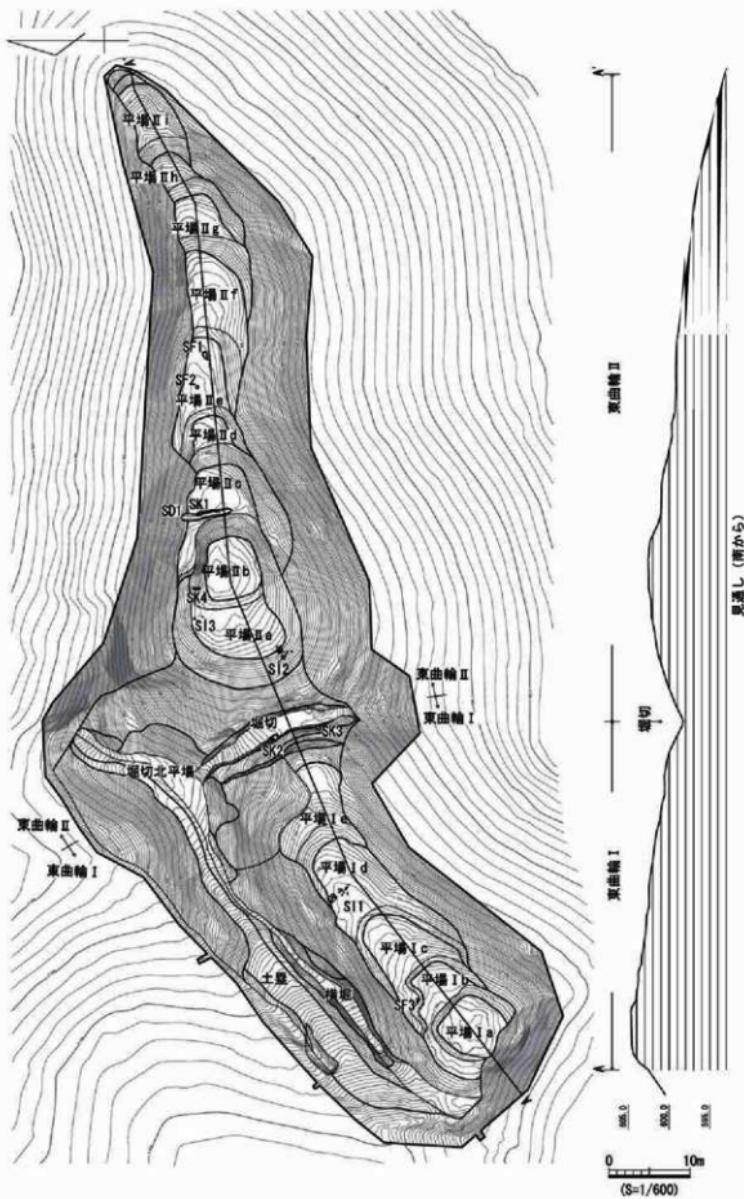
第30図 調査区全域分割図(22)



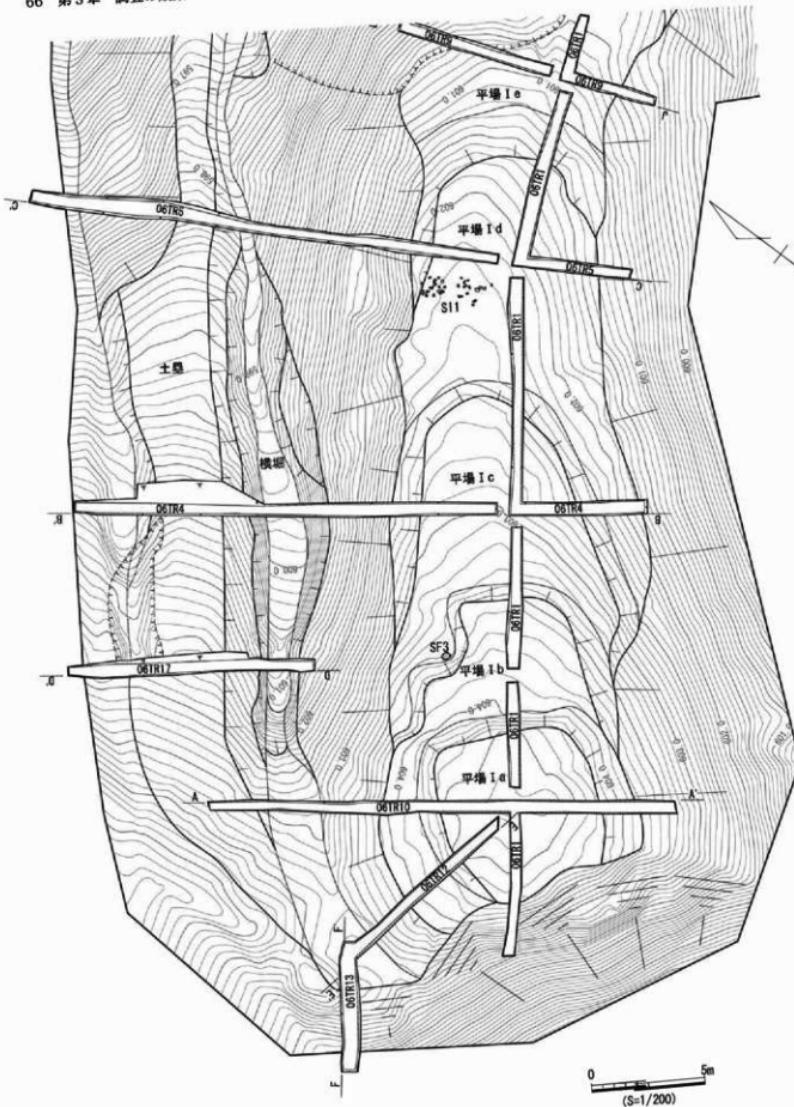
第31図 調査区全域分割図 (23)



第32図 調査区全域分割図 (24)



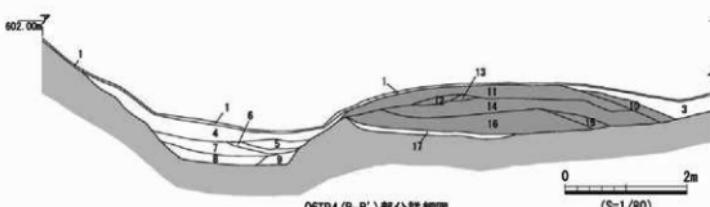
第33図 東尾根地区概要



第34図 東曲輪I・横堀・土塁

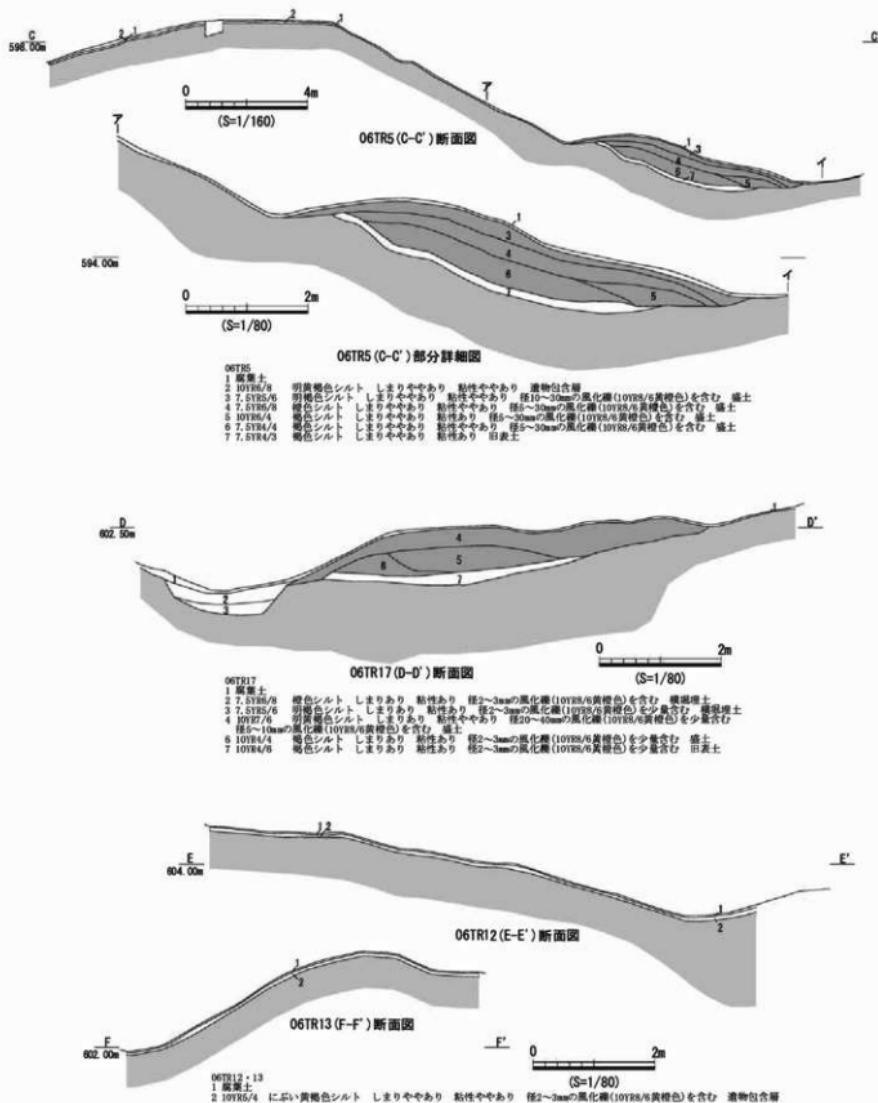


06TR10
1 混凝土
2 10YR5/4 に近い黄褐色シルト しまりややあり 黏性ややあり 厚2~3mmの黒化層(10YR8/6黄褐色)を含む 遺物包含層
3 10YR8/6 明黄色地色シルト しまりあり 黏性ややあり 厚2~5mmの黒化層(10YR8/6黄褐色)を含む 遺物包含層

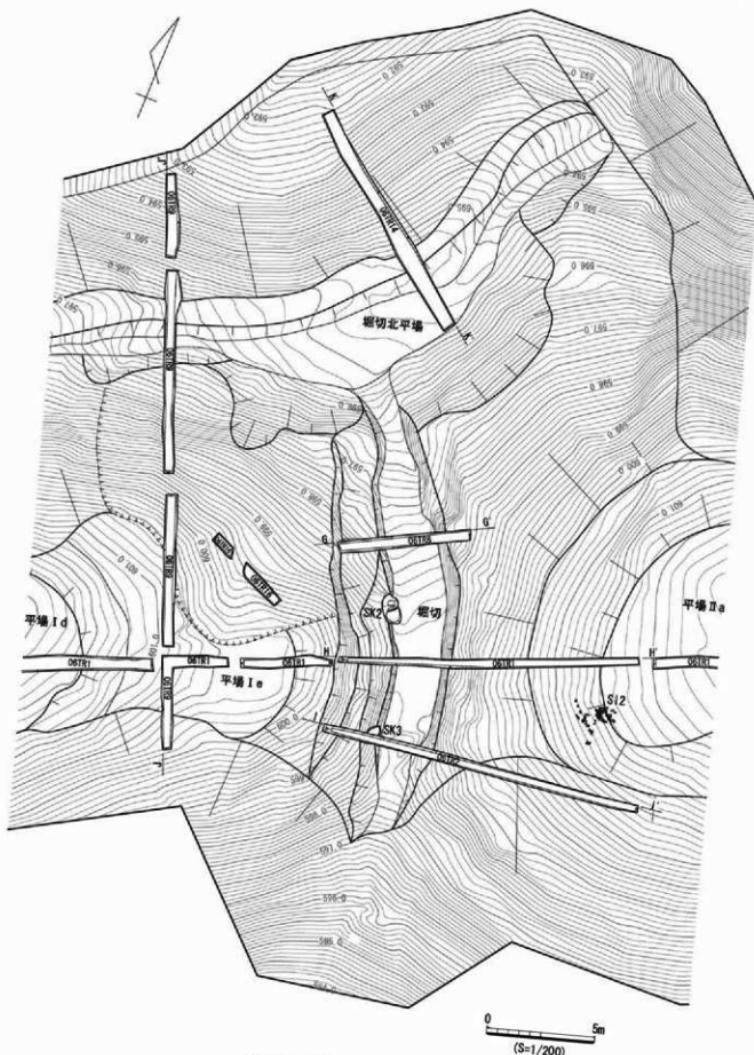


06TR4
1 混凝土
2 7. SYRS/8 棕褐色シルト しまりややあり 黏性ややあり 遺物包含層
3 7. SYRS/8 棕褐色シルト しまりあり 黏性ややあり 65cm~12cmの黒化層(10YR8/6黄褐色)を少量含む 遺物包含層
4 7. SYRS/8 棕褐色シルト しまりややあり 黏性ややあり 65cm~12cmの黒化層(10YR8/6黄褐色)を少量含む 遺物包含層
5 10YR5/4 明褐色シルト しまりややあり 黏性ややあり 65cm~12cmの黒化層(10YR8/6黄褐色)を少量含む 遺物包含層
6 7. SYRS/8 棕褐色シルト しまりあり 黏性ややあり 混凝土
7. SYRS/8 棕褐色シルト しまりあり 黏性ややあり 65cm~12cmの黒化層(10YR8/6黄褐色)を少量含む 混凝土
8 7. SYRS/6 棕褐色シルト しまりあり 黏性ややあり 65cm~12cmの黒化層(10YR8/6黄褐色)を少量含む 混凝土
9 7. SYRS/6 棕褐色シルト しまりあり 黏性ややあり 65cm~12cmの黒化層(10YR8/6黄褐色)を少量含む 混凝土
10 7. SYRS/6 棕褐色シルト しまりあり 黏性ややあり 65cm~12cmの黒化層(10YR8/6黄褐色)を少量含む 混土
11 7. SYRS/6 棕褐色シルト しまりあり 黏性ややあり 65cm~12cmの黒化層(10YR8/6黄褐色)を少量含む 混土
12 7. SYRS/4 棕褐色シルト しまりあり 黏性ややあり 65cm~12cmの黒化層(10YR8/6黄褐色)を少量含む 混土
13 7. SYRS/4 明褐色シルト しまりあり 黏性ややあり 65cm~12cmの黒化層(10YR8/6黄褐色)を少量含む 混土
14 7. SYRS/4 棕褐色シルト しまりあり 黏性ややあり 65cm~12cmの黒化層(10YR8/6黄褐色)を少量含む 混土
15 7. SYRS/4 棕褐色シルト しまりあり 黏性ややあり 65cm~12cmの黒化層(10YR8/6黄褐色)を少量含む 混土
16 7. SYRS/4 棕褐色シルト しまりあり 黏性ややあり 65cm~12cmの黒化層(10YR8/6黄褐色)を少量含む 混土
17 7. SYRS/4 棕褐色シルト しまりあり 黏性ややあり 65cm~12cmの黒化層(10YR8/6黄褐色)を少量含む 混土

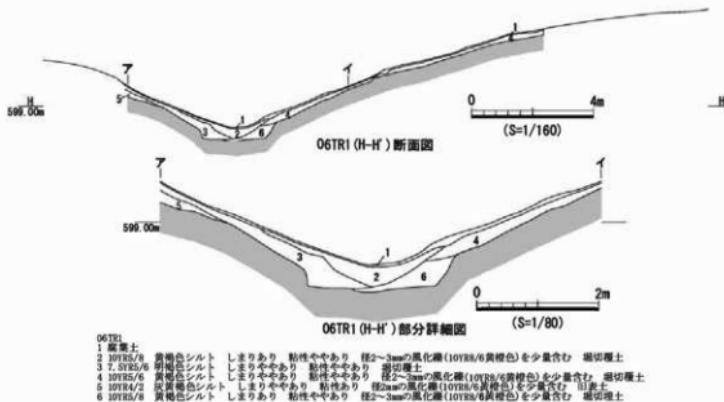
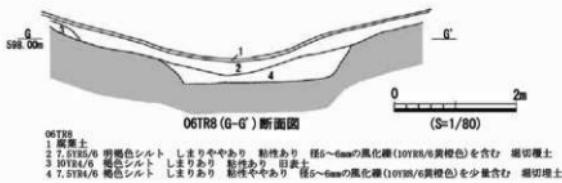
第35図 東曲輪I断面（1）



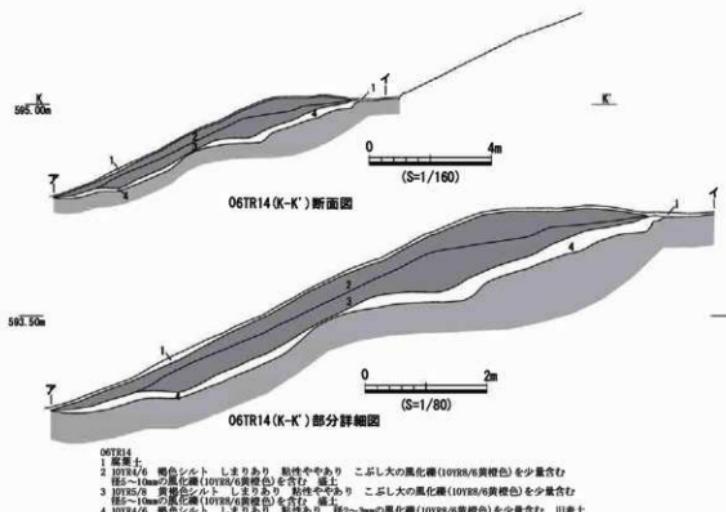
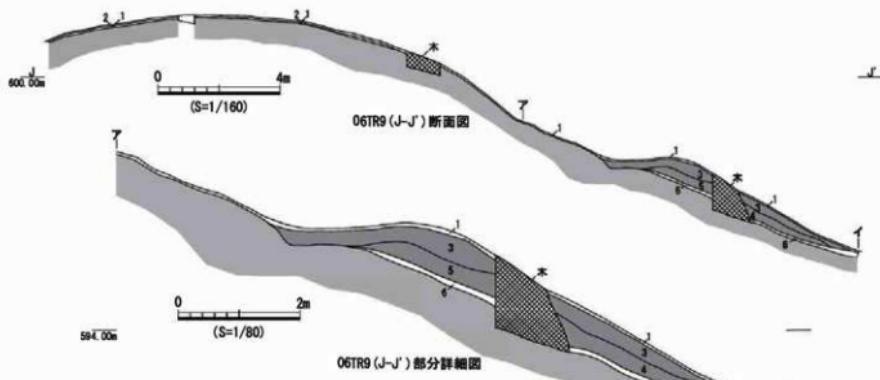
第36図 東曲輪I断面(2)



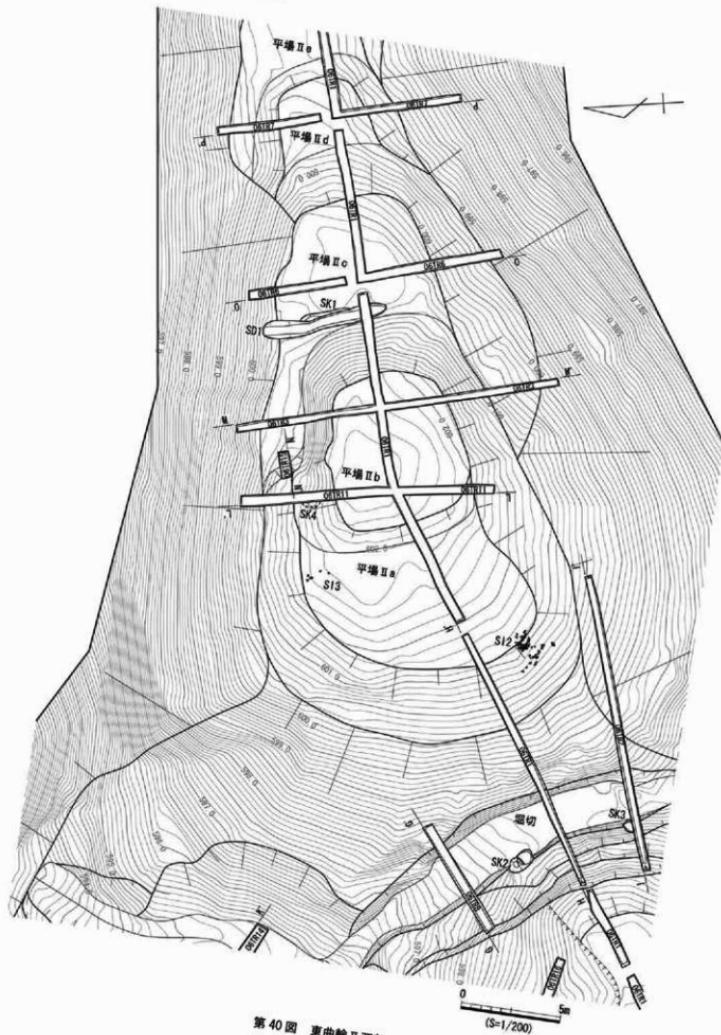
第37図 堀切・堀切北平場



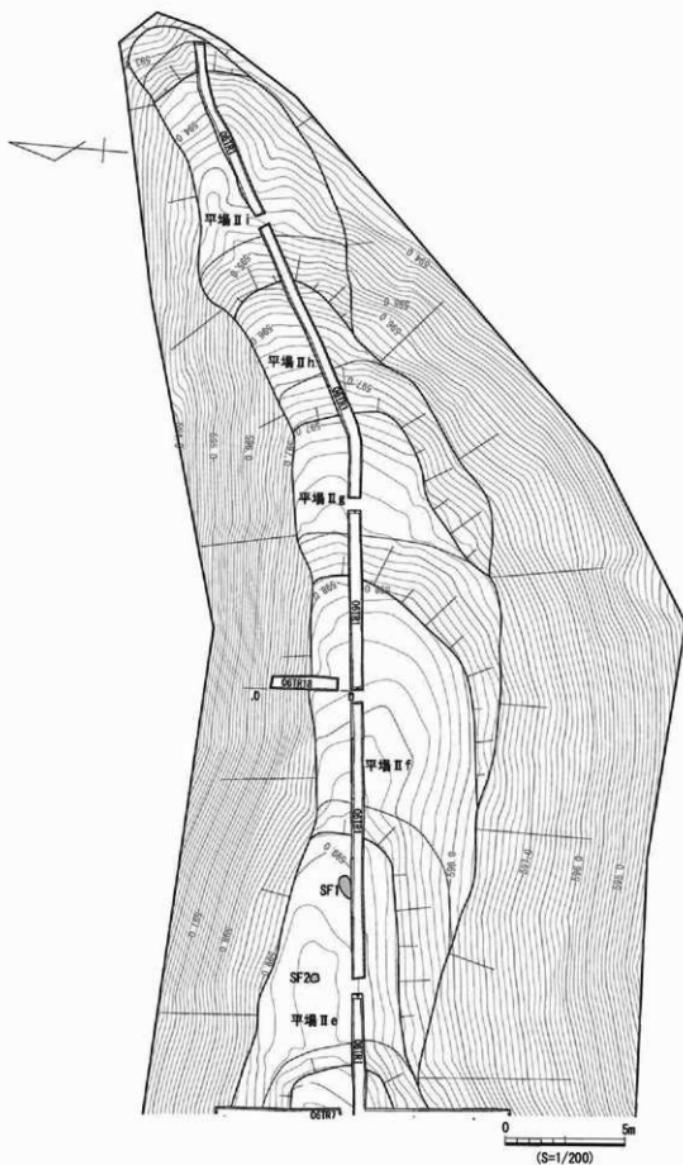
第38図 堀切断面



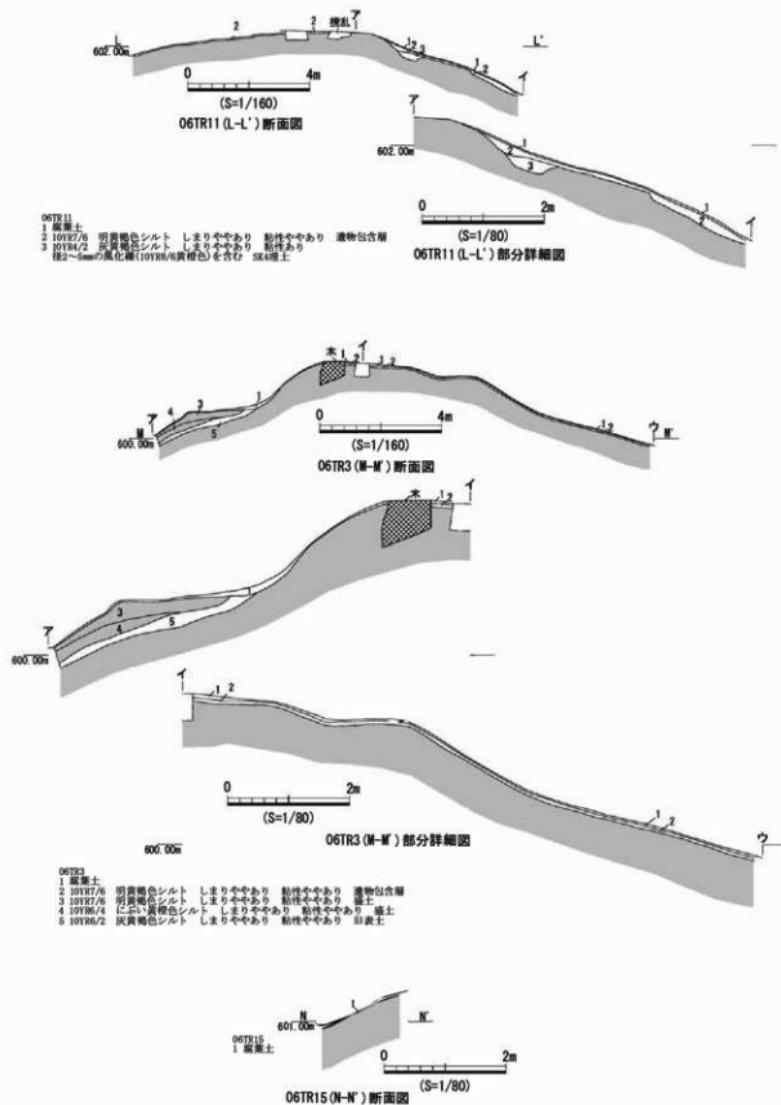
第39図 堀切北平場断面



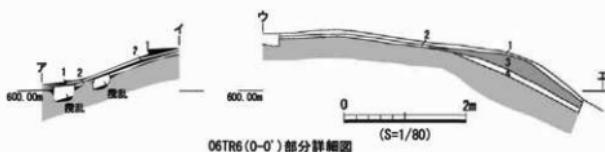
第40図 東曲輪II西部



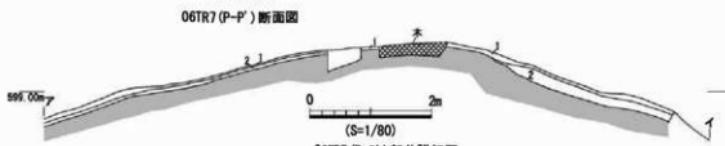
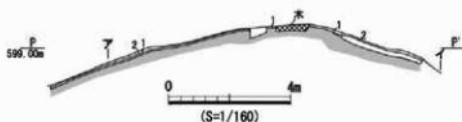
第41図 東曲軸II東部



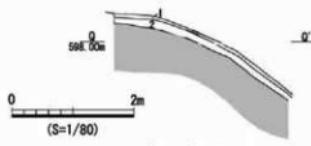
第42図 東曲輪Ⅱ断面(1)



06TR6
 1 蒸氣土
 2 10YR7/6 明黄褐色シルト しまりややあり 黏性ややあり 遺物包含層
 3 10YR8/6 明黄褐色シルト しまりややあり 黏性ややあり 風土
 4 10YR5/4 にい黄褐色シルト しまりややあり 黏性ややあり 表土

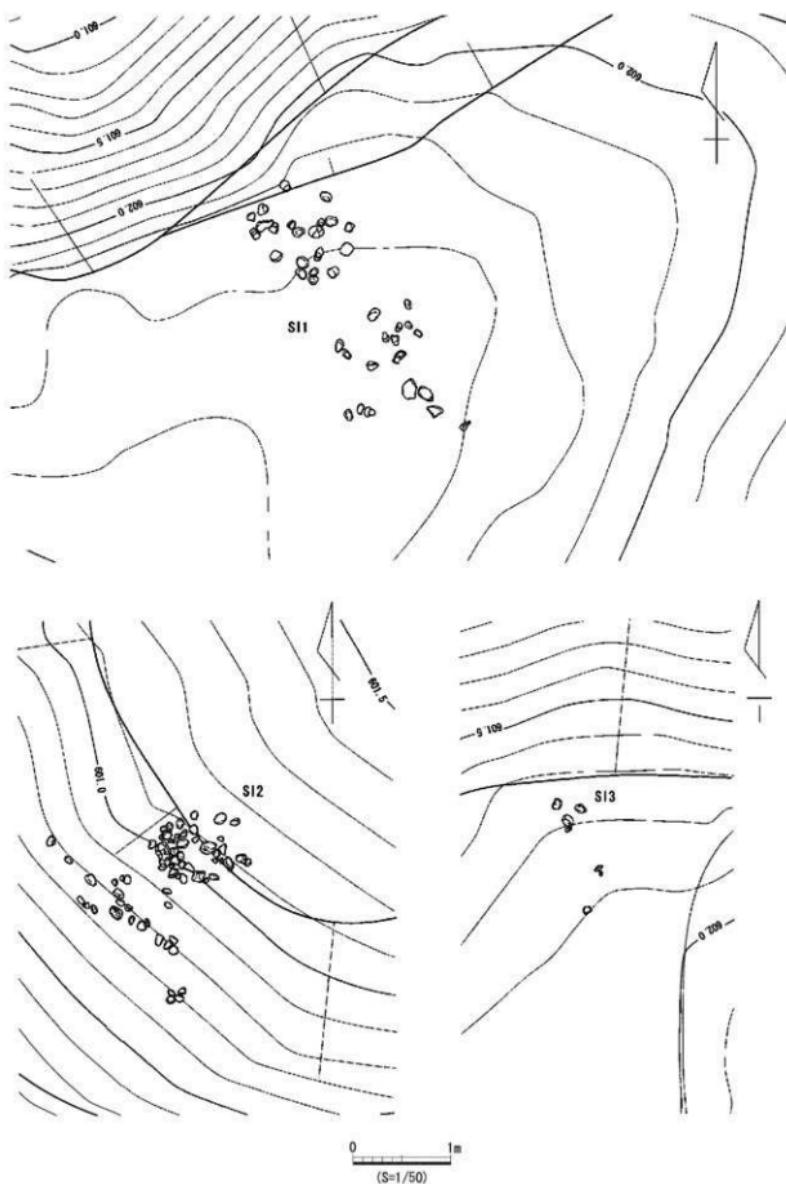


06TR7
 1 蒸氣土
 2 10YR7/6 明黄褐色シルト しまりややあり 黏性ややあり 遺物包含層

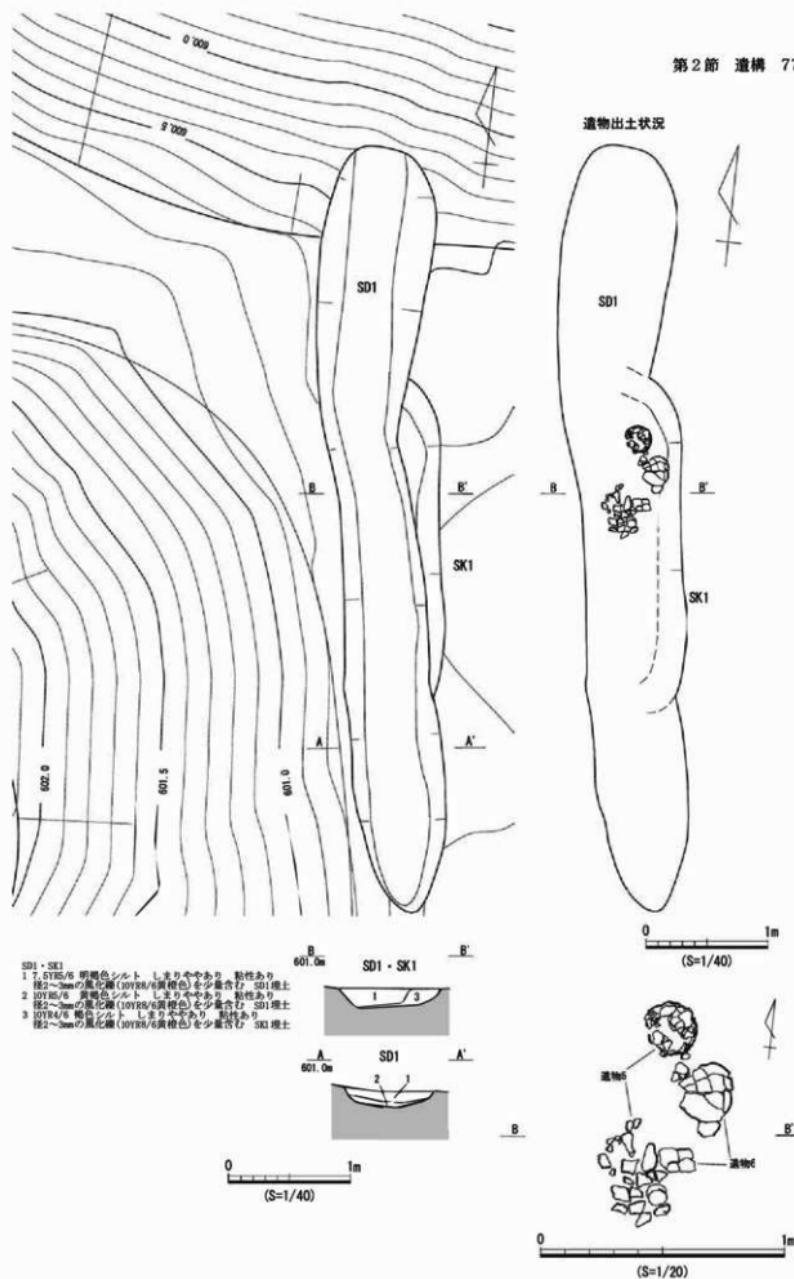


06TR18
 1 蒸氣土
 2 10YR5/4 にい黄褐色シルト しまりややあり 黏性ややあり
 深2~3mの風化層(10YR8/6黄褐色)を含む 遺物包含層

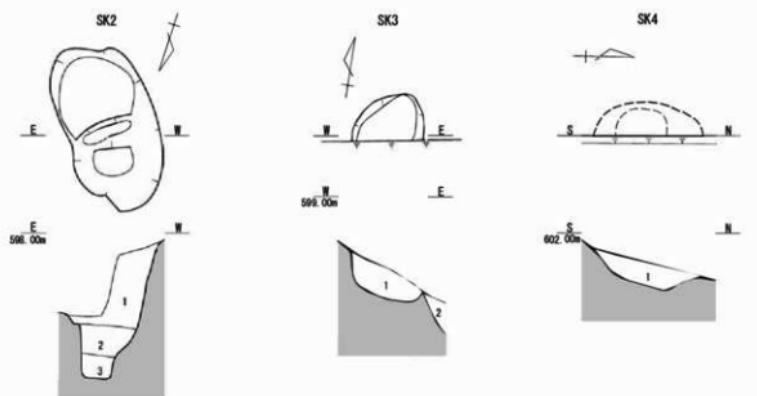
第43図 東曲輪Ⅰ断面(2)



第44図 S I 1~3



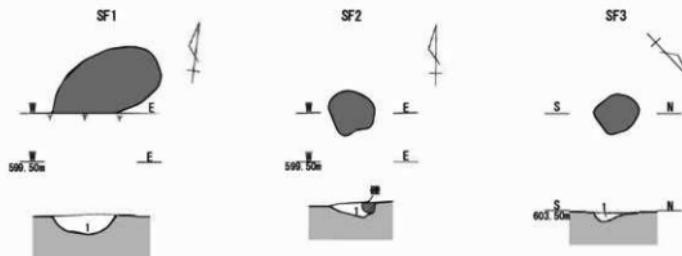
第45図 SD1・SK1



SK2
1 7SY4/4 暗色シルト しまりあり 黏性あり
5~15mmの木炭片を少許含む
2 3SY8/6 明褐色シルト しまりあり 黏性あり
3 SY25/6 の風化層(黄褐色・10YR8/6)を少許含む
3 SY8/6 木炭片を少許含む

SK3
1 10YR4/6 暗色シルト しまりややあり 黏性あり
径2~3mmの風化層(10YR8/6黄褐色)を少許含む
2 3SY8/6 暗色シルト しまりややあり 黏性あり
3 SY25/6 の風化層(10YR8/6黄褐色)を少許含む
地盤上

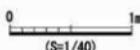
SK4
1 10YR4/2, 反黄褐色シルト しまりややあり
粘性あり
径2~3mmの風化層(10YR8/6黄褐色)を含む
地盤上



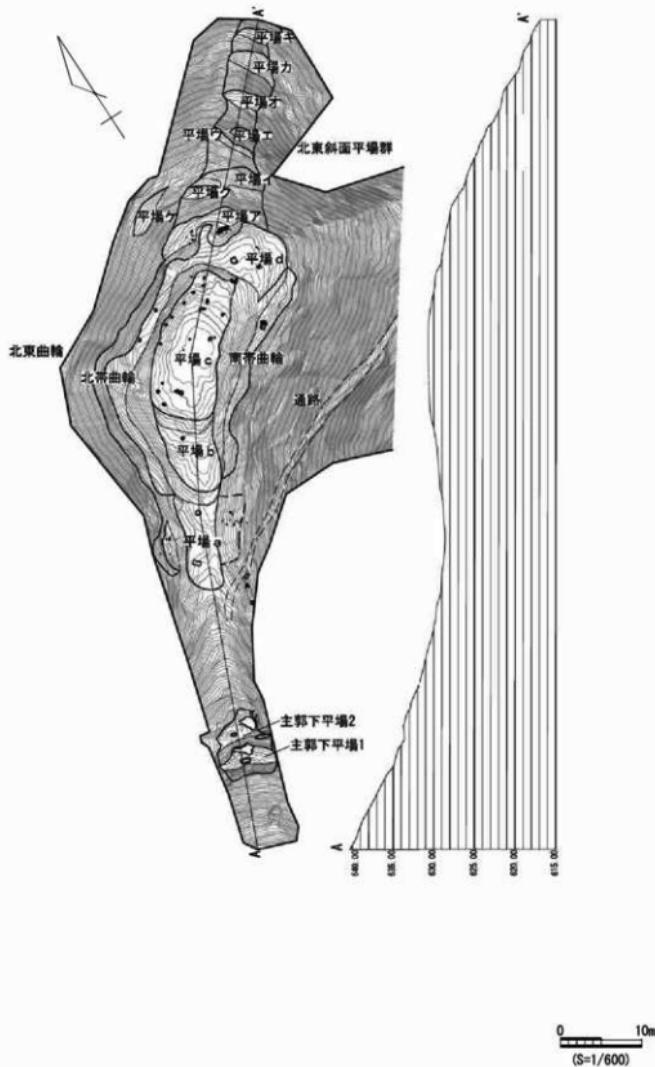
SF1
1 3SY4/4 に応じ赤褐色シルト しまりあり 黏性なし
径2~3mmの風化層(10YR8/6黄褐色)を少許含む
地盤上

SF2
1 3SY5/6 反赤褐色シルト しまりあり 黏性なし
径2~3mmの風化層(10YR8/6黄褐色)を少許含む
地盤上

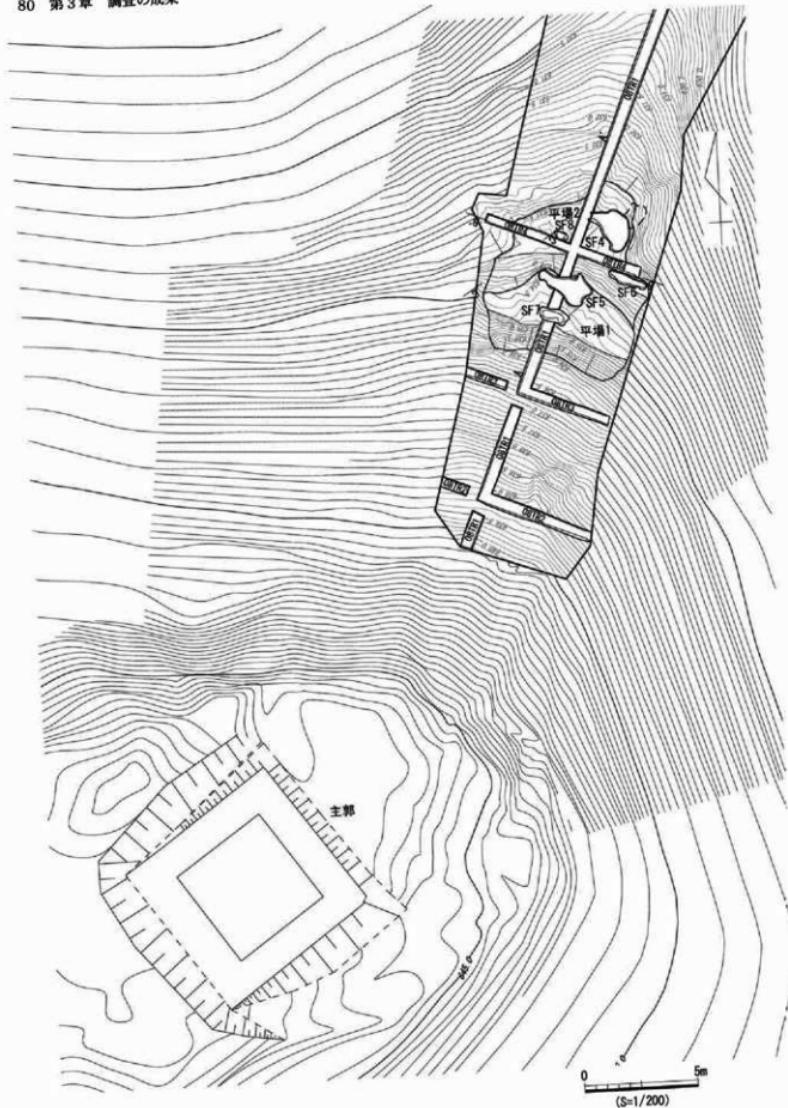
SF3
1 3SY5/6 明赤褐色シルト しまりあり 黏性なし
径2~3mmの風化層(10YR8/6黄褐色)を少許含む
地盤上



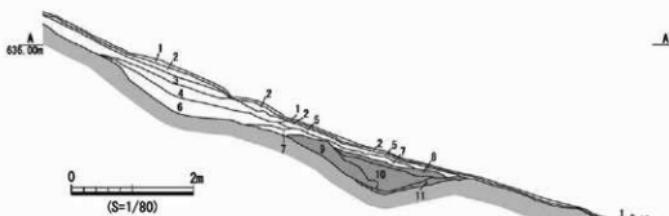
第46図 SK2~4・SF1~3



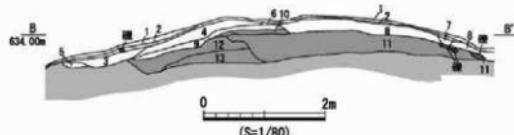
第47図 北東尾根地区概要



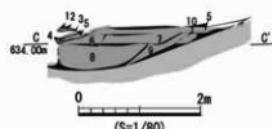
第48図 主郭下平場



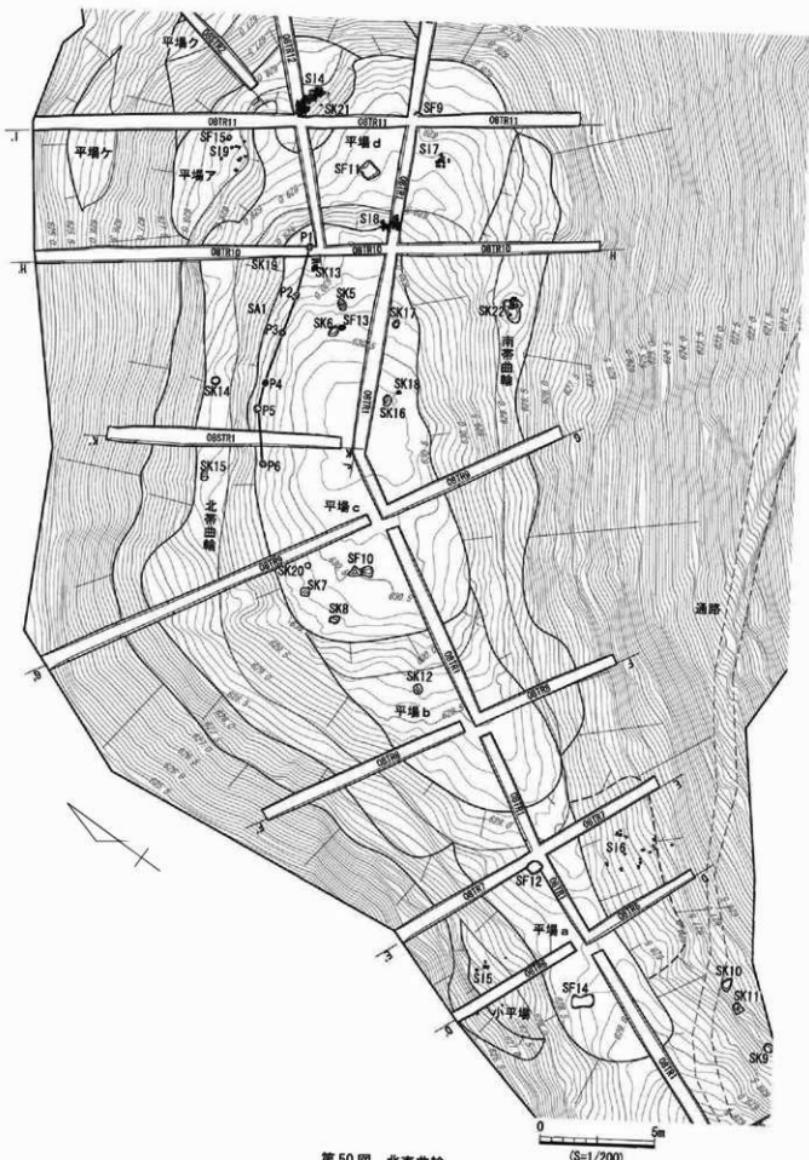
08TR1
1 7.5YR2/3 楊樹褐色腐葉土 しまりなし 黏性なし 草木根多し 表土 I層
2 7.5YR2/2 黄褐色シルト しまりなし 黏性なし 粘性なし 同色で径2~5mmの風化礫を5%程度含む 草木根多し 流入土(覆土) IIa層
3 10YR5/6 黄褐色シルト しまりなし 黏性なし 同色で径2~10mmの風化礫を10%程度含む 草木根多し 流入土(覆土) IIb層
4 10YR4/5 黄褐色シルト しまりなし 黏性なし 同色で径2~10mmの風化礫を10%程度含む 草木根多し 流入土(覆土) IIb層
5 10YR4/4 黄褐色シルト ややしまる 黏性あり 同色で径2~5mmの風化礫を10%程度含む 草木根多し 流入土(覆土) IIb層
6 10YR5/6 黄褐色シルト しまりなし 黏性なし 同色のシルトを30%程度含む(流入砂付近層) IIb層 同色の径2~35mmの風化礫の層
7 10YR5/6 黄褐色シルト しまりなし 黏性ややあり 同色で径2~10mmの風化礫を10%程度含む 草木根多し 表土 IIa層
8 10YR5/8 黄褐色シルト しまる 黏性ややあり 同色で径2~10mmの風化礫を30%程度含む 墓立上
9 10YR5/6 黄褐色シルト しまりなし 黏性なし 同色のシルトを30%程度含む 墓立上 同色の径2~15mmの風化礫の層
10 10YR5/6 黄褐色シルト しまる 黏性ややあり 同色で径2~10mmの風化礫を30%程度含む 墓立上
11 10YR5/6 黄褐色シルト しまる 黏性ややあり 同色で径2~10mmの風化礫を30%程度含む 墓立上
12 10YR5/8 黄褐色シルト しまる 黏性ややあり 同色で径2~3mmの風化礫を5%程度含む 墓立上(基盤層) III層



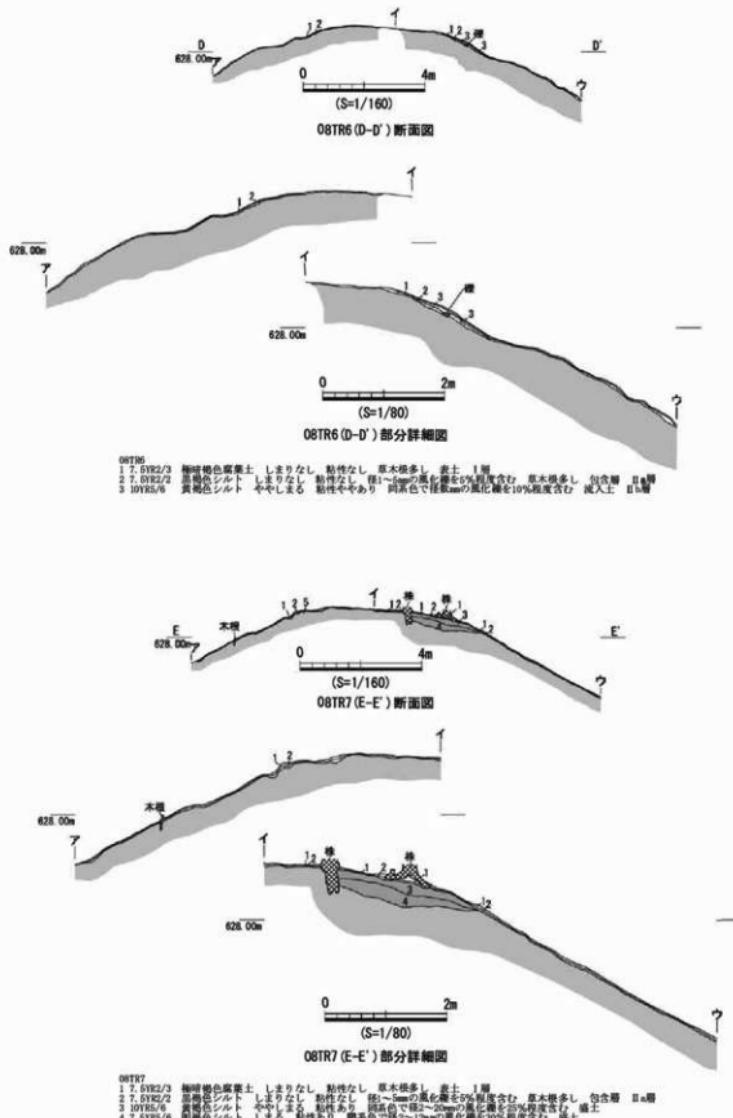
08TR4
1 7.5YR2/3 楊樹褐色腐葉土 しまりなし 黏性なし 草木根多し 表土 I層
2 7.5YR2/2 黄褐色シルト しまりなし 黏性なし 粘性なし 同色で径2~5mmの風化礫を5%程度含む 草木根多し 表土 IIa層
3 10YR5/6 黄褐色シルト しまりなし 黏性なし 同色で径2~10mmの風化礫を10%程度含む 草木根多し 表土 IIb層
4 7.5YR3/4 黄褐色シルト しまりなし 黏性ややあり 同色で径2~20mmの風化礫を5%程度含む 墓立上 同色から他の成るか 5 10YR4/5 黄褐色シルト ややしまる 黏性あり 同色で径2~5mmの風化礫を5%程度含む 墓立上 同色で5%程度含む 6 10YR4/6 黄褐色シルト しまる 黏性ややあり 同色で径2~10mmの風化礫を20%程度含む 表土 IIa層 7 10YR4/6 黄褐色シルト しまる 黏性ややあり 同色で径2~10mmの風化礫を20%程度含む 表土 IIb層 8 10YR4/6 黄褐色シルト しまる 黏性ややあり 同色で径2~10mmの風化礫を20%程度含む 表土 IIb層 9 10YR4/3 こじら 黄褐色シルト しまりなし 黏性ややあり 同色で径2~10mmの風化礫を20%程度含む 表土 IIa層 10 10YR4/3 黄褐色シルト しまる 黏性なし 同色で径2~10mmの風化礫を20%程度含む 表土 IIb層 11 10YR5/4 黄褐色シルト しまる 黏性なし 同色で5%程度の風化礫を含む 墓立上 12 10YR5/4 黄褐色シルト しまる 黏性なし 同色で5%程度の風化礫を含む 墓立上 13 10YR5/6 黄褐色シルト ややしまる 黏性なし 同色で径1~10mmの風化砂を5%程度含む 墓立上



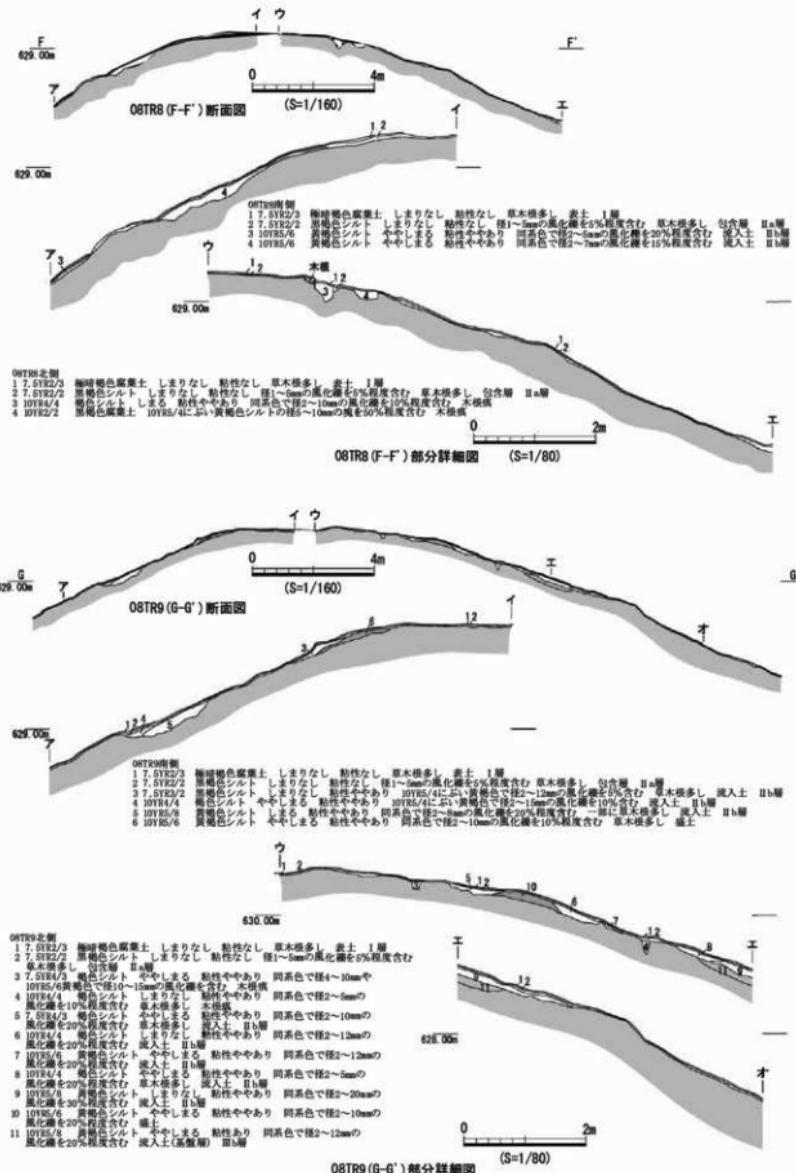
主郭下平場1
1 7.5YR2/3 楊樹褐色腐葉土 しまりなし 黏性なし 草木根多し 表土 I層
2 7.5YR2/2 黄褐色シルト しまりなし 黏性なし 同色で径2~5mmの風化礫を5%程度含む 草木根多し 表土 IIa層
3 10YR5/6 黄褐色シルト ややしまる 黏性ややあり 同色で径2~10mmの風化礫を10%程度含む 草木根多し 流入土(覆土) IIb層
4 10YR4/6 黄褐色シルト しまりなし 黏性ややあり 同色で径2~10mmの風化礫を40%程度含む 草木根多し 流入土(覆土) IIb層
5 10YR5/8 黄褐色シルト しまりなし 黏性ややあり 同色で径2~10mmの風化礫を40%程度含む 墓立上
6 10YR5/8 黄褐色シルト しまりなし 黏性ややあり 同色で径2~10mmの風化礫を40%程度含む 墓立上
7 10YR5/6 黄褐色シルト ややしまる 黏性ややあり 同色で径2~15mmの風化礫を50%以上含む 墓立上
8 10YR5/6 黄褐色シルト しまりなし 黏性ややあり 同色で径4~10mmの風化礫を50%以上含む 墓立上
9 10YR5/6 黄褐色シルト ややしまる 黏性ややあり 同色で径2~20mmの風化礫を50%以上含む 墓立上
10 10YR5/8 黄褐色シルト ややしまる 黏性ややあり 同色で径2~8mmの風化礫を50%以上含む 墓立上



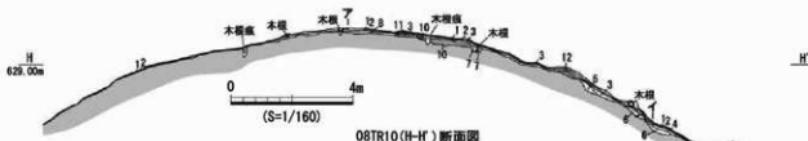
第50図 北東曲輪



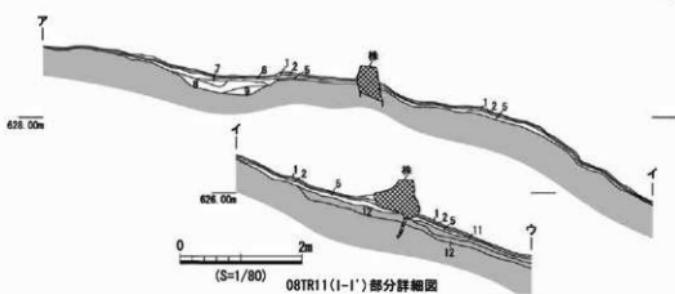
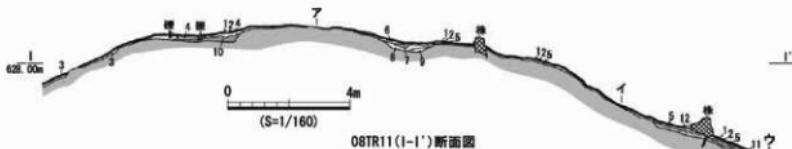
第51図 北東曲輪断面（1）



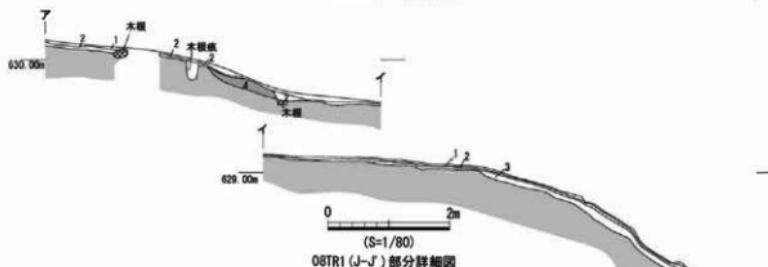
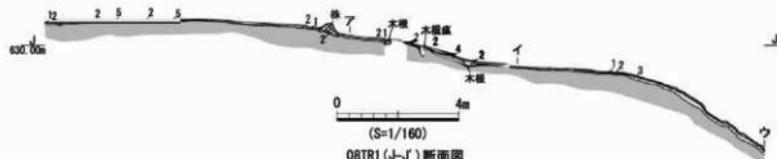
第52図 北東曲輪断面（2）



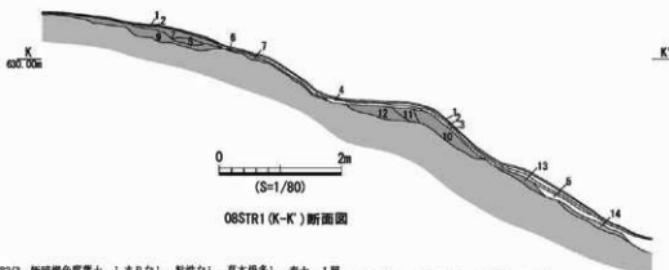
08TR10
 1. 7. STB2/3 黒褐色粘土質砂土 しまりなし、粒性なし、草木很多! 表土 1層
 2. 8. STB2/3 黒褐色粘土質砂土 しまりなし、粒性なし、草木很多! 表土 1層
 3. 10TR4/4 黑褐色シルト しまりなし、粒性ややあり 同系色の明るい色で径2~8mmの風化礫を10%程度含む 草木很多! 深入土 Hb層
 4. 10TR4/4 黑褐色シルト しまりなし、粒性ややあり 同系色の明るい色で径2~12mmの風化礫を10%程度含む 草木很多! 深入土 Hb層
 5. 10TR4/6 黑褐色シルト しまりなし、粒性ややあり 同系色の明るい色で径2~12mmの風化礫を20%程度含む 草木很多! 深入土 Hb層
 6. 7. STB4/6 黑褐色シルト しまりなし、粒性ややあり 同系色の明るい色で径2~12mmの風化礫を20%程度含む 表土 Hb層
 7. 7. STB4/4 黑褐色シルト しまりなし、粒性ややあり 同系色の明るい色で径2~12mmの風化礫を5%程度含む 表土 Hb層
 8. 10TR4/4 黑褐色シルト しまりなし、粒性ややあり 同系色の明るい色で径2~12mmの風化礫を5%程度含む 表土 Hb層
 9. 10TR4/9 黑褐色シルト しまりなし、粒性ややあり 同系色の明るい色で径2~12mmの風化礫を5%程度含む 表土 Hb層
 10. 10TR4/4 黑褐色シルト しまりなし、粒性ややあり 同系色の明るい色で径2~12mmの風化礫を5%程度含む 表土 Hb層
 11. 10TR4/8 黑褐色シルト しまりなし、粒性ややあり 10TR4/4以上と同様で径2~10mmの風化礫を10%程度含む 5cm程度の炭粒を含む 盛土
 12. 10TR4/6 黑褐色シルト しまりなし、粒性ややあり 同系色で径2~8mmの風化礫を10%程度含む 草木很多! 盛土



08TR11
 1. 7. STB2/3 黒褐色粘土質砂土 しまりなし、粒性なし、草木很多! 表土 1層
 2. 8. STB2/2 黒褐色粘土質砂土 しまりなし、粒性なし、草木很多! 表土 1層
 3. 10TR4/3 黑褐色シルト ややしまる 粒性ややあり 同系色の明るい色で径2~10mmの風化礫を10%程度含む 草木很多! 深入土 Hb層
 4. 10TR4/4 黑褐色シルト ややしまる 粒性ややあり 同系色の明るい色で径2~12mmの風化礫を10%程度含む 草木很多! 深入土 Hb層
 5. 10TR4/3 黑褐色シルト ややしまる 粒性ややあり 同系色の明るい色で径2~12mmの風化礫を10%程度含む 草木很多! 深入土 Hb層
 6. 7. STB4/4 黑褐色シルト ややしまる 粒性ややあり 同系色の明るい色で径2~12mmの風化礫を10%程度含む 表土 Hb層
 7. 7. STB4/2 黑褐色シルト ややしまる 粒性ややあり 同系色の明るい色で径2~12mmの風化礫を5%程度含む 表土 Hb層
 8. 10TR4/4 黑褐色シルト ややしまる 粒性ややあり 同系色の明るい色で径2~12mmの風化礫を5%程度含む 表土 Hb層
 9. 10TR4/6 黑褐色シルト ややしまる 粒性ややあり 同系色の明るい色で径2~12mmの風化礫を5%程度含む 表土 Hb層
 10. 10TR4/6 黑褐色シルト しまる 粒性あり 同系色で径2~8mmの風化礫を5%程度含む 盛土
 11. 10TR4/8 黑褐色シルト しまる 粒性あり 同系色で径2~10mmの風化礫を10%程度含む 径3~8mmの炭粒を確かに含む 深入土 (高密度) Hb層
 12. 10TR4/6 黑褐色シルト しまる 粒性ややあり 同系色で径2~10mmの風化礫を10%程度含む 径3~8mmの炭粒を確かに含む 深入土 (高密度) Hb層

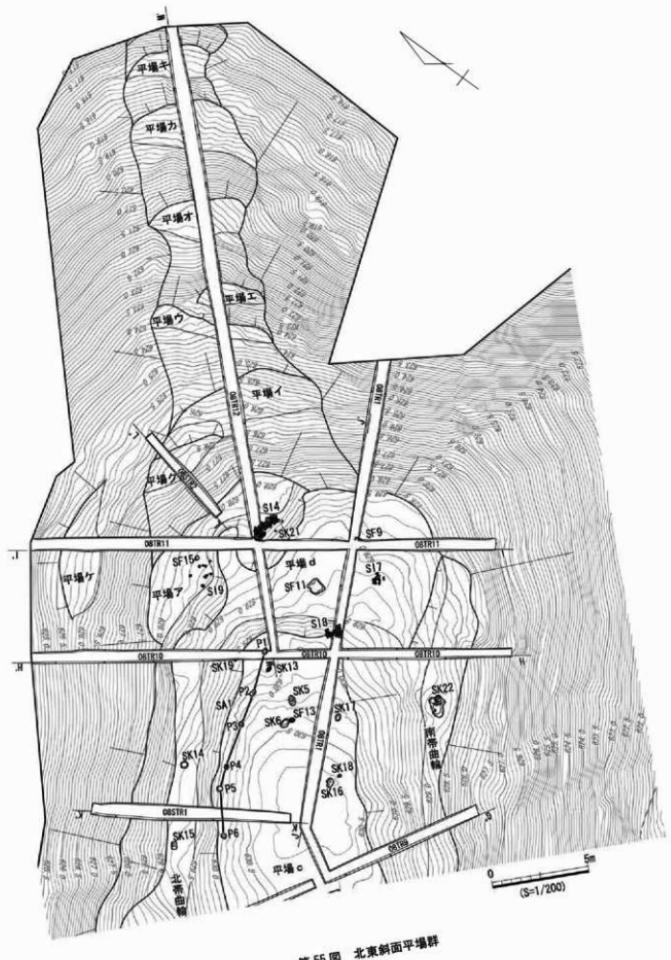


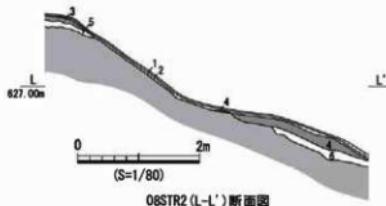
08TR1
1 7.SYR2/3 極暗褐色粘土質土 しまりなし。粘性なし。草木根多し。表土：Ⅰ層
2 7.SYR2/3 暗褐色シルト しまりなし。粘性なし。同系色で径2~4mmの風化礫を5%程度含む。草木根多し。包含層。Ⅱa層
3 7.SYR3/4 暗褐色シルト 少々しまる。粘性あり。同系色で径2~4mmの風化礫を3%程度含む。草木根多し。流入土。Ⅱb層
4 10YRS3/4 暗褐色シルト 少々しまる。粘性あり。同系色で径2~10mmの風化礫を7%程度含む。草木根多し。硬化層
5 10YRS3/4 暗褐色シルト 少々しまる。粘性あり。同系色で径2~4mmの風化礫を3%程度含む。硬化層 Ⅱb層
6 10YRS/4 にじむ。暗褐色シルト しまる。粘性あり。同系色で径2~4mmの風化礫を3%程度含む。硬化層 Ⅱb層



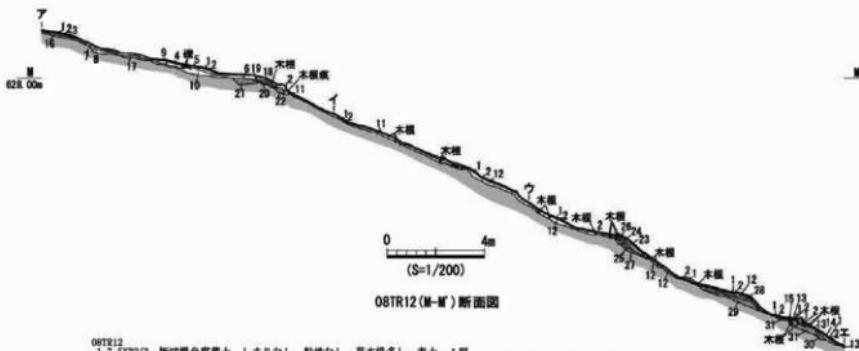
08TR1
1 7.SYR2/3 極暗褐色粘土質土 しまりなし。粘性なし。草木根多し。表土：Ⅰ層
2 7.SYR2/3 暗褐色シルト しまりなし。粘性なし。同系色で径2~4mmの風化礫を5%程度含む。草木根多し。包含層。Ⅱa層
3 7.SYR4/4 暗褐色シルト ややしまる。粘性あり。同系色で径2~4mmの風化礫を5%程度含む。草木根多し。流入土。Ⅱb層
4 10YRS3/4 暗褐色シルト 少々しまる。粘性あり。同系色で径2~4mmの風化礫を5%程度含む。草木根多し。流入土。Ⅱb層
5 7.SYR5/6 明褐色シルト 少々しまる。粘性あり。10YR黄色で径2~4mmの風化礫を5%程度含む。径2~4mmの風化礫を極く少く含む。草木根多し。流入土(覆土) Ⅱb層
6 10YRS/4 にじむ。明褐色シルト ややしまる。粘性ややあり。草木根多し。Ⅲ上
7 10YRS/4 明褐色シルト 少々しまる。粘性あり。同系色で径2~4mmの風化礫を5%程度含む。Ⅲ中
8 10YRS/4 明褐色シルト 少々しまる。粘性あり。同系色で径2~4mmの風化礫を5%程度含む。Ⅲ下
9 10YR6/6 明褐色シルト しまる。粘性ややあり。同系色で径2~7mmの風化礫を5%程度含む。径2~4mmの風化礫を極く少く含む。細い木根あり。盛土
10 10YR6/6 明褐色シルト しまる。粘性ややあり。同系色で径2~7mmの風化礫を5%程度含む。細い木根あり。盛土
11 7.SYR5/6 明褐色シルト 上とよろ。粘性あり。同系色で径2~7mmの風化礫を5%程度含む。正規含水率の風化礫を極く少く含む。土質近く草木根多し。盛土
12 10YR4/6 明褐色シルト しまる。粘性あり。同系色で径2~10mmの風化礫を10%程度含む。径3~10mmの風化礫を2%程度含む。盛土
13 10YR5/6 明褐色シルト しまる。粘性ややあり。同系色で径2~5mmの風化礫を5%程度含む。径2~4mmの風化礫を極く少く含む。草木根多し。盛土
14 30YTR4/6 黄褐色シルト ややしまる。粘性あり。同系色で径2~5mmの風化礫を5%程度含む。径3~7mmの風化礫を2%程度含む。田表土

第54図 北東曲輪断面（4）

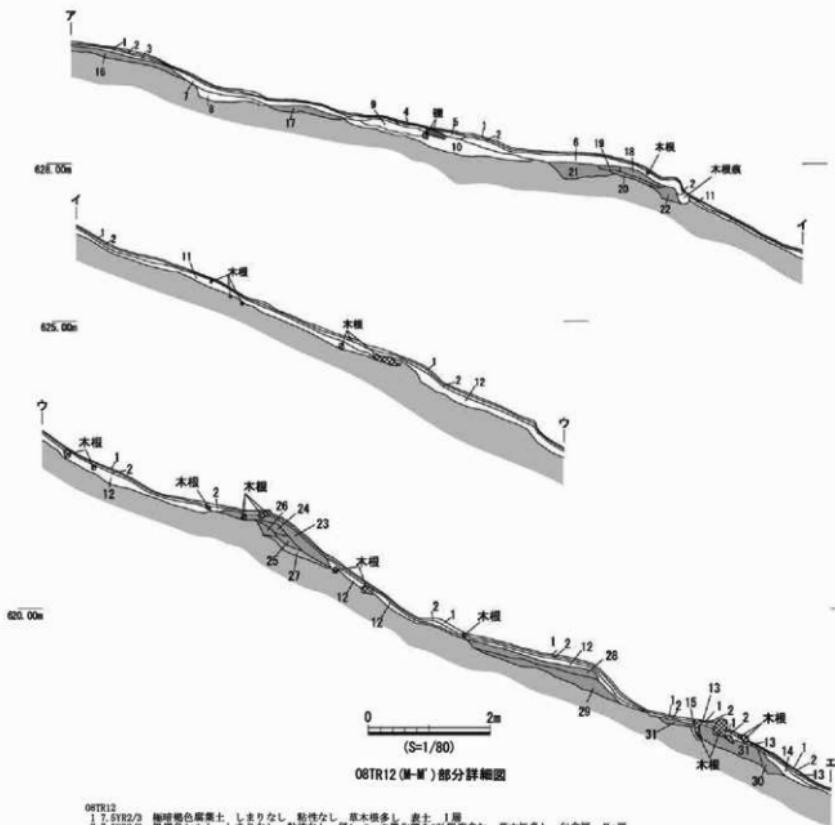




08STR2(L-L')断面图

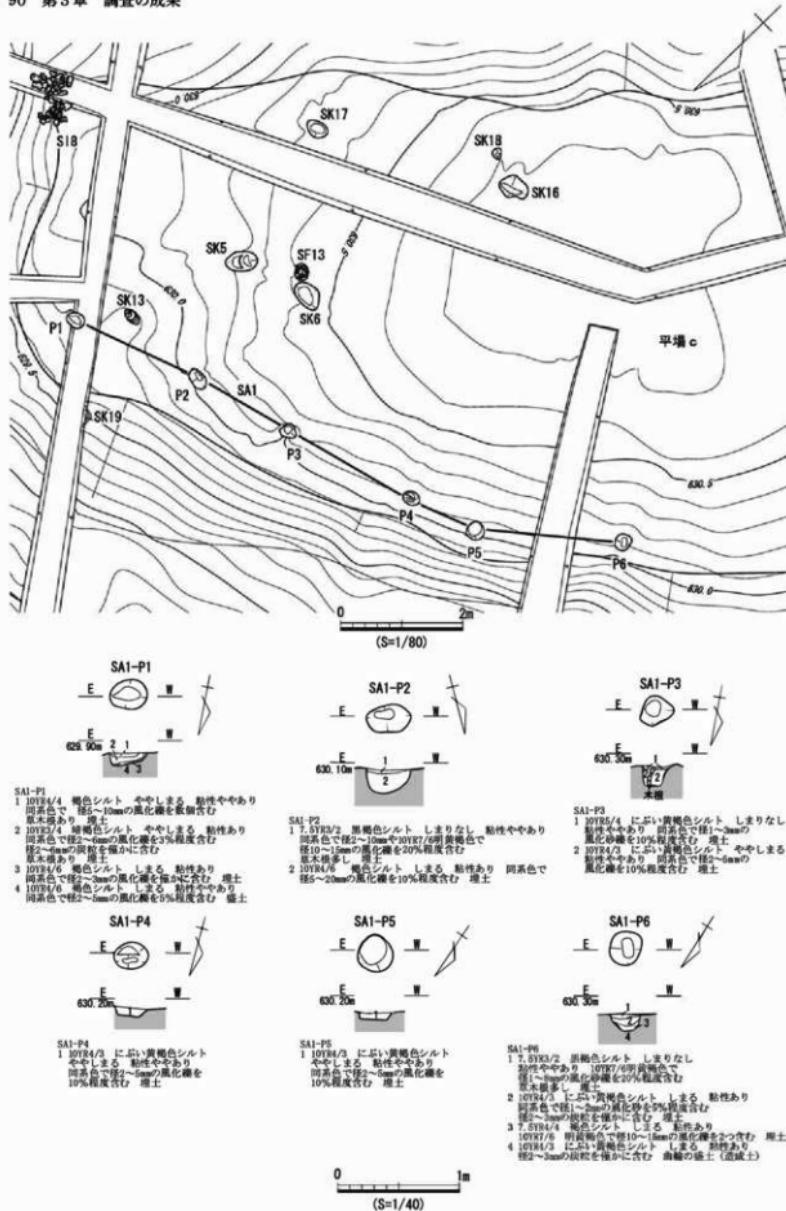


08TB12 (M-M') 断面图

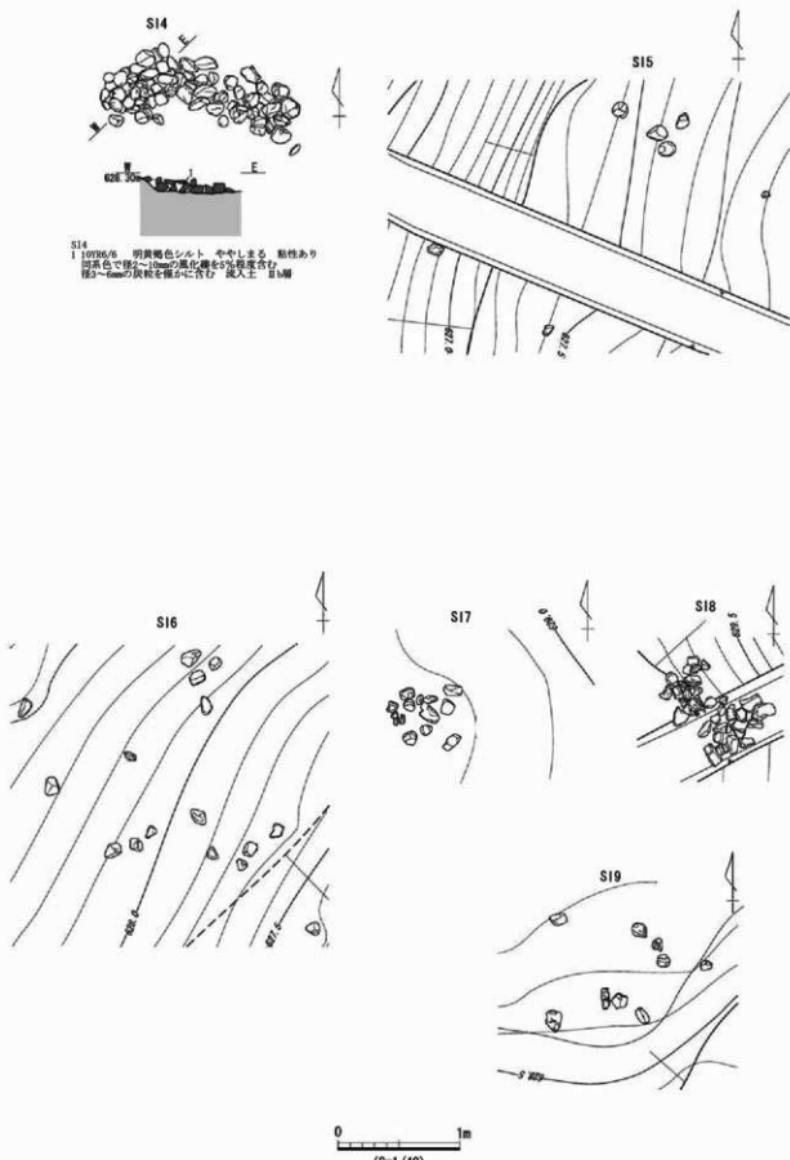


- 08TR12
 1. 7. SY12/3 植物混合層土 しきりなし 黏性なし 木根很多・土上・Ⅰ層
 2. 7. SY12/2 植物色シルト しきりなし 黏性あり 木根多く Ⅱa層
 3. 7. SY12/3 植物色シルト ややしきりなし 黏性ややあり 10YR8/4の明らか色で径2~5mmの風化層を5%程度含む 木根很多・土上・Ⅱb層
 4. 7. SY14/2 灰褐色色シルト ややしきりなし 黏性ややあり 10YR8/4の明るい色で2~5mmの風化層を10%程度含む 木根很多・土上・Ⅱb層
 5. 7. SY14/3 灰褐色色シルト ややしきりなし 黏性ややあり 10YR8/4の明るい色で2~5mmの風化層を5%程度含む 木根很多・土上・Ⅱb層
 6. 7. SY12/6 黄褐色色シルト ややしきりなし 黏性ややあり 同色で径2~5mmの風化層を5%程度含む
 7. 10Y8/6 黄褐色色シルト しきりなし 黏性あり 同色で径2~5mmの風化層を5%程度含む 木根很多・土上・Ⅱb層
 8. 10Y8/6 黄褐色色シルト しきりなし 黏性あり 同色で径2~5mmの風化層を5%程度含む 木根很多・土上・Ⅱb層
 9. 10Y8/6 黄褐色色シルト ややしきりなし 黏性あり 同色で径2~5mmの風化層を5%程度含む 木根很多・土上・Ⅱb層
 10. 10Y8/6 黄褐色色シルト ややしきりなし 黏性あり 同色で径2~5mmの風化層を5%程度含む 木根很多・土上・Ⅱb層
 11. 7. SY14/4 黄褐色色シルト しきりなし 黏性あり 10YR8/4の明るい色で2~5mmの風化層を5%程度含む 木根很多・土上・Ⅱb層
 12. 7. SY15/6 黄褐色色シルト ややしきりなし 黏性ややあり 同色で径2~5mmの風化層を5%程度含む 木根很多・土上・Ⅱb層
 13. 10Y8/3 黄褐色色シルト しきりなし 黏性ややあり 同色で径2~5mmの風化層を5%程度含む 木根很多・土上・Ⅱb層
 14. 10Y8/4 黄褐色色シルト しきりなし 黏性ややあり 同色で径2~5mmの風化層を5%程度含む 木根很多・土上・Ⅱb層
 15. 7. SY12/2 黄褐色色シルト しきりなし 黏性あり 同色で径2~10mmの風化層を5%程度含む 木根很多・土上・Ⅱb層
 16. 10Y8/6 黄褐色色シルト しきりなし 黏性あり 同色で径2~10mmの風化層を5%程度含む 木根很多・土上・Ⅱb層
 17. 10Y8/6 黄褐色色シルト しきりなし 黏性あり 同色で径2~10mmの風化層を5%程度含む 木根很多・土上・Ⅱb層
 18. 10Y8/6 黄褐色色シルト しきりなし 黏性あり 同色で径2~10mmの風化層を5%程度含む 木根很多・土上・Ⅱb層
 19. 10Y8/3 黄褐色色シルト ややしきりなし 黏性ややあり 同色で径2~5mmの風化層を5%程度含む 木根很多・土上・Ⅱb層
 20. 10Y8/4 黄褐色色シルト しきりなし 黏性あり 同色で径2~5mmの風化層を5%程度含む 木根很多・土上・Ⅱb層
 21. 10Y8/6 黄褐色色シルト しきりなし 黏性あり 同色で径2~5mmの風化層を5%程度含む 木根很多・土上・Ⅱb層
 22. 10Y8/6 黄褐色色シルト ややしきりなし 黏性ややあり 同色で径2~5mmの風化層を5%程度含む 木根很多・土上・Ⅱb層
 23. 10Y8/5 黄褐色色シルト ややしきりなし 黏性ややあり 同色で径2~5mmの風化層を5%程度含む 木根很多・土上・Ⅱb層
 24. 10Y8/6 黄褐色色シルト ややしきりなし 黏性ややあり 同色で径2~5mmの風化層を5%程度含む 木根很多・土上・Ⅱb層
 25. 10Y8/3 黄褐色色シルト ややしきりなし 黏性ややあり 同色で径2~5mmの風化層を5%程度含む 木根很多・土上・Ⅱb層
 26. 10Y8/8 黄褐色色シルト しきりなし 黏性あり 同色で径2~5mmの風化層を5%程度含む 木根很多・土上・Ⅱb層
 27. 10Y8/6 黄褐色色シルト しきりなし 黏性あり 同色で径2~5mmの風化層を5%程度含む 木根很多・土上・Ⅱb層
 28. 10Y8/6 黄褐色色シルト しきりなし 黏性あり 同色で径2~5mmの風化層を5%程度含む 木根很多・土上・Ⅱb層
 29. 10Y8/3 黄褐色色シルト しきりなし 黏性あり 同色で径2~20mmの風化層を5%程度含む 木根很多・土上・Ⅱb層
 30. 10Y8/6 黄褐色色シルト ややしきりなし 黏性あり 同色で径2~10mmの風化層を10%程度含む 部分的に径2~4mm程度の風化層を僅かに含む 土上
 31. 10Y8/6 黄褐色色シルト ややしきりなし 黏性あり 同色で径2~10mmの風化層を10%程度含む 部分的に径2~4mm程度の風化層を僅かに含む 土上

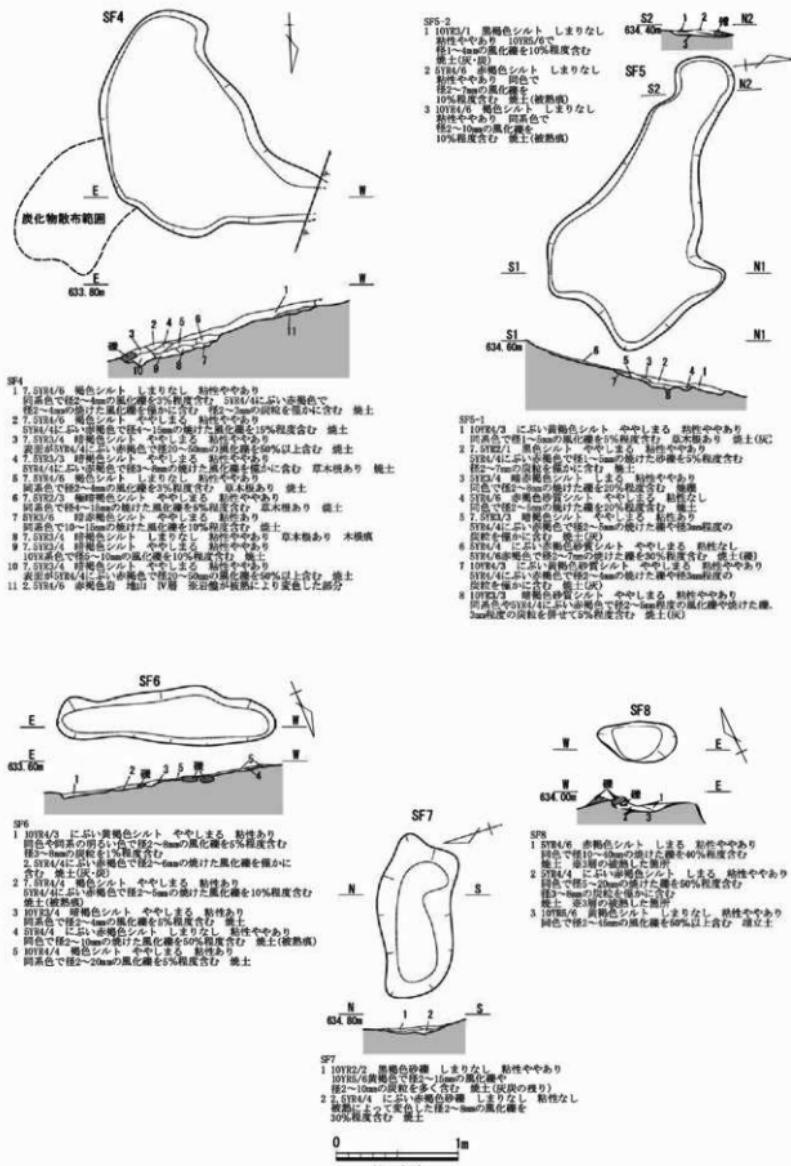
第57図 北東斜面平場断面（2）



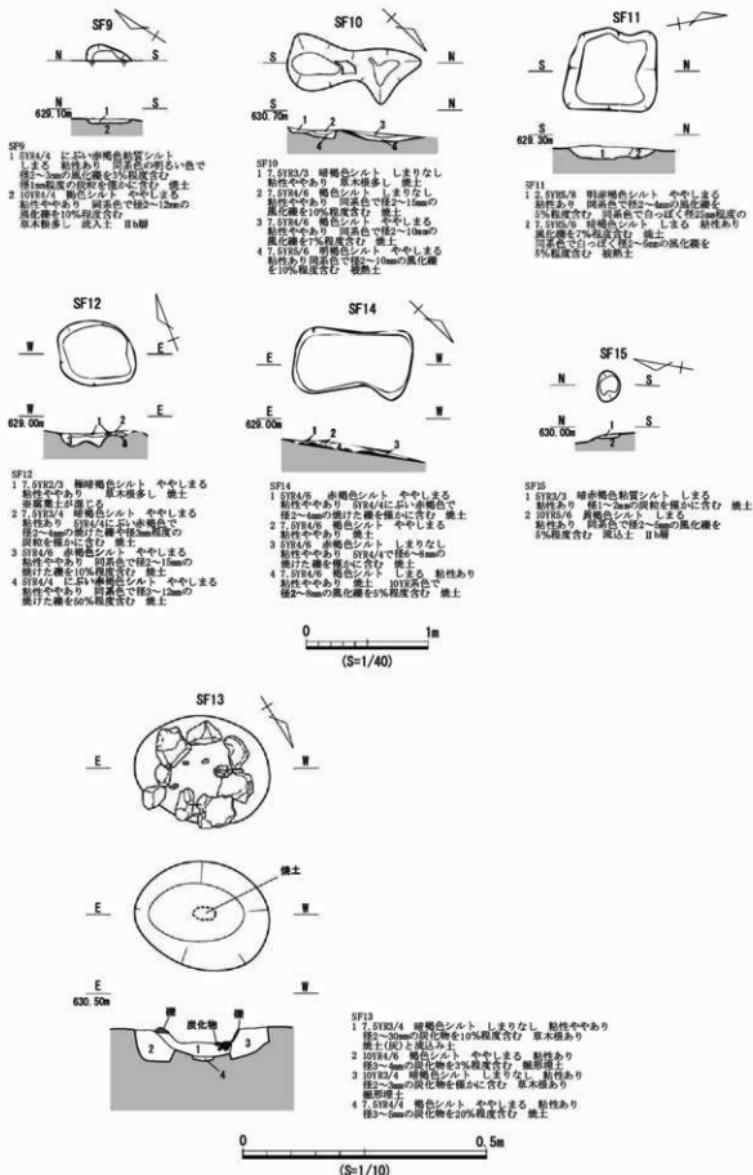
第58図 S A 1



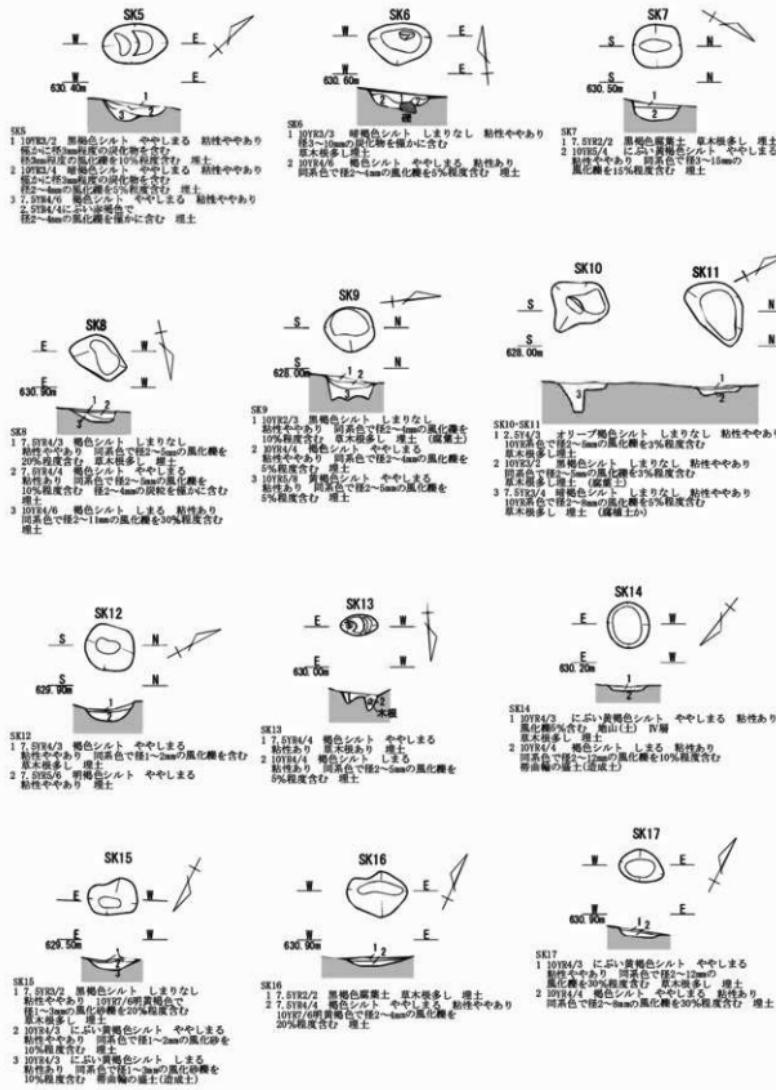
第59図 S14~9



第60圖 S E 4-2-B

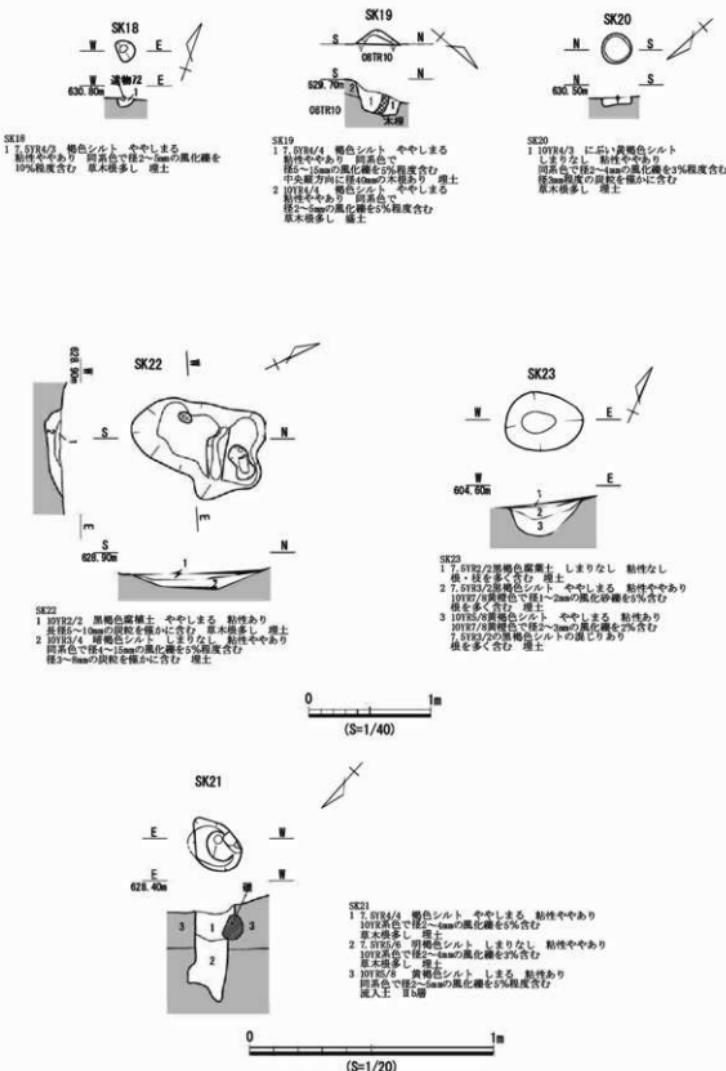


第61図 SF9~15

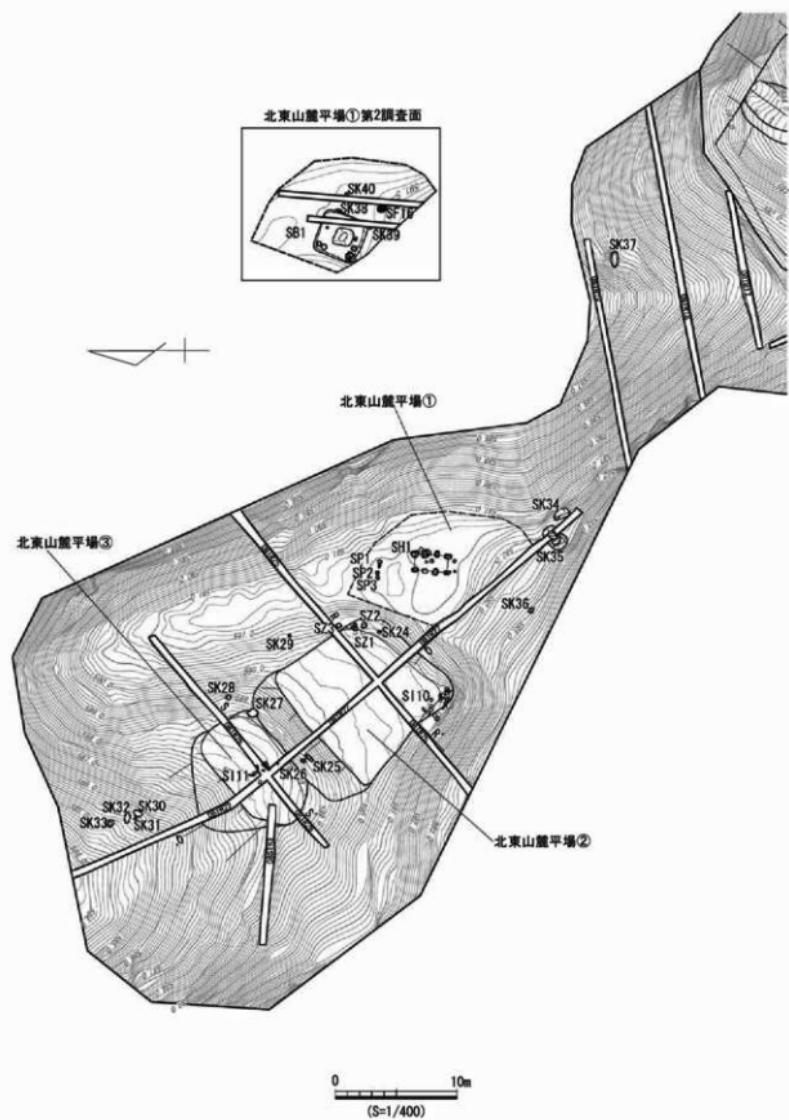


0 1m
(S1/40)

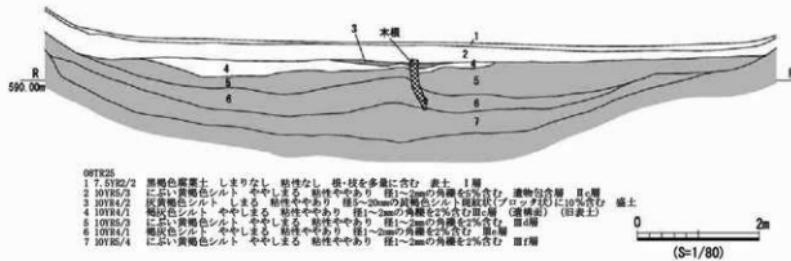
第62図 SK 5 ~ 17

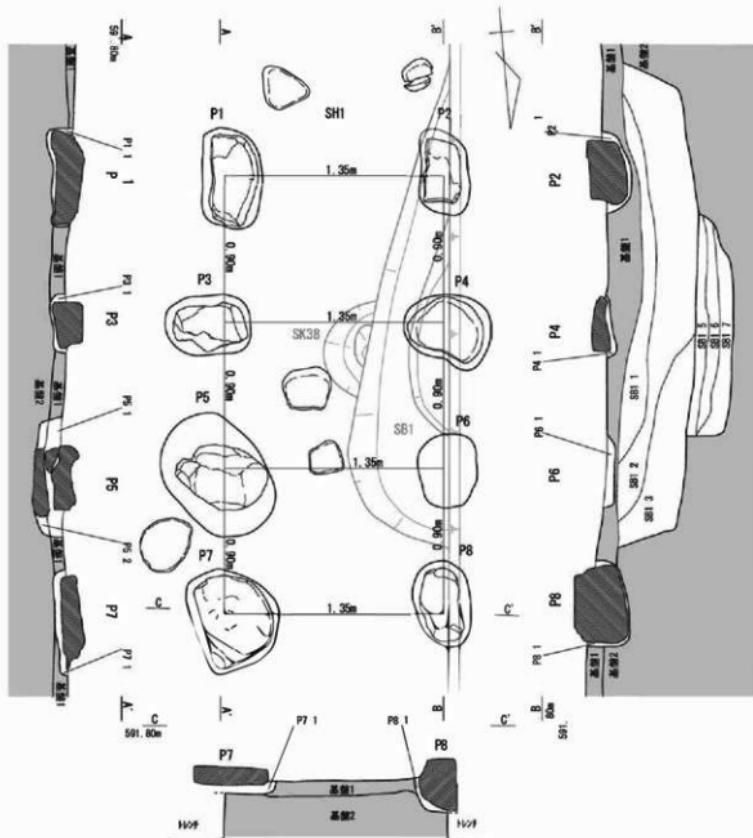


第63図 SK18~23



第64図 北東山麓地区概要

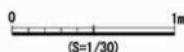




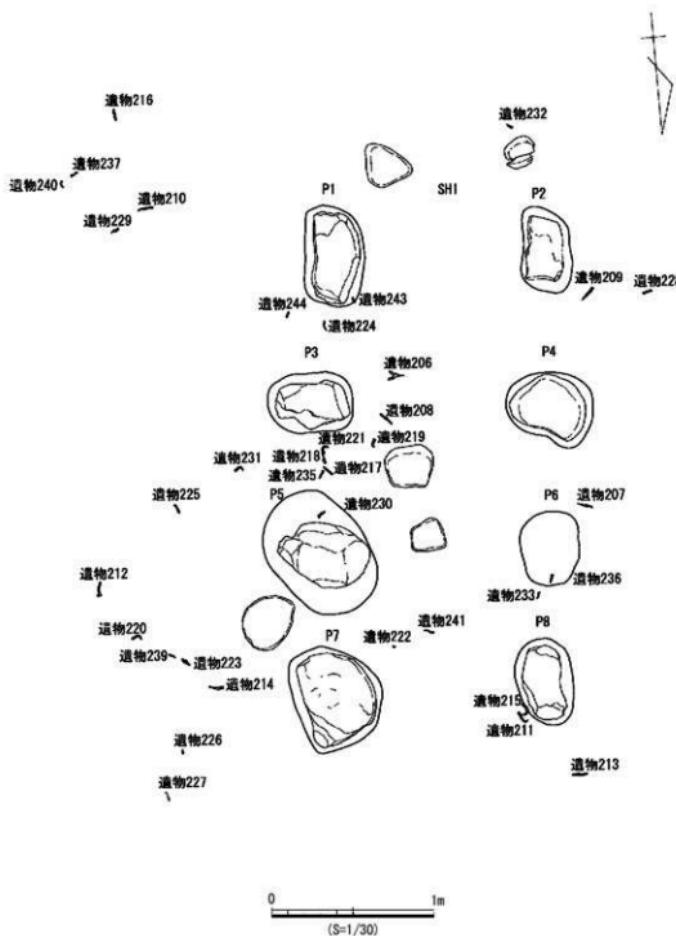
- P1
1 JOYES/4 にぶい黄褐色シルト ややしまる 黏性ややあり
径1~2mmの角礫を2%含む
- P2
1 JOYES/4 にぶい黄褐色シルト ややしまる 黏性ややあり
径1~2mmの角礫を2%含む
- P3
1 JOYES/5 黄褐色シルト ややしまる 黏性ややあり
径1~2mmの角礫を2%含む
- P4
1 JOYES/6 黄褐色シルト ややしまる 黏性ややあり
径1~2mmの角礫を2%含む
- P5
1 JOYES/6 黄褐色シルト ややしまる 黏性ややあり
径1~2mmの角礫を2%含む
- P6
1 JOYES/6 黄褐色シルト ややしまる 黏性ややあり
径1~2mmの角礫を2%含む
- P7
1 JOYES/6 黄褐色シルト ややしまる 黏性ややあり
径1~2mmの角礫を2%含む
- P8
1 JOYES/6 黄褐色シルト ややしまる 黏性ややあり
径1~2mmの角礫を2%含む

- P9
1 JOYES/3 にぶい黄褐色シルト ややしまる 黏性ややあり
径1~2mmの角礫を2%含む
- P10
1 JOYES/3 にぶい黄褐色シルト ややしまる 黏性ややあり
黄褐色シルト 疊状(ブリック状)に2%含む
- P11
1 JOYES/4 にぶい黄褐色シルト ややしまる 黏性ややあり
径1~2mmの角礫を2%含む
- P12
1 JOYES/4 にぶい黄褐色シルト ややしまる 黏性ややあり
径1~2mmの角礫を2%含む

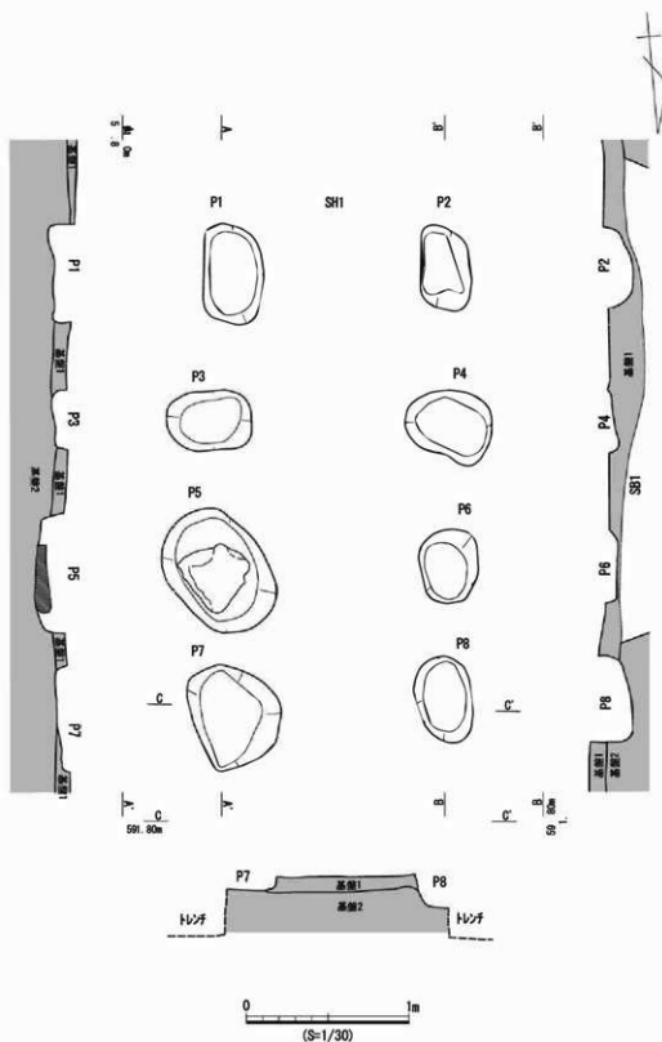
基盤
1 JOYES/4 にぶい黄褐色シルト 黏性ややあり ややしまる 径1~2mmの角礫2%含む 基1層
2 JOYES/7 初黄褐色シルト ややしまる 黏性ややあり 地山 基層



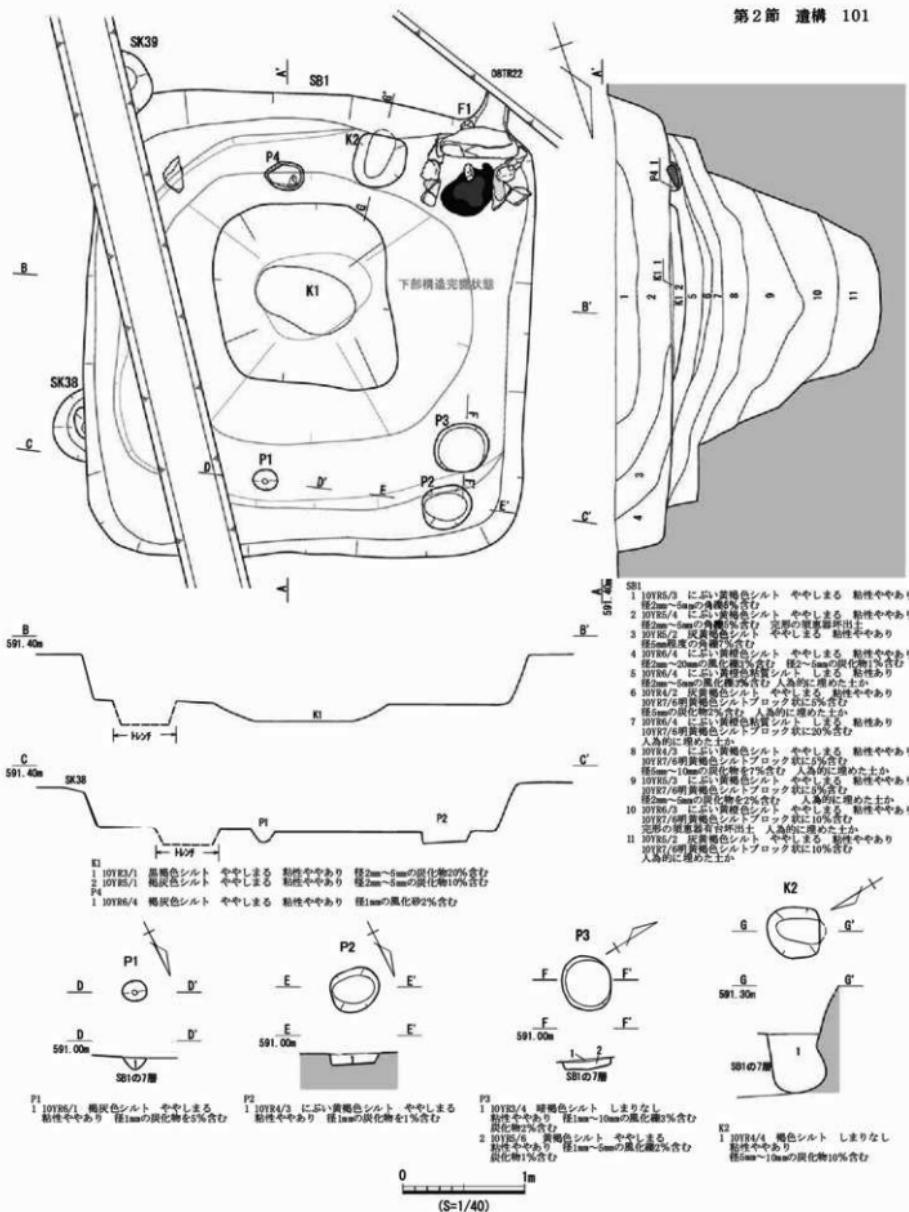
第66図 S H 1検出状態



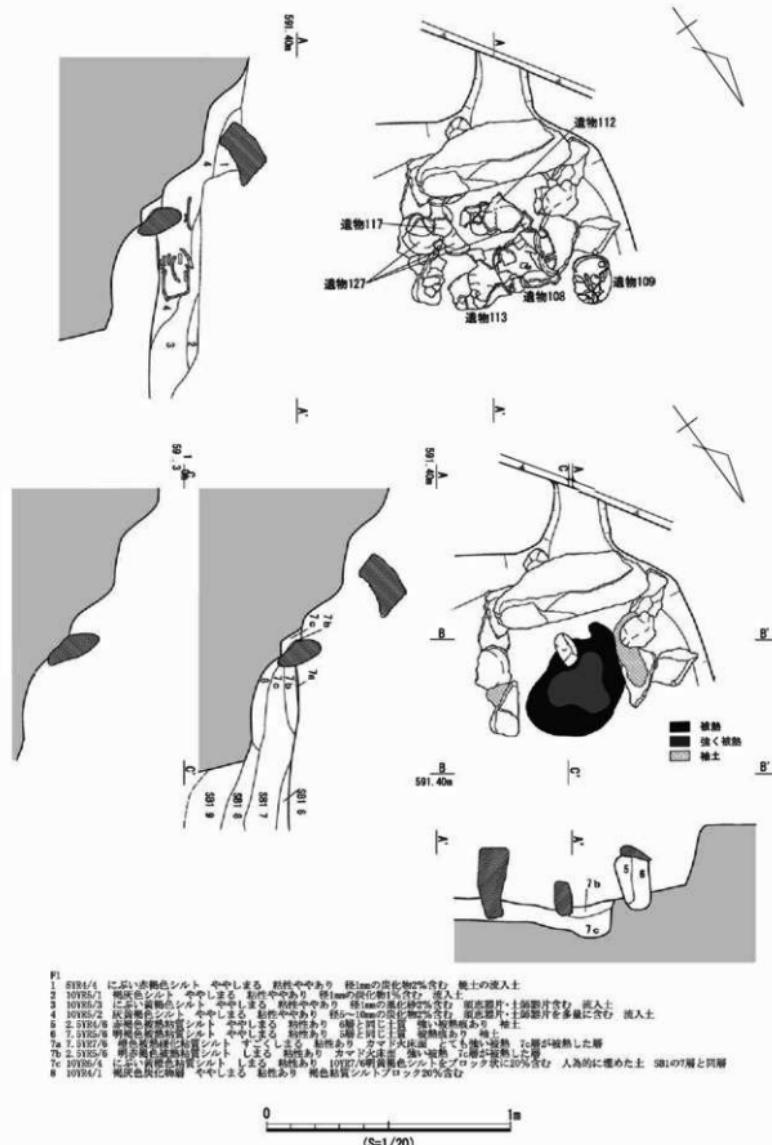
第67図 SH 1検出面遺物出土状況



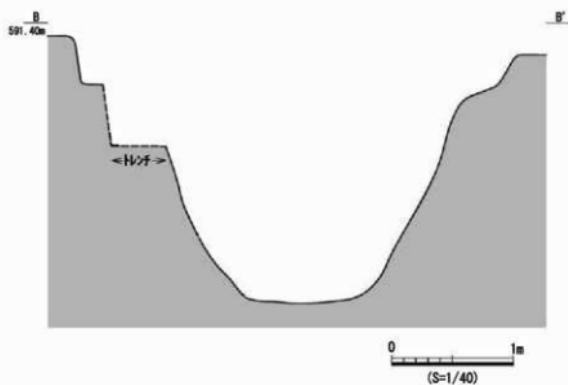
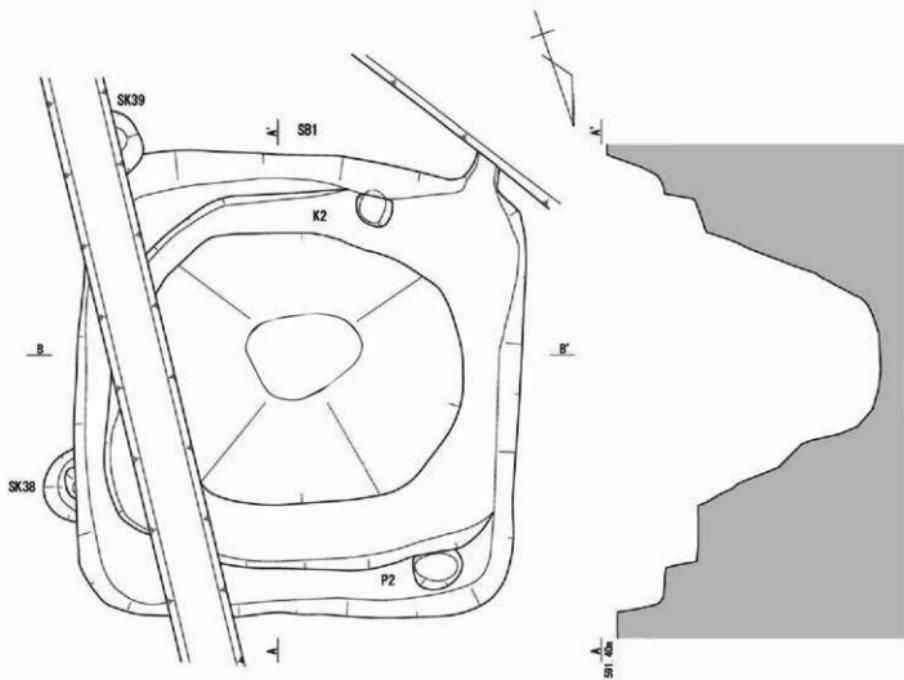
第68図 SH1完掘状態



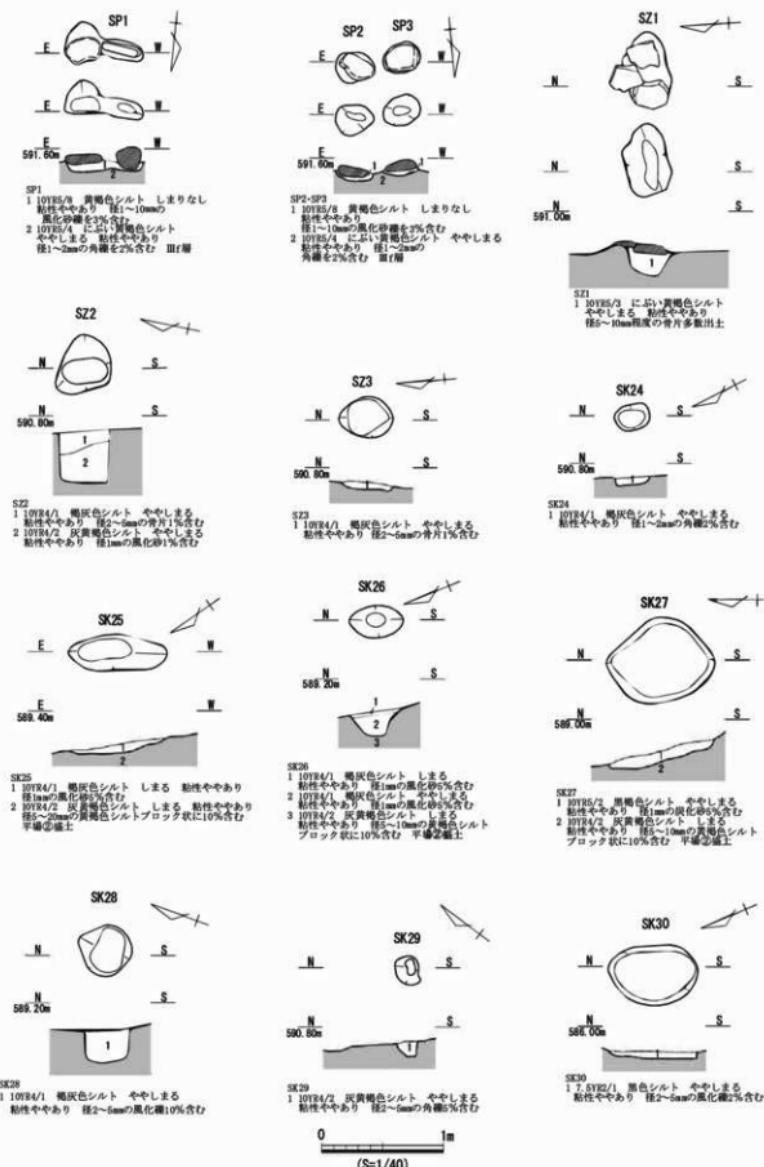
第69図 SB1床面検出状態



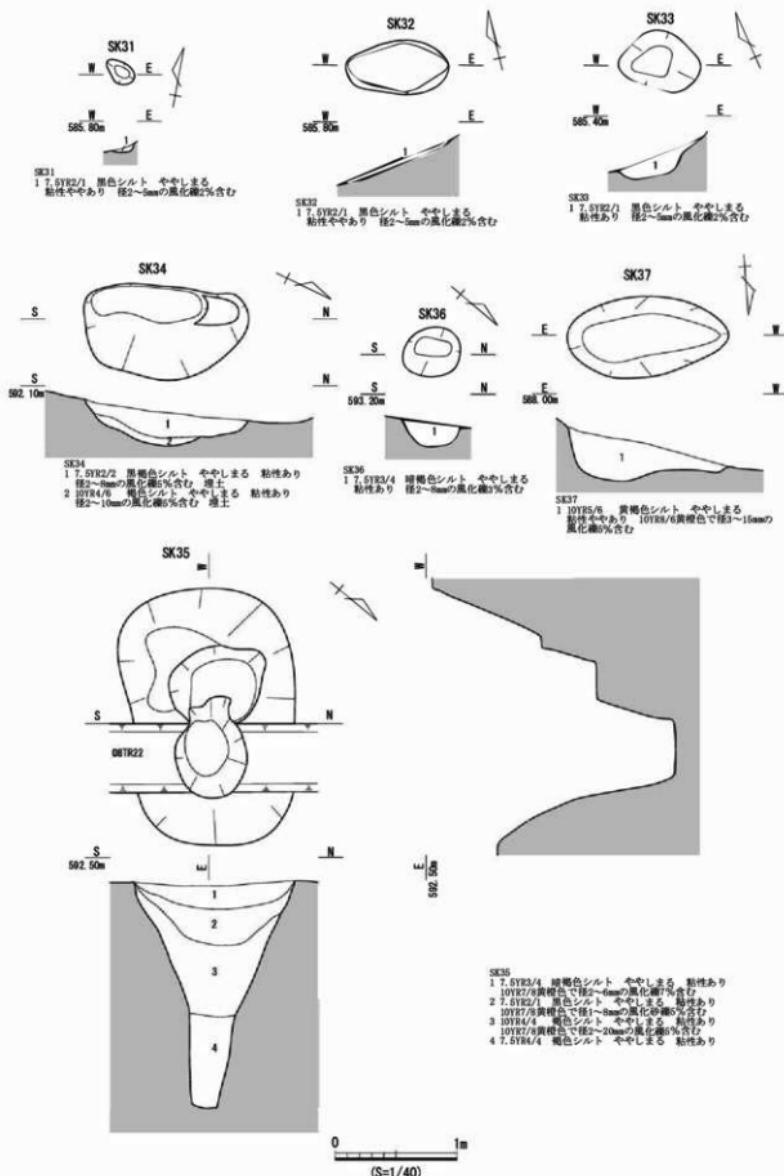
第70図 SB 1内カマド跡 (F 1)



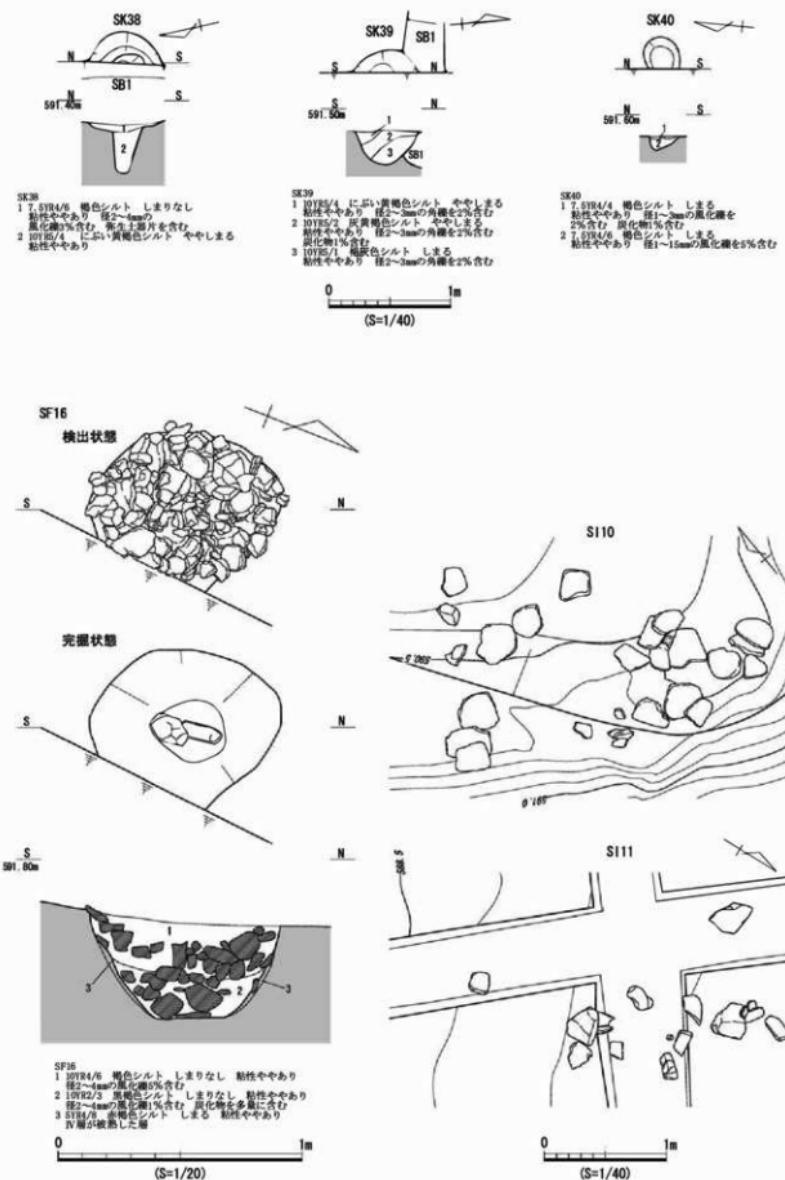
第71図 SB1完掘状態



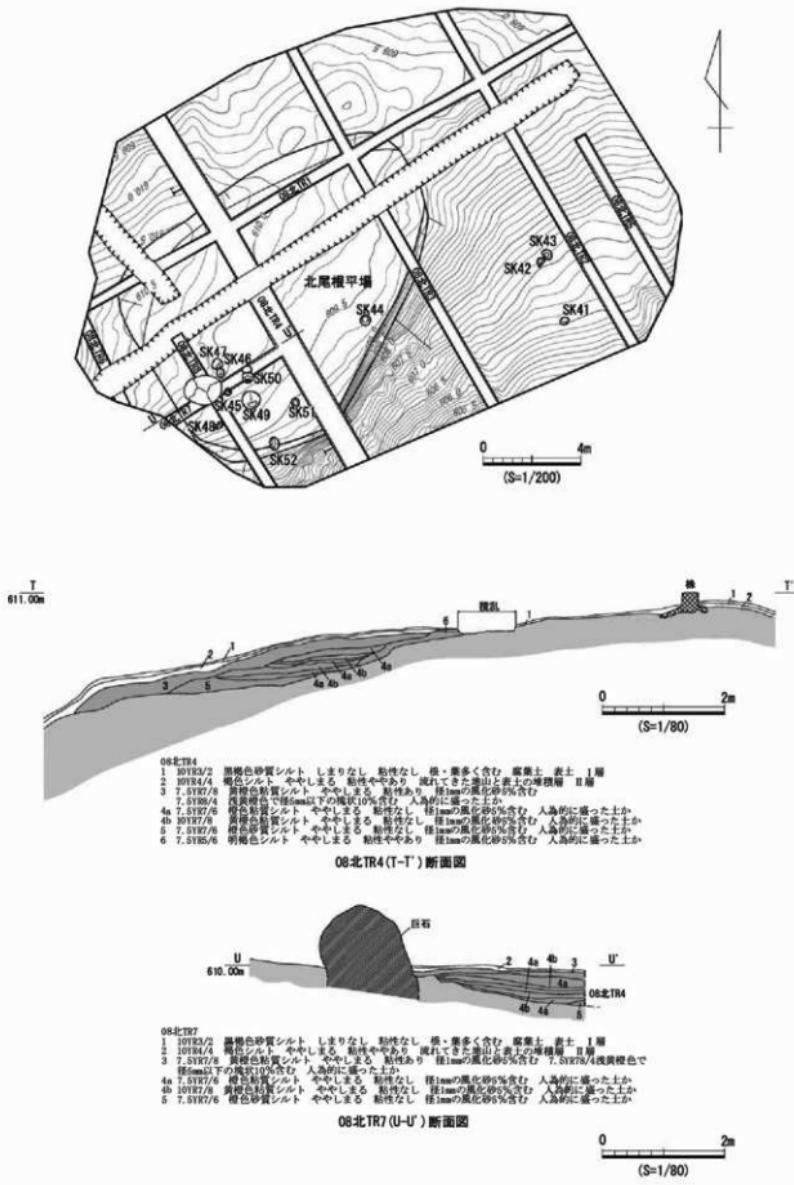
第72図 SP1~3, SZ1~3, SK24~30



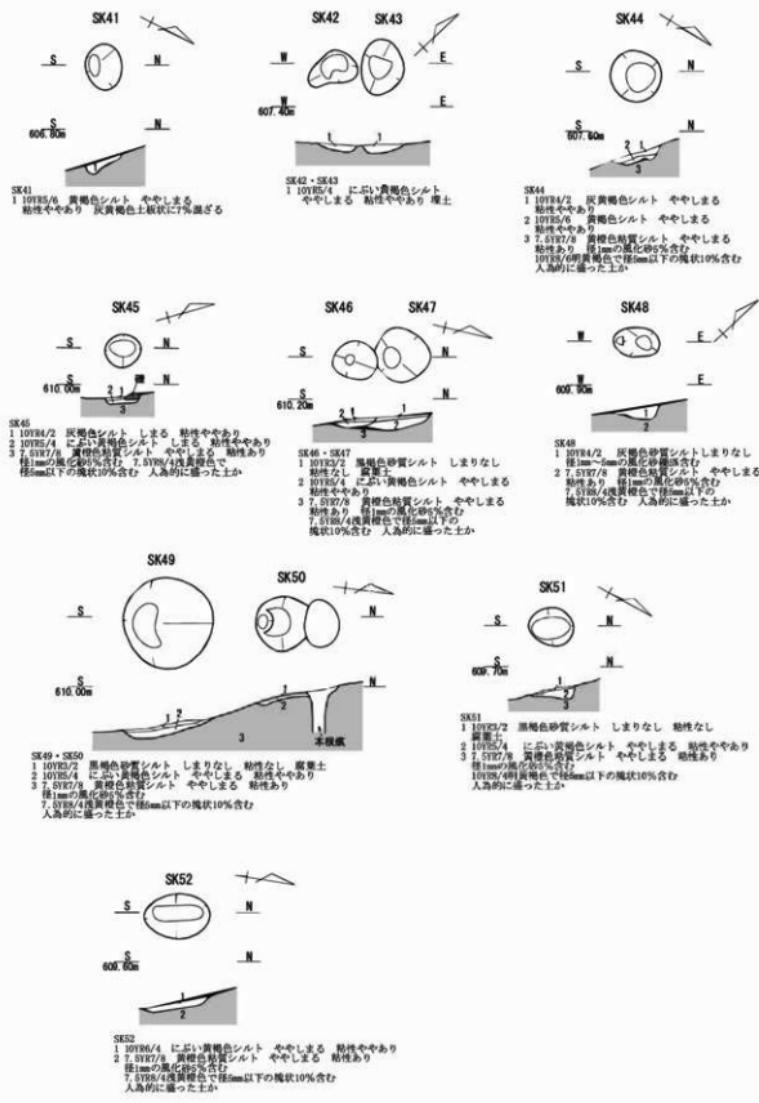
第73図 SK31 ~ 37



第74図 SK38~40, SF16, S110・11



第75図 北尾根地区概要



0 1m
(S=1/40)

第76図 SK41～52

第3節 遺物

1 出土遺物の概要

三枝城跡で出土した遺物の総点数は、接合前破片数で数えて2,813点である。出土遺物を大きく分類すると、土器・陶磁器類（2,071点、73.6%）、金属製品（57点、2.0%）、石器類（187点、6.6%）、飛礫（498点、17.7%）となる。飛礫については、石器の一種とみることもできるが、それらの多くが自然石であることから、石器とは分けて数えている。ちなみに、飛礫を除いた場合の遺物総点数は2,315点となる。その場合、遺跡全体での遺構内出土遺物は697点（30.1%）に過ぎず、1,618点（69.9%）を数える包含層出土遺物の半数に満たない。

地区別では、東尾根地区（553点、19.7%）、北東尾根地区（548点、19.5%）、北東山麓地区（1,704点、60.6%）、北尾根地区（6点、0.2%）、地区不明（2点、0.1%）となり、北東山麓地区出土遺物が過半数を占める。なお、東尾根地区と北東尾根地区では飛礫が多くを占めており、飛礫を除いた場合には、東尾根地区（429点、18.5%）、北東尾根地区（198点、8.6%）、北東山麓地区（1,681点、72.6%）、北尾根地区（5点、0.2%）、地区不明（2点、0.1%）となり、北東山麓地区に偏る傾向がさらに顕著となる。

遺物種別ごとの点数など、細かな内訳は第16表に示したとおりである。三枝城が存続したとされる戦国時代に属する可能性のある遺物は、飛礫を除けば、極めて少ない。多数を占めるのは、土師器・須恵器・灰釉陶器であり、それらの多くは、北東山麓地区において山林寺院跡に伴い出土したものである。弥生土器も破片数では340点を数え、一見、多く出土したように見えるが、それらのほとんどは細かく割れて出土した3個体分の破片に過ぎない。

本書では、全体形状を推測でき、実測可能な個体の大半を図示した。ただし、剥片・石核など、製品とはみなすことのできないものについては、この限りではない。また、飛礫については、集石遺構から出土したものを中心、全体傾向を示すことのできるよう抽出して図示した。実測図は地区ごとにまとめて掲載し、本文では遺物種別ごとに解説を加えることとする。

第16表 出土遺物破片数集計

地区	出土区分	出土遺物破片数																		計
		土器・陶磁器類										金属製品				石器類				
		縄 文 土 器	齊 生 土 器	土 師 器	須 恵 土 器	灰 釉 陶 器	輸 入 磁 器	土 師 質 土 器	古 墳 戶 系 施 設 土 器	近 世 陶 器	不 明 土 器	古 銭 器	鉄 錢	そ の 他	石 礫	剥 片 ・ 石 核	飛 礫			
東尾根	包含層	17	19	1	55	39	2	-	2	5	42	3	-	-	5	10	56	15	262	
	遺構内	-	176	-	-	-	-	-	-	5	-	-	-	-	-	-	-	1	109	291
北東尾根	包含層	-	-	4	46	110	1	14	5	-	-	6	1	1	1	4	1	186	380	
	遺構内	-	-	-	-	1	-	-	1	-	-	2	-	-	-	-	-	164	168	
北東山麓	包含層	20	72	235	656	37	2	3	-	1	-	43	1	6	2	92	23	1,193		
	遺構内	5	82	356	62	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	5	-	511	
北尾根	包含層	-	-	-	-	-	-	-	-	2	-	-	-	-	-	-	3	1	6	
	遺構内	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	0	0	
不明	-	-	-	-	1	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	2	
	合計	42	346	596	819	188	5	17	8	6	50	9	46	2	13	16	158	498	2,813	

2 縄文土器 1~4・128~130・133~138

破片数で42点確認した。地区別では、東尾根地区が17点、北東山麓地区が25点であり、北東尾根地区と北尾根地区では出土していない。遺構内から出土したもののが5点あるものの、それらの出土地点は古代の堅穴住居跡S B 1であり、縄文時代の遺構に伴うものではない。全形を窺える個体はないが、比較的状態の良い13個体を図示した。

1~4は東尾根地区で出土した。それらのうち2・3は、縄文時代後期に属するとみられる。北東山麓地区的S B 1とその周辺で出土した128・129・133は同一個体の可能性があるが、外面に押型による山形文が認められ、縄文時代早期の押型文系土器とみられる。出土地点付近に焼砾集積遺構とみなされる集石遺構S F 16があることに注目すべきであろう。そのほか、北東山麓地区では、縄文時代中期の深鉢とみられる口頸部破片(135)、晚期の深鉢とみられる口頸部破片(134)なども出土しており、幅広い時期差が認められる。

3 弥生土器 5~7・132・139

破片数で340点確認した。5個体図示する。

5と6は東尾根地区的土坑SK 1で出土した。5は胴部下半を欠くものの、全形を推定可能な壺である。有段状の口縁部を持つことと、胴部内面にヘラ削り調整を施し器壁を薄く仕上げていることから、弥生時代後期の北陸系の壺と捉えることができよう。6は平底の壺である。口頸部を欠くが、胴部以下の大部分が残存する。5と共に出土していることから、同時期の遺物とみてよいであろう。7は外面に条痕が認められる胴部破片である。東尾根地区8エグリッドで出土した。

132は北東山麓地区的土坑SK 38から出土した壺である。口縁部の破片が接合できないものの、ほぼ全形を窺うことのできる残存状態良好な個体である。頸部外面の上半には沈線による工字文、下端には刻みと瘤状突起を伴う横位隆帯を持つ。下端を除く胴部外面には縦位沈線と縦位の矢羽根状沈線、下端には横位沈線を施す。胴部内外面に部分的に黒色炭化物が付着しており、煮炊具として使用したとみられる。弥生時代前期中葉頃に位置付けられる柴山出村系土器である。この土器については、第5章第1節において、文様構成について検討を加えて推定復元図を掲げ、既存の資料との比較を行っているので、併せて参照されたい。なお、北東山麓地区では、これとは別個体であるが、弥生時代前期の沈線文系土器の口頸部破片も出土している(139)。

4 土師器

酸化炎焼成による軟質土器のうち、古墳時代以降に属するものを土師器とする。ただし、中世以降の同様の土器については、本書では「土師質土器」と呼び、区別している。

破片数で596点確認した。地区別では、東尾根地区1点、北東尾根地区4点、北東山麓地区591点、北尾根地区0点となり、北東山麓地区に偏る傾向が著しい。確認した器種は、壺・壺・高壺である。23個体図示した。北東山麓地区的堅穴住居跡S B 1において長胴壺が良好な状態で一括出土したこと、特に注目される。

壺 146・147

北東山麓地区のみで出土した。2個体図示したが、これらは同一個体の可能性がある。いずれも胎

土は緻密で橙色を呈する。口縁端部は内面にわずかに面取りが施され、小さく外反する。146の体部内面には、光沢ある線状模様を表現した暗文と呼ばれる装飾が認められる。同地区で出土した須恵器の坏身（164・165）や坏蓋（148～150）などと同様に、古墳時代後期の遺物である可能性が高い。

なお、暗文を持つ土師器の出土例は飛騨地域では多くはないが、当遺跡の西方350mに位置する与島3号古墳（7世紀中葉）において類似する土師器坏が出土しており¹¹⁾、関連が注目される。

高坏 8・107・145

状態の良い個体は出土していない。東尾根地区で出土した8は高坏の坏部とみられる。北東山麓地区で出土した107と145は、高坏の脚部とみられる。このうち107は、堅穴住居跡SB1のカマド跡（SB1-F1）4層と16VグリッドIIc層から出土した破片が接合したもので、焼きゆがみによるものか、類例のない特異な形状である。

壺 108～120・140～144

図示したのは、すべて北東山麓地区的出土品である。堅穴住居跡SB1内のカマド跡SB1-F1において、残存状態良好な壺が一括出土した（108～114・116・117・119）。なかでも108・109・113は全形を窺うことができ、当地域の古代の土師器壺としては、最も状態の良い個体に数えられる。

108・113は長胴壺である。小さく開く直立気味の口頭部、中央付近で最大径を測る長い胴部、胴部との間に明瞭な境を持たぬ小さな平底、以上を形状の特徴とする。調整については、外面には縦方向のハケ目、内面には横方向のハケ目が認められるが、108の胴部内面では、主としてハケ目を残さぬ板ナデ調整が施されている。108では胴部内外面に指オサエ痕も認められる。なお、この2個体は、カマド内において、113の口に108の底部が差し込まれた状態で出土した（第70図）。109は非長胴・丸底の壺である。内面には横方向のハケ目、外面には縦方向のハケ目が認められる。カマドに向かって右側の袖より外側で出土した。今回の調査では、ほかに同様の壺は確認していない。

それら3個体に次いで状態の良いものとして、112がある。胴部下半を欠くものの、108・113と同様の特徴を備えた長胴壺である。出土状況などからみて、胴部下端から底部にかけての破片117が112と同一個体の可能性がある。また、カマド焚口より外側で出土した底部破片116は、ここまで見てきた4個体とは別個体である可能性が高い。

以上から、カマド跡SB1-F1とその周辺からは5個体以上の壺が出土したこととなるが、それらは、108・113などに顕著な長胴化の進んだ形状や、SB1出土遺物の組成、それに、ともに出土した須恵器の年代観から、8世紀後半から9世紀初頭頃にかけての遺物と考えてよいであろう。なお、SB1埋土中からも壺とみられる小破片が出土しているが、1層から出土した115は胴部、2層から出土した118は底部とみられる。ただし118については、より小型の別器種となる可能性がある。

北東山麓地区では包含層からも壺の破片が多数出土した。それらのうち5個体を図示した（140～144）。140～142は口頭部の破片である。このうち140・142はSB1で出土したものと同様の長胴壺とみてよいが、直立する形状の141については違和感がある。143は胴部の破片であろう。144は平底の底部である。

5 須恵器

破片数で819点確認した²¹⁾。地区別では、東尾根地区55点、北東尾根地区46点、北東山麓地区718点

で、北尾根地区では出土していない。土師器と同様に北東山麓地区に偏る傾向が著しいものの、分布範囲は土師器よりも広い。ただし、北東山麓地区では8世紀後期から9世紀代に属するものが多くを占めるに対し、東尾根地区と北東尾根地区ではそうした傾向は希薄で、古墳時代後期に属するものも少なくない。確認した器種は、壺身・壺蓋・摘み蓋・壺蓋・無台壺・有台壺・無台碗・有台碗・有台盤・脚付盤・高壺・托・火舍・壺・甕・鉢・鉢・鉢・甕、以上である³⁾。69個体図示した。北東山麓地区出土品に、鉢（193）、火舍（194）、托（195）といった、仏具とみなすべき個体がみられることが特に注目される。

壺身 10・11・164・165

全形を窺うことのできる個体は出土していない。この器種を特徴づける口縁部の立ち上がり、もしくはその痕跡の残る4個体を図示した。比較的高い立ち上がりを持つ10・11は、東尾根地区で出土した。立ち上がりの痕跡のみ残す164・165は北東山麓地区で出土した。

壺蓋 9・60・148～150

5個体図示した。小型で天井部外面の調整が顕著でない148～150は古墳時代後期でも終末段階頃の遺物であろう。この3個体は北東山麓地区で出土した。比較的大型で肩部に明瞭な稜を持つ9・60は、それより帰属時期が遡ると捉えるべきであろう。9では天井部外面に回転ヘラ削り調整が認められる。9は東尾根地区、60は北東尾根地区で出土した。

摘み蓋 151～162

天井部外面に摘みを持ち、口縁端部が折り返され、内面に返りを持たない蓋である。当遺跡では最も確認個体数の多い器種である。12個体図示した。

摘みの形状は、摘みの残る6個体では、いずれも比較的扁平である。摘みが欠失している6個体のうち、159と160では摘みの痕跡も確認できない状態ではあったが、残る体部・天井部の形状から、本来は摘みが付く器形とみて大過ない。口縁端部の折り返しは短く、総じて丸みを帯びて鋭さを欠く。調整技法については、天井部外面に回転ヘラ削り調整を施し、他の部位には回転ナデ調整を施すのを基本とする。ただし、154では天井部外面に回転によらないヘラ削り調整が認められる。天井部内面のナデ調整は省略される個体が多い。

摘み蓋は、飛驒地域では7世紀後半頃から平安時代までみられる器種であるが、以上のような形状・調整技法の特徴から、当遺跡の出土品は平安時代前期に当たる9世紀前半頃の遺物とみてよいであろう。これらはすべて北東山麓地区で出土している。口径から、小サイズ（152・153・157）、中サイズ（154～156・158～162）、大サイズ（151）の3群に分類できる。小サイズの153・157のみ、焼成良好で青味の強い灰色を呈する。

壺蓋 163

北東山麓地区で出土した163は、口縁端部を下方へ大きく折り返す形状から壺蓋とみられる。確認した壺蓋は、この1個体のみである。

無台壺 166～170

平らな底部から直立気味に直線的な体部が伸びる器形の食膳具を壺とする。高台を持たない無台壺は5個体図示した。すべて北東山麓地区の出土品である。

法量には大きなばらつきがみられ、最も大型の168では、口径14.4cm、器高4.2cm、底径11.6cmを測

るのに対し、最も小型の166では口径8.6cm、器高3.3cm、底径6.2cmにとどまる。調整技法については、体部内外面と底部内面には回転ナデを施すのを基本とし、168～170では底部内面にナデ調整を加えている。底部外面の切り離しは5個体ともヘラ切りにより行われており、切り離し後、167・168ではナデ、169では回転を伴わないヘラ削り、166では回転ヘラ削り、170では工具によるとみられるナデにより調整されている。

なお、169については、口縁部内面に煤が付着しており、灯明具としての使用が想定される。

有台坏 121・122・171～178

高台を持つ坏である有台坏は、当遺跡では摘み蓋に次いで確認個体数の多い器種である。出土地区が北東山麓地区に偏る傾向が認められ、図示した10個体はいずれも北東山麓地区で出土している。

法量には大きなばらつきがみられ、最も大型の173では、口径16.6cm、器高6.7cm、台径11.8cmを測るのに対し、最も小型の121では口径10.9cm、器高3.0cm、台径8.0cmにとどまる。調整技法については、体部内外面と底部内面には回転ナデを施し、底部外面には回転ヘラ削り調整を施すのを基本とする。底部外面の切り離し技法については、調整の結果、読み取れなくなっている個体が多いが、121では回転糸切り痕が明瞭に認められる。

特に注目されるのは、堅穴住居跡SB1から出土した121と122である。121はSB1の2層から出土しており、この住居での使用が想定される。122はSB1の最下部に近い10層から出土しており、ほぼ完形品である。住居構築時に埋納された個体である可能性がある。これら2個体については、形状や121の底部に認められる回転糸切り技法、それにSB1で出土した遺物の組成などからみて、8世紀後期から9世紀初頭頃にかけての時期に収まる遺物と捉えるべきであろう。

なお、以上のほかに、図示した坏のなかには、無台か有台か不明の個体が3個体ある(61・123・179)。このうち123と179は北東山麓地区で出土しているが、61は北東尾根地区の曲輪盛土から出土したものである。

無台碗 62・180・181

坏に比べ底径が小さく、体部が斜めに延びる器形の食膳具を碗とする。一般に坏より後に現れる新しい器種とされるが、当遺跡では食膳具は坏形態が主流で、碗形態のものは少数である。

図示した3個体のうち、北東尾根地区で出土した62では、底部の切り離しは回転糸切り技法により行われている。これに対して、北東山麓地区で出土した180と181では、ヘラ切り技法により切り離されている。

有台碗 182

高台を持つ碗である有台碗は、図示した1個体のみ確認した。182は口縁部を欠くものの、碗形態となるとみられる。底部の切り離し技法については、底部外面にナデ調整が施されているため、不明である。

有台盤 12・183・184

有台碗より扁平で、口縁部が明瞭に折れる器種を有台盤とする。ほぼ完形品の1個体を含め、3個体図示した。

183は、口径20.2cm、器高3.0cm、台径13.0cmを測る大型の個体である。体部内外面には回転ナデ調整、底部内外面にはナデ調整を施している。北東山麓地区で出土した。同じく北東山麓地区で出土し

た底部破片である184も、より小型ではあるものの、同様の器形となるとみられる。東尾根地区で出土した12も底部破片であるが、灰釉陶器の皿の可能性もある。

脚付盤 185～188

有台盤の脚が長く延びた器種を脚付盤とする。4個体図示した。いずれも北東山麓地区で出土した。唯一、全形を窺うことのできるのが187である。有台盤と同様の口縁部が折れる扁平な盤部の中央に、太い脚部がつく。口径19.2cm、器高5.4cm、台径12.0cmを測る。施されている調整技法は、盤部の底部外面には回転ヘラ削り調整、そのほかの部位は回転ナデ調整である。ただし、底部内面中央部にはナデ調整を加えている。残る3個体もほぼ同様の作りとみてよいであろう。なお、脚部破片186と盤部破片188は、同一個体の可能性がある。

高壙 13・14

本書では長い脚をもつ器種を形状により高壙と脚付盤に分けているため、出土遺物中に高壙に該当する個体は少ない。図示した2個体は、いずれも古墳時代の遺物とみられる。13は壙部から脚部にかけての破片とみられるが、脚部にカキ目が認められる。14は脚部の破片とみられ、透かしを持つ。いずれも東尾根地区で出土した。

托 195

器を載せる台である托は須恵器では極めて稀な器種であるが、当遺跡では残存状態良好な1個体が北東山麓地区の平場③で出土した。195は全形を窺うことができ、口径10.3cm、器高3.0cm、台径7.0cmを測る。口縁端部は短く屈曲して垂直気味に立ち上がり、これとは別に、底部内面中央には、高さ1.9cm、端部径3.5cm、基部径4.4cmを測る円筒形の立ち上がりを設けている。底部外面には高台を持つ。調整は外表面とも回転ナデ調整を基本とするが、立ち上がりの内側はナデ調整、底部外面は回転ヘラ削り調整を施している。

同様の器形の個体の出土例は稀であるとはいえる、奈良時代から平安時代にかけての金属器には散見される。例を挙げるならば、東京国立博物館が保管する「法隆寺献納宝物」中に同じ器形の個体を見出すことができる⁴⁾。日常生活において使用する器種ではなく、金属器を模倣して作られた仏具と捉えるべきであろう。

火舎 194

香炉としての使用が想定される仏具である。1個体のみ出土した。194は口径9.6cm、器高6.0cmを測り、既往の出土例に比べ小型である。口縁部が開く有台壙の底部に脚部を取り付けたような形状である。残存する脚は1本のみであるが、それとは別に脚部剥離痕が1か所残る破片が出土しており、それら2脚の位置関係から本来は脚は3本の可能性が高いと推定できる。体部と底部の外表面は回転ナデ調整が施され、脚部は手づくねで成形され、ナデ調整が施されている。北東山麓地区の平場②と平場③下斜面で出土した。

壺 15・16

小破片のみ出土しており、全形を窺うことのできる個体はない。図示した2個体はいずれも東尾根地区で出土した。15は小型の短頸壺の口縁部から胴部上端にかけての破片である。16は比較的大型の壺ないし甕の口頸部とみられ、頸部外面にカキ目が認められる。古墳時代の遺物であろう。

定かではないものの、63は注ぎ口の円孔を持つ壺である龜の胸部破片とみられる。北東尾根地区で出土した。

鉢 125・127・190～192

北東山麓地区でまとめて出土しており、5個体を図示した。このうち、全形を窺うことのできる3個体（127・190・191）では、上端が屈曲する短い口頸部、上端付近で最大径を測る胸部、胸部との境の明瞭な平底、以上のような形状を共有しており、残る2個体でも同様であった可能性が高い。125と190には把手が付けられており、190では本来4か所に存在したことが判明している。調整技法については、回転ナデ調整を基本としつつも、127・190・192では胸部外面下半ないし下端に回転ヘラ削り調整、191・192では胸部内面下半に回転ヘラ削り調整が認められる。

通常、須恵器の鉢は貯蔵具としての使用が想定される器種である。しかし、当遺跡の5個体の場合、いずれも須恵器としては軟質であり、土師器に近い質感を持っている。さらに、127は住居跡S B 1のカマド跡F 1の袖部から出土しており、胸部下端と底部の内面に黒色炭化物が付着している。したがって、少なくとも127については煮炊具としても使用されたことが想定され、他の個体についても同様の可能性を視野に入れるべきであろう。

鉄鉢 193

「鉄鉢」と通称される金属器模倣の須恵器鉢1個体が、良好な残存状態で出土している。193は、北東山麓地区の平場②・平場③、それに平場③下斜面にまたがる広範囲において、45点の破片に分かれた状態で出土したが、接合作業の結果、全形を窺うことのできる1個体に復元できた。内彎する口縁部のすぐ下で最大径を測り、滑らかに外反する体部に緩やかな尖底状の丸底が明瞭な境を持たずにつなげて、少なくとも127については煮炊具としても使用されたことが想定され、他の個体についても同様の可能性を視野に入れるべきであろう。

金属器の鉢を模倣した仮具とみられ、托（195）、火舎（194）などとともに、北東山麓地区の平場群が、平安時代前期頃に信仰ないし修行の場であったことを示唆する重要資料に位置付けられる。

壺 17・64・124・126・189

小破片のみ出土しており、全形を窺うことのできる個体はない。比較的大きな破片5点を図示した。いずれも胸部の破片である。比較的薄手の作りの17・64・126は、内面に同心円状の當て具痕、外面上に平行線状の叩き痕とカキ目を残しており、古墳時代の遺物との印象を受ける。これに対し、124と189はより厚手の大型品とみられ、内面は當て具痕をナデ調整により消している。

出土地区は、17が東尾根地区、64が北東尾根地区、124・126・189が北東山麓地区であり、他器種同様、北東山麓地区に偏る傾向は認められるものの、出土範囲は広域に及んでいる。

6 灰釉陶器

破片数で188点確認した。地区別では、東尾根地区39点、北東尾根地区111点、北東山麓地区37点、地区不明1点で、北尾根地区では出土していない。須恵器が北東山麓地区に偏る傾向が強かったのに対し、東尾根地区と北東尾根地区でも満遍なく出土しているのが注目される。

美濃地方の製品に比べ色調がやや黄色味を帯び、施釉が省略される個体が多いことから、在地窯の

製品が主体を占めるとみられる⁵⁾。碗・皿を主とするが、壺・瓶類も出土している。15個体図示した。
碗・皿 18~24・65・196~200

図示した13個体のうち、199と200が皿、残る11個体は碗とみられる。輪花碗・段皿などの特殊器種や深碗は出土していない。

全形を窺える個体が、碗では65と198、皿では199に限られることと、個体間の差違が大きいことから、定型と言えるものを見出すのは難しい。高台に断面三日月形の高台を持つものを基本とするものの、高いもの（21など）と低いもの（24など）の差は大きい。口縁部の形状についても、端部の外反が顕著なもの（196など）と顕著でないもの（198など）がみられる。施釉については、碗では施釉が認められない個体も多いが、皿199では内面全面と体部外面上半に灰釉を施している。調整技法については、いずれも内外面に回転ナデ調整を施すのを基本としているものの、65・196では体部外面下半に回転ヘラ削り調整を施している。65では底部外面にも回転ヘラ削り調整が認められる。色調面でも均質とは言えず、黄色味の強いもの（22・24・197・198）が多数を占める一方で、須恵器同様の青味の強いもの（65）や、より白いもの（21）もみられる。23は例外的に赤褐色を呈する底部破片で、須恵器有台碗の可能性もある。

出土地区ごとの傾向を概観する。まず、須恵器集中出土区域に当たる北東山麓地区では、碗3個体（196~198）と皿2個体（199・200）が出土した。このうち196を除く4個体では、一般に9世紀代までの個体では認められることが多いとされる口縁端部の外反⁶⁾が顕著ではない。したがって、より退化した段階の遺物である可能性が高く、周辺で出土した須恵器の年代観とは隔たりを持つとの印象を受ける。ただし、その一方で、196では口縁端部の外反が顕著であり、加えて体部外面下半の回転ヘラ削り調整痕も明瞭であるなど、より古い要素が認められることから、同地区での灰釉陶器の使用が、一時期に偏るものではなかったことが窺える。

東尾根地区では7個体出土している（18~24）。いずれも小破片であるが、この地区では須恵器の出土数が少なく、しかもそれらの多くは古墳時代の遺物であることを念頭に置くなら、人々の営みが平安時代にこの区域にまで及んでいたことを証明する資料と評価できる。北東尾根地区では1個体（65）のみの出土にとどまったが、この地区では次に記す壺・瓶も出土していることが注目される。

壺・瓶 66・67

66は口頸部と胴部上端を欠くものの、灰釉陶器の長頸瓶ないし広口瓶とみられる。胴部外面下半には薄い灰釉が認められる。ただし、これは自然釉の可能性がある。薄手の作りで、胴部残存部分の外面には回転ヘラ削り調整を施している。67は、ほぼ全形を窺うことのできる残存状態良好な壺である。直立する短い頸部を持ち、底部は高台を持ったぬ平底である。胴部外面下半に回転ヘラ削り調整を施している。口頸部内面の全面、それに口縁部から胴部下端に至る外面の過半に自然釉が付着しており、人為的な施釉の有無は定かではない。今回の調査で確認した灰釉陶器壺・瓶類はこれら2個体ですべてである。

66と67は、灰釉陶器碗・皿類や須恵器の集中出土地点から遠く離れた北東尾根地区の北東曲輪平場cの盛土中から共に出土した。戦国時代の曲輪造成時に擾拌を受けて詳細不明となったものの、この地点で平安時代に埋納等が行われたことを示唆するものと言えよう。

7 輸入磁器 25・26・71・203・204

確認できたのは、図示した5個体（破片5点）のみである。すべて青磁碗であるが、いずれも小破片である。25・26・203・204は、いずれも龍泉窯系の青磁碗で、体部外面に蓮弁文を施している。71は同安窯系の青磁碗とみられる。

出土地区は、25・26が東尾根地区、71が北東尾根地区、203・204が北東山麓地区である。北東山麓地区の2個体は、いずれも古代山林寺院跡の見つかった平場からは外れた斜面で出土していることから、上方から転げ落ちてきたとみなすべきであり、北東山麓平場の寺院が中世にまで存続したこと直接示すものではない。しかし、わずかとはいえ東尾根地区と北東山麓地区で龍泉窯系青磁が出土したこととは、中世においても、戦国時代より前の時期に人々の活動が山中に及んでいた可能性を示している。

8 土師質土器 68～70・201・202

古代後期以降の土師質の土器については、古墳時代から古代にかけて盛行した土師器とは区別する必要があると判断し、本書では土師質土器と呼ぶこととする。「土師器皿」や「かわらけ」と呼称されることも多いが、当遺跡の出土品には碗に近い形状のものもみられるため、この呼称を用いる。5個体図示した。

北東尾根地区で出土した68～70は、いずれも手づくね成形で薄手の作りである。全形を窓うことのできる唯一の個体である68は、口縁部内外面に黒色炭化物が付着している。70にも内面に黒色炭化物の付着が認められる。3個体とも北東曲輪で出土しており、三枝城で使われた灯明皿の可能性がある。

201と202は北東山麓地区で出土した。これらにも黒色炭化物の付着が認められる。しかし、先に見た3個体に比べ、厚手の作りで碗形を呈することと、山城関連の遺構が確認されなかった区域で出土していることから、帰属時期が大幅に異なる遺物とみるのが妥当であろう。むしろ、山林寺院関連遺物である可能性を視野に入れておきたい。

9 古瀬戸系施釉陶器 27・72～74

確認できたのは、図示した4個体（破片8点）のみである。

27は天目茶碗の口縁部である。内外面に鉄釉が施されている。藤澤良祐氏による古瀬戸編年に照らせば、古瀬戸後III期から後IV期古（15世紀前期～半ば）の製品と判断される⁷⁾。これのみ東尾根地区で出土した。

72～74は北東尾根地区で出土した。72は全形を窓うことのできる縁釉小皿である。古瀬戸後期（14世紀後半～15世紀後半）の製品である。調査区内の最高所に近い主郭下平場や土坑SK18ほか、広い範囲に破片が散らばっていた。北東曲輪の南端付近で出土した73は、壺の胴部破片である。74は卸目付大皿である。古瀬戸後期の15世紀頃の製品である。

これら古瀬戸系施釉陶器は、今回の調査で出土した土器・陶磁器類の中では、三枝城の城内で使用された可能性が高いとみなすことのできる遺物である。出土地区が、山城の曲輪が認められる東尾根地区と北東尾根地区に限られることも見逃せない。伝世の可能性のほか、三枝城が文献に現れる16世紀よりも前、これらの陶器の示す年代から、山城として機能していた可能性も視野に入るべきであ

ろう。

10 近世陶磁器 205

破片数で6点確認した。図示した205は、磁器染付の箱形湯呑である。江戸時代後期の19世紀の製品である。北東山麓地区で出土した。

11 金属製品

金属製品は、明らかに現代の製品であると判断したもの除去して、鉄釘46個体、雁股鎌1個体、刀子1個体、古銭9個体を確認した。

鉄釘 76~78・207~249

不明確なものを含めて46個体出土しており、すべて図示した。

礎石建物跡SH1の床面付近から、43個体がまとまって出土していることが注目される(207~249)。大型品は認められず、10cmを超える個体はない。また、復元長でも5cmに届かない小型品がほぼ半数を占める。確認できるすべての個体で上端を折り曲げて頭部を作っている。しかも、それらのほとんどが、上端を打ち伸ばした後に折り曲げて頭部成形を行うという特徴を共有している。出土状況と合わせ考え、それらを同時代に属する遺物と判断してよいであろう。すなわち、礎石建物で使われていた可能性が極めて高いと言える。屈曲する個体が多いことも、それらが実際に柱などに打ち込まれていたことを示している。

北東尾根地区でも、焼土堆積遺構SF4から2個体(77・78)、遺物包含層から1個体(76)出土した。77のみ、特別に頭部を作り出さない切釘の可能性がある。

古銭 28・79~83・259・260

銅銭が9個体出土し、8個体掲載した(259と260は写真のみ)。判読できたのは6個体である⁹⁾。東尾根地区で出土した3個体のうち、28は北宋銭「嘉祐元宝」(1056年初鋤)である。北東尾根地区では6個体出土しており、うち5個体が判読できる状態であった。79は北宋銭「政和通宝」(1111年初鋤)、80は明銭「洪武通宝」(1368年初鋤)、81は後周銭「周通元宝」(955年初鋤)、82は北宋銭「紹聖元宝」(1094年初鋤)、83は北宋銭「咸平元宝」(998年初鋤)である。平安時代後期から中世にかけて流通した渡来銭が多数を占めている。

出土区域が集落から隔たった東尾根地区と北東尾根地区に限られる点と、当遺跡では土器類があまりみられない時期に属するものが多い点が注目される。平安時代後期以降のある時期に埋納が行われた可能性を考えるべきであろうか。

刀子 75

北東尾根地区21イで出土した。鉄製の刀子の茎から刃部にかけての破片とみられるが、両端を欠く。刃部の横断面は二等辺三角形である。北東曲輪の中心区域付近から出土しているため、山城関連遺物の可能性がある。

雁股鎌 206

206は礎石建物跡SH1の床面付近から、多数の鉄釘とともに出土した。鎌身が二股に分かれる鉄製の雁股鎌である。鎌身の右端をわずかに欠くものの、ほぼ全形を窺うことのできる優品である。長

さ8.9cm、残存幅5.5cmを測る。ただし、^茎の下端が欠けている可能性があり、その場合には長さはさらに延びる。鎌身は二股に分かれ、いずれも先端を尖らせている。頭部の横断面は長方形で、^関部では隅丸長方形となる。茎の横断面は正方形である。

時代特定の手掛かりとなる共伴遺物が出土していないため、この雁股鎌の使用年代については明言し難い。しかし、一般に雁股鎌は武器としての使用にとどまらず、祭祀や儀礼用に使われることが多いとされることから、礎石建物の性格を考える上で重要な遺物と言える。

12 石器類

飛鏢は除外して、石器類は、破片数で187点確認した。ただし、このうち158点は剥片・石核であり、製品と言えるものは、石鎌13点（13個体）、砥石16点（10個体）にとどまる。なお、以下の記述における石材の判別は肉眼観察による。

石鎌 29~33・84・131・250~255

確認した13個体すべてを図示した。地区別では、東尾根地区5個体、北東尾根地区1個体、北東山麓地区7個体である。調査範囲の狭小であった北尾根地区では出土していないものの、縄文時代にすでに山中の広範囲にわたり、さほど偏りなく人々の活動が及んでいたことを読み取れる。

茎の有無で分類すれば、有茎鎌が7個体、無茎鎌が6個体となる。さらに基部の形状に着目するなら、凹基有茎鎌2個体（30・31）、平基有茎鎌4個体（29・32・84・255）、凸基有茎鎌1個体（131）、凹基無茎鎌5個体（33・251・252・253・254）、平基無茎鎌1個体（250）、以上のように細分することができ、形状面でも一様ではない。石材別では、下呂石が9個体、黒曜石が2個体、チャートが1個体、玉髓が1個体である。下呂石が最も多く使われているのは当地域の一般的な傾向どおりと言えるが、84のような玉髓製の石鎌は稀である。

砥石 34~37・85~88・256・257

確認できたのは、破片数で16点（10個体）である。確認個体をすべて図示した。地区別では、東尾根地区4個体、北東尾根地区4個体、北東山麓地区2個体である。遺構内から出土した個体はないものの、城の曲輪跡を検出した東尾根地区と北東尾根地区に集中する傾向が認められる。それらのなかに城の存続時期に使用されたものが含まれる可能性を考えてもよいであろう。

34・36・85・86・88には、銳利な金属器に対して使用したことを示すとみられる深く幅広の線条が認められる。なかでも最も残存状態の良い85では、4面にわたって数多くの線条を確認できる。石材は34・35が粘板岩、36が砂岩で、残る7個体が凝灰岩である。北東尾根地区と北東山麓地区ではすべて凝灰岩を選択していることとなり、明らかな偏りが認められる。

剥片・石核

図示してはいないが、破片数で158点確認した。集落から離れた山林内にしては、予想外に多いとの印象を受ける。下呂石が大部分を占めるものの、玉髓・チャートもみられる。

13 飛鏢 38~59・89~106

外敵に対して投げつけるために蓄えたとみられる石を飛鏢とした。特に加工を施さないことを基本としているため単なる自然石と見分けがつきにくいが、検出位置や出土状況に手掛かりを求める、人為

的に持ち込まれたとみなすことのできるもので、投げつけるのにふさわしい大きさのものを飛礫と判断した。多くの個体は集積されており、当遺跡の集石遺構のうちS I 1～9は飛礫用の石を集めたものと考えられる。

498個体確認した。東尾根地区と北東尾根地区的集石遺構で出土したものを中心にして40個体を図示した。石材は大半が濃飛流紋岩で、そのほかに流紋岩・凝灰岩・花崗岩系・砂岩・チャート・頁岩・安山岩がみられる。平滑な川原石が多く、498個体中402個体は川原石と判断される。川原石は遺跡の位置する山中に自然に存在するものではなく、人為的に運ばれて集められたと考えられる。他方、山石を利用した飛礫も88個体ある。詳細は第20表(124頁)のとおりである。

なお、飛礫については、第5章第3節において考察を加えているので参照されたい。

第3章 第3節 注

- 1) 財団法人岐阜県文化財保護センター1997『与島古墳群』第15図の遺物18・19。
- 2) 遺物種別の判定において、小破片の場合、須恵器と灰釉陶器の見分けのつかないケースが少なからずあったが、そのようの場合には原則として須恵器としてカウントした。
- 3) 須恵器の分類と器種名、それに年代観については、原則として第1回東海土器研究会で提示されたものに従った。東海土器研究会2000『須恵器生産の出現から消滅 猿投窯・湖西窯編年再構築』を参照されたい。
- 4) 東京国立博物館1990『法隆寺献納宝物目録』所載の271番、272番。
- 5) 当遺跡で出土した灰釉陶器は、在地座をはじめ複数の產地の製品が混在する可能性があると思われるが、在地窯の調査が進展していない現状を考慮し、產地別に分類することは行っていない。年代観については、とりあえずの措置ではあるが、最も普遍的な灰釉陶器編年である猿投窯編年を援用し、主に以下の文献を参照した。
齊藤孝正2000『越州窯青磁と緑釉・灰釉陶器』至文堂
- 6) 前掲注6) 文献によれば、猿投窯の灰釉陶器においては黒窯90号窯式期(9世紀半ば～後半)までの個体では口縁部が強く外反することが多いとされる。また、当遺跡に隣接する野内遺跡B地区出土の灰釉陶器についても、同様の傾向を示すことを確認している。財団法人岐阜県教育文化財団文化財保護センター2009『野内遺跡B地区』を参照されたい。
- 7) 古瀬戸系施釉陶器の年代観については、愛知県史編さん委員会2007『愛知県史 別編 窯業2 中世・近世 濱戸系』所載の「編年表」を参照した。
- 8) 古錢の判読に当たっては、日本貨幣商協同組合1984『日本貨幣型録1984年版』を参照した。

第17表 出土地点別遺物破片数一覧表(1)

第18表 出土地自別遺物破片数一覽表 (2)

第19表 土地點別遺物破片數一覽表（3）

出土地点		土器・陶器類										石器類				金属製品		
グリッド番号	層位	破片数	绳文土器	弥生土器	土師器	須恵器	灰陶器	輸入陶器	土師土器	古窯炉 古燒結陶器	近世陶 器	不明上器	石織	砾石 片石類	古錢	鐵釘	その他	
15	Y SW	Bc	22			22												
16	V SW	Bc	3	2		1												
17	V NE	Bc	4				4											
17	V SE	Bc	15			4	11											
17	W NE	Bc	1														1	
17	W NE	Bc	4				3	1										
17	X NE	Bc	3				1		1									1
18	エ NW	I	1															1
19	イ NW	Ba	2			1			1									
20	イ SW	Bb	1				1											
20	ウ NW	Ba	1				1											
20	ウ SW	Ba	3				3											
20	ウ SW	Bb	1				1											
21	イ SW	Ba	2				1	1										
21	イ SW	Bb	3				1	2										
21	イ SW	Bb	1								1							
21	タ NE	Ba	1				1											
21	タ NE	Bb	12				4	7										1
21	タ NE	Bb	3					2										1
21	タ NE	底土	6			1		5										
21	タ NW	Ba	1															
21	タ NW	Bb	1															
21	タ NW	底土	3				1	2										
21	タ SW	I	1	1														
21	タ SW	Ba	10					10										
21	タ SW	Bb	8				1	7										
21	タ SW	Bb	1															
21	タ SW	Bb	1															
21	タ SW	Bb	1															
21	タ SW	底土	1															
21	エ NE	Ba	1															
21	エ NW	Ba	1															
21	エ NW	底土	1															
21	エ NW	底土	1															
21	オ NE	Ba	1															
21	オ NE	Bb	1															
21	オ SW	I	1															
21	オ SW	Bb	1															
21	オ SW	底土	71				2	68										1
21	エ NE	Bb	1															
21	エ NE	Bb	1															
22	タ NW	底土	8															
22	タ NW	Ba	4															
22	タ NW	Bb	3				1	2										
22	タ SW	I	1	1														
22	タ SW	Ba	10															
22	タ SW	Bb	8				1	7										
22	タ SW	Bb	1															
22	タ SW	Bb	1															
22	タ SW	底土	71				2	68										1
22	エ NE	Bb	1															
22	エ NE	Bb	1															
22	オ NW	底土	3															
22	オ NW	地山直上	4															
22	オ NW	地山直上	1															
22	オ SW	Ba	2															2
22	オ SW	Bb	2															
22	オ SW	Bb	1															
22	オ SW	Bb	1															
22	タ NE	Bb	2				1											
22	タ NE	Bb	2															
22	タ SE	Ba	2				2											
22	エ SW	Ba	4				2	2										
22	エ SW	底土	2				2											
22	オ SW	Ba	3							1								1
22	オ SW	Ba	4							3								
23	カ NE	Ba	3							1								1
23	カ NE	Bb	1															
23	カ NW	I	1															
23	カ NW	Ba	1															
23	カ NW	Bb	2															
24	タ NW	Ba	1															
25	Q NE	I	1															
25	Q1 SE	底土	1															
25	Q1 NW	I	1															
25	R1 SE	Ba	2															2
25	R1 SE	Bb	1															
SAI-FW			1						1									
SBI		1	43		13	16	13											1
SBI		2	34	1	6	12	13											1
SBI		3	39		29	9	1											
SBI		4	2				2											
SBI		5	4	1	3													
SBI		6	19	2	14	1												2
SBI		7	11					11										
SBI		10	1					1										
SBI-F1		2	30				30											
SBI-F1		3	17				14	2										
SBI-K1		4	260				271	9										
SBI-K1		2	2	1														
SBI-K2		1						1										
SBI		—	42		42													
SF3		1	5															
SF4		1	1															1
SF4		9	1															
SK1			135		154													1
SK18		1	1															
SK27		1	2					2										
SK38		1	26		17	1	8											
不明			2					1										
合計			2,315	42	340	596	819	188	5	17	8	6	50	13	16	158	9	46

第20表 出土地点別飛礫数一覧表

出土地点	個数	石						川原石	山石	不明
		透飛沫紋岩	流紋岩	凝灰岩	花崗岩系	砂岩	チャート			
5 ウ SW	1							1	1	
6 ウ NE	1	1					1		1	
7 ウ SE	1	1							1	
7 オ NW	1	1							1	
8 エ NW	1	1							1	
8 エ SE	1	1							1	
11 ウ SE	1	1							1	
11 エ NE	1	1							1	
12 エ SW	2	2						2		
13 エ SE	1							頁岩1	1	
13 オ SE	1	1							1	
13 キ SW	1	1							1	
14 オ NE	1	1							1	
11 Z NW	2	1					1	2		
11 Z SW	4	4							4	
12 ア NE	1				1				1	
13 ヤ SE	1						1		1	
14 ヤ NW	3		1			1	1	2	1	
14 ヤ SE	1						1		1	
15 W SE	2	1			1				2	
15 X NW	1	1							1	
15 Y NE	2	1		1					2	
15 Y SE	1	1							1	
15 オ SW	1				1				1	
16 W NW	1						1		1	
16 W SE	2	2							2	
16 W SW	2	2							2	
18 エ SE	1						1		1	
19 イ 一	1				1				1	
20 イ NW	1	1							1	
20 ウ NW	10	10						9	1	
20 ウ SE	1	1							1	
20 ウ SW	85	85						84	1	
20 オ NE	1		1						1	
20 カ NW	1	1							1	
21 イ SE	1			1					1	
21 イ SW	1						1		1	
21 ウ NE	5	5						4	1	
21 ウ NW	1	1							1	
21 ウ SE	22	22							22	
21 ウ SW	1	1							1	
21 オ SE	2	1			1				2	
21 カ NE	2	2							2	
21 カ NW	1			1						1
22 ウ SW	1	1								1
22 オ NW	5	3		1	1			3	2	
22 オ SE	2	2							2	
22 オ SW	8	7			1				8	
23 エ NE	5	5							5	
23 エ NW	3	3							3	
23 エ SE	3	3							3	
23 エ SW	1	1							1	
23 オ NE	1	1							1	
23 オ SE	2	1			1				2	
23 オ SW	3	3							3	
23 カ NE	4	4							4	
23 カ NW	5	5							5	
24 キ SE	1	1							1	
24 ク NE	2	1			1				2	
24 ク SW	2	2							2	
27 R NE	1			1					1	
S1	44	44						38	6	
S12	59	58				1		56	3	
S13	6	6							6	
S14	79	71		5	2		安山岩1	59	19	1
S15	7	7						7		
S16	16	16						13	2	1
S17	14	14						1	12	1
S18	38	32	2	2		2		4	34	
S19	10	8					不明2	5	3	2
合計	498	454	3	8	14	9	6	402	88	8

第21表 遺物観察表（1）

番号	地区	グリッド 座標	層位	種別	器種	口径 (長さ)	器高 (厚さ)	底径 (幅)	実測図 写真	遺物所見など
1	東尾根	79NW	I・II	調文土器	不明	-	-	-	第77回 回取17	外表面巻きに刻文列。
2	東尾根	87SE	-	調文土器	不明	-	-	-	第77回 回取17	外表面に刻文と調文。3と同一個体の可能性あり。調文時代後期。
3	東尾根	87SE	I・II	調文土器	不明	-	-	-	第77回 回取17	外表面に横方向の波線と調文。2と同一個体の可能性あり。
4	東尾根	89NW	I・II	調文土器	不明	-	-	4.8	第77回 回取17	底部内外面ナザ。作成時代以降の遺物の可能性あり。
5	東尾根	SK1 SD1	-	仰生土器	甕	18.5	約28.0	4.5	第77回 回取17	口部内外面横刷毛。底部内面横方向へ削り、外表面に縱方向のハケ目。底盤外沿基部-側面外縁-底盤端面に部分的に墨色変化付着。
6	東尾根	SK1 SD1	-	仰生土器	甕	-	-	7.4	第77回 回取17	底部内面に部分的に横方向のハケ目。大部分はナザ上にハケ目を消してある。側面外縁に斜め方向のハケ目。底盤外表面ナザ。底部外縁中央に墨色変化付着。
7	東尾根	83NE	-	仰生土器	甕か	-	-	-	第77回 回取17	側面破片。外表面に横方向の条痕。
8	東尾根	83NE	-	土器器	高环	-	-	-	第77回 回取18	底部内面ナザ。杯部外表面に部分的に横方向のハケ目(ハケ目をナザに消してある)。斜土密部が砂質を含む。あるいは赤土質。
9	東尾根	24SW	I・II	須恵器	环盡	13.0	3.8	-	第77回 回取19	天井部内外面回転ナザ。天井部内外面回転ハラ脚。底部内外面回転ナザ。
10	東尾根	24SW	I・II	須恵器	环身	10.2	-	-	第77回 回取19	底部内外面回転ナザ。
11	東尾根	24SW	I・II	須恵器	环身	約10.7	-	-	第77回 回取19	底部内外面回転ナザ。底盤で青灰色を呈する。
12	東尾根	59NW	-	須恵器	有台盤	-	-	-	第77回 回取19	台盤6.8cm。底部内外面回転ナザ。底部内外面回転ナザ。内面中央にナザを残す。底盤外縁に工具による刃切痕。焼成ややあせく變色を呈する。
13	東尾根	24SW	-	須恵器	高环	-	-	-	第77回 回取19	側面内面ナザ。脚部外縁にカキ目。底盤。
14	東尾根	39SW	I・II	須恵器	高环	-	-	-	第77回 回取19	脚部内外面回転ナザ。脚部外縁に自然剥付着。
15	東尾根	113NE	I・II	須恵器	甕	6.2	-	-	第77回 回取19	口部内外面回転ナザ。底部上端内外面回転ナザ。
16	東尾根	34SE	I・II	須恵器	甕	13.4	-	-	第77回 回取20	口部内外面回転ナザ。底部内面回転ナザ。底部外縁にカキ目。底盤で器底は青灰色。底面は赤褐色を呈する。
17	東尾根	54SE	I・II	須恵器	甕	-	-	-	第77回 回取20	甕の胸底。内面に同心円凹凸底。外面に平行叩き痕とカキ目。
18	東尾根	130SW	I・II	灰陶陶器	瓶	13.0	-	-	第77回 回取20	体部内外面回転ナザ。
19	東尾根	130SE	I・II	灰陶陶器	瓶	約16.0	-	-	第77回 回取20	体部内外面回転ナザ。
20	東尾根	124SW	I・II	灰陶陶器	瓶	-	-	-	第77回 回取20	口径6.8cm。体部内外面回転ナザ。体部内面に灰斑(あるいは自然剥離)。
21	東尾根	124NW	I・II	灰陶陶器	瓶	-	-	-	第77回 回取20	口径6.8cm。体部内外面回転ナザ。底部内外面回転ナザ。旋土痕部で灰白色を呈する。
22	東尾根	143SE	-	灰陶陶器	甕か	-	-	6.5	第77回 回取20	口径6.8cm。底部内外面回転ナザ。底部内面平滑化。
23	東尾根	59NW	I・II	灰陶陶器	瓶	-	-	7.1	第77回 回取20	口径7.2cm。体部内外面回転ナザ。底部内外面ナザ。焼成ややあせくに凹み赤褐色を呈する。
24	東尾根	130NE	I・II	灰陶陶器	瓶	-	-	6.9	第77回 回取20	口径6.9cm。体部内外面回転ナザ。底部内外面回転ナザ。
25	東尾根	128NW	I・II	輸入磁器	青磁瓶	17.2	-	-	第77回 回取21	体部内外面にくすんだ緑色の青磁釉。体部外縁に輪縫弁孔。輪縫系。
26	東尾根	不明	鉢土	輸入磁器	青磁瓶	17.8	-	-	第77回 回取21	体部内外面に明い水色の青磁釉。体部外縁に茎足。難窓室乳。
27	東尾根	140NW	-	古蘭戸系 直耳瓶	天目茶碗	約13.0	-	-	第77回 回取21	体部内外面に鉄輪。古蘭戸後期～後IV期。
28	東尾根	64SE	I・II	金属製品	古鏡	(2.3)	(0.1)	(2.3)	第78回 回取25	銅鏡。基祐元慶(北宋・1066年初切)。重さ1.4g。
29	東尾根	79SW	I・II	石器	石礫	(3.2)	(0.6)	(1.7)	第78回 回取21	石材は下貝石。重さ2.4g。平基有茎。
30	東尾根	83NE	I・II	石器	石礫	(2.4)	(0.5)	(1.5)	第78回 回取21	石材は下貝石。重さ1.0g。回基有茎。

第22表 遺物観察表（2）

番号	地区	グリッド 遺構	層位	種別	器種	口徑 (長さ)	器高 (厚さ)	底径 (幅)	実測圖 写真	觀察所見など	
										表面	裏面
31	東尾根	9号NE	I・II	石器	石鏃	(残存2.0)	(0.6)	(2.0)	第78図 写真21	上平を欠く。あるいは尖頭器か。石材は下呂石。重さ2.6kg。底基有茎縫。	
32	東尾根	10号SW	I・II	石器	石鏃	(2.0)	(0.5)	(1.4)	第78図 写真21	石材は下呂石。重さ20.7kg。平基有茎縫。	
33	東尾根	12号SE	I・II	石器	石鏃	(残存1.7)	(残存0.5)	(残存1.0)	第78図 写真21	無茎縫の破片。石材は下呂石。重さ20.4kg。	
34	東尾根	12号NW	I・II	石器	石鏃	(1.8.0)	(2.1)	(3.0)	第78図 写真22	画面24面。石材は船板岩。重さ157.6kg。	
35	東尾根	12号SE	I・II	石器	石鏃	(6.1)	(0.7)	(2.5)	第78図 写真22	画面24面。石材は船板岩。重さ19.3kg。	
36	東尾根	5号NW	I・II	石器	石鏃	(2.6)	(1.5)	(3.4)	第78図 写真22	画面は4面。石材は砂岩。重さ24.2kg。	
37	東尾根	12号NE	I・II	石器	石鏃	(4.1)	(1.4)	(5.0)	第78図 写真22	画面は1面。石材は凝灰岩。同一個体とみられる破片が均方に2点あり。重さ46.4kg。	
38	東尾根	SH	I・II	石器	飛鏢	(8.0)	(4.6)	(7.2)	第78図 写真23	石材は濃飛沫状岩。重さ418.2kg。	
39	東尾根	SH	I・II	石器	飛鏢	(13.0)	(2.7)	(10.0)	第78図 写真23	石材は濃飛沫状岩。重さ653.3kg。	
40	東尾根	SH	I・II	石器	飛鏢	(13.0)	(5.9)	(9.0)	第78図 写真23	両の当たる位置に僅みが認められるが、加工によるものか否かは定かでない。石材は濃飛沫状岩。重さ1014.0kg。	
41	東尾根	SH	I・II	石器	飛鏢	(8.0)	(4.8)	(7.4)	第78図 写真23	石材は濃飛沫状岩。重さ386.3kg。	
42	東尾根	SH	I・II	石器	飛鏢	(11.5)	(4.1)	(7.5)	第78図 写真23	判別の僅みが認められるが、加工によるものか否かは定かでない。石材は濃飛沫状岩。重さ488.4kg。	
43	東尾根	SH	I・II	石器	飛鏢	(12.4)	(6.0)	(9.0)	第78図 写真23	両の当たる位置に打ち欠きによる僅みが認められる。石材は濃飛沫状岩。重さ630.4kg。	
44	東尾根	S12	I・II	石器	飛鏢	(10.0)	(4.6)	(5.5)	第78図 写真23	下端面摩滅。石材は濃飛沫状岩。重さ359.0kg。	
45	東尾根	S12	I・II	石器	飛鏢	(6.0)	(4.5)	(6.4)	第78図 写真23	石材は濃飛沫状岩。重さ254.4kg。	
46	東尾根	S12	I・II	石器	飛鏢	(10.0)	(5.5)	(7.0)	第78図 写真23	石材は濃飛沫状岩。重さ563.7kg。	
47	東尾根	S12	I・II	石器	飛鏢	(10.0)	(7.3)	(9.7)	第78図 写真23	両の当たる位置に打ち欠きによる僅みが認められる。石材は濃飛沫状岩。重さ1065.4kg。	
48	東尾根	S12	I・II	石器	飛鏢	(10.0)	(6.0)	(7.5)	第78図 写真23	3か所折減。石材は濃飛沫状岩。重さ550.8kg。	
49	東尾根	S12	I・II	石器	飛鏢	(9.0)	(5.6)	(7.0)	第78図 写真23	打ち欠きによる僅みが認められる。石材は濃飛沫状岩。重さ531.3kg。	
50	東尾根	S13	I・II	石器	飛鏢	(10.0)	(6.0)	(7.5)	第78図 写真23	石材は濃飛沫状岩。重さ611.5kg。	
51	東尾根	S13	I・II	石器	飛鏢	(10.0)	(5.2)	(7.0)	第78図 写真23	石材は濃飛沫状岩。重さ597.2kg。	
52	東尾根	S13	I・II	石器	飛鏢	(8.0)	(5.5)	(8.0)	第78図 写真23	石材は濃飛沫状岩。重さ459.7kg。	
53	東尾根	S13	I・II	石器	飛鏢	(8.0)	(7.6)	(8.2)	第78図 写真23	石材は濃飛沫状岩。重さ562.0kg。	
54	東尾根	S13	I・II	石器	飛鏢	(11.1)	(5.2)	(7.0)	第78図 写真23	石材は濃飛沫状岩。重さ589.7kg。	
55	東尾根	S13	I・II	石器	飛鏢	(12.0)	(5.5)	(8.0)	第78図 写真23	石材は濃飛沫状岩。重さ686.0kg。	
56	東尾根	7号NE	I・II	石器	飛鏢	(9.0)	(7.3)	(7.7)	第78図 写真23	石材は砂岩。重さ597.0kg。	
57	東尾根	13号SE	I・II	石器	飛鏢	(20.0)	(5.1)	(8.0)	第78図 写真23	石材は濃飛沫状岩。重さ1250.0kg。	
58	東尾根	8号NW	I・II	石器	飛鏢	(10.2)	(5.1)	(7.0)	第78図 写真23	石材は濃飛沫状岩。重さ316.8kg。	
59	東尾根	14号NE	I・II	石器	飛鏢	(6.7)	(5.1)	(5.5)	第78図 写真23	石材は濃飛沫状岩。重さ153.3kg。	
60	北東尾根	21号NW	IIa	領應器	壺蓋	約11.0			第59図 写真19	内外面転写ナメ。聖職で暗灰色を呈する。	

第23表 遺物観察表（3）

番号	地区	グリッド 連携	層位	種別	基種	口径 (長さ)	高さ (厚さ)	直径 (幅)	実測図 写真	範囲所見など
61	北東尾根	219SW 219NE	盛土 IIb	須恵器	片	19.6	~	~	第80回 図版19	体部内外面回転ナゲ。
62	北東尾根	219SE	IIa	須恵器	無台脚	~	~	5.8	第80回 図版19	体部内外面回転ナゲ。底部内面回転ナゲ、外面に回転穴切痕。
63	北東尾根	209NW	IIa	須恵器	施	~	~	~	第80回 図版19	内外面に自然輪付着。側面外間に横方向の沈撇と列点文。
64	北東尾根	219SE	IIa+ IIb	須恵器	施	~	~	~	第80回 図版20	腹の頸部から脚部上端。内面に同心状凹凸状当て具痕。外面に平行凹凸線と捺目。
65	北東尾根	21+SE 21+SW 219NE 底上- IIa+ IIb	IIa IIa IIa IIa+ IIb	灰陶陶器	碗	15.2	5.6	8.0	第80回 図版12	口径8.0cm。底部内面回転ナゲ。体部外面上半回転ナゲ、下半回転ナフナ。底部内面回転ナゲ兼ナゲ、外面回転ナフナ。身上に砂を多く含む。褐色色を呈する。
66	北東尾根	209NW 229SW 233SW SA1-P6 1	盛土- IIa IIa- IIb IIa IIa I	灰陶陶器	瓶	~	~	10.6	第80回 図版12	台径11.4cm。瓶底部内面回転ナゲ。底部外表面へラ削れ。底部内面ナゲ。側面外面上半に灰斑(あら)は白質點突起。
67	北東尾根	229NW 229SW 233SW 239NE	盛土- IIa+ IIb IIb	灰陶陶器	壺	10.8	23.8	13.1	第80回 図版12	口縁部内面セザン。底部内面回転ナゲ。瓶底部内面上半回転ナゲ、下半回転ナフナ削れ。底部内面ナゲ。口縁部内面と口縁部側面外間に自然輪付着。
68	北東尾根	228NW	堆山層上- 盛土- 植土	土師質 土器	壺	11.4	3.2	5.3	第80回 図版12	手づくね成形。68と同一個体。
69	北東尾根	238SW	IIa	土師質 土器	壺	11.4	~	~	第80回 図版21	手づくね成形。68と同一個体。
70	北東尾根	238NW	IIa	土師質 土器	壺	~	~	~	第80回 図版21	手づくね成形。内面に黑色炭化物付着。灯明孔。
71	北東尾根	228SW	IIb	輸入磁器	青磁縮小	~	~	~	第80回 図版21	体部内外面に灰オーラブ色の青磁釉。同安窯系。
72	北東尾根	SK16 228NE 247NW	I IIb IIa	古瀬戸系 施輪陶器	綠釉小皿	11.4	~	~	第80回 図版12	体部内面回転ナゲ。口縁部内外面にぶい薄緑の灰釉。古瀬戸後期。
73	北東尾根	235NE	IIa	古瀬戸系 施輪陶器	壺	~	~	~	第80回 図版21	脚部破片。内外面回転ナゲ。内面のほぼ全面と下端を除外外面上に薄緑色の釉。
74	北東尾根	21+SW	IIb	古瀬戸系 施輪陶器	柳口村大皿	~	~	12.0	第80回 図版12	体部内面回転ナゲ、外表面回転ナフナ削れ。底部内面回転ナフナ削れ。体部上半外面上に薄緑色の灰釉。底部内面に捺目。
75	北東尾根	21+SW	IIa	金属製品	刀子	(残存4.9)	(0.3)	(1.1)	第80回 図版25	腰を丸く。刀部の横断面は二等辺三角形。鉄製。
76	北東尾根	228NW	IIa	金属製品	鉗	(6.8)	(0.5)	(0.7)	第80回 図版25	頭部は2.2cm。打ち跡が2.2後に折り曲げて形成されている。
77	北東尾根	SP4	1	金属製品	鉗	(残存3.5)	(0.5)	(0.5)	第80回 図版25	下半を丸く。頭部も生存しないが、切削の可能性がある。
78	北東尾根	SP4	9	金属製品	鉗	(残存2.1)	(0.5)	(0.4)	第80回 図版25	上半を丸く。下端が絶曲する。
79	北東尾根	21+SE	I	金属製品	古鏡	(2.4)	(0.1)	(2.4)	第80回 図版25	銅鏡。波和通宝(北宋、1111年初鋤)。重さ2.2g。
80	北東尾根	238SE	IIb	金属製品	古鏡	(2.3)	(0.1)	(2.3)	第80回 図版25	銅鏡。洪武通宝(明、1368年初鋤)。重さ3.1g。
81	北東尾根	229SW	盛土	金属製品	古鏡	(2.5)	(0.1)	(2.5)	第81回 図版25	銅鏡。周通元宝(後周、955年初鋤)。重さ2.5g。
82	北東尾根	21+SW	I	金属製品	古鏡	(2.4)	(0.1)	(2.4)	第81回 図版25	銅鏡。絢美元宝(北宋、1094年初鋤)。重さ2.0g。
83	北東尾根	228SW	IIa	金属製品	古鏡	(2.3)	(0.1)	(2.2)	第81回 図版25	銅鏡。成平元宝(北宋、998年初鋤)。重さ2.3g。
84	北東尾根	228NW	IIa	石器	石鏡	(2.9)	(0.6)	(1.0)	第81回 図版21	石材は玉髓。重さ1.5g。平基有茎鏡。
85	北東尾根	21+SE	IIb	石器	砾石	(20.0)	(0.9)	(5.0)	第81回 図版22	画面は2面。石材は砾状岩。重さ2807.9g。
86	北東尾根	229NE	IIa	石器	砾石	(7.5)	(3.0)	(5.0)	第81回 図版22	画面は2面。石材は砾状岩。重さ168.4g。
87	北東尾根	18+SW	I	石器	砾石	(8.4)	(2.3)	(4.6)	第81回 図版22	画面は1面。石材は砾状岩。重さ165.9g。
88	北東尾根	23+SW	IIa	石器	砾石	(4.3)	(1.9)	(3.0)	第81回 図版22	画面できる砾面は1面。石材は砾状岩。本來はもっと大きな砾石だったとされる。重さ21.6g。
89	北東尾根	SI4	IIb	石器	砾石	(15.0)	(11.0)	(14.0)	第81回 図版24	石材は濃青泥狀岩。重さ1127.9g。
90	北東尾根	SI4	IIb	石器	砾石	(13.4)	(7.6)	(10.7)	第81回 図版24	石材は濃青泥狀岩。重さ812.9g。

第24表 遺物觀察表（4）

番号	地区	グリッド 座標	層位	種別	器種	口径 (長さ)	最高 (厚さ)	底径 (幅)	実測面 写真	観察所見など
91	北東尾根	SH	II b	石器	飛鏢	(11.4)	(6.2)	(10.7)	第81回 図版24	ノズム工具によるとみられる加工痕が認められる。石材は通常流紋岩。重さ1115.0g。
92	北東尾根	SH	II b	石器	飛鏢	(8.7)	(4.2)	(6.7)	第81回 図版24	石材は通常流紋岩。重さ308.7g。
93	北東尾根	SH	II b	石器	飛鏢	(9.6)	(5.1)	(7.3)	第81回 図版24	石材は通常流紋岩。重さ488.6g。
94	北東尾根	SH	II b	石器	飛鏢	(14.0)	(7.0)	(8.5)	第81回 図版24	石材は通常流紋岩。重さ1410.0g。
95	北東尾根	SH	II b	石器	飛鏢	(10.0)	(5.6)	(5.9)	第82回 図版24	石材は通常流紋岩。重さ479.6g。
96	北東尾根	SH	II a	石器	飛鏢	(14.2)	(7.1)	(9.3)	第82回 図版24	石材は通常流紋岩。重さ1062.3g。
97	北東尾根	SH	II a	石器	飛鏢	(15.2)	(5.3)	(9.0)	第82回 図版24	石材は通常流紋岩。重さ1018.5g。
98	北東尾根	SH	II a	石器	飛鏢	(14.7)	(7.7)	(9.9)	第82回 図版24	石材は通常流紋岩。重さ1260.0g。
99	北東尾根	SH	II a	石器	飛鏢	(12.0)	(4.3)	(8.6)	第82回 図版24	石材は通常流紋岩。重さ746.8g。
100	北東尾根	SH	盛土直上	石器	飛鏢	(16.7)	(6.3)	(8.6)	第82回 図版24	石材は通常流紋岩。重さ1131.0g。
101	北東尾根	SH	盛土直上	石器	飛鏢	(9.4)	(6.0)	(9.1)	第82回 図版24	石材は通常流紋岩。重さ582.4g。
102	北東尾根	SH	II a	石器	飛鏢	(13.0)	(5.0)	(8.3)	第82回 図版24	石材は砂岩。重さ609.0g。
103	北東尾根	SH	II a	石器	飛鏢	(22.0)	(5.3)	(12.2)	第82回 図版24	左端に直線的分割線。石材は通常流紋岩。重さ1700.0g。
104	北東尾根	SH	II a	石器	飛鏢	(11.2)	(3.2)	(9.8)	第82回 図版24	石材は通常流紋岩。重さ474.8g。
105	北東尾根	SH	II a	石器	飛鏢	(16.0)	(4.5)	(9.6)	第82回 図版24	上端に直線的分割線。石材は流紋岩。重さ905.7g。
106	北東尾根	SH	II b	石器	飛鏢	(13.1)	(5.5)	(9.1)	第82回 図版24	列状の剥離が認められるが、加工によるものか否かは定かでない。石材は通常流紋岩。重さ871.0g。
107	北東山腹	SHI-P1 16VNW 16VSW	4 II c II c	土師器	高所か	-	-	-	第83回 図版13	高所の剥離があるが、やはり割れ目らしい。また近隣遺跡で倒壊が知られているが、定かではない。内面には横方向のハケ日、断面には横方向に斜め方向の剥離の跡が見られる。
108	北東山腹	SHI-P1	4	土師器	甕	18.8	32.0	5.0	第83回 図版13	口部部から側面下端にかけての内面に横方向のハケ日、上端を横く断面内面に斜めアザ、口部部側面に内面に横方向のハケ日、断面中央部外側に斜めアザ、底部内面に斜めアザ。口部部内外に削下部下端内面に斜めアザに分布する黒色炭化物付着。
109	北東山腹	SHI-P1	4	土師器	甕	14.2	19.6	-	第83回 図版13	口部部内外に削下部下端内面に横方向のハケ日、断面内面に横方向のハケ日、外側に縦方向のハケ日。口部部側面に内面に斜めアザ、外側にハケ日。口部部内外に削下部下端内面に斜めアザに分布する黒色炭化物付着。
110	北東山腹	SHI-P1	4	土師器	甕	-	-	-	第83回 図版18	甕の側面破片、内面に横方向のハケ日、外面上に縦方向のハケ日、内面下端に黒色炭化物付着。
111	北東山腹	SHI-P1	4	土師器	甕	13.2	-	-	第83回 図版18	口部部内面に横方向のハケ日、外面上に縦方向のハケ日。
112	北東山腹	SHI-P1 SHI-P2 1TVSE	2 2-3 II c	土師器	甕	17.2	-	-	第83回 図版13	口部部内外に削下部下端内面に横方向のハケ日、断面内面に斜めアザ、口部部側面に内面に横方向のハケ日、外側に縦方向のハケ日。断面中央部外側に斜めアザに分布する黒色炭化物付着。117と同一個体。
113	北東山腹	SHI-P1	2-3-4	土師器	甕	16.0	33.0	5.6	第83回 図版18	全体に剥離しているが、口部部・断面内面に横方向のハケ日、外面上に縦方向のハケ日、底部内面削下部下端内面に斜めアザに分布する黒色炭化物付着。
114	北東山腹	SHI-P1	4	土師器	甕	19.0	-	-	第83回 図版18	口部部内面に横方向のハケ日、外面上に縦方向のハケ日。断面内面に斜めアザに分布する黒色炭化物付着。
115	北東山腹	SHI	1	土師器	甕	-	-	-	第83回 図版18	甕の側面破片、内面に横方向のハケ日、外面上に縦方向のハケ日。
116	北東山腹	SHI-P1	4	土師器	甕	-	-	4.6	第83回 図版14	甕の側面下端から底盤にかけての状態の良い破片。内面ナジ。外面上に斜めアザ、底盤は堅密。底盤は非常に強く、久遠に亘る。
117	北東山腹	SHI-P1	4	土師器	甕	-	-	4.0	第83回 図版18	断面内面に横方向のハケ日。断面外側に縦方向のハケ日。112と同一個体。
118	北東山腹	SHI	2	土師器	甕	-	-	4.0	第83回 図版18	底部破片であるが、土師器甕以外の器種の可能性もある。内外面ナジ。
119	北東山腹	SHI-P1	4	土師器	甕	-	-	-	第83回 図版18	甕の側面破片、内面上半に横方向のハケ日、下端ナジ。外面上に縦方向のハケ日。内面上に部分的に黒色炭化物付着。
120	北東山腹	SHI	1	土師器	甕	-	-	-	第83回 図版18	甕の側面破片、内面上半に横方向のハケ日、下端ナジ。外面上に縦方向のハケ日。内面上に部分的に黒色炭化物付着。

第25表 遺物観察表（5）

番号	地区	グリッド 連携	層位	種別	基種	口径 (長さ)	高さ (厚さ)	直径 (幅)	実測図 写真	観察所見など
121	北東山麓	SBI	2	須恵器	有台坪	10.9	3.0	8.5	図版14 図版15	台形底なみ。底部内面回転ナデ。底部内面回転ナデ。底部内面回転ナデ。中井に比較点の付かぬ。底部内面に使用する平滑化がなされる。
122	北東山麓	SBI	19	須恵器	有台坪	14.5	4.4	13.3	図版14 図版15	台形11.2cm。ほぼ完形成である。底部内面回転ナデ。底部内面回転ナデ。底部内面回転ナデ。外面回転ヘアラウンドナデ。
123	北東山麓	SBI-P1 SBI	4 1	須恵器	坪	約11.0	-	-	図版14 図版15	体内内面回転ナデ。内外面に点々と黑色炭化物が付着。焼成あと浅黄色を呈する。
124	北東山麓	SBI 16WNW	7 Bc	須恵器	甕	-	-	-	図版14 図版20	甕の胸部。内外面に同心円状凹凸具備(大半はナデ焼成している)。外面に平行引き継ぎ。
125	北東山麓	SBI	1-3	須恵器	釜	28.0	-	-	図版14 図版15	口部部内面回転ナデ。腹部内面回転ナデ。脚部の中央付近に内側下端に手縛り。巴部にはチーク状になる形が認められ、上部の部分に指がタイツドする形になっている。把手の本数は不明。能成あと黄褐色を呈する。
126	北東山麓	SBI-K1 SBI	2 1-2	須恵器	甕	-	-	-	図版14 図版20	甕の胸部。内外面に同心円状凹凸具備。外面に平行引き継ぎと今日。
127	北東山麓	SBI-P1	3-4	須恵器	釜	22.7	13.7	10.6	図版14 図版15	口部部内面回転ナデ。脚部内面回転ナデ。下端を除く腹部外周回転ナデ。外井下端回転ヘアラウンド。底部内面回転ナデ。外井ナデ。脚部下端は底部の内外面に黑色炭化物が付着しており、煮えきが使用した可能性あり。能成あと浅黄色を呈する。SBIのカマド焼P1の脚部に付いた状態で出土。
128	北東山麓	SBI	6	圓文土器	深鉢か	-	-	-	図版14 図版17	外面に押縁によるとみられる山形文。内面ナデ。129-133と同一個体の可能性あり。圓文時代早期。
129	北東山麓	SBI	6	圓文土器	深鉢か	-	-	-	図版14 図版17	外面に押縁によるとみられる山形文。内面ナデ。129-133と同一個体の可能性あり。圓文時代早期。
130	北東山麓	SBI	5	圓文土器	不明	-	-	-	図版14 図版17	外面に舟形状の伏線。
131	北東山麓	SBI	2	石器	石礫	(2.1)	(0.4)	(1.1)	図版14 図版21	石材は下呂石。重さ0.8kg。凸基有茎。
132	北東山麓	22SE SBI 14YNE 14YNW	1-3-5-6 仰 面	仰生土器	釜	-	-	6.4	図版14 図版15 図版17	口部部内面回転ナデ。脚部内面下端に付けるようにして点々と斜め状突起と呼ばれる横位突起。脚部内面下端に付ける横位突起。脚部内面外周に断続的に黑色炭化物が付着。紫山1系土器。
133	北東山麓	14YNW	Bf	圓文土器	深鉢か	-	-	-	図版14 図版15 図版17	外面に押縁によるとみられる山形文。内面ナデ。129-133と同一個体の可能性あり。圓文時代早期。
134	北東山麓	14XSE	面上面	圓文土器	深鉢か	-	-	-	図版14 図版15 図版17	脚部の口部面とみられる。外面に押縁。橙色を呈する。圓文時代後期。
135	北東山麓	15XNE	Ee	圓文土器	深鉢か	-	-	-	図版14 図版15 図版17	口部部内面回転ナデ。外井下端回転ヘアラウンド。底部内面回転ナデ。下端を除く腹部外周回転ナデ。脚部下端回転ヘアラウンド。脚部外周に横方向の突起。圓文時代中葉。
136	北東山麓	14YNE	面上面	圓文土器	深鉢	-	-	10.0	図版14 図版15 図版17	底部外周に横方向の突起。
137	北東山麓	14YNW	Bf	圓文土器	不明	-	-	-	図版14 図版15 図版17	外面に刻みを持った隠密と伏線。圓文時代後期。
138	北東山麓	14XSW	Ee	圓文土器	不明	-	-	-	図版14 図版15	外面に斜文文と2条の伏線。
139	北東山麓	16VSW	Ee	仰生土器	甕	-	-	-	図版14 図版15 図版17	外反する左脚部破片。右脚部内面に4条の横方向北縫。うち3条が東縫に付ける。外井に3条以上の北縫と2つの突起。須生時代前期の圓文文土器。
140	北東山麓	15WSW	Ee	土師器	甕	15.2	-	-	図版14 図版15 図版18	内外面摩擦するが、頸部内面に横方向のヘケ目。
141	北東山麓	14YNE	Bf	土師器	甕か	-	-	-	図版14 図版15	口部部破片があるが、他の個体に比べ形状等異質である。口部部内面横ナデ。外延弧度。
142	北東山麓	16VSW	Ee	土師器	甕	-	-	-	図版14 図版15	口部部内面に横方向のヘケ目。外面に縱方向のヘケ目。
143	北東山麓	16WNE	Ee	土師器	甕	-	-	-	図版14 図版15	甕の脚部破片。内面に横方向のヘケ目。外面に縱方向のヘケ目。
144	北東山麓	15XSE	Ee	土師器	甕	-	-	3.4	図版14 図版15	内外面摩擦。
145	北東山麓	12ZSE	Eg	土師器	壺	-	-	-	図版14 図版15	内外面摩擦により側面底は難窺できない。断面に粘土繊維が認められる。
146	北東山麓	16VSW	Ee	土師器	甕	9.4	-	-	図版14 図版21	脚部上半内外面横ナデ。下半内外面ナデ。内面に縱方向の縫文。脚部底で橙色を呈する。147と同一個体の可能性あり。
147	北東山麓	17VSE	Ee	土師器	甕	9.4	-	-	図版14 図版21	脚部上半内外面横ナデ。脚部底で橙色を呈する。146と同一個体の可能性あり。
148	北東山麓	16VSW	Ee	須恵器	壺	9.3	2.5	-	図版14 図版15	内外面回転ナデ。天井部外周にヘア切痕。

第26表 遺物觀察表（6）

番号	地区	グリッド 座標	層位	種別	器種	口径 (長さ)	基高 (厚さ)	底径 (幅)	実測図 写真	觀察所見など
149	北東山麓	MVSW MWNW	I-IIc Ec	須恵器	坪壠	9.0	2.1	-	図版14 図版14	外面部回転ナデ。天井部外面にヘラ切痕。瓶底で青灰色を呈する。
150	北東山麓	MVSW MVSE MWNW	Ec I I	須恵器	坪壠	約10.4	4.0	-	図版15 図版19	外面部に自然輪付着。焼きゆがみ大きい。
151	北東山麓	MXSW MXNE	I-IIc Ec	須恵器	縫み蓋	22.3	3.8	-	図版15 図版15	天井部内面回転ナデ、外面部回転ヘラ削り。底部内外面回転ナデ。
152	北東山麓	MVSW LXSE 15XSW MVNW MVSE LXSE MVNW 17VNE	Ec I Ec I-IIc Ec I Ec I	須恵器	縫み蓋	14.6	2.8	-	図版15 図版15	天井部内面回転ナデ、外面部回転ヘラ削り。底部内外面回転ナデ。外面部は全面に自然輪付着。
153	北東山麓	MXNE MWNW	I-IIc Ec	須恵器	縫み蓋	14.6	3.6	-	図版15 図版15	天井部内面回転ナデ、外面部回転ヘラ削り。底部内外面回転ナデ。焼きゆがみあり。
154	北東山麓	MVNW 16VSE	Ec I-IIc	須恵器	縫み蓋	17.5	3.6	-	図版15 図版15	天井部内面回転ナデ、中央にナデを加える。天井部外面ヘラ削り(手縫によるものではない)。底部内外面回転ナデ。外面部に薄く自然輪付着。
155	北東山麓	15XSE 15XSW	Ec I-IIc	須恵器	縫み蓋	15.7	3.0	-	図版15 図版15	天井部内面回転ナデ、外面部回転ヘラ削り。底部内外面回転ナデ。
156	北東山麓	15WSW 16VSE	Ec Ec	須恵器	縫み蓋	19.0	4.2	-	図版15 図版15	天井部内面回転ナデ、外面部回転ヘラ削り。底部内外面回転ナデ。瓶底にあくまで青色を呈する。
157	北東山麓	MVSW	Ec	須恵器	縫み蓋	14.0	-	-	図版15 図版15	天井部内面回転ナデ、外面部回転ヘラ削り。底部内外面回転ナデ。
158	北東山麓	MVNW 16VSE 16VSE	I-IIc Ec Ec	須恵器	縫み蓋	15.0	-	-	図版15 図版15	天井部内面回転ナデ、中央にナデを加える。天井部外面ヘラ削り、底部内外面回転ナデ。
159	北東山麓	MVSE MXNE 17VNE	I-IIc Ec Ec	須恵器	縫み蓋	16.4	-	-	図版15 図版15	天井部内面回転ナデ、外面部回転ヘラ削り。底部内外面回転ナデ。
160	北東山麓	15XSE 16VSE 16VSE 17VNE	Ec Ec I-IIc Ec	須恵器	縫み蓋	16.4	-	-	図版15 図版15	天井部内面回転ナデ、外面部回転ヘラ削り。底部内外面回転ナデ。焼きゆがみ大きい。
161	北東山麓	MVSW	Ec	須恵器	縫み蓋	16.2	-	-	図版15 図版15	天井部内面回転ナデ、中央にナデを加える。天井部外面回転ヘラ削り、底部内外面回転ナデ。天井部内面平坦化。外面部に自然輪付着。
162	北東山麓	15VSE 16VNE 16VSE	Ec Ec Ec	須恵器	縫み蓋	16.9	-	-	図版15 図版15	天井部内面回転ナデ。天井部外面は自然輪が厚く付着しており、調査不明。底部内外面回転ナデ。
163	北東山麓	16VSE 16VSE	Ec Ec	須恵器	蓋	13.9	-	-	図版15 図版19	外面部回転ナデ。
164	北東山麓	14ZNW	Ec	須恵器	坪身	-	-	-	図版15 図版19	外面部回転ナデ。
165	北東山麓	17VNE	Ec	須恵器	坪身	-	-	-	図版15 図版15	底部内面回転ナデ。体部外面上半回転ナデ、下半回転ヘラ削り。蓋の可能性あり。
166	北東山麓	MVSW 16VSE 17VNE	I-IIc Ec Ec	須恵器	無台坪	8.6	3.3	6.2	図版15 図版15	体部内外面回転ナデ。体部外面上中央に沈縫。底部内面回転ナデ。底部外表面回転ヘラ削り。蓋部外面上へ「X」。
167	北東山麓	15XNE 15XSE	Ec Ec	須恵器	無台坪	12.0	4.2	6.6	図版15 図版15	体部内外面回転ナデ。底部内面回転ナデ。底部外表面回転ナデ。底部外表面に断続的に剥離層、ただしこれは二次的な付着の可能性あり。
168	北東山麓	15XSE	Ec	須恵器	無台坪	14.4	4.2	11.6	図版15 図版15	体部内外面回転ナデ。底部内面回転ナデ後ナデ。底部外表面へ切欠きナデ。
169	北東山麓	MVNW 16VSE 16VSE	I Ec Ec	須恵器	無台坪	12.0	3.7	8.4	図版15 図版15	体部内外面回転ナデ。底部内面回転ナデ後ナデ。オサヌ。底部外表面へ切欠きナデ削り。また、ヘラ削りによる剥離層あり。ロ繩部内面に黑色化粧(墨汁)付着。灯明具としての使用印想定される。
170	北東山麓	15XSE	Ec	須恵器	無台坪	-	-	5.4	図版15 図版19	体部内外面回転ナデ。底部内面回転ナデ後ナデ。底部外表面へ切欠きナデ。
171	北東山麓	15XSE 15XSW 16VNE	Ec Ec Ec	須恵器	有台坪	15.4	4.1	12.2	図版15 図版15	台径10.5cm。体部内外面回転ナデ。底部内面回転ナデ、外面部回転ヘラ削り。高台部はほとんど剥離している。全体に焼きゆがみあり。
172	北東山麓	MWNE MWNW	Ec Ec	須恵器	有台坪	12.0	3.6	10.0	図版15 図版15	台径3.6cm。体部内外面回転ナデ。底部内面全面に自然輪付着のため調整不明。外面部回転ヘラ削り。内・外面部の溝部全面に自然輪付着(厚さは一定でない)。
173	北東山麓	15XSE 15VSE	I-IIc Ec	須恵器	有台坪	16.6	6.7	13.7	図版15 図版15	台径11.6cm。体部内外面回転ナデ。底部内面回転ナデ、外面部回転ヘラ削り。聖鑑で青灰色を呈する。
174	北東山麓	MVSW	Ec	須恵器	有台坪	約11.0	2.8	約9.2	図版15 図版19	台径約7.0cm。体部内外面回転ナデ。
175	北東山麓	15XSE	Ec	須恵器	有台坪	14.0	3.5	11.8	図版15 図版19	台径10.0cm。体部内外面回転ナデ。
176	北東山麓	14YSW	Ec	須恵器	有台坪	-	-	-	図版15 図版19	台径9.0cm。底部内面回転ナデ、外面部回転ヘラ削り。体部欠損のため、有台盤の可能性もあり。

第27表 遺物観察表（7）

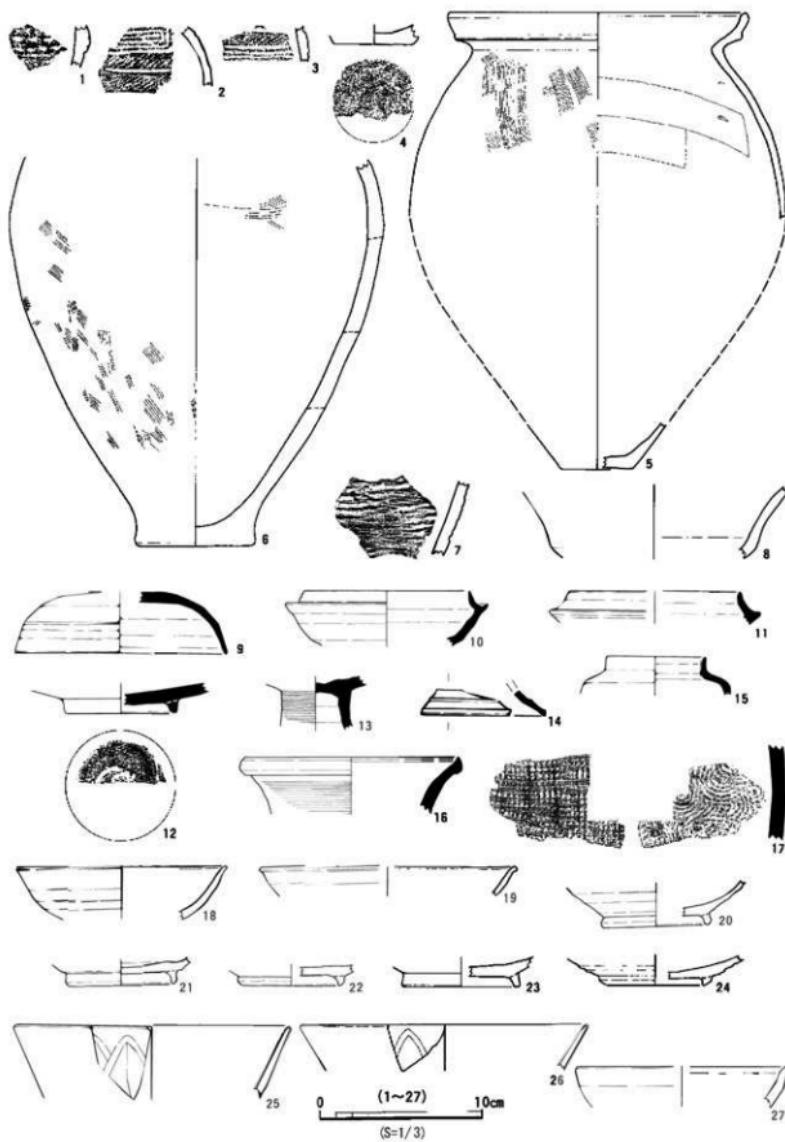
番号	地区	グリッド 連携	層位	種別	基種	口径 (長さ)	器高 (厚さ)	直径 (幅)	実測図 写真	観察所見など
177	北東山麓	M6WSW M6NNW	Ic Ec	須恵器	有台坪	-	-	11.4	第86回 図版16	台形10.0cm。底部内外面回転ナダ。底部内面回転ナダ、外面部へ へラ削り後へ削り。
178	北東山麓	M6WNE M6WNW	Ic I	須恵器	有台坪	-	-	11.0	第86回 図版16	台形9.6cm。底部内外面回転ナダ。底部内面回転ナダ、外面部へ リ削り。底成あくにらむ黄褐色を呈する。
179	北東山麓	I5NSH	Ic	須恵器	环	約12.4	-	-	第86回 図版19	底部内外面回転ナダ。
180	北東山麓	M6VSE	Ic	須恵器	無台輪	14.9	4.1	9.3	第86回 図版19	底部内外面回転ナダ。底部内面回転ナダ後ナダ。底部外表面へラ切 り後後。
181	北東山麓	M6VNW	I・Ic	須恵器	無台輪	12.6	3.6	5.5	第86回 図版16	底部内外面回転ナダ。底部外表面へラ切り。口縁部外表面に部分的に 自然釉付。
182	北東山麓	11-ENW 127NE 127SE 12-ENW	Eg	須恵器	有台輪	-	-	8.4	第86回 図版16	台形7.4cm。底部内外面回転ナダ。底部内面回転ナダ後ナダ。底面 外表面ナダ。
183	北東山麓	I5NSW	Ic	須恵器	有台輪	20.2	3.0	-	第86回 図版16	台形13.0cm。底部内外面回転ナダ。底部内外面ナダ。
184	北東山麓	M6VNW	Ic	須恵器	有台輪	-	-	-	第86回 図版16	台形9.2cm。底部内外面回転ナダ。
185	北東山麓	I5NSW	Ic	須恵器	脚付盤	-	-	-	第86回 図版19	底成あく灰白色を呈する。
186	北東山麓	M6VNW M6WNW	Ic Ec	須恵器	脚付盤	-	-	-	第86回 図版16	台形12.2cm。底部内外面回転ナダ。底成ややあく灰黄色を呈す る。188と同一個体の可能性あり。
187	北東山麓	I5XNE I5XNW I5XSW M6VNW M6VSE M6WNW ITVNE SK27 I	Ic	須恵器	脚付盤	19.2	5.4	-	第86回 図版16	台形12.0cm。腹部の体部内外面回転ナダ。腹部の底部内外面回転ナ ダ、中央部にナダを加える。底部外表面へラ削り。脚部の底部内外面 回転ナダ。底成は焼きぬみが大きい。にらむ黄褐色を呈する。
188	北東山麓	I5YNW M6VSW M6WNW	Ic Ec Ec	須恵器	脚付盤	-	-	-	第86回 図版16	推定口径2.2cm。底部内外面回転ナダ。底部内面回転ナダ、中央 部にナダを加える。底部外表面へラ削り。186と同一個体の可能性 あり。
189	北東山麓	I2ZSW	Ig	須恵器	環	-	-	-	第86回 図版20	環の内側、内面に当具痕と想われるくぼみをわずかに残る(大半は ナラ削りされている)。外面上に平行き裂。
190	北東山麓	I6VSW M6WNE M6WNW	Ic Ec Ec	須恵器	林	19.5	16.6	9.2	第86回 図版17	口縁部内外面回転ナダ。脚部の底部内外面回転ナダ。脚部外表面半回転ナ ダ、下部外表面へラ削り。底部内外面回転ナダ、各底ナダ。脚部外表面の 最大径を残す部分に把手がある。把手は平手打で、把手を水平方向に 取り付けた後、中央に約3mmの棒状工具を上方から貫通させ、円孔を 形成している。既存する把手を持つよりも、さらに内側に把手が1.5倍認めら れる。本件は4色であったと推定できる。地成あくにらむ黄褐色を呈す る。
191	北東山麓	I4YNW I4VSW I4VSE 299NSW	Ic Ic Ic Ia	須恵器	林	23.2	13.7	13.2	第86回 図版17	口縁部内外面回転ナダ。脚部外表面半回転ナダ、下部外表面へラ削 り。底部内外面回転ナダと見られるが形状が複雑で、地成あくに 内面は浅黄色。外面上は灰黄色を呈する。焼きぬみが大きいから ら、本件は口縫と底縫はより小さかった可能性がある。192と同一 個体の可能性あり。
192	北東山麓	M6VNW	Ic	須恵器	林	-	-	-	第86回 図版19	脚部下の壁、内面回転へラ削り。焼成あく灰黄色を呈する。 191と同一個体の可能性あり。
193	北東山麓	I5YNW I5VSW I5VSE M6WNE M6WNW M6VSE M6NSW M6NNW	Ic Ic Ic Ic Ic Ic Ic	須恵器	鉢	22.3	12.2	-	第87回 図版16	最大径24.8cm。底部内外面回転ナダ。体部外面上半回転ナダ、下半 回転へラ削り。底部外表面回転ナダ。外面上に部分的に焼成跡が見ら れる。その内縁の位置関係から本件は脚3.3cmの可能性が高いと 推定する。全面丁寧な作り、金具部も鉢身と併せて仕上げた。
194	北東山麓	I5XNE I5XNW I5XSW M6VSE	Ic Ec Ec I	須恵器	火舟	9.8	6.0	6.5	第87回 図版16	体部内外面回転ナダ。底部内外面回転ナダ。脚部は手づく成形、 火舟の内側のみ焼成する。脚部側面が1/2程度の崩壊片が土し てある。その内縁の位置関係から本件は脚3.3cmの可能性が高いと 推定する。
195	北東山麓	I5XNW	Ic	須恵器	托	10.3	3.0	-	第87回 図版16	台形7.6cm。底部内外面回転ナダ。底部内面回転ナダ、外面部へ リ削り。火舟を呈し、特に船底焼成でも堅めでもない。全体に作り が丁寧である。仏具。
196	北東山麓	ITWNE	Ic	灰釉陶器	碗	約16.0	-	-	第87回 図版20	体部内外面回転ナダ。体部外面上半回転ナダ、下半回転へラ削り。内 面全体に堅膜。
197	北東山麓	I6VNE I6VSW I5XNE I5NNW	Ic Ec I・Ec I・Ec	灰釉陶器	碗	12.6	-	-	第87回 図版20	体部内外面回転ナダ。外面上端に部分的に灰釉が認められるが、底 部の施釉は自然釉へリ剥離。
198	北東山麓	I5XNE	Ic	灰釉陶器	碗	12.4	3.6	6.3	第87回 図版17	台形6.8cm。底部内外面回転ナダ。底部内面回転ナダ、外面部へ リ削り。底部外表面に部分的に灰釉、全体に砂がまわり。
199	北東山麓	I6XNE	I・Ic	灰釉陶器	豆	13.0	2.8	6.5	第87回 図版17	台形6.4cm。底部内外面回転ナダ。内面全体と体部外面上半に灰 釉。口縁部の土模様。
200	北東山麓	I6XNE	I・Ic	灰釉陶器	豆	約11.0	-	-	第87回 図版20	体部内外面回転ナダ。内面全体と外面上半に灰釉。口縁部は一 度剥離。

第28表 遺物観察表（8）

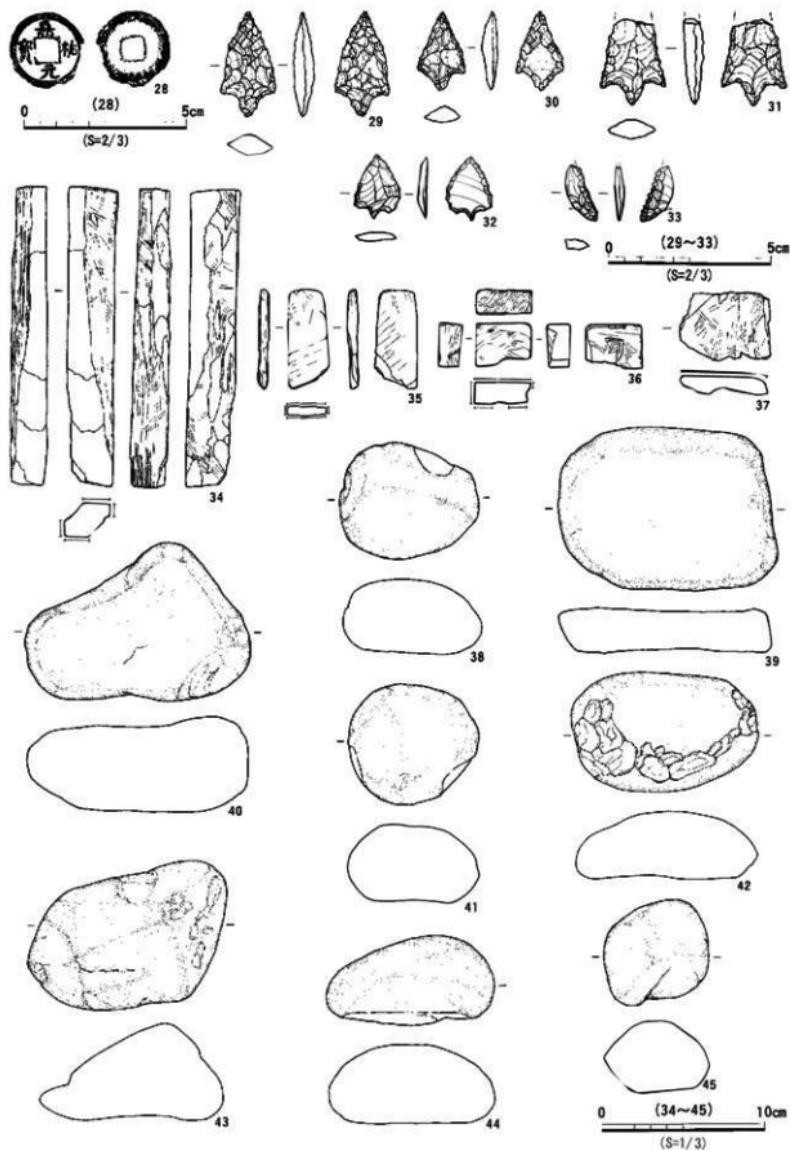
番号	地区	グリッド 遺構	層位	種別	器種	口径 (直径) (cm)	基高 (厚さ) (cm)	直径 (cm)	実測 写真	観察所見など	
										基部内面	外側内面
201	北東山麓	15KSE	Ⅱc	土師質土器	碗	約12.0	-	-	図版27 図版21	内外面堅硬。内部内面に部分的に黑色炭化物付着。	
202	北東山麓	15KSE	Ⅱc	土師質土器	碗か		-	-	図版27 図版21	残存部分の内面外面上の大部分に黒色炭化物付着。打目痕か。	
203	北東山麓	17XNE	Ⅱc	輸入磁器	青磁碗	36.0	-	-	図版27 図版21	鹿児島系青磁の鍋窯井文碗。時期は13世紀中～14世紀中頃。内外全体に縁の跡。	
204	北東山麓	18XSW	Ⅱc	輸入磁器	青磁碗	-	-	-	図版27 図版21	鹿児島系青磁の鍋窯井文碗。時期は13世紀中～14世紀中頃。内外全体に縁の跡。	
205	北東山麓	18YSE	I	近世陶磁器	染付梅呂番	-	-	-	図版27 図版21	染付梅呂番の梅形酒呑。内外面に折り曲げと良剥離。	
206	北東山麓	14YNNE	Ⅲ上上面	金属製品	漆紋鉗	(8.0)	(0.6)	(残存5.5)	図版27 図版17	右端の一部を欠くものの、ほぼ完成品である。ただし、基の下端が欠いている可能性がある。鉗は一括に分かれ、いずれも先端を尖らせる。頭部の頭面は正方形である。鉗頭では構丸三方形となる。	
207	北東山麓	14YNNE	Ⅲ上上面	金属製品	鉗釘	(0.0)	(0.5)	(残存1.0)	図版27 図版25	頭部は、打ち伸ばした後に折り曲げて成形されている。下端が極やかに屈曲する。	
208	北東山麓	14YNW	Ⅲc	金属製品	鉗釘	(残存9.0)	(0.6)	(1.0)	図版27 図版25	下端を欠く。頭部は、打ち伸ばした後に折り曲げて成形されている。	
209	北東山麓	14YNW	Ⅲc	金属製品	鉗釘	(0.0)	(0.5)	(0.9)	図版27 図版25	頭部は、打ち伸ばした後に折り曲げて成形されている。	
210	北東山麓	14YN	Ⅲ上上面	金属製品	鉗釘	(0.0)	(0.5)	(1.0)	図版27 図版25	頭部は、打ち伸ばした後に折り曲げて成形されている。全体に緩やかに屈曲する。	
211	北東山麓	14YN	Ⅲ上上面	金属製品	鉗釘	(0.0)	(0.6)	(1.1)	図版27 図版25	頭部は、打ち伸ばした後に折り曲げて成形されている。下手は大きくねじながら屈曲する。	
212	北東山麓	14YN	Ⅲc	金属製品	鉗釘	(0.0)	(0.6)	(1.4)	図版27 図版25	頭部は、打ち伸ばした後に折り曲げて成形されている。下端が緩やかに屈曲する。	
213	北東山麓	14YN	Ⅲ上上面	金属製品	鉗釘	(0.0)	(0.5)	(残存0.0)	図版27 図版25	頭部は、組曲頭は基底込みの大きさだが、先端は扁平化している。	
214	北東山麓	14YN	Ⅲ上上面	金属製品	鉗釘	(残存7.0)	(0.4)	(1.1)	図版27 図版25	下端を欠く。頭部は、打ち伸ばした後に折り曲げて成形されている。下半は緩やかに屈曲する。	
215	北東山麓	14YN	Ⅲ上上面	金属製品	鉗釘	(0.0)	(0.7)	(1.4)	図版27 図版25	頭部は、打ち伸ばした後に折り曲げて成形されている。下半は大きく屈曲する。	
216	北東山麓	14YN	Ⅲ上上面	金属製品	鉗釘	(0.0)	(0.5)	(0.9)	図版27 図版25	頭部は、打ち伸ばした後に折り曲げて成形されている。	
217	北東山麓	14YN	Ⅲ上上面	金属製品	鉗釘	(0.0)	(0.4)	(0.9)	図版27 図版25	頭部は、打ち伸ばした後に折り曲げて成形されている。	
218	北東山麓	14YN	Ⅲ上上面	金属製品	鉗釘	(残存4.0)	(0.5)	(0.9)	図版27 図版25	下端を欠く。頭部は、打ち伸ばした後に折り曲げて成形されている。中央では底角に屈曲する。	
219	北東山麓	14YN	Ⅲc	金属製品	鉗釘	(残存3.0)	(0.4)	(1.0)	図版27 図版25	下端を欠く。頭部は、不規則であるが、方頭釘の可能性がある。中央よりやや下で底角に屈曲する。	
220	北東山麓	14YN	Ⅲ上上面	金属製品	鉗釘	(残存5.0)	(0.4)	(0.8)	図版27 図版25	下端を欠く。頭部は、打ち伸ばした後に折り曲げて成形されている。中央よりやや左で底角に屈曲する。	
221	北東山麓	14YN	Ⅲ上上面	金属製品	鉗釘	(0.0)	(0.5)	(1.0)	図版27 図版25	頭部は、打ち伸ばした後に折り曲げて成形されている。	
222	北東山麓	14YN	Ⅲ上上面	金属製品	鉗釘	(5.0)	(0.4)	(0.6)	図版27 図版25	頭部は、打ち伸ばした後に折り曲げて成形されている。全体に緩やかに屈曲する。	
223	北東山麓	14YN	Ⅲ上上面	金属製品	鉗釘	(5.0)	(0.5)	(0.8)	図版27 図版25	頭部は、打ち伸ばした後に折り曲げて成形されている。	
224	北東山麓	14YN	Ⅲc	金属製品	鉗釘	(残存5.0)	(0.3)	(残存0.6)	図版27 図版25	頭部と下端を欠く。	
225	北東山麓	14YN	Ⅲ上上面	金属製品	鉗釘	(残存5.0)	(0.0)	(0.7)	図版27 図版25	下端を欠く。頭部は、打ち伸ばした後に折り曲げて成形されている。	
226	北東山麓	14YN	Ⅲ上上面	金属製品	鉗釘	(0.0)	(0.4)	(0.8)	図版27 図版25	頭部は、打ち伸ばした後に折り曲げて成形されている。下半は緩やかに屈曲する。	
227	北東山麓	14YN	Ⅲc	金属製品	鉗釘	(残存5.0)	(0.3)	(残存0.6)	図版27 図版25	頭部を欠く。下端が屈曲する。	
228	北東山麓	14YNW	Ⅲ上上面	金属製品	鉗釘	(残存5.1)	(0.4)	(0.8)	図版27 図版25	下端を欠く。頭部は、打ち伸ばした後に折り曲げて成形されている。全体に緩やかに屈曲する。	
229	北東山麓	14YN	Ⅲ上上面	金属製品	鉗釘	(残存5.0)	(0.3)	(0.7)	図版27 図版25	下端を欠く。頭部は、打ち伸ばした後に折り曲げて成形されている。下半は緩やかに屈曲する。	
230	北東山麓	14YN	Ⅲ上上面	金属製品	鉗釘	(残存4.0)	(0.5)	(残存1.1)	図版27 図版25	頭部の一部と下端を欠く。頭部は、打ち伸ばした後に折り曲げて成形されている。	

第29表 遺物観察表（9）

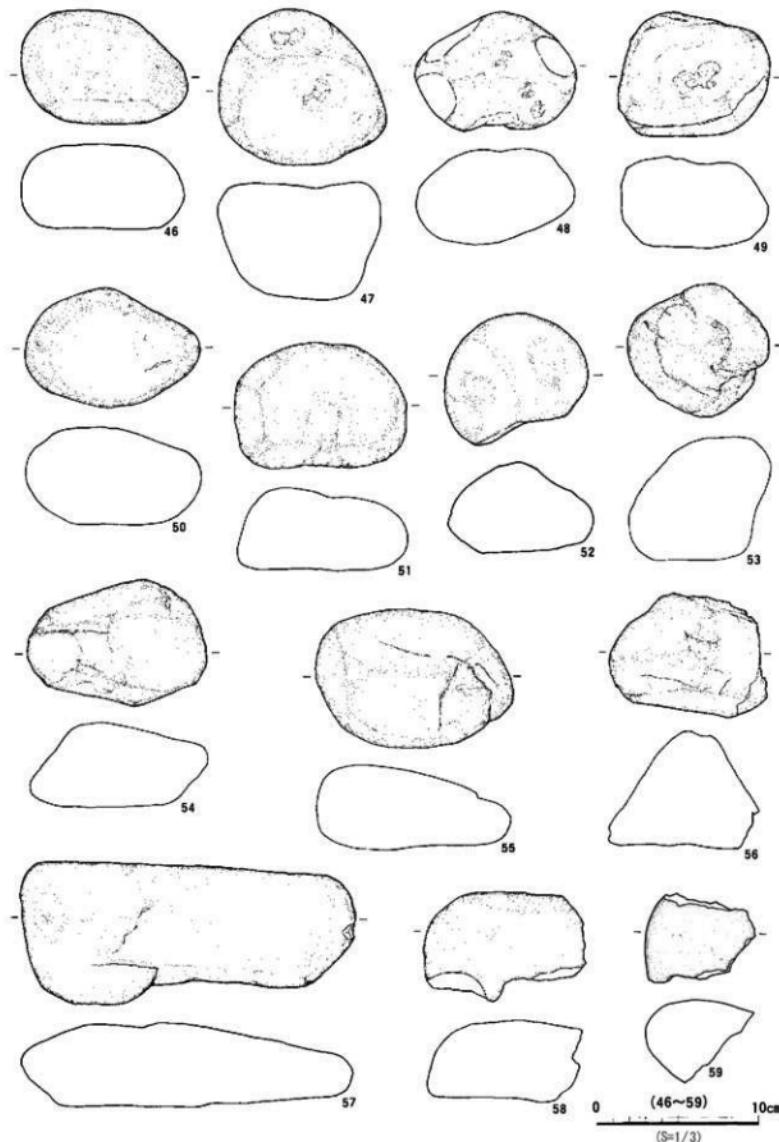
番号	地区	グリッド 遺構	層位	種別	基種	口径 (長さ)	器高 (厚さ)	底径 (幅)	実測図 写真	備考所見など
231	北東山麓	14YNNE	Ⅲ/上面	金属製品	鉄針	(3.0)	(0.5)	(0.9)	第88回 図版25	頭部は、打ち伸ばした後に折り曲げて成形されている。中央よりやや下で底をく。
232	北東山麓	14YNNE	Ⅲ/上面	金属製品	鉄針	(3.9)	(0.3)	(0.9)	第88回 図版25	頭部22、打ち伸ばした後に折り曲げて成形されている。
233	北東山麓	14YNNE	Ⅲ/上面	金属製品	鉄針	(残存4.5)	(0.4)	(残存0.4)	第88回 図版25	頭部と下端をく。
234	北東山麓	14YNNE	Ⅲ/上面	金属製品	鉄針	(4.5)	(0.3)	(0.7)	第88回 図版25	頭部22、打ち伸ばした後に折り曲げて成形されている。下端が頭部裏面に扭曲する。
235	北東山麓	14YNNE	Ⅲ/上面	金属製品	鉄針	(4.5)	(0.3)	(0.7)	第88回 図版25	平面は欠けている可能性がある。頭部は、打ち伸ばした後に折り曲げて成形されている。
236	北東山麓	14YNNE	Ⅲ/上面	金属製品	鉄針	(残存4.5)	(0.3)	(0.8)	第88回 図版25	下端をく。頭部は、打ち伸ばした後に折り曲げて成形されている。
237	北東山麓	14YNNE	Ⅲ/上面	金属製品	鉄針	(残存4.2)	(0.2)	(0.8)	第88回 図版25	下端をく。頭部は、打ち伸ばした後に折り曲げて成形されている。全体に二字字に扭曲する。
238	北東山麓	14YNNE	Ⅲ/上面	金属製品	鉄針	(残存4.0)	(0.3)	(0.7)	第88回 図版25	下端をく。頭部は、打ち伸ばした後に折り曲げて成形されている。全体に二字字に扭曲する。
239	北東山麓	14YNNE	Ⅲ/上面	金属製品	鉄針	(残存4.1)	(0.4)	(0.8)	第88回 図版25	下端をく。頭部は、打ち伸ばした後に折り曲げて成形されている。下半は大きく扭曲する。
240	北東山麓	14YNNE	Ⅲ/上面	金属製品	鉄針	(残存3.4)	(0.3)	(0.8)	第88回 図版25	下端をく。頭部は、打ち伸ばした後に折り曲げて成形されている。頭部すぐ下で扭曲する。
241	北東山麓	14YNNE	Ⅲ/上面	金属製品	鉄針	(4.7)	(0.4)	(0.7)	第88回 図版25	下端をく。頭部は、打ち伸ばした後に折り曲げて成形されている。全体に二字字に扭曲する。
242	北東山麓	14YNNE	Ⅲ/上面	金属製品	鉄針	(残存3.5)	(0.5)	(残存1.0)	第88回 図版25	下半をく。頭部は、打ち伸ばした後に折り曲げて成形されている。
243	北東山麓	14YNNE	Ⅲ/上面	金属製品	鉄針	(残存3.4)	(0.4)	(0.8)	第88回 図版25	下半をく。頭部は、打ち伸ばした後に折り曲げて成形されている。
244	北東山麓	14YNNE	Ⅲc	金属製品	鉄針	(残存3.4)	(0.3)	(残存0.4)	第88回 図版25	頭部をく。下端は大きく扭曲する。
245	北東山麓	14YNNE	Ⅲ/上面	金属製品	鉄針	(残存2.9)	(0.3)	(0.8)	第88回 図版25	下端をく。頭部は、打ち伸ばした後に折り曲げて成形されている。全体に二字字に扭曲する。
246	北東山麓	14YNNE	Ⅲ/上面	金属製品	鉄針	(残存2.7)	(残存0.3)	(残存0.4)	第88回 図版25	下半をく。頭部は、打ち伸ばした後に折り曲げて成形されている。
247	北東山麓	14YNNE	Ⅲ/上面	金属製品	鉄針か	(残存1.4)	(残存0.4)	(残存0.7)	第88回 図版25	残存状態悪い小被片で、側断面形はまきりしない。鉄製。
248	北東山麓	14YNNE	Ⅲ/上面	金属製品	鉄針	(残存1.7)	(残存0.2)	(残存0.2)	第88回 図版25	針の下端付近の破片とみられる。
249	北東山麓	14YNNE	Ⅲ/上面	金属製品	鉄針	(残存1.0)	(残存0.3)	(残存0.3)	第88回 図版25	針の中央付近の破片とみられる。
250	北東山麓	14YNNE	Ⅲ	石器	石礫	(2.3)	(0.7)	(1.8)	第88回 図版21	石材はチャート。重さ2.2g。田基無系繩。
251	北東山麓	15XSE	Ⅲc	石器	石礫	(1.9)	(0.3)	(1.7)	第88回 図版21	石材は墨研石。重さ0.8g。田基無系繩。
252	北東山麓	14XSW	Ⅲf	石器	石礫	(2.1)	(0.4)	(1.2)	第88回 図版21	石材は下呂石。重さ0.9g。田基無系繩。
253	北東山麓	15XNE	Ⅲc	石器	石礫	(2.1)	(0.4)	(1.4)	第88回 図版21	石材は墨研石。重さ0.9g。田基無系繩。
254	北東山麓	14XSE	I	石器	石礫	(残存1.4)	(0.3)	(1.3)	第88回 図版21	先端をく。石材は下呂石。重さ0.4g。田基無系繩。
255	北東山麓	139NE	I	石器	石礫	(残存1.9)	(0.3)	(1.3)	第88回 図版21	先端と舞部右端をく。石材は下呂石。重さ0.5g。田基有系繩。
256	北東山麓	15XSW	Ⅲc	石器	石礫	(7.3)	0.5	(5.0)	第88回 図版22	画面は1面。石材は墨研石。重さ73.3g。
257	北東山麓	17WNNE	I	石器	石礫	(6.2)	(1.0)	(3.4)	第88回 図版22	画面は2面。石材は墨研石。重さ261.8g。
258	北尾根	26QSE	盛土	不明土器	不明	-	-	-	図版18	摩滅著しい。
259	東尾根	14QSE	I・II	金属製品	古鏡	-	-	-	図版25	銅鏡。重さ1.2g。
260	東尾根	14QSE	I・II	金属製品	古鏡	-	-	-	図版25	銅鏡。重さ1.1g。



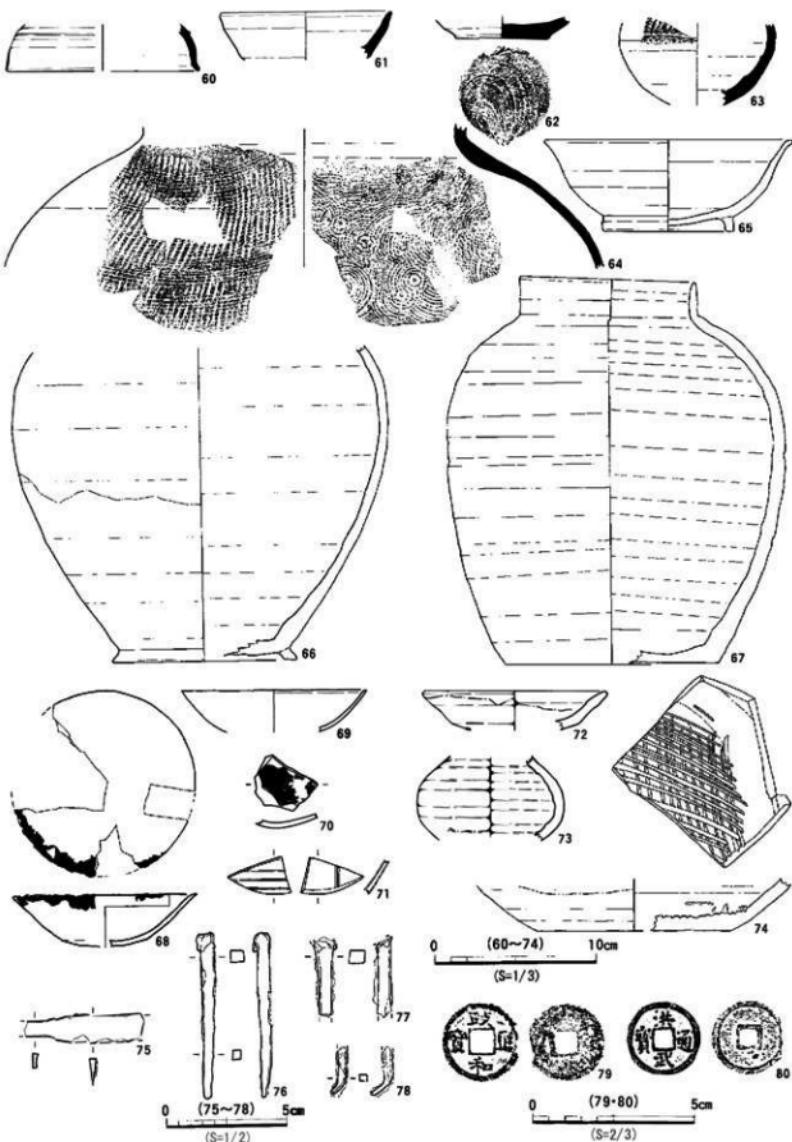
第77図 東尾根地区出土遺物(1)



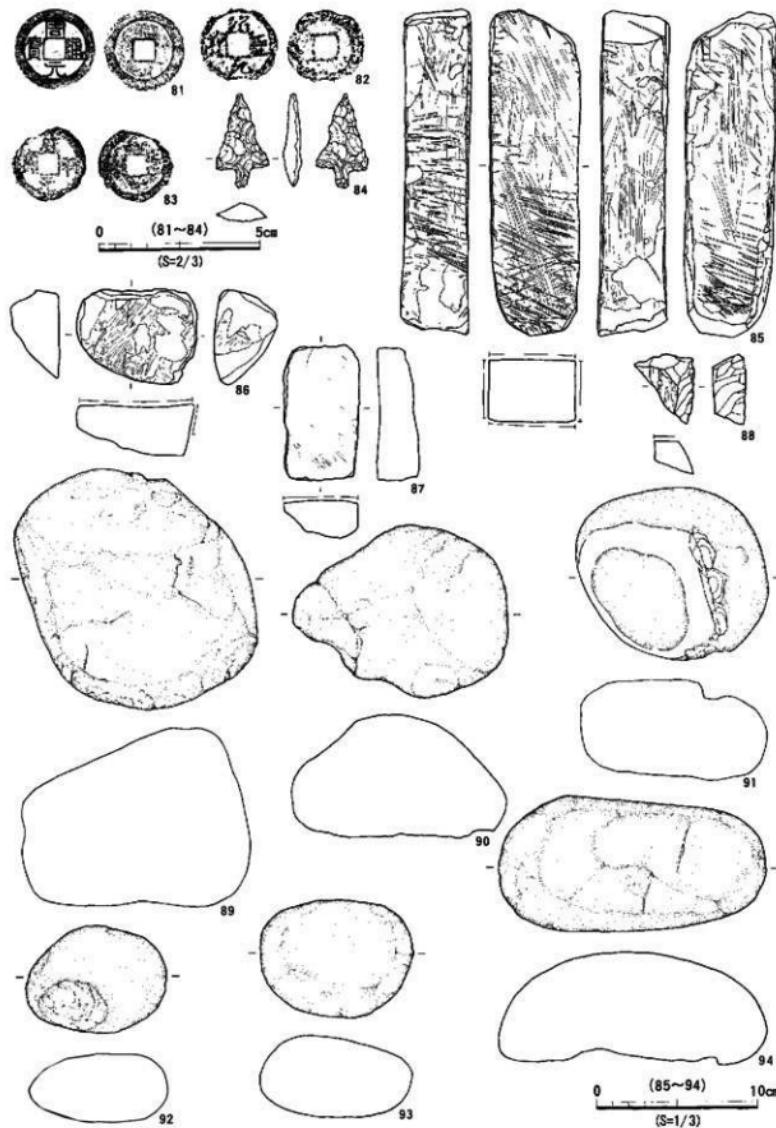
第78図 東尾根地区出土遺物(2)



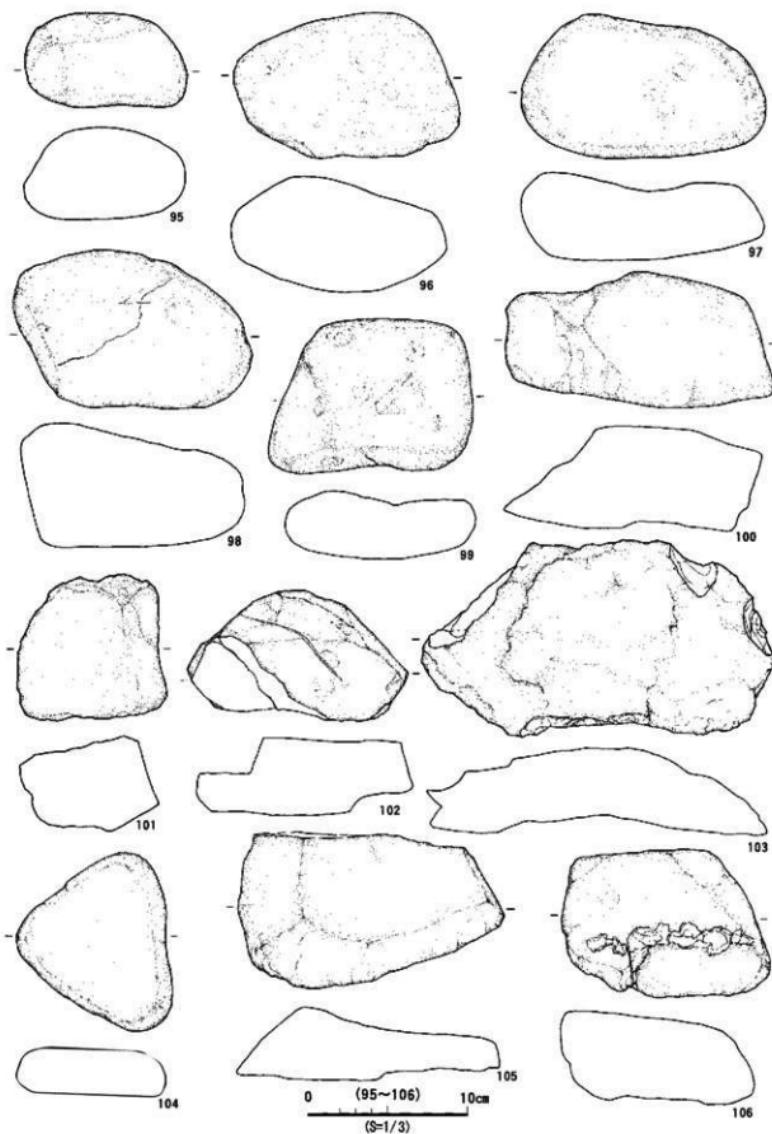
第79図 東尾根地区出土遺物(3)



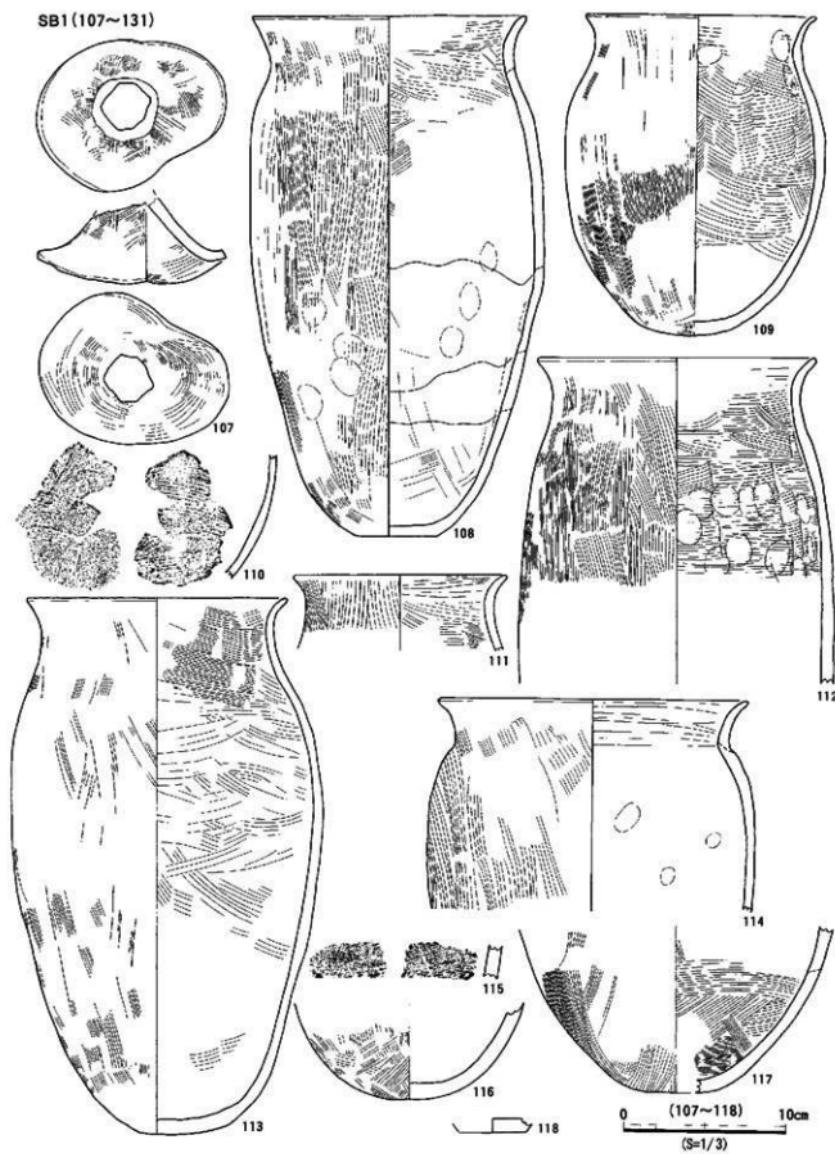
第80図 北東尾根地区出土遺物(1)



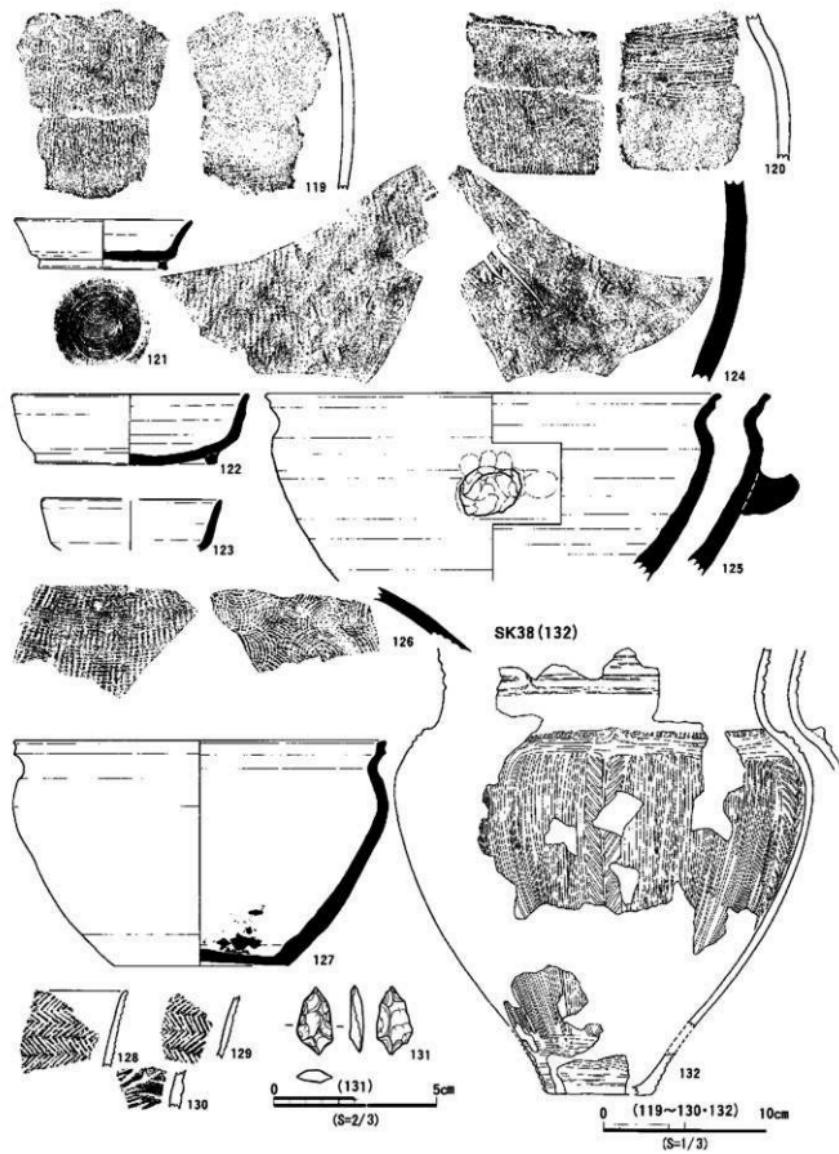
第81図 北東尾根地区出土遺物(2)



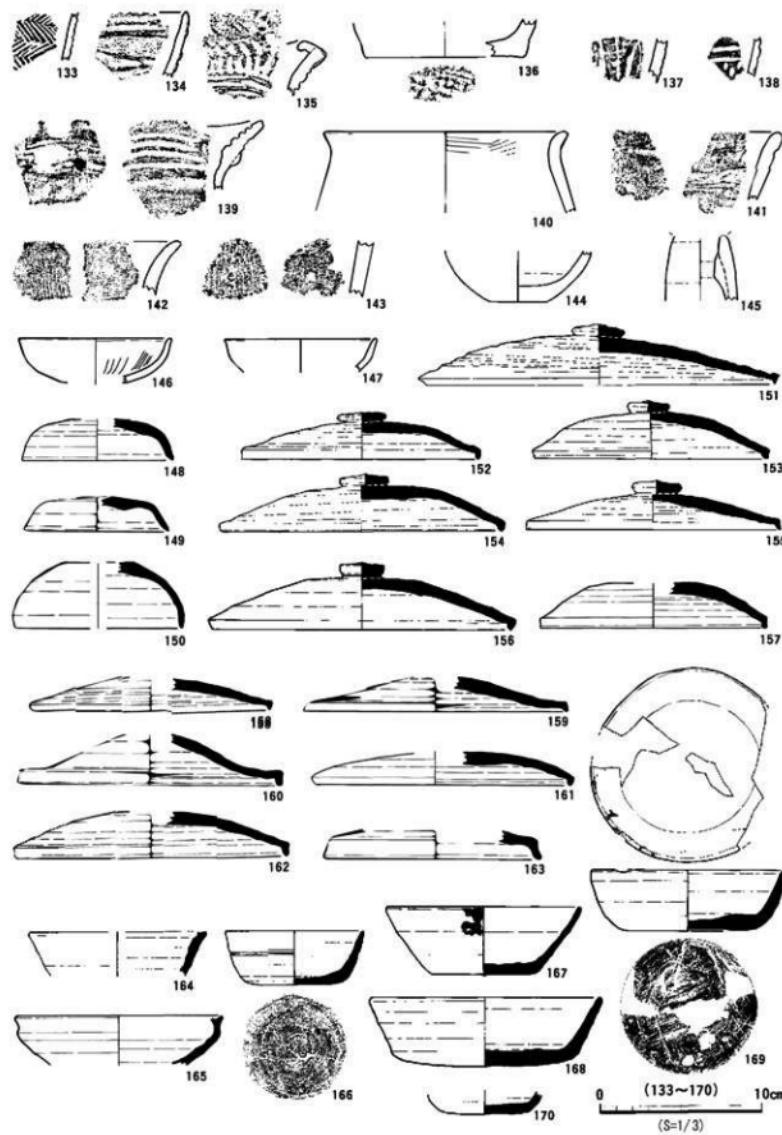
第82図 北東尾根地区出土遺物(3)



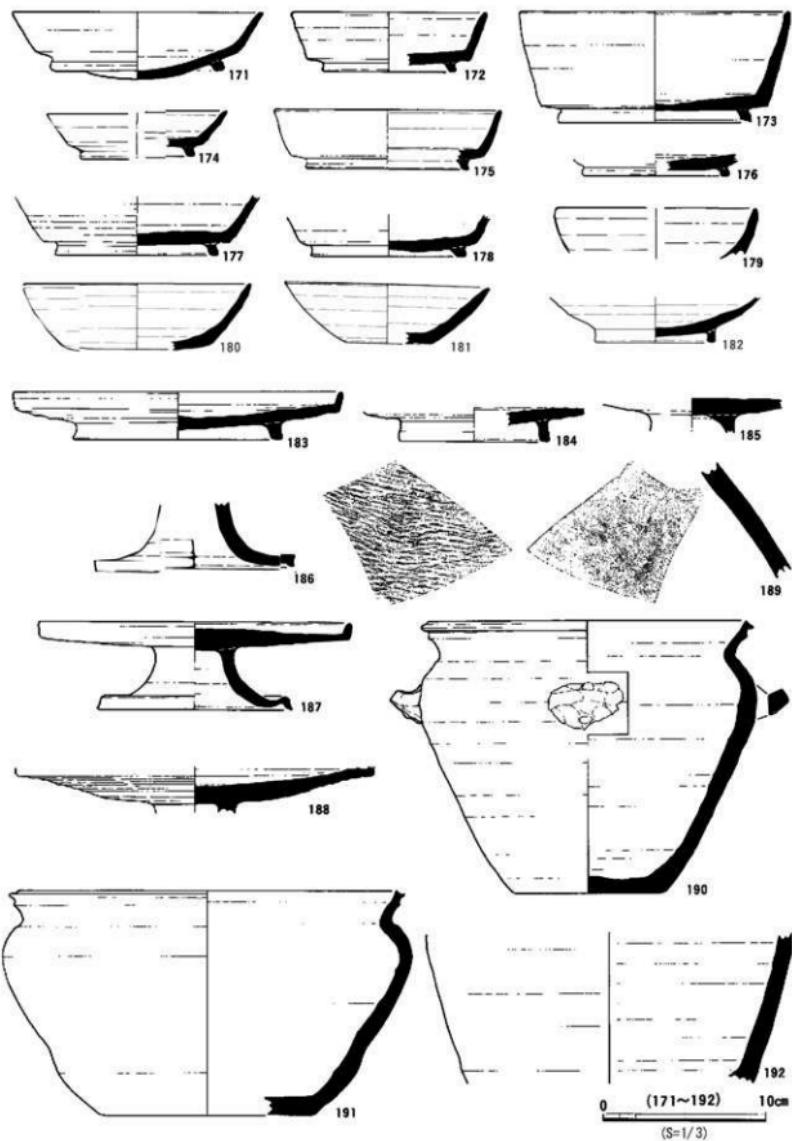
第83図 北東山麓地区遺構内出土遺物(1)



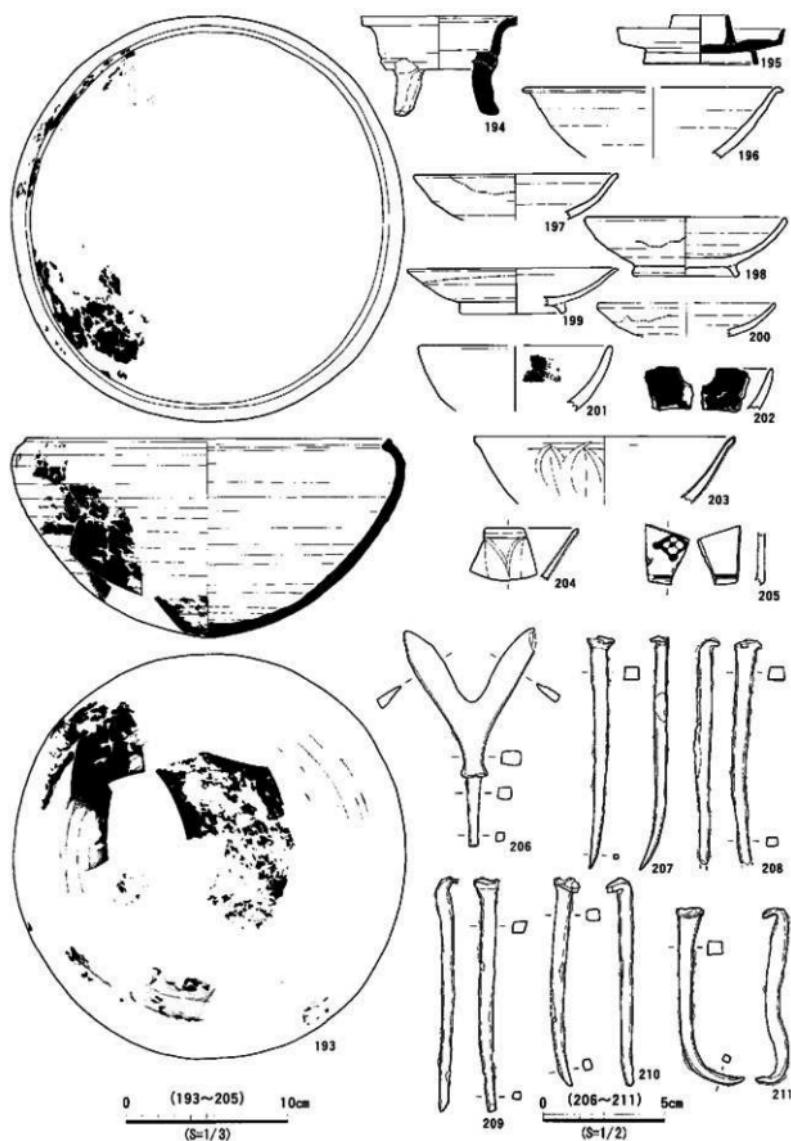
第84図 北東山麓地区遺構内出土遺物(2)



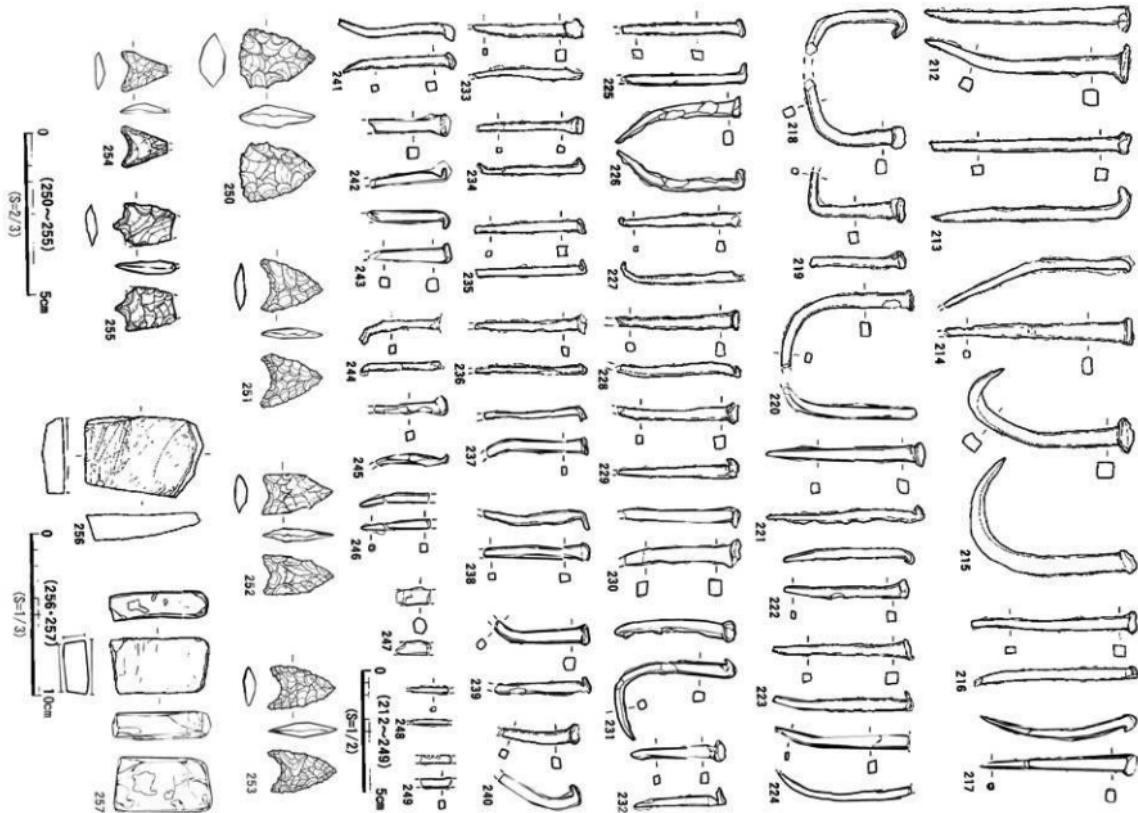
第85図 北東山麓地区包含層出土遺物(1)



第86図 北東山麓地区包含層出土遺物(2)



第87図 北東山麓地区包含層出土遺物(3)



第89圖 北東山麓地區包含層出土遺物(4)

第4章 自然科学分析

第1節 北東尾根地区出土炭化物の放射性炭素年代測定

1 はじめに

三枝城跡の北東山麓地区では、使用年代の判明する遺物がほとんど出土しなかった。そのため、炭化物が出土した遺構の内、焼土堆積遺構 S F 13（北東曲輪平場 c で検出）、S F 4・S F 5・S F 7（いずれも主郭下平場で検出）を選び、加速器質量分析法（AMS法）による放射性炭素年代測定を行い、山城の年代検討のための手掛かりを求ることとなった。分析は、伊藤茂・丹生越子・廣田正史・瀬谷薰・小林紘一・Zaur Lomtadze・Ineza Jorjoliani・中村賢太郎（株式会社パレオ・ラボAMS年代測定グループ）が担当した。

2 試料と方法

測定試料の情報、調製データは第30表のとおりである。

試料採取地点は北東尾根地区的北東曲輪平場 c の焼土堆積遺構 1か所と主郭下平場の焼土堆積遺構 3か所である。北東曲輪の S F 13は小規模な石圍炉状の遺構で、遺構内から採取された炭化したマツ属穂果（PLD-12045）を試料とした。主郭下平場の S F 4は浅い掘り込みを有する遺構で、遺構中から採取された枝状の炭化材 1点（PLD-12046）、部位不明の炭化材 2点（PLD-12047・12048）の計 3点を試料とした。同じく主郭下平場の S F 5は浅い掘り込みを有する遺構で、炭化したサクラ属核 1点（PLD-12049）、部位不明の炭化材 1点（PLD-12050）、最外年輪を有する炭化材 1点（PLD-12051）の計 3点を試料とした。同じく主郭下平場の S F 7は浅い掘り込みを有する遺構で、枝状の炭化材 3点（PLD-12052～12054）を試料とした。

試料は調製後、加速器質量分析計（パレオ・ラボ、コンパクトAMS：NEC製 1.5SDH）を用いて測定した。得られた¹⁴C濃度について同位体分別効果の補正を行った後、¹⁴C年代、暦年代を算出した。

3 結果

第31表に、同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比（ $\delta^{13}\text{C}$ ）、同位体分別効果の補正を行って暦年較正に用いた年代値、慣用に従って年代値、誤差を丸めて表示した¹⁴C年代、¹⁴C年代を暦年代に較正した年代範囲を、第89図～第91図に暦年較正結果をそれぞれ示す。暦年較正に用いた年代値は年代値、誤差を丸めていない値であり、今後暦年較正曲線が更新された際にこの年代値を用いて暦年較正を行うために記載した。

¹⁴C年代はAD1950年を基点にして何年前かを示した年代である。¹⁴C年代（yrBP）の算出には、¹⁴Cの半減期としてLibbyの半減期5568年を使用した。また、付記した¹⁴C年代誤差（ $\pm 1\sigma$ ）は、測定の統計誤差、標準偏差等に基づいて算出され、試料の¹⁴C年代がその¹⁴C年代誤差内に入る確率が68.2%であることを示すものである。

なお、暦年較正とは、大気中の¹⁴C濃度が一定で半減期が5568年として算出された¹⁴C年代に対し、過

第30表 北東尾根地区測定試料及び処理

測定番号	遺跡データ	試料データ	前処理
PLD-12045	地区：北東尾根地区 施設：北東曲輪平場 c 遺構：SF13 遺構種別：焼土堆積	試料の種類：炭化穀実(マツ属核1点) 状態：dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸:1.2N, 水酸化ナトリウム:1N, 塩酸:1.2N) サルフィックス
PLD-12046	地区：北東尾根地区 施設：主郭下平場 遺構：SF 4 遺構種別：焼土堆積 層位：9層 遺物No. : 4102-1	試料の種類：炭化材(枝) 試料の性状：最外年輪 状態：dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸:1.2N, 水酸化ナトリウム:1N, 塩酸:1.2N) サルフィックス
PLD-12047	地区：北東尾根地区 施設：主郭下平場 遺構：SF 4 遺構種別：焼土堆積 層位：9層 遺物No. : 4102-2	試料の種類：炭化材 試料の性状：部位不明 状態：dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸:1.2N, 水酸化ナトリウム:1N, 塩酸:1.2N) サルフィックス
PLD-12048	地区：北東尾根地区 施設：主郭下平場 遺構：SF 4 遺構種別：焼土堆積 層位：9層 遺物No. : 4102-3	試料の種類：炭化材 試料の性状：部位不明 状態：dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸:1.2N, 水酸化ナトリウム:1N, 塩酸:1.2N) サルフィックス
PLD-12049	地区：北東尾根地区 施設：主郭下平場 遺構：SF5 遺構種別：焼土堆積 層位：5層 遺物No. : 4071-1	試料の種類：炭化穀実(サクランボ核1点) 状態：dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸:1.2N, 水酸化ナトリウム:1N, 塩酸:1.2N) サルフィックス
PLD-12050	地区：北東尾根地区 施設：主郭下平場 遺構：SF5 遺構種別：焼土堆積 層位：5層 遺物No. : 4071-2	試料の種類：炭化材(4年輪) 試料の性状：部位不明 状態：dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸:1.2N, 水酸化ナトリウム:1N, 塩酸:1.2N) サルフィックス
PLD-12051	地区：北東尾根地区 施設：主郭下平場 遺構：SF5 遺構種別：焼土堆積 層位：2層 遺物No. : 4071-3	試料の種類：炭化材 試料の性状：最外年輪 状態：dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸:1.2N, 水酸化ナトリウム:1N, 塩酸:1.2N) サルフィックス
PLD-12052	地区：北東尾根地区 施設：主郭下平場 遺構：SF7 遺構種別：焼土堆積 層位：1層 遺物No. : 4038-1	試料の種類：炭化材(枝) 試料の性状：最外年輪 状態：dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸:1.2N, 水酸化ナトリウム:1N, 塩酸:1.2N) サルフィックス
PLD-12053	地区：北東尾根地区 施設：主郭下平場 遺構：SF 7 遺構種別：焼土堆積 層位：1層 遺物No. : 4038-2	試料の種類：炭化材(枝) 試料の性状：最外年輪 状態：dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸:1.2N, 水酸化ナトリウム:1N, 塩酸:1.2N) サルフィックス
PLD-12054	地区：北東尾根地区 施設：主郭下平場 遺構：SF 7 遺構種別：焼土堆積 層位：1層 遺物No. : 4038-3	試料の種類：炭化材(枝) 試料の性状：最外年輪 状態：dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸:1.2N, 水酸化ナトリウム:1N, 塩酸:1.2N) サルフィックス

去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の¹⁴C濃度の変動、及び半減期の違い（¹⁴Cの半減期5730±40年）を較正することで、より実際の年代値に近いものを算出することである。

¹⁴C年代の暦年較正には0xCal4.0（較正曲線データ：INTCAL04）を使用した。なお、 1σ 暦年代範囲は、0xCalの確率法を使用して算出された¹⁴C年代誤差に相当する68.2%信頼限界の暦年代範囲であり、同様に 2σ 暦年代範囲は95.4%信頼限界の暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値は、その範囲内に暦年代が入る確率を意味する。グラフ中の縦軸上の曲線は¹⁴C年代の確率分布を示し、二重曲線は暦年較正曲線を示す。それぞれの暦年代範囲のうち、その確率が最も高い年代範囲については、表中に下線で示してある。

4 考察

試料について、同位体分別効果の補正及び暦年較正を行った。以下、得られた結果を 2σ 暦年代範囲（95.4%の確率でこの範囲に暦年代が収まることを意味する）に着目して遺構ごとに整理する。

北東曲輪平場cのS F 13から採取された炭化したマツ属種果（PLD-12045）の 2σ 暦年代範囲は、17世紀末～18世紀前葉と19世紀前葉～20世紀前葉の2つの範囲を示した。北東曲輪平場cからは14世紀後半～15世紀後半の古瀬戸系施釉陶器の縁袖小皿（72）が出土しているが、年代測定の結果に基づけば、S F 13が使用された時期はこれよりも明らかに新しいと言える。

主郭下平場のS F 4から採取された炭化材3点（PLD-12046～12048）の 2σ 暦年代範囲はほぼ同じであった。3点の 2σ 暦年代範囲は、15世紀中葉～16世紀前葉と16世紀後葉～17世紀前葉の2つの範囲を示した。

主郭下平場のS F 5では、炭化したサクラ属核（PLD-12049）と最外年輪を有する炭化材（PLD-12051）の 2σ 暦年代範囲は、ほぼ同じであった。いずれも15世紀中葉～17世紀前葉にかけての範囲であり、サクラ属核（PLD-12049）は15世紀中葉～16世紀前葉と16世紀中葉～17世紀前葉、炭化材（PLD-12051）は15世紀中葉～末と17世紀前葉の範囲を示した。一方、部位不明の炭化材（PLD-12050）の 2σ 暦年代範囲は、PLD-12051の炭化材とはやや重複するものの比較的古い範囲を示し、15世紀前半であった。PLD-12050の炭化材は部位不明であり、木材年輪の内側である可能性もある。そのため、枯死・伐採年よりも古い年代を示している可能性がある。したがって、S F 5が使用された年代はPLD-12049と12051が示す15世紀中葉～16世紀前葉ないし16世紀中葉～17世紀前葉と考えられる。

主郭下平場のS F 7では、枝状の炭化材3点のうち、PLD-12052と12054は、 2σ 暦年代範囲がほぼ同じであった。PLD-12052と12054の 2σ 暦年代範囲は、15世紀中葉～16世紀前葉と16世紀後葉～17世紀前葉の範囲を示した。一方、PLD-12053の 2σ 暦年代範囲は15世紀台であった。これはPLD-12052や12054の 2σ 暦年代範囲と重複する。また、S F 7の試料3点はいずれも枝状で最外年輪を有する炭化材であり、木材部位の年代への影響を考慮する必要がない。したがって、S F 7が使用された年代は、PLD-12053が示す15世紀代の可能性が高いと考えられる。

以上をまとめると、北東曲輪平場cのS F 13の使用時期は17世紀末～18世紀前葉あるいは19世紀前葉～20世紀前葉と考えられる。この結果から、S F 13は三枝城が戦国時代に山城として機能していた時期よりも新しい時期に使用されたと考えられる。他方、主郭下平場のS F 4の使用時期は、15世紀中葉～16世紀前葉あるいは16世紀後葉～17世紀前葉、同じく主郭下平場のS F 5の使用時期は15世紀

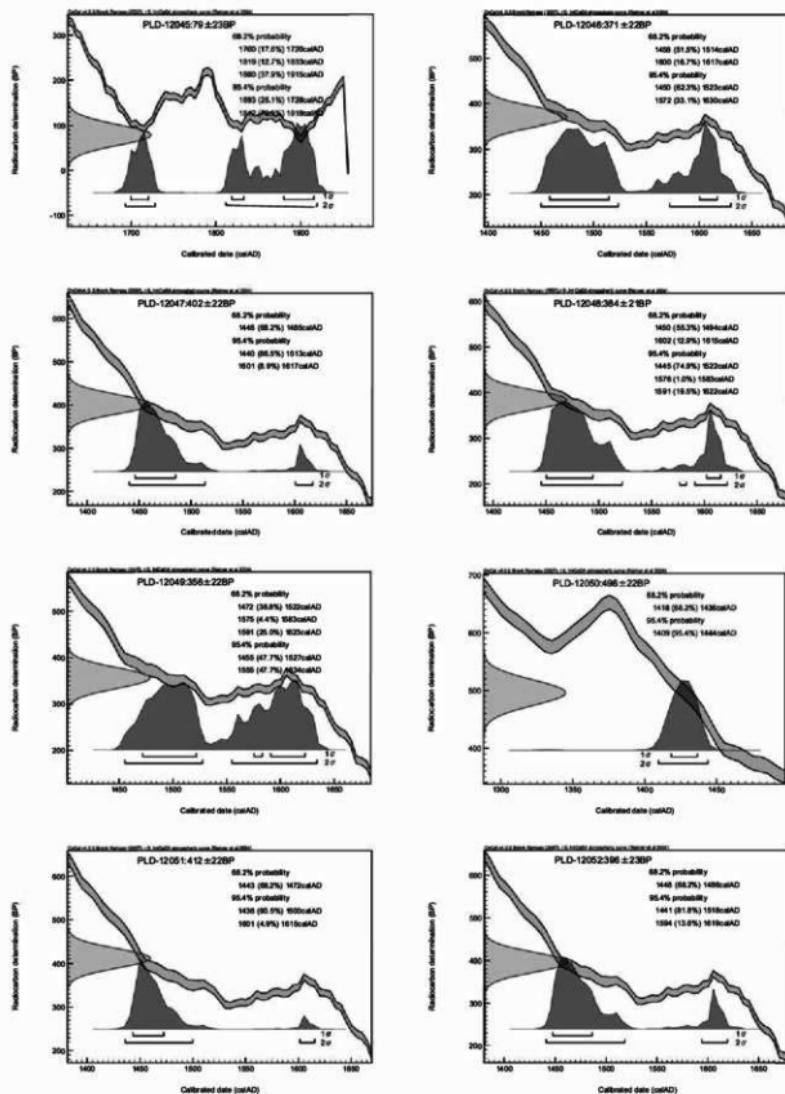
第31表 北東尾根地区放射性炭素年代測定及び暦年較正の結果

	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	曆年較正用年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	^{14}C 年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	^{14}C 年代を曆年に較正した年代範囲	
				1σ 曆年代範囲	2σ 曆年代範囲
PLD-12045	-25.66 \pm 0.15	79 \pm 23	80 \pm 25	1700AD(17.0%) 1720AD 1819AD(12.7%) 1833AD 1880AD(37.9%) 1915AD	1693AD(25.1%) 1728AD 1812AD(76.3%) 1919AD
PLD-12046 遺物No. : 4102-1	-25.35 \pm 0.17	371 \pm 22	370 \pm 20	1450AD(51.0%) 1514AD 1600AD(16.7%) 1617AD	1450AD(62.3%) 1523AD 1572AD(33.1%) 1630AD
PLD-12047 遺物No. : 4102-2	-26.54 \pm 0.21	402 \pm 22	400 \pm 20	1440AD(68.2%) 1485AD	1440AD(96.5%) 1513AD 1601AD(8.9%) 1617AD
PLD-12048 遺物No. : 4102-3	-28.07 \pm 0.14	384 \pm 21	385 \pm 20	1450AD(55.3%) 1494AD 1602AD(12.9%) 1615AD	1445AD(74.9%) 1522AD 1576AD(1.0%) 1583AD 1591AD(19.8%) 1622AD
PLD-12049 遺物No. : 4071-1	-24.87 \pm 0.14	356 \pm 22	355 \pm 20	1472AD(38.8%) 1522AD 1575AD(4.4%) 1583AD 1591AD(25.0%) 1623AD	1455AD(47.7%) 1527AD 1555AD(4.7%) 1634AD
PLD-12050 遺物No. : 4071-2	-27.94 \pm 0.2	496 \pm 22	495 \pm 20	1418AD(68.2%) 1436AD	1409AD(95.4%) 1444AD
PLD-12051 遺物No. : 4071-3	-26.84 \pm 0.25	412 \pm 22	410 \pm 20	1443AD(68.2%) 1472AD	1436AD(90.5%) 1500AD 1601AD(4.9%) 1615AD
PLD-12052 遺物No. : 4038-1	-23.74 \pm 0.17	396 \pm 23	395 \pm 25	1448AD(68.2%) 1486AD	1441AD(81.8%) 1518AD 1594AD(13.6%) 1619AD
PLD-12053 遺物No. : 4038-2	-24.97 \pm 0.17	443 \pm 22	445 \pm 20	1435AD(68.2%) 1453AD	1424AD(95.4%) 1470AD
PLD-12054 遺物No. : 4038-3	-29.13 \pm 0.18	385 \pm 21	385 \pm 20	1450AD(57.3%) 1493AD 1602AD(10.9%) 1613AD	1445AD(76.2%) 1522AD 1579AD(0.4%) 1581AD 1591AD(18.9%) 1620AD

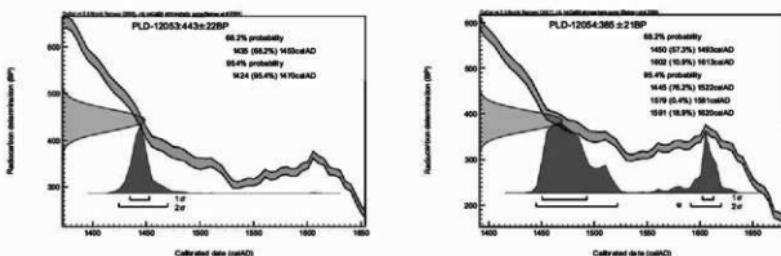
中葉～16世紀前葉あるいは16世紀中葉～17世紀前葉と考えられる。これらの結果から、S F 4とS F 5は戦国時代に山城の施設の一部だった可能性がある。同じく主郭下平場のS F 7の使用時期は15世紀代の可能性が高い。この結果から、S F 7は戦国時代に山城の施設の一部だった可能性がある一方で、戦国時代より前に使用されていた可能性もある。

参考文献

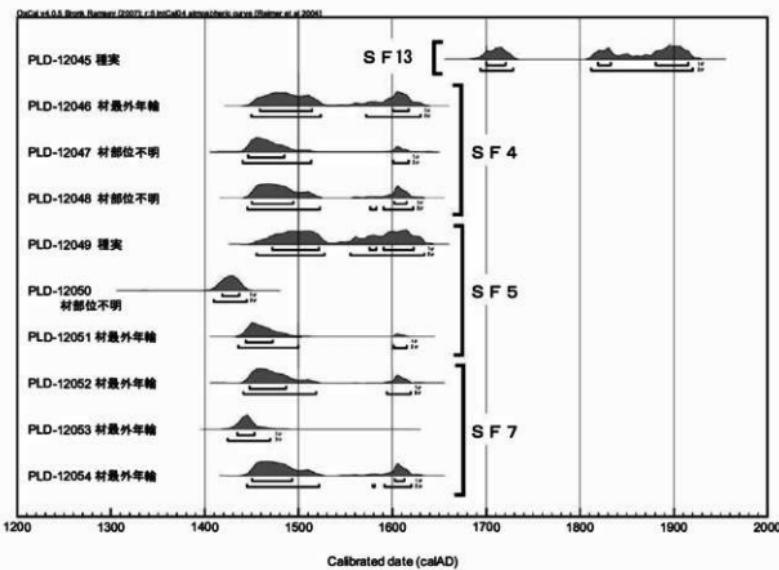
- Bronk Ramsey, C. (1995) Radiocarbon Calibration and Analysis of Stratigraphy: The OxCal Program. Radiocarbon, 37, 425–430.
- Bronk Ramsey, C. (2001) Development of the Radiocarbon Program OxCal. Radiocarbon, 43, 355–363.
- 中村俊夫 (2000) 放射性炭素年代測定法の基礎. 日本先史時代の ^{14}C 年代. 3–20.
- Reimer, P.J., Baillie, M.G.L., Bard, E., Bayliss, A., Beck, J.W., Bertrand, C.J.H., Blackwell, P.G., Buck, C.E., Burr, G.S., Cutler, K.B., Damon, P.E., Edwards, R.L., Fairbanks, R.G., Friedrich, M., Guilderson, T.P., Hogg, A.G., Hughen, K.A., Kromer, B., McCormac, G., Manning, S., Bronk Ramsey, C., Reimer, R.W., Remmelle, S., Southon, J.R., Stuiver, M., Talamo, S., Taylor, F.W., van der Plicht, J. and Weyhenmeyer, C.E. (2004) IntCal04 terrestrial radiocarbon age calibration, 0–26 cal kyr BP. Radiocarbon, 46, 1029–1058.



第89図 北東尾根地区出土炭化物年代測定暦年較正結果（1）



第90図 北東尾根地区出土炭化物年代測定暦年較正結果（2）



第91図 北東尾根地区出土炭化物年代測定暦年較正結果の比較

第2節 北東山麓地区出土炭化物の放射性炭素年代測定

1 はじめに

北東山麓地区で検出した遺構の中から、炭化物が出土した2つの重要遺構を選び、放射性炭素年代測定を実施した。焼土堆積遺構 S F16は、遺構構造から縄文時代早期の焼穢集積遺構の可能性が考えられたものの、遺構内から遺物が出土しなかつたため、放射性炭素年代測定を行って年代検討の参考とすることとなった。また、竪穴住居跡 S B 1は、深い下部構造を持つ特異な遺構であるため構築方法について多方面から手掛かりを得る必要があることから、下部構造部分とカマド跡から試料を選び、放射性炭素年代測定を実施した。

採取した炭化物については、加速器質量分析法(AMS法)による放射性炭素年代測定を行った。分析は、伊藤茂・尾崎大真・丹生越子・廣田正史・小林絃一・Zaur Lomtadze・Ineza Jorjoliani・中村賢太郎(パレオ・ラボAMS年代測定グループ)が担当した。

2 試料と方法

測定試料の情報、調製データは第32表のとおりである。試料は北東山麓平場に位置する焼土堆積遺構 S F16と竪穴住居跡 S B 1から3点ずつ採取された炭化材計6点である。

S F16は周囲から縄文土器が出土しているが、遺構内からは遺物が出土していない。時期の検討のために、S F16から採取された炭化材3点(No. 4216、4239-1、4239-2: PLD-14877~14879)を年代測定試料とした。

S B 1は、床下に掘られた擂鉢状の下部構造を有し、カマド跡(S B 1-F 1)などを伴う竪穴住居跡である。カマド跡からは土師器甕が出土している。建物の下部構造からは須恵器が出土している。No. 4019(PLD-14880)は下部構造の6層より採取された最外年輪を有する炭化材である。No. 4268(PLD-14881)はカマドの立柱石より下位の炭化物密集層である8層より採取された部位不明の炭化材である。No. 3985(PLD-14882)はカマド(F 1)4層の土師器甕の中から採取された部位不明の炭化材である。

試料は調製後、加速器質量分析計(パレオ・ラボ、コンパクトAMS: NEC製 1.5SDH)を用いて測定した。得られた¹⁴C濃度について同位体分別効果の補正を行った後、¹⁴C年代、曆年代を算出した。

3 結果

第33表に、同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比($\delta^{13}\text{C}$)、同位体分別効果の補正を行って曆年較正に用いた年代値、慣用に従って年代値、誤差を丸めて表示した¹⁴C年代、¹⁴C年代を曆年代に較正した年代範囲を、第92図に曆年較正結果をそれぞれ示す。曆年較正に用いた年代値は下1桁を丸めていない値であり、今後曆年較正曲線が更新された際にこの年代値を用いて曆年較正を行うために記載した。

¹⁴C年代はAD1950年を基点にして何年前かを示した年代である。¹⁴C年代(yrBP)の算出には、¹⁴Cの半減期としてLibbyの半減期5568年を使用した。また、付記した¹⁴C年代誤差($\pm 1\sigma$)は、測定の統計誤差、標準偏差等に基づいて算出され、試料の¹⁴C年代がその¹⁴C年代誤差内に入る確率が68.2%であることを示す。

なお、曆年較正とは、大気中の¹⁴C濃度が一定で半減期が5568年として算出された¹⁴C年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の¹⁴C濃度の変動、及び半減期の違い(¹⁴Cの半減期5730±40年)

第32表 北東山麓地区測定試料及び処理

	遺跡データ	試料データ	前処理
PLD-14877 遺物No. 4216	調査区: 08MD北東山麓地区 位置: 14YSE 遺構: SF16(焼窯集積遺構) 層位: 2層 遺物No. 4216	試料の種類: 炭化材 試料の性状: 最外年輪, 直径7mm 状態: dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸:1.2N, 水酸化ナトリウム:0.1N, 塩酸:1.2N)
PLD-14878 遺物No. 4239-1	調査区: 08MD北東山麓地区 位置: 14YSE 遺構: SF16(焼窯集積遺構) 層位: 2層 遺物No. 4239-1	試料の種類: 炭化材 試料の性状: 最外年輪, 直径6mm 状態: dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸:1.2N, 水酸化ナトリウム:0.1N, 塩酸:1.2N)
PLD-14879 遺物No. 4239-2	調査区: 08MD北東山麓地区 位置: 14YSE 遺構: SF16(焼窯集積遺構) 層位: 2層 遺物No. 4239-2	試料の種類: 炭化材 試料の性状: 最外年輪, 直径11mm 状態: dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸:1.2N, 水酸化ナトリウム:0.1N, 塩酸:1.2N)
PLD-14880 遺物No. 4019	調査区: 08MD北東山麓地区 位置: 14YNW 遺構: SB 1 (堅穴建物跡) の下部構造 層位: 6層, 住居床下88cm 遺物No. 4019	試料の種類: 炭化材 試料の性状: 最外年輪, 直径4mm, 6年輪 状態: dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸:1.2N, 水酸化ナトリウム:0.1N, 塩酸:1.2N)
PLD-14881 遺物No. 4268	調査区: 08MD北東山麓地区 位置: 14YNW 遺構: SB 1 - F 1 (堅穴建物内カマド跡) 層位: 8層(立柱下石位の炭化物密集層) 遺物No. 4268	試料の種類: 炭化材 試料の性状: 部位不明, できるだけ外側 を約10年輪採取 状態: dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸:1.2N, 水酸化ナトリウム:0.1N, 塩酸:1.2N)
PLD-14882 遺物No. 3985	調査区: 08MD北東山麓地区 位置: 14YNW 遺構: SB 1 - F 1 (堅穴建物内カマド跡) 層位: 4層(壁の中) 遺物No. 3985	試料の種類: 炭化材 試料の性状: 部位不明, 最外年輪に近い? 状態: dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸:1.2N, 水酸化ナトリウム:0.1N, 塩酸:1.2N)

第33表 北東山麓地区放射性炭素年代測定及び暦年較正の結果

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	暦年較正用 年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	^{14}C 年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	^{14}C 年代を曆年代に較正した年代範囲	
				1 σ 曆年範囲	2 σ 曆年範囲
PLD-14877 遺物No. 4216	-28.41 \pm 0.14	6302 \pm 27	6300 \pm 25	5316BC(27.8%) 5291BC 5269BC(40.4%) 5226BC	5326BC(95.4%) 5217BC
PLD-14878 遺物No. 4239-1	-29.30 \pm 0.14	6291 \pm 27	6290 \pm 25	5308BC(22.7%) 5287BC 5271BC(45.5%) 5226BC	5317BC(95.4%) 5218BC
PLD-14879 遺物No. 4239-2	-28.57 \pm 0.38	6299 \pm 33	6300 \pm 35	5315BC(26.8%) 5288BC 5271BC(41.4%) 5226BC	5342BC(95.4%) 5214BC
PLD-14880 遺物No. 4019	-25.05 \pm 0.15	1335 \pm 20	1335 \pm 20	657AD(68.2%) 681AD	649AD(87.9%) 695AD 702AD(0.7%) 706AD 747AD(6.9%) 765AD
PLD-14881 遺物No. 4268	-25.81 \pm 0.12	1349 \pm 20	1350 \pm 20	655AD(68.2%) 671AD	645AD(95.4%) 689AD
PLD-14882 遺物No. 3985	-31.63 \pm 0.28	1283 \pm 24	1285 \pm 25	680AD(39.7%) 718AD 743AD(28.5%) 769AD	670AD(95.4%) 774AD

を較正して、より実際の年代値に近いものを算出することである。

^{14}C 年代の暦年較正にはOxCal4.1（較正曲線データ：INTCAL09）を使用した。なお、 1σ 暦年範囲は、OxCalの確率法を使用して算出された ^{14}C 年代誤差に相当する68.2%信頼限界の暦年範囲であり、同様に 2σ 暦年範囲は95.4%信頼限界の暦年範囲である。カッコ内の百分率の値は、その範囲内に暦年が入る確率を意味する。グラフ中の縦軸上の曲線は ^{14}C 年代の確率分布を示し、二重曲線は暦年較正曲線を示す。

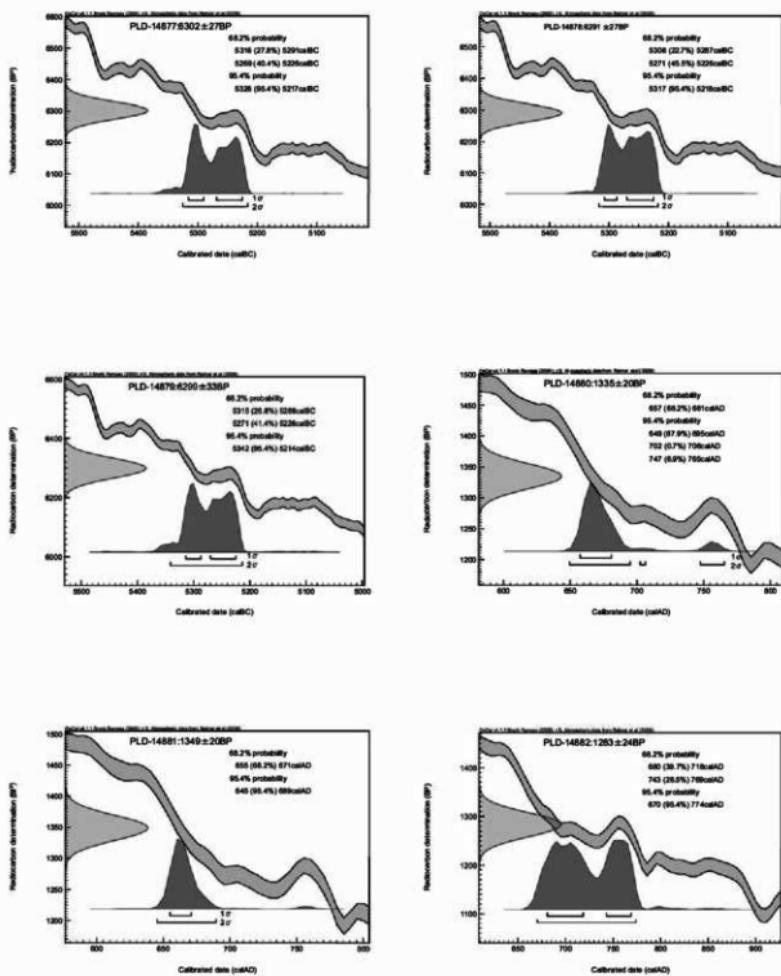
4 考察

焼土堆積遺構S F16のNo. 4216、4239-1、4239-2（PLD-14877～14879）は、それぞれの 2σ 暦年範囲が5326-5217calBC(95.4%)、5317-5218calBC(95.4%)、5342-5214calBC(95.4%)で、たいへん良い一致を示した。3点の結果は、小林謙一による縄文土器編年と暦年較正結果との対応関係（小林2008）を参照すると、縄文時代早期末に相当する。よって、S F16については、縄文時代早期に広くみられる焼穢集積遺構と考えることに問題はないであろう。

竪穴住居跡S B 1では、下部構造の6層より採取されたNo. 4019（PLD-14880）の 2σ 暦年範囲は649-695calAD(87.9%)、702-706calAD(0.7%)及び747-765calAD(6.9%)を示した。特に649-695calADの確率が高い。カマド立柱石下位の炭化物密集層（8層）より採取されたNo. 4268（PLD-14881）は645-689calAD(95.4%)の範囲を示した。カマド跡（S B 1-F 1）4層の土師器甕の中から採取されたNo. 3985（PLD-14882）は670-774calAD(95.4%)の範囲を示した。まとめると、下部構造の炭化材は7世紀中頃～末の確率が高く、カマド立柱石下位炭化物密集層の炭化材は7世中頃～後半、カマドの土師器甕中の炭化材は7世紀後半～8世紀後半の暦年範囲を示した。以上の結果は、出土遺物の年代観から導かれる年代所見とは一致しない。ただし、カマド跡から採取された遺物No. 4268とNo. 3985の炭化材は部位不明であり、内側の年輪である可能性がある。材は内側の年輪であれば、その分古い年代を示し、これは古木効果と呼ばれる。遺物No. 4268とNo. 3985の結果については古木効果を考慮する必要がある。

参考文献

- Bronk Ramsey, C. (1995) Radiocarbon Calibration and Analysis of Stratigraphy: The OxCal Program. *Radiocarbon*, 37, 425-430.
- Bronk Ramsey, C. (2001) Development of the Radiocarbon Program OxCal. *Radiocarbon*, 43, 355-363.
- 小林謙一（2008）縄文時代の暦年代。縄文時代の考古学2-歴史のものさし, 257-269, 同成社。
- 中村俊夫（2000）放射性炭素年代測定法の基礎。日本先史時代の ^{14}C 年代, 3-20。
- Reimer, P. J., Baillie, M. G. L., Bard, E., Bayliss, A., Beck, J. W., Blackwell, P. G., Bronk Ramsey, C., Buck, C. E., Burr, G. S., Edwards, R. L., Friedrich, M., Grootes, P. M., Guilderson, T. P., Hajdas, I., Heaton, T. J., Hogg, A. G., Hughen, K. A., Kaiser, K. F., Kromer, B., McCormac, F. G., Manning, S. W., Reimer, R. W., Richards, D. A., Southon, J. R., Talamo, S., Turney, C. S. M., van der Plicht, J. and Weyhenmeyer C. E. (2009) IntCal09 and Marine09 Radiocarbon Age Calibration Curves, 0-50,000 Years cal BP. *Radiocarbon*, 51, 1111-1150.



第92図 北東山麓地区出土炭化物年代測定暦年校正結果

第3節 北東山麓地区出土の人骨について

1 はじめに

北東山麓地区的平場②で検出した墓S Z 1～3から出土した骨片の鑑定結果を報告する。分析は、梶ヶ山真里・中村賢太郎（株式会社パレオ・ラボ）が担当した。

2 試料と方法

試料は北東山麓地区的平場②で検出した墓S Z 1～3から出土した骨片である。3基のうちS Z 1は直上に角礫数点が並んでいた。いずれも発掘時に多量の骨片が採取された。これらのうち比較的残りの良い骨片を選別し、墓1基あたり4点、計12点の骨片を鑑定の対象とした。

3 結果と考察

鑑定の結果、12点の骨片は全て人骨であった。いずれも灰白色を呈するほど良く焼かれており、ほとんどは小さな破片となっていた。収縮・亀裂・変形が多く認められるため、これらの骨はおおよそ800度以上の温度で長時間焼かれたと考えられる。なぜならば、600度以下の温度では有機物が炭化して残るために骨は黒色を呈し、骨自体の物理的な変化も起こらないが、800度になると、有機物が分解し骨の色が灰白色になり、収縮が起り骨は硬く炭化するからである。その際、骨の微細構造は見られなくなる。また、晒された骨が焼かれた場合には変形や亀裂は少ないと、新鮮な骨が焼かれた場合には変形や亀裂が激しいことから判断すると、これらの骨は軟部が付着した状態で焼かれたと判断できる。以下、検出された焼骨について遺構ごとに記載する。

S Z 2：側頭骨右錐体（図版26No. 1）、左肩甲骨（No. 2）、左右不明脛骨片（No. 3）、前頭骨片（No. 4）である。前頭骨片は冠状縫合部分が確認でき、癒合しておらず開いている状態である。

S Z 3：側頭骨左錐体（No. 5）、頭頂骨片（No. 6）、左右不明大腿骨片（No. 7）、部位不明四肢骨片（No. 8）である。頭頂骨では矢状縫合が確認でき、癒合せず開いている。

S Z 1：遺物番号2617は大腿骨破片（No. 9）と後頭骨片（No. 10）である。後頭骨片は内壁部分である。遺物番号2633は側頭骨片（No. 11）であり、詳細は不明である。遺物番号2633Aは収縮・変形が大きいが、左右不明桡骨片と思われる（No. 12）。

当遺跡から検出された人骨の個体数は、一般的には、墓ごとに1体ずつ埋葬されるので、少なくとも3体と思われる。3体の年齢はそれぞれ大まかに成人と判断するが、頭蓋骨が確認されたS Z 2とS Z 3の出土人骨の年齢は、成人でもやや前半（若い）に分類できる。S Z 1から検出された人骨については、変形・収縮・亀裂等が多く年齢性別の判断は非常に難しい。

4 おわりに

三枝城跡北東山麓地区的平場②で検出された墓S Z 1～3から出土した骨片は、人骨であった。また、いずれの人骨も焼けていた。さらに、S Z 2とS Z 3の出土人骨の年齢は、成人でもやや前半（若い）と判断された。以上から、この3基の遺構については、火葬人骨を納めた墓と考えてよいことが明らかとなった。

第5章 総括

第1節 三枝城跡の柴山出村系土器

1 SK38出土の弥生土器について

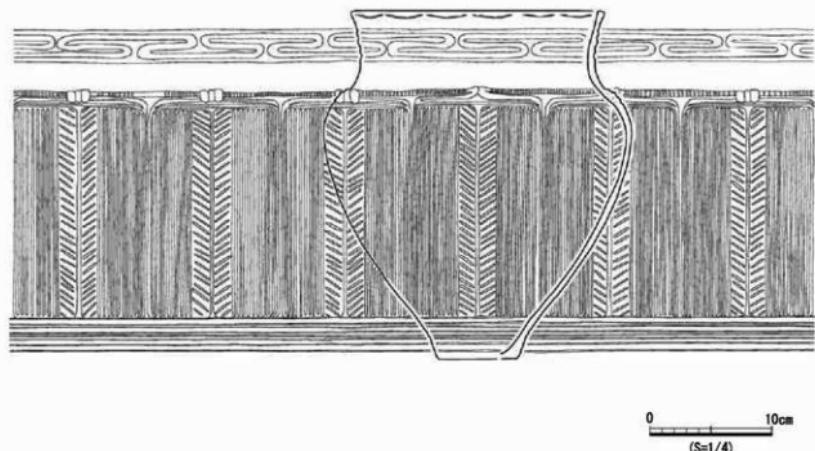
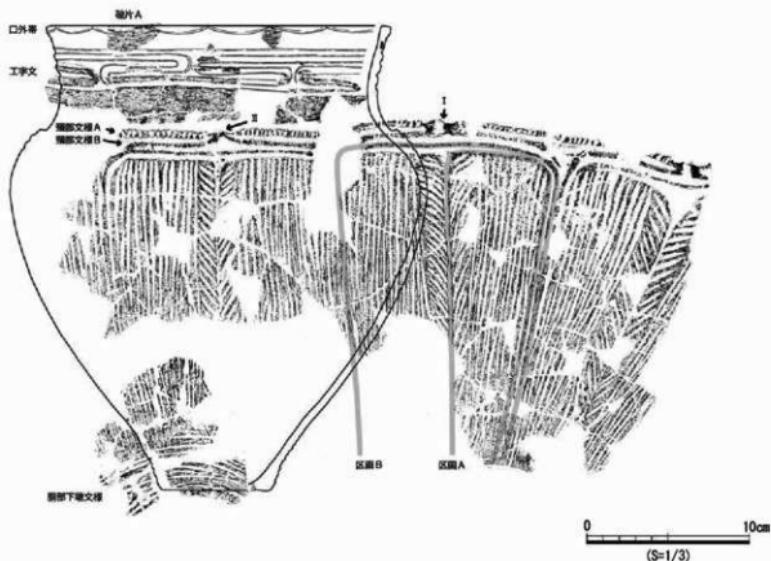
土坑SK38から出土した弥生土器（遺物132）は大半が小片で出土した。その総数は152点に及び接合が困難であった。後世の遭構によって削平を受けた影響と考えられる。接合可能な資料は胴部約3分の1程度で、口縁端部及び底部は大きく復元した胴部には接合しなかった。確認した口縁端部は2片だが、口外帯が認められる。残存部位が少ないがおそらく、12～13単位で構成されていたと考えられる。口外帯から下は無文帶があり、やや外反する口頭部に粗大な雖の手状の文様が認められる。口外帯と口頭部文様との距離は破片Aによって判断した。口頭部文様の振幅は上下を合わせるとおよそ12単位となる。その下は頸部まで無文帶となり、頸部から底部にかけて施文が認められる。頸部文様Aは途切れることなく全周し、刻みが認められる。中央に刺突を加えた瘤状突起が現状で2か所認められる（I）。その位置は対向斜線文上にある。また、1か所は瘤状突起ではなく、下の隆帯（頸部文様B）との結節点（II）となり、対向斜線文上に位置する。後述するが対向斜線文は6単位で構成されることから、Iが5か所、IIが1か所と想定して復元したのが第93図である。頸部文様Aの下には2本の隆帯があり、そのうち上段の頸部文様Bは先に述べたとおり、結節点I・IIに繋がる。頸部文様Bから分岐する隆帯は区画A2組を連結するよう位置する（区画B）。区画Aは縱位の沈線と斜線文で構成される。縱位沈線は平均値で11～13本認められるが、底部まで届かず途中で途切れたり、胴部の真ん中から始まる沈線があって、粗雑なつくりである。この区画Aは12単位で構成され、頸部文様で区画された区画Bは6単位となる。斜線文は隣接する区画文Aで対向するよう配置されて縱羽状文となるが、区画文Aの境界となる沈線で区画してから区画内の文様を埋めているので、区画設置の優先順位が高いと考えられる。底部付近は横位の沈線が8～9本認められる。精緻な沈線ではなく、状況は区画内の縱位沈線と同様である。煮沸痕が胴部外面に顕著に残る。

2 132と既存の資料の比較及び位置づけ

132はこれまで沈線文系及び柴山出村系の土器と呼称される一群と類似する特徴をもつ。沈線文系及び柴山出村系の資料として132は飛騨唯一の確認事例であり、132のもの資料的価値は大きい。さらに、こうした資料の多くが遭構から伴出する例が少なく、単独ながらも土坑から出土したことでも資料的価値が高いと考えられる。また、132に認められる文様はこれまでない要素があり、既存の資料と比較することで132の特徴を検討し、その位置づけを考えてみる。

132の文様は①口縁端部②口頭部③胴部④胴部下端にそれぞれ異なる文様が認められるので分けて以下に述べる。

①には口外帯が認められる。132類似形状における口外帯の確認例はこれまでにない。口外帯は中部高地の水式にもつながる要素である。^{これより}飛騨地域ではカクシクレ遺跡など丹生川ダム建設関連に伴う調査によって縄文時代晩期末の資料が得られている。その中には深鉢形に口外帯のある資料がみら



第93図 柴山出村系土器（遺物132）復元図

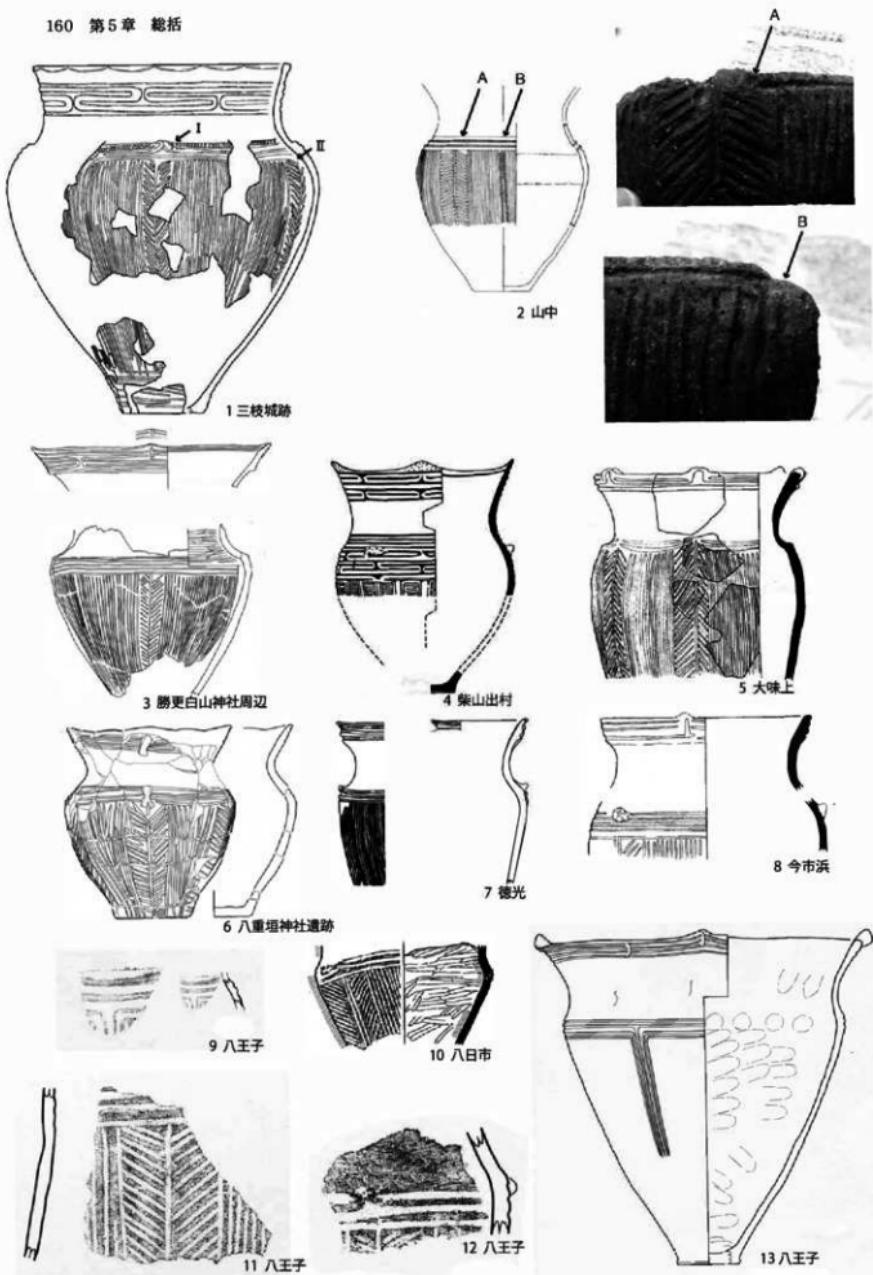
れる。多くは搬入品の可能性が高い。高山市立石遺跡（旧吉城郡国府町）資料でも同様の状況が認められる。飛騨地域は中部高地との近い関係を有し、その一端が132の口外帯へと結びついた可能性がある。復元図では平口縁として作図した。波状口縁の可能性も残るが、現状のわずかな残存部位では波状口縁として復元する根拠がない。既存の類似資料からすると波状口縁や瘤状の装飾が加わる可能性があるので、詳細は将来の課題としておきたい。

②の文様も新出の要素である。文様構成は飛騨～北陸地域にかけて縄文時代晩期末の資料に広く認められる要素で、こうした要素が132にも残存する1例と考えられる。類似する例として勝更白山神社周辺遺跡出土例（第94図3）、柴山出村遺跡出土例（第94図4）がある。とくに3は文様が上段・下段でそれぞれ途切れ、単位が2分の1単位の交互となり、132にちかい。上段の区切りは短沈線となっているが、132から形骸化した1つのあり方を示す可能性がある。3は実見すると上下が連続するのかしないのか既存資料では判別がつかない。132によって3の上下がつながる可能性が残されたとみたい。4は同じ単位の文様を重複しているので3より132との距離が大きいと考えられる。

③のように縦位沈線と矢羽根状沈線による文様構成はこれまでの資料と共通性の高い要素である。132で注意を要するのが、先にも述べたが区画の存在である。132はコの字形の区画内を斜沈線と縦位沈線で埋め、この区画を連ねることで全体を構成している。これまでの資料の場合、3を例にとると頸部の横位沈線と胸部の縦位沈線が非連続で区画は認められない。3及び多くの資料の場合、頸部の横位沈線は132のように隆帯ではなく、沈線表現をとっており、両資料には時間差を想定することが可能である。132のように隆線の表現及び区画をもつ文様構成から、3などは隆線の表現が沈線の表現となって区画をもたない文様表現へと変化した可能性がある。類似する資料に2がある。胸部文様はほぼ同様で、頸部文様も隆線で刻みがある点も類似する。実見すると写真A・Bにあるように頸部文様が直線ではなく、一部に途切れる部位が認められた。Aは斜沈線から上方へ向かって途切れるので、132-Iにちかい部位の可能性がある。Bは下へ向かう表現がみられるので、132-IIにちかい部位でかもしれない。2は残念ながら口頸部を欠損するが、胸部文様は酷似する特徴をもつ可能性が高く、さらに2に区画が仮に存するとすれば、12単位が想定可能で、132ときわめて近い資料である。

④は横位の沈線が認められる。これまで胸部下端文様は欠損する資料が大半であった。132によって横位沈線を確認したが、やや乱雑で丁寧さに欠け、始点と終点がつながる沈線は少ないと考えられ、沈線は8本前後が認められる。横位沈線は渦巻文系土器につながる要素でもあり、今後の検討課題である。

以上、①～④に関してこれまでの類似資料と132を検討した。さらに132と既存資料との違いに着目すると口縁端部から口頸部にかけての文様空白域があげられる。多くの資料は文様が口縁端部から空白域をもたずに連続し、口縁端部を肥厚するのが通例で、132にはそうした要素はみられない。仮に②で述べたように132が2・3より先行する資料とするなら、132の口外帯が消失することによって文様が上方へ移行し、文様空白域も同時に消失する変遷過程が想定できる。さて、課題は132に対する評価である。これまで述べてきたように、部位が多く残ることによって復元できた文様から新しい要素を認めることができた。それらから132はどの時期に置くかが重要である。①～④の検討からすれば既存資料よりも先行する資料と考えられる。また、口頸部にみられる文様は縄文時代晩期にもつながる要素である。こうした要素も既存資料よりも先行し、より縄文時代にちかい時期を与えてよいと



第94図 柴山出村系土器関連資料の集成

考えられる重要な要素であろう。既存の資料の多くは弥生時代前期後半の資料であるので、132は前期中葉を下らない時期を想定できる。問題はさらに遡って前期前半まで遡る可能性があるかという点である。先に触れた縄文時代晩期の要素を色濃く残すことを勘案すれば、前期中葉より遡る可能性も十分あるが、現状では他に類例のない資料で比較検討材料がないので、ひとまず前期中葉に位置づけ、今後、検証すべき課題としておきたい。

本稿を記すにあたって石黒立人氏・久田正弘氏・永井宏幸氏にはいろいろと有益なご助言をいただいた。土本典夫氏には資料の実見にあたり便宜を図っていただいた。記して感謝します。

(藤田英博)

第94図に引用した資料の出典は以下のとおりである。

- 2 : 財団法人愛知県埋蔵文化財センター1992『山中遺跡』
- 3 : 財団法人岐阜県文化財保護センター1995『西乙原遺跡・勝更白山神社周辺遺跡』
- 4 : 湯尻修平1983「柴山出村式土器について」『石川県考古学研究会誌第26号 北陸の考古学』石川考古学研究会
- 5 : 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター1999『福井県埋蔵文化財調査報告第43集 大味地区遺跡群一坂井大味地区低コスト化水田農業大区画圃場整備業に伴う調査ー』
- 6 : 鈴鹿市考古博物館2009『八重垣神社遺跡（第6次） 鈴鹿市立神戸中学校移転改築に係る発掘報告書』
- 7 : 石川県立埋蔵文化財センター1992『徳光一県営ほ場整備事業関係埋蔵文化財発掘調査報告書ー』
- 8 : 美浜町誌編纂委員会2009『わかさ美浜町誌 美浜の文化 第6巻 掘る・使う』
- 9 : 財団法人愛知県埋蔵文化財センター2001『八王子遺跡』
- 10 : 小松市教育委員会2003『八日市地方遺跡 I一小松駅東土地区画整理事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書ー』
- 11 : 財団法人愛知県埋蔵文化財センター2001『八王子遺跡』
- 12 : 財団法人愛知県埋蔵文化財センター2001『八王子遺跡』
- 13 : 財団法人愛知県埋蔵文化財センター2001『八王子遺跡』

第2節 三枝城跡で見つかった山林寺院跡について

1 調査区内の古代の遺物と遺構

山林を広範囲にわたり対象とした三枝城跡発掘調査においては、戦国時代の遺構・遺物のみならず、須恵器・土師器・灰釉陶器など古代の遺物を多数確認する成果を収めた。その出土範囲は、調査面積9,510m²のうち北尾根地区と急傾斜地を除く大部分に及んでいるが、特に集中する区域は、調査区内の北東山麓地区に認められる3段の平場（北東山麓平場①～③）と、その下方の斜面である。

この区域では、破片数で1,500点を超える遺物が出土した。出土須恵器のなかには、漆を塗った鉄鉢形の鉢（193）、小型の三足火舎（194）、金属器を模倣した托（195）など、仏具とみるべき特殊品が含まれる。また、検出した遺構にみられる特異な性格にも注意を払うべきであろう。平場①第2調査面で検出した竪穴住居跡SB1は、カマドを備えることから、とりあえず住居跡とみることができるものの、床面下に1.74mもの深さの擂鉢状下部構造を持つことから、単なる生活の場にとどまらず、鎮壇など、特異な性格を併せ持つ施設であった可能性が高い。さらに、その上層の第1調査面で検出した礎石建物跡SH1についても、帰属時代判定の手掛かりとなる土器類が出土していないものの、検出地点周辺から多数の鉄釘（207～249）に混じって鉄製の雁股鐵（206）が出土しており、やはり信仰関連施設との性格を持つ建物であった可能性が考えられる。

2 北東山麓平場群の検討

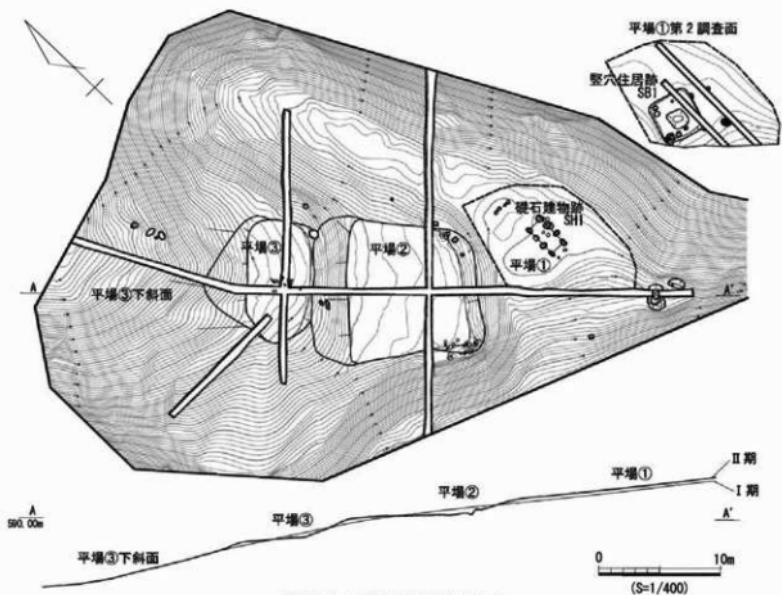
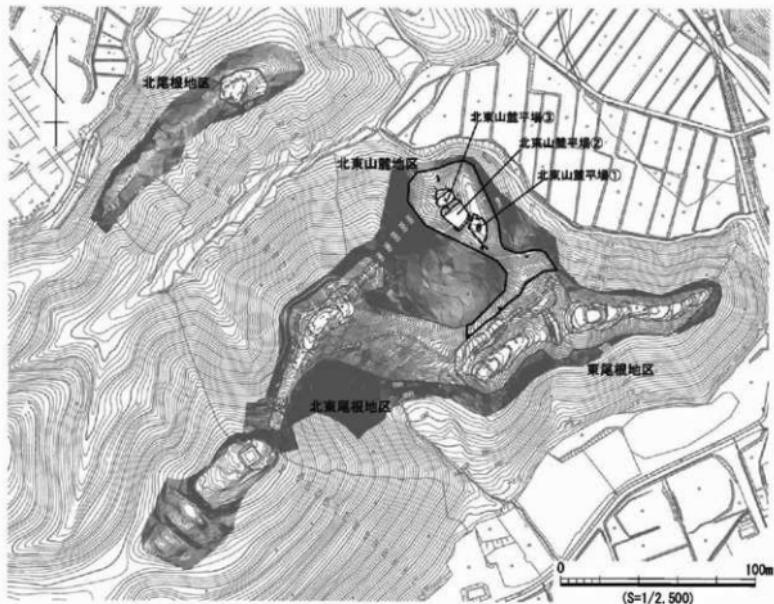
現地で行った層位の検討からは、北東山麓地区で検出した3つの平場の先後関係について確実なことを把握するに至らなかった。そこで、ここで改めて、出土遺物からそれらの形成過程を考察する。古代に属する可能性の高い出土遺物を対象とし、それらの接合関係に手掛かりを求めてみる。対象区域を6つに区切り、出土遺物間にみられる接合関係を第34表に示す¹⁾。

ここからは、まず、最上段に位置する平場①の包含層出土遺物は、上層の第1調査面（礎石建物跡検出面）、その下層の第2調査面（竪穴住居跡検出面）を問わず、下段の平場②及び平場③の包含層出土遺物とは全く接合しないことが分かる。両面とも遺物数が限られることから、これだけでは全く接合関係を持たぬと断定するのは早計かもしれない。しかしながら、平場①第2調査面で検出した遺構であり、数多くの遺物を包含する竪穴住居跡SB1についても同様の事象が認められることから、少なくとも平場①のうち第2調査面については、平場②・平場③との接合関係を持たないと判断してよいと思われる。加えて、竪穴住居跡SB1については、この遺構の位置する平場①の第1調査面・第2調査面包含層とさえも遺物接合関係が認められないことにも注目しておきたい。すなわち、廃絶

第34表 北東山麓地区の遺物接合関係

	平場①第1面	平場①第2面	SB1内	平場②	平場③	平場③下斜面
平場①第1面						○
平場①第2面						
SB1内						
平場②					◎	◎
平場③				◎	◎	◎
平場③下斜面	○		◎	◎	◎	

○：1例確認 ◎：複数例確認



第95図 山林寺院跡の検出地点

後の堅穴住居跡 S B 1 は、おそらく廃絶直後は別として、その後、形成された層によりバックされた状態におかれ、後世における遺物破片の流出は起きていないと判断されるのである。

ところで、平場の先後関係を見定める上で特に注目すべきなのは、堅穴住居跡 S B 1 出土遺物と平場③下斜面出土遺物との間に接合関係が認められる点である。先に記したように、堅穴住居跡 S B 1 の出土遺物は、平場①直下の平場②や、そこからもう一段下った平場③とは接合関係が認められない。にもかかわらず、それらよりさらに下方、すなわち、さらに隔たった区域の出土遺物との間で明瞭な接合関係が認められることとなる。これは一見、不可解に思えるが、意味ある偏りと捉えたい。つまり、平場②と平場③の開削時期を、堅穴住居の埋没後、すなわち住居跡からの遺物破片の流出が止まった後と考えれば、無理なく理解することができる。付け加えるなら、このことは遺物組成の観点からも裏付けを得ることができる。堅穴住居跡 S B 1 では、出土遺物が須恵器・土師器に限られるのに対し、平場②では土師質土器が、平場③では灰釉陶器が出土しており、明らかに新しい要素が認められるのである。

平場②と平場③の先後関係については、第3章で述べたように、先に下段の平場③を造成し、次いで上段の平場②を造成したことが土層観察により判明している。両者の出土遺物間に接合関係が認められ、なおかつ、特に大きな型式差が認められないことから、さほど時期を違はず相次いで造成されたと捉えておきたい。問題となるのは、平場①第1調査面、及びこの面で検出した礎石建物跡 S H 1 の成立時期を、平場②・平場③の造成時期と同時期と考えてよいか否かである。

この礎石建物の成立時期については、遺構内からの出土遺物には手掛かりを求めることができない。また、平場①第1調査面包含層の出土遺物が少なく、平場②・平場③包含層との遺物接合も確認できない。しかし、ここで検討対象としている北東山麓平場群の全域において、出土遺物の大半が古代に属するもので占められることと、礎石建物跡 S H 1 と堅穴住居跡 S B 1 の平面上の位置が重なるのは偶然の符合とは考え難く、礎石建物の建設に当たっては堅穴住居の存在を念頭に置いた選地がなされたとみるのが自然であることから、堅穴住居の埋没後、さほど大きな年代的隔たりを経ぬ頃に礎石建物が建てられたとするのが最も無理のない解釈であると判断する。さらに、この礎石建物に認められる特異な諸要素、すなわち、周辺に住居など他の施設が見当たらず単独で存在すること、住居や倉庫として使用するには小規模すぎること、祭祀具とされる雁股鐵が出土していること、下段の平場②・平場③などから平安時代頃の仏具類が出土していること、乗鞍岳を東方に望む眺望に恵まれた地点に位置すること、以上を総合的に捉え、この礎石建物についても、古代の祭祀や信仰にかかわる施設であった可能性が高いと判断する²⁾。平場②・平場③については、それらには施設の存在を窺わせる遺構が見出されない以上、その上段の主堂=礎石建物の前庭として設けられた平場であったとの推測が妥当と思われる。

以上を整理すると、北東山麓地区の古代の遺構は、大きく2つの時期に分けて捉えることができる。I期は、平場①に堅穴住居が築かれ、人が居住しつつ仏教にかかわる活動を行った時期である。住居跡内に残された遺物から、その年代は8世紀後期～9世紀初頭頃と判断される。II期は、堅穴住居埋没後、平場①に礎石建物が築かれ、平場①下方の斜面に平場②・平場③が開削され、領域が拡大されて活動が継続された時期である。出土須恵器に、無台碗（180・181）・有台碗（182）・有台盤（183・184）・脚付盤（185～188）など、堅穴住居では皆無であった新出器種がみられ、さらに灰釉陶器（196～200）もまとまった量が出土していることから、その年代は9世紀前半～10世紀代前半頃と推定さ

れよう³⁾。

3 山林寺院の立地と範囲

近年の古代寺院研究により、主に奈良時代後期から平安時代前期にかけての時期に、数多くの中小寺院が建立された事実が明らかとなリつつある。それらは、從来から広く知られていた白鳳寺院などとは異なり、瓦を葺かず、文献にも現れないが、建物の構造や位置関係、礎石の存在といった遺構についての知見から、あるいはまた、仏器形の土器や墨書き土器などの出土遺物から、寺院跡との認定に至っている。何より特徴的なのは、それらの多くが山林に営まれたということである。そのため、それらを指して「山林寺院」と呼ぶ慣行が定着している⁴⁾。

人里離れた山岳における僧の修行の場という、かつての一般的なイメージからはかけ離れるが、これまでに実際に確認された山林寺院跡の多くは、平地の集落から直に望むことはできないにせよ、至近の地点に立地する。当遺跡の北東山麓地区で検出した古代の遺構は、この立地条件を満たしていると言える。当遺跡の場合、選地に当たっては、さらに、飛騨国の中核地域であった高山盆地の縁辺部という好条件も考慮された可能性がある。飛騨国府の位置は未だ確定に至ってはいないものの、当遺跡は飛騨国分寺からは北西に3.5kmの地点に当たり、当時、飛騨国で最も栄えたであろう地域と恒常的な繋がりを持つことのできる範囲に位置している。里の民のみならず、国府や国分寺とも関わりを保ちつつ、修行を行った人々の活動拠点の一つがここにあったと捉えたい。

当遺跡の他地区に目を向けると、東尾根地区と北東尾根地区からも、量としては多くはないものの古代の遺物が出土している。これらは、古代における人々の営みが北東山麓地区にとどまらず高所にまで及んでいたことを示すものである。1例のみではあるが、遠く隔たった北東山麓地区と北東尾根地区との間での遺物接合が確認されていることも、北東山麓地区の施設が営まれた時期における人々の往来が、山中の広範囲に及んでいたことを物語っている⁵⁾。さらに、灰釉陶器に限定すれば、北東山麓地区よりむしろ東尾根地区と北東尾根地区において多数出土していることから、灰釉陶器の普及期には寺院関連施設の造営が高所の尾根にまで及んだ可能性も考えられる。北東山麓地区以外では山林寺院関連と断定できるような遺構は確認されていないとはいへ、今回の調査において山城跡の遺構と認識した平場のなかに、起源が古代にまで遡るものが含まれる可能性があると言わなくてはならないであろう。古代に山林寺院の一部として造成された平場が、戦国時代に山城の曲輪の一部として再利用されることも十分あり得る。ただし、寺院がそのまま中世にまで存続した可能性は、調査区全域において中世前期に属する出土遺物が極めて少ないとから、あまり高いとは言えない。

4 今後の展望

飛騨地域においては、山林寺院跡の確認例は未だ僅少である。高山盆地では確実な事例が知られておらず、当遺跡から比較的近い所では、わずかに、西ヶ洞廃寺跡（飛騨市古川町寺地）があるにすぎない⁶⁾。当地域における山林寺院跡の分布状況の解明は、今後の課題として残されている。

とはいへ、当遺跡が古代遺跡の集中域に位置していることは、重要視してよいであろう。当遺跡の南に隣接する野内遺跡B地区では鍛冶工房跡多数を含む平安時代の集落跡を検出しており⁷⁾、集落跡に隣接する野内遺跡C地区では、平安時代の水田跡を確認している⁸⁾。当遺跡北東山麓地区的下方に

位置する与島C地点遺跡では、須恵器・灰釉陶器の集積を検出している⁹⁾。さらに、当遺跡の北に隣接するウバガ平遺跡では、平安時代の土器焼成坑とみられる遺構を検出している¹⁰⁾。飛騨地域全城を見渡しても、これほど高密度かつ多様な古代の遺構を検出した事例は稀である。

今回の発掘調査においては、中世の山城跡を主な対象としたことから、通常は調査対象となりにくい古代集落の後背に位置する山林が広範囲にわたり調査区域に含まれるという、得難い機会に恵まれることとなった。存在の把握自体が困難な山林寺院跡を検出するという成果を収めることができたのは、その賜物である。重要なのは、結果として立地条件の異なる広域を面的に調査したことにより、当遺跡とその周辺地域が、平安時代における居住・生産・信仰といった人々の活動の全体像を発掘調査の成果から把握し得る、またとない好例となったことである。周辺遺跡のうち、野内遺跡C地区と与島C地点遺跡についてはまだ整理作業途上にあるが、当遺跡周辺の状況の全体像が明らかとなるにしたがって、今回検出した山林寺院の位置付けについても、より鮮明となることが期待される。

(小瀬忠司)

第5章 第2節 注

- 1) 掲載遺物各々の破片の出土地点については「遺物観察表」(125頁～133頁)にもれなく明記してあるので、参照されたい。
- 2) SH1の年代推定にかかわって補足しておく。この建物の場合、柱間寸法は時代を特定する手掛かりとはならない。SH1の柱間寸法は1尺=30cmを基準としているのは明らかである。当地域の当該期の他遺跡に目を向けてみると、白鳳時代から平安時代にかけての寺院跡とその周辺集落跡からなる太江遺跡（飛騨市古川町）においても、やはり1尺=30cmを基準にしており、少なくともSH1を古代の遺構と捉えることに矛盾はない。しかし、これは、近世に至る広い時代にわたる普遍的に使われた可能性の高い値であるので、この事実をもってSH1を古代の遺構と断ずるわけにはいかない。
- 3) 当遺跡では灰釉陶器の良好な個体が少ないと、飛騨地域では灰釉陶器の編年が確立していない現状を踏まえ、Ⅱ期の年代下限について明言するのは難しいと判断した。そのため、時期幅を最大限見ることとし、余裕を持って下限を下させている。
- 4) 山林寺院を巡る調査・研究動向については、以下の文献を参照した。また、久保智康氏からご教示を賜った。
 - ①久保智康1999『国府をめぐる山林寺院の展開—越前・加賀の場合—』『国宝と歴史の旅3 神護寺薬師如来像の世界』朝日新聞社
 - ②久保智康2001『古代山林寺院の空間構成』『古代』第110号、早稲田大学考古学会
 - ③上野川勝2006『山林寺院』『季刊 考古学』第97号、雄山閣
- 5) 遺物191の須恵器鉢は、大部分の破片が北東山麓地区の14Y・16Wグリッドで出土したが、そこから70mあまり離れ、36mあまり高い北東尾根地区20Wグリッドの出土破片と接合できた。
- 6) 西ヶ洞廐寺跡では、2基の鍛冶関連遺構と礎石建物跡などが検出されている。財團法人岐阜県教育文化財団文化財保護センター2006『西ヶ洞廐寺跡・中野山越遺跡・中野大洞平遺跡・大洞平5号古墳』を参照のこと。
- 7) 財團法人岐阜県教育文化財団文化財保護センター2009『野内遺跡B地区』。
- 8) 岐阜県教育委員会・財團法人岐阜県教育文化財団文化財保護センター2007『岐阜県新発見考古速報 2007』。
- 9) 財團法人岐阜県教育文化財団文化財保護センター2008『平成19年度 年報』。
- 10) 岐阜県文化財保護センター2010『ウバガ平遺跡・ウバガ平古墳群』。

第3節 三枝城跡の飛礫について

1はじめに

三枝城跡では、外敵に対して投げつける飛礫として蓄えられたとみられる集石遺構を9基検出した。分布は、東尾根地区に3基(S I 1~3)、北東尾根地区に6基(S I 4~9)である。本節では、これらの集石遺構に含まれる全273個体の飛礫について、個々の石を観察した結果をもとに、集石遺構ごとの傾向を分析することを通して、三枝城の機能等について考察を加える¹⁾。

2 飛礫の分析

(1) 石材

石材については、対象とする273個体の大半が濃飛流紋岩であることが判明した。濃飛流紋岩以外の石材は1割にも満たない。濃飛流紋岩以外の石材に特化する集石遺構もなく、石材については遺構ごとの比較検討に値する有意な差異を見出すことはできなかった。

(2) 石の採集地

肉眼観察により、飛礫を川原石と山石に分類した。角が丸く、平滑化した表面が残っているものを川原石とし、角が残り、ごつごつしているものを山石とした。この分類は便宜上の分類であり、正確なものとは言い切れない。例えば、川原石であっても、表面がすべて割れて内部だけが残れば山石の特長を残してしまうし、山石であっても風化の具合で川原石のように見えることもある。しかし、およその傾向を把握するには有効な手法と判断する。

分類の結果、全体でみると川原石が約7割、山石が約3割となり、川原石優位である。当遺跡は山上に位置しており、川原石は自然の状態では存在しない。よって、ここで見つかった川原石は川原から意図的に集められたものである。第2章第1節で示したとおり、当遺跡の南を流れる川上川は、流域に広く濃飛流紋岩帯を持つため、最も近い川上川河畔から手頃な石を集めたと考えるのが自然であろう。

もう少し詳しく分析を加える。東尾根地区では、3基の集石遺構すべてについて明確に川原石優位で、構成比91.7%である。それに対し、北東尾根地区では6基の集石遺構のうち川原石優位が4基にとどまる。S I 7・S I 8では明らかに山石優位となっており、全体として川原石の構成比は54.3%に下がっている。このことについては後に考察を加える。

(3) 石の大きさ

次に、集石を構成する石の大きさについて重量を指標に分類した。石材の大半が濃飛流紋岩であることから、石材ごとの密度の差は小さいと考えられる。よって、石材の重量と見た目の大きさは概ね比例していると考えてよいであろう。個々の石の重量を測定し階級分けを行い、その後、全体が個数で3等分されるように分け、600gまでを小型、1000gまでを中型、それ以上を大型とした。そして各遺構を、小型卓越型・中型卓越型・大型卓越型・重量分散型に分類した。

分類の結果、東尾根地区では中型卓越型と小型卓越型のみであるのに対し、北東尾根地区では大型卓越型・小型卓越型・重量分散型が存在することが判明した。

(4) 石の加工

次に個々の石が、自然石であるのか、何らかの加工を施しているかどうかについて観察した。観察は肉

第35表 飛礫の重量別個体数

造構名	個数	上段: 個体数(個) 下段: 構成比(%)																最大重量 最小重量 (g)
		0~ 400g	401~ 500g	501~ 600g	601~ 700g	701~ 800g	801~ 900g	901~ 1000g	1001~ 1100g	1101~ 1200g	1201~ 1300g	1301~ 1400g	1401~ 1500g	1501~ 1600g	1601~ 1700g	1701g~		
SI1 (東曲輪I)	44	4	4	5	6	7	2	5	2	3	1				1	1	3	220.0 94.5
		9.1	9.1	11.4	13.6	15.9	4.5	11.4	4.5	6.8	2.3				2.3	2.3	6.8	
SI2 (東曲輪II)	59	15	8	11	7	6	6	1	1	1					1	2	2	3600.0 149.5
		25.4	13.6	18.6	11.9	10.2	10.2	1.7	1.7	1.7					1.7	3.4		
SI3 (東曲輪III)	6		1	2	3													686.0 430.7
			16.7	33.3	50.0													
東尾根地区計	109	19	13	18	16	13	8	6	3	4	1				2	1	5	
		17.4	11.9	16.5	14.7	11.9	7.3	5.5	2.8	3.7	0.9				1.8	0.9	4.6	
SI4 (北東曲輪)	79	3	7	9	7	5	6	2	6	8	7	4	3	1	4	10	2900.0 308.7	
		3.8	8.9	11.4	8.9	6.3	7.6	2.5	7.6	6.3	8.9	5.1	3.8	1.3	5.1	12.7		
SI5 (北東曲輪)	7	2								1	1					1	2	2600.0 352.4
		28.6								14.3	14.3				14.3	28.6		
SI6 (北東曲輪)	16	1			1	3	1	1	2	2	1				1	3	220.0 348.6	
		6.3			6.3	18.8	6.3	6.3	12.5	12.5	6.3				6.3	18.8		
SI7 (北東曲輪)	14	4		3	1					5	1							1285.0 121.6
		28.6		21.4	7.1					35.7	7.1							
SI8 (北東曲輪)	38	21	5	2	2	1	3	1	1	1	1				1	1	1	3850.0 19.2
		58.3	13.2	5.3	5.3	2.6	7.9	2.6	2.6	2.6	2.6				2.6	2.6		
SI9 (北東斜面平場群)	10	1	2	1		1	2	2									1	231.0 10.0
		10.0	20.0	10.0		10.0	20.0	20.0										195.1
北東尾根地区計	164	32	14	15	11	9	9	8	8	14	11	5	3	1	7	17		
		19.5	8.5	9.1	8.7	5.5	5.5	4.9	4.9	8.5	8.7	3.0	1.8	0.8	4.3	10.4		

第36表 飛礫の種類・加工法

造構名	個数	石の種類(上段:個、下段:%)			加工(上段:個、下段:%)			打ち欠き
		川原石	山石	不明	担当	分割	打ち欠き	
SI1 (東曲輪I)	44	38	6		7	2		
		86.4	13.6		15.9	4.5		
SI2 (東曲輪II)	59	56	3		9			2
		94.9	5.1		15.3			3.4
SI3 (東曲輪III)	6	6						
		100.0						
東尾根地区計	109	100	9		16	2		2
		91.7	8.3		14.7	1.8		1.8
SI4 (北東曲輪)	79	59	19	1	14	3		8
		74.7	24.1	1.3	17.7	3.8		10.1
SI5 (北東曲輪)	7	7			2			
		100.0			28.6			
SI6 (北東曲輪)	16	13	2	1				
		81.3	12.5	6.3				
SI7 (北東曲輪)	14	1	12	1		2		
		7.1	85.7	7.1		14.3		
SI8 (北東曲輪)	38	4	34			11		
		10.5	89.5			28.9		
SI9 (北東斜面平場群)	10	5	3	2	1			1
		50.0	30.0	20.0	10.0			10.0
北東尾根地区計	164	89	70	5	17	16		9
		54.3	42.7	3.0	10.4	9.8		5.5
合計	273	189	79	5	33	18		11
		69.2	28.9	1.8	12.1	6.6		4.0

眼で行った。大半が自然石であり、何らかの加工の可能性が考えられるものは2割程度にとどまっている。加工された石が比較的多いのは、山石優位の集石遺構ではS I 8であり、川原石優位の集石遺構ではS I 4である。加工の可能性がある例として、以下の3種類がある²⁾。

まず1つ目は、「指当部加工」である。これは、遺物番号48のように、握ったときに指があたる部分を産ませて指をフィットしやすくする加工、ないしは指が当たった痕跡である。主に、川原石に対して行われ、全体で33個体認められる。このなかには、加工ないし指当痕跡というよりは、飛礫としての使用にかなう自然の産みを利用した可能性のあるものも含まれる。これに該当するものとして、遺物番号40などがある。

2つ目は、「分割」である。これは遺物番号105の上端部のように、石の一部を他の石にぶつけるなどして、手頃な大きさに分割するものである。山石の多い北東尾根地区の集石遺構で多くみられる。該当するものは全体で18個体と多くはないが、自然の割れと区別の不可能な非直線的な割れまで含むならば、山石優位の集石遺構ではかなりの数に達する。「分割」が最も多く、最も石の小型化が進んでいるS I 8では大半が山石で構成されているのは、山石の大きさ調節の容易さを示した好例であろう。

最後は、「打ち欠き」である。遺物番号91のようにノミ状の工具で直線的に削り込んだ痕跡が残るもの、遺物番号49のように、打ち欠きによる産みがみられるもの、遺物番号106のように列状の産みが並ぶものなどがみられる。

3 総まとめ

上記のような観点から比較を行った中で目につくのは、東尾根地区と北東尾根地区的差異である。まず、東尾根地区では3基の集石遺構すべてで川原で採集した川原石優位であるのに対して、北東尾根地区では山で採集した山石優位の集石遺構もみられる点に注目したい。

川原石は、川原に出向いて無数の石の中から適したものを集めてくるため、収集した時点で武器として即戦力に近いものになる。ただし、川原に出向く時間と運搬の手間がかかる。一方、山石はその逆である。北東尾根地区的山石優位の集石遺構で直線的分割が多くみられたことが物語るように、採集してから即戦力の武器として加工するには手間がかかる。ただし、採集場所と集積場所が近接するため、運搬の手間は川原石に比べて少ない。激流にさらされてきた川原石に比べて、形が不揃いで、軟らかいものも含まれることとなろうが、山石が容易に手に入る区域であれば、山石が優位になることもあり得る。

三枝城跡の場合、東尾根地区的最高点は標高604.6mであるのに対し、北東尾根地区的うち集石遺構の存在する区域の標高は630.8mである。麓の平坦地と山地の境界付近が標高570mくらいであるので、東尾根地区的場合には、川原から石を運ぶのは特に負担の大きな作業とは思えない。このような条件から、東尾根地区では山石を割って飛礫とするまでもなく、川原石を運んで飛礫としたと考えられる。他方、より川原から遠い北東尾根地区では、川原石のみに依存するわけにはいかず、山石の飛礫が混在することとなったのであろう。

次に、飛礫の大きさについては、東尾根地区では小型から中型の飛礫が中心を占め、1,000g以上の大型個体は16個体(14.7%)にとどまっているのに対し、北東尾根地区では小型から大型まで分散している。さらに、S I 4～6にみられるように、東尾根地区よりも川原から遠いはずの北東尾根地区の方がむしろ大型の川原石を多く選んでいるのは興味深い。このことに合理的な解釈を施すのは難しい。しかし、ここ

第37表 飛礫分析結果

地区	遺構名	個数	石材	主な石種	主なサイズ	主な加工法
東尾根	S11(東曲輪I)	44	磨飛流紋岩44	川原石	中型	指当
	S12(東曲輪II)	59	磨飛流紋岩58・砂岩1	川原石	小型	指当
	S13(東曲輪II)	6	磨飛流紋岩6	川原石	—	—
北東尾根	S14(北東曲輪)	79	磨飛流紋岩71・花崗岩系5・砂岩2・安山岩1	川原石	大型	指当
	S15(北東曲輪)	7	磨飛流紋岩7	川原石	大型	指当
	S16(北東曲輪)	16	磨飛流紋岩16	川原石	大型	—
	S17(北東曲輪)	14	磨飛流紋岩14	山石	分散型	分割
	S18(北東曲輪)	38	磨飛流紋岩32・流紋岩2・凝灰岩2・砂岩2	山石	小型	分割
	S19(北東斜面平場群)	10	磨飛流紋岩8・不明2	川原石	—	—

で指摘しておきたいのが、石の採集地、大きさ、加工といった、ここで分析対象とした飛礫の属性のすべてにおいて、北東尾根地区の方が東尾根地区よりも多様であるという事実である。北東尾根地区の方が城の主郭により近く、より多様な場面を想定して防御に当たる必要があった結果、このような現象が生じたと考えてよいのではないだろうか。

最後に、北東尾根地区の様相に目を向けておきたい。北東尾根地区には6基の集石遺構があるが、川原石優位のS14が構成個体数、密度ともに群を抜いている。曲輪の先端中央に位置し、北西・北東・南東の3方向いずれからの敵に対しても対応できる、北東尾根の守りの中心というべき存在である。この地区には、このほか、川原石優位の集石遺構としては、北西方向の敵に備えるS19、曲輪の南西端に位置し北西側と南東側それぞれに備えるS15とS16があり、他方、山石優位のS17とS18が、S14の近接地点に位置している。これはS14を補完することをねらった配置と捉えたい。ところで、S14・S18は、川原石優位、山石優位それぞれのグループの中で、加工された石の割合が最も高い。S14は平場d、S18は平場cにあり、いずれも北東曲輪の中堅城とみなすべき区域に位置していると言えることができる。石が加工されるには人の手が必要であり、この辺りには川原石を集積した時期にも山石を集積した時期にも加工する人物がいたこととなる。この区域に人々が常駐したこと示す遺物は出土していないとはいっても、臨時に配置された可能性は高いであろう。

飛礫は使い捨ての武器である。そのため、加工は必要最小限にしか施さないものの、それを相手に対して投げるとときは身の危険が迫った緊迫した場面である。投げやすいもの、コントロールしやすいものを多く揃えておきたいものである。平場cと平場dから階段状の北東斜面平場群をたどれば、北東方向の眺望も得られる。見張りをしながら、自分の命を守ることになるかもしれない投石用の飛礫をより使いやすい大きさや形に加工する、そんな営みが行われた場所ではなかろうか。

(中澤正樹)

第5章 第3節 注

- 1) 飛礫の可能性が高い石でも、集石遺構に属さないものは考察対象から除外した。また、集石遺構であっても、飛礫の集積とみなすことのできないS110とS111もまた、除外してある。
- 2) 石は人が手を加えなくても個々の特性や気候条件に応じて多様に風化や分割が進む。よって、今回、加工ありと分類したものには、人為的な加工によるものではないものが含まれる可能性があることをご承知置き願いたい。

第37表 飛礫分析結果

地区	遺構名	個数	石材	主な石種	主なサイズ	主な加工法
東尾根	S11(東曲輪I)	44	磨飛流紋岩44	川原石	中型	指当
	S12(東曲輪II)	59	磨飛流紋岩58・砂岩1	川原石	小型	指当
	S13(東曲輪II)	6	磨飛流紋岩6	川原石	—	—
北東尾根	S14(北東曲輪)	79	磨飛流紋岩71・花崗岩系5・砂岩2・安山岩1	川原石	大型	指当
	S15(北東曲輪)	7	磨飛流紋岩7	川原石	大型	指当
	S16(北東曲輪)	16	磨飛流紋岩16	川原石	大型	—
	S17(北東曲輪)	14	磨飛流紋岩14	山石	分散型	分割
	S18(北東曲輪)	38	磨飛流紋岩32・流紋岩2・凝灰岩2・砂岩2	山石	小型	分割
	S19(北東斜面平場群)	10	磨飛流紋岩8・不明2	川原石	—	—

で指摘しておきたいのが、石の採集地、大きさ、加工といった、ここで分析対象とした飛礫の属性のすべてにおいて、北東尾根地区の方が東尾根地区よりも多様であるという事実である。北東尾根地区の方が城の主郭により近く、より多様な場面を想定して防御に当たる必要があった結果、このような現象が生じたと考えてよいのではないだろうか。

最後に、北東尾根地区の様相に目を向けておきたい。北東尾根地区には6基の集石遺構があるが、川原石優位のS14が構成個体数、密度ともに群を抜いている。曲輪の先端中央に位置し、北西・北東・南東の3方向いずれからの敵に対しても対応できる、北東尾根の守りの中心というべき存在である。この地区には、このほか、川原石優位の集石遺構としては、北西方向の敵に備えるS19、曲輪の南西端に位置し北西側と南東側それぞれに備えるS15とS16があり、他方、山石優位のS17とS18が、S14の近接地点に位置している。これはS14を補完することをねらった配置と捉えたい。ところで、S14・S18は、川原石優位、山石優位それぞれのグループの中で、加工された石の割合が最も高い。S14は平場d、S18は平場cにあり、いずれも北東曲輪の中堅城とみなすべき区域に位置していると言えることができる。石が加工されるには人の手が必要であり、この辺りには川原石を集積した時期にも山石を集積した時期にも加工する人物がいたこととなる。この区域に人々が常駐したこと示す遺物は出土していないとはいっても、臨時に配置された可能性は高いであろう。

飛礫は使い捨ての武器である。そのため、加工は必要最小限にしか施さないものの、それを相手に対して投げるとときは身の危険が迫った緊迫した場面である。投げやすいもの、コントロールしやすいものを多く揃えておきたいものである。平場cと平場dから階段状の北東斜面平場群をたどれば、北東方向の眺望も得られる。見張りをしながら、自分の命を守ることになるかもしれない投石用の飛礫をより使いやすい大きさや形に加工する、そんな営みが行われた場所ではなかろうか。

(中澤正樹)

第5章 第3節 注

- 1) 飛礫の可能性が高い石でも、集石遺構に属さないものは考察対象から除外した。また、集石遺構であっても、飛礫の集積とみなすことのできないS110とS111もまた、除外してある。
- 2) 石は人が手を加えなくても個々の特性や気候条件に応じて多様に風化や分割が進む。よって、今回、加工ありと分類したものには、人為的な加工によるものではないものが含まれる可能性があることをご承知置き願いたい。

第4節 三枝城の構造について

1 はじめに

最後に、今回の調査成果をもとに、山城としての三枝城の構造について考察し、本書のまとめとする。過去の調査成果も踏まえ、調査区外であった主郭や主郭の西側の区域も視野に入れ、現研究段階における三枝城の全体像を提示したい。

2 調査成果のまとめ

(1) 東尾根地区

東尾根地区は山の東端に半島上に突き出た尾根上に位置する。東西に長い2群の曲輪が構築されている。曲輪は、尾根の鞍部を掘削した堀切によって、東曲輪I・東曲輪IIの2つに分けられる。このうち東に位置する東曲輪IIは、高山市の調査における「二ノ郭」に当たる¹⁾。

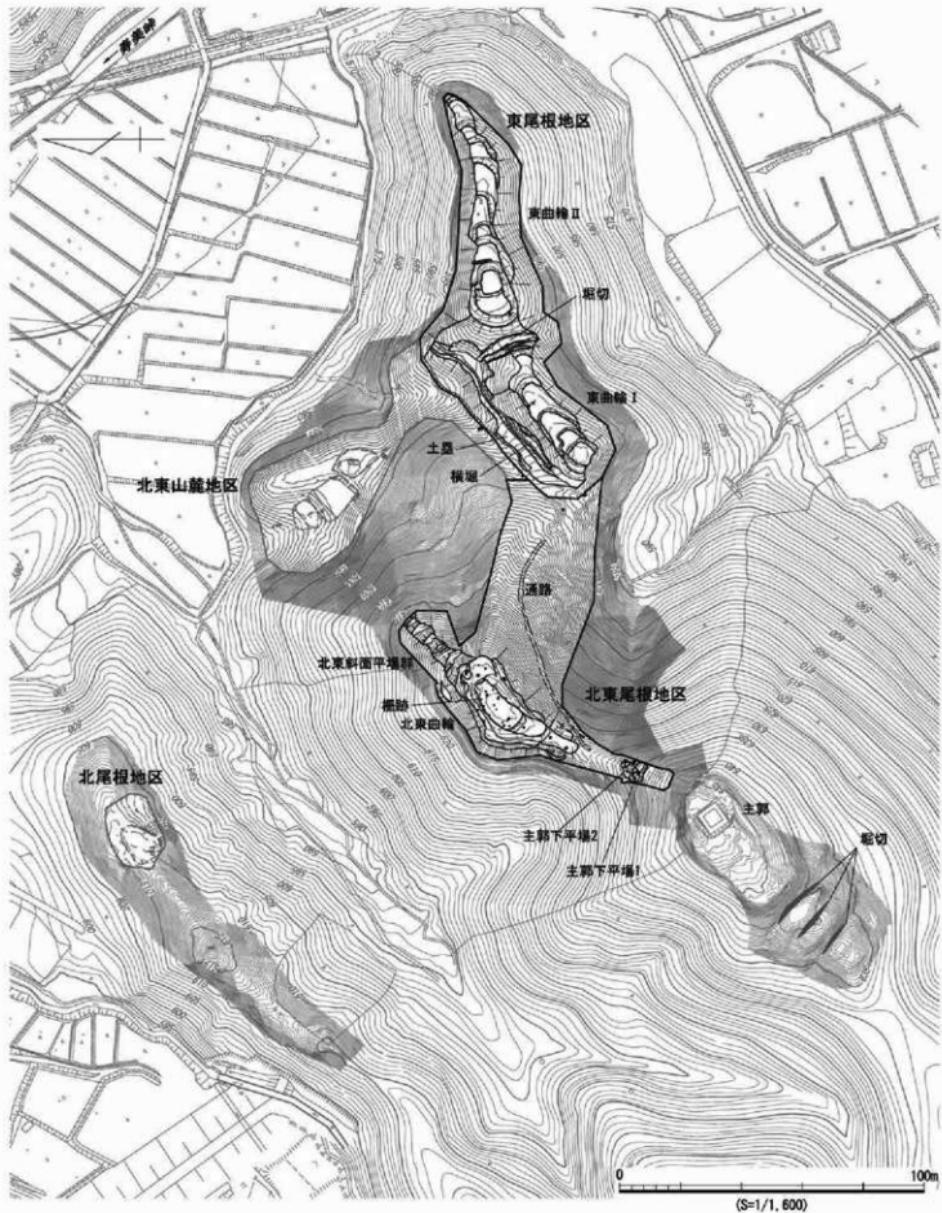
東曲輪を二分する堀切は、底部が幅広でさほど急峻な造りではないものの、防御施設として十分な機能を持ったとみられ、山城に伴う遺構と捉えておきたい。堀切北側には平場が接続しており、尾根を超えて北側斜面と南側斜面との間を行き来する際の通路としての使用も想定されよう。

東曲輪Iと東曲輪IIは、ともに小さな平場の連続により形成されている(東曲輪I = 平場I a ~ I e、東曲輪II = 平場II a ~ II i)。このうち平場II cにおいて一段上の平場II bからの雨水等を排水したと考えられる溝跡を確認したものの、多くの山城跡で見出される櫓などの防御施設の痕跡を確認することはできなかった。投石用の飛礫とみられる川原石の集積は3か所確認した。また、東曲輪Iと東曲輪IIの間に認められる堀切の北には、曲輪としての機能も果たしたと考えられる平場(堀切北平場)が造られている。これは北側からの攻撃に対して備えたものとみられる。

東曲輪Iでは、北側に横堀と土塁を配置している。横堀と土塁をセットで構築することで東曲輪Iの横堀の斜面に造られた切岸を際だたせ、北側に対する防御性を高めたと考えられる。他方、東曲輪IIでは、平場の北端を削ったり、盛土したりすることで急峻な切岸を造っている。平場II cでは、この区域のピークに当たる平場II bの北側まで平坦面が延び、帯曲輪状になっている。このような造作も、北側から侵入しようとする者に対する防御と言える。

以上のように、東曲輪はその全体の構造から、北側からの攻撃に備えた曲輪であったと考えられる。しかしながら、敵への備えがさほど厳重であるとは言えず、むしろ監視所としての役割が期待された場所であったと捉えるべきかもしれない。平場II bや平場II cからは東方から西方にかけて高山盆地を一望できるのみならず、北方の寿美峠への登り口をも見渡すことができる。三枝城の北側を通る寿美峠へと向かう街道を監視するには都合のよい立地である。直下の通行人を監視するだけでなく、寿美峠を越えて古川盆地からやって来る者をいち早く確認し、主郭に伝えるという重要な役割を東曲輪IIが果たしたと考えられる。あるいはまた、街道を通過する者からは東曲輪IIの様子がよく見えることから、その存在が通行人を威圧する効果を持ったこともあり得る。

ただし、曲輪のどの平場にも、戦国時代に人が日常的に生活した痕跡はみられず、東尾根地区に居住施設の存在を想定することは難しい。したがって、東曲輪I・東曲輪IIは、軍事的に緊張が高まった際に臨時に機能した曲輪であった可能性が高いであろう。



第97図 三枝城跡関連遺構の配置

(2) 北東尾根地区

北東尾根地区は、今回は調査対象外であった三枝城主郭の北東に隣接する地区である。主郭の手前は急峻な切岸になっており、容易に到達することを妨げている。主郭切岸の下には、やせた尾根上に2段の平場がある（主郭下平場）。ここで検出した焼土堆積遺構のなかには、放射性炭素年代測定の結果、山城の存続時期に合致するとみられるものが含まれ、東の高山盆地に向けての狼煙場が設けられていた可能性がある。

主郭下平場から、やせ尾根を下った先の小ピークとその周辺に、北東曲輪が存在する。尾根線上の4つの平場（平場a～d）のほか、それらを取り巻く帶曲輪（北帶曲輪・南帶曲輪）、それに斜面上の平場（平場a下小平場）により構成される。北東曲輪の最上面である平場cにおいて、柵跡とみられる遺構を確認した。柵跡は平場cの北縁辺部に存在する。北東曲輪のさらに北東には、尾根線に沿って階段状の平場群（北東斜面平場群）が存在する。平場の一部は尾根線よりも北にずれて存在しているが、尾根線の南にずれている平場は存在しない。これらの配置を見る限りでは、北からの攻撃への備えを重視していたと捉えることができる。また、多くの平場を連ねているのは、防御の機能だけでなく、死角を少なくして監視所としての機能を充実させるねらいがあったのかもしれない。

この地区には飛縄とみられる石の集積が6か所存在する。前節で述べたとおり、東尾根地区とは様相が異なり、川原石優位型と山石優位型が混在し、大きさや加工法も多様である。東尾根地区に比べれば、より厳重な備えを施していたとの印象を受ける。

北東尾根地区的個々の平場は狭く、建物の存在を窺わせる遺構は検出されなかった。中世における人々の活動を窺うことのできる遺物として、灯明皿や古瀬戸系施釉陶器が出土したものの、山城での常駐を想定できるような量が出土したわけではない。東曲輪と同様、軍事的に緊張が高まった際に、臨時に機能した施設であった可能性が高いであろう。ただし、主郭のすぐ手前に位置する地区だけに、特に監視所としての役割が重視されたとみられる東尾根地区に比べ、主郭を防護する機能が重視されたと考えられる。

(3) 北東山麓地区

3段の平場を検出したが、防御的機能はみられず、山城に関連する施設の痕跡は認められなかった。前節で紹介したとおり、出土遺物の大半は古代に属するものであり、仏具が出土していることなどから、平安時代頃の信仰や祭祀に関わる場であった可能性が高い。

(4) 北尾根地区

高山市の調査における三枝城「五ノ郭」に当たるが、今回の調査では、城郭と関わるような遺構・遺物は全く確認されなかった。

3 主郭と各曲輪の関わりについて

今回は調査区外であった主郭は、城内の最高所、北東尾根地区的主郭下平場からさらに15m登り切った地点に位置する。主郭の西側に延びる尾根は、三重の堀切によって断ち切られており、西側からの敵に対する防御は厳重を極めている。

今回、調査を行った主郭東側全体をみた場合、主郭と各曲輪間の連携が弱く、東曲輪・北東曲輪それぞれが独立しているような印象を受ける。三枝城の主郭を東側から攻撃しようとした場合、麓の平

坦地と主郭との間に急斜面が立ちはだかり天然の要害の様相を呈している。その傾斜は特に南側斜面で大きい。しかし、いくつか比較的傾斜の緩やかな攻撃ルートが想定できる。最も有力なルートは、北東山麓地区と東尾根地区の間の谷を北から登るルートである。このルートから侵入すると、まず、東曲輪の堀切北平場にたどり着く。南に進むとそのまま堀切に、主郭を目指して西に向かおうすると、土壘と横堀に阻まれ動きが封じ込まれる。3つの投石用飛碟の集積も堀切や横堀に近い平場上に配されている。東尾根地区的曲輪は、このルートからの侵入に備えた造りであると言える。また、東曲輪IIの東端に比較的緩い傾斜で麓の平坦地につながる部分もある。ここから東曲輪IIに攻め込まれた場合でも堀切に行く手を阻まれることとなり、同じ結果となる。一方、東曲輪I南からの侵入に対しては脆弱と言わざるを得ない。東曲輪の防御の主要部は東曲輪Iであり、東に突き出た東曲輪IIは、東曲輪Iから死角となる北側の寿美峠の状況を観察する見張り場の役割があったと考えられる。

北東曲輪については、まず、北側から侵入した敵が、比較的緩やかな斜面を経て北東曲輪に到達する可能性がある。北東曲輪では柵跡とみられるピット列が北側だけに存在するなど、北に備えた造りとなっているのは、これに備えたものとみられる。次に、東曲輪との関係からは、東曲輪との標高差が26mあるものの、東から登ってくるルートが現在の通路と同じと仮定した場合、東曲輪を突破した敵は北東曲輪を経由しなくとも直接主郭下平場にたどり着いてしまう。東曲輪と主郭下平場の間には比較的長い距離があるとはいえ、突破されれば一気に主郭に接近される。にもかかわらず、自然地形に頼るのみで、意図的に防御力を高めた痕跡がみられない。飛碟の集積が東曲輪からの通路にも対応できる位置に配されているものの、主郭直下に位置し主郭を守る最後の曲輪としては、東曲輪を突破して来た敵や、南斜面を登って来た敵に対してやや脆弱と言える。東曲輪の防御力や南急斜面の自然の防御力を信じて、北側からの敵に対して優先的に備えたのであろうか。

なお、主郭下平場には、狼煙場としての機能を想定できる。焼土堆積遺構は主郭下平場以外にも存在するが、ここには大規模な焼土痕が集中している。東から南東方向へ開けているこのエリアが、寿美峠の動きに関して察知した情報を高山盆地東部に位置する三仏寺城や鍋山城などに伝える役割を果たしたことは想像に難くない。

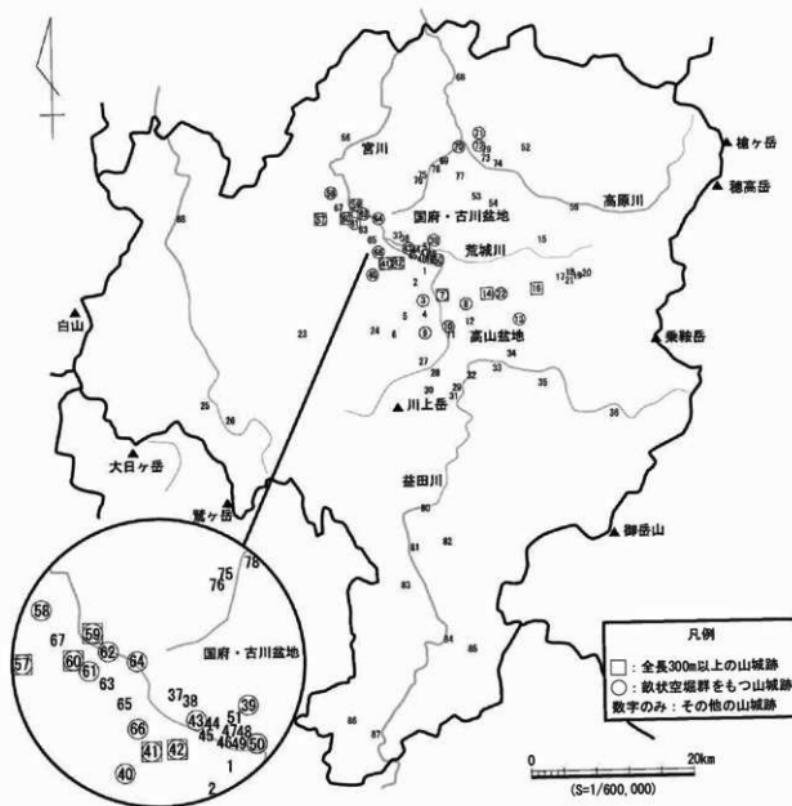
4 飛驒地域における山城構造の傾向と三枝城との比較

最後に、過去の研究成果と合わせ、飛驒の山城全体について概観し、飛驒の山城の傾向から三枝城の位置づけを探る。

中世は合戦の時代であった。前期にはまだ騎馬による野外戦が合戦の主流であったが、後期になると、戦法・戦術も変化し、いたる所に防備の施設が築かれることになる。その防備施設の代表が山城であった。岐阜県教育委員会が行った中世城館総合調査によると、飛驒地区では、現地調査の結果、現存している遺構から城館跡と確認できた箇所が96か所あり、そのほとんどが戦国時代またはそれ以前に築かれたものであるとされている²⁾。

周囲を急峻な山岳に囲まれ、日本有数の豪雪地帯でもあった飛驒国は、豊臣秀吉による天下統一がほぼ固まった1585（天正13）年になるまで、本格的に外部勢力に侵略されことがなかった。このような環境の中、飛驒の中世城館は、周囲の中世城館とは異なった展開をすることになる。

飛驒国は、1585（天正13）年、金森長近が三木討伐に侵攻するまで外部勢力がほとんど侵入せず、土



1. 中切城跡	16. 森ヶ城跡	31. 牛臥山城跡	46. 境の峰城跡	61. 池之山城跡	76. 政元奥城跡
2. 三枝城跡	17. 笠根城跡	32. 那島城跡	47. 白米(蓑輪)城跡	62. 小島城跡	77. 拿松城跡
3. 冬頭城跡	18. 板殿城跡	33. 甲城跡	48. 木追砦跡	63. 真岩(鞍ヶ岩)城跡	78. 下山田城跡
4. 中山城跡	19. 和田原(北丘尼賀)城跡	34. 青屋和田城跡	49. 光寿庵城跡	64. 下北城跡	79. 岩ヶ平城跡
5. 山田城跡	20. 入道洞城跡	35. 中島(黒川)城跡	50. 甲山城跡	65. 百足(垣内山)城跡	80. 中根(大ヶ洞)城跡
6. 畑佐城跡	21. イビキの城跡	36. 鮎多山城跡	51. 萩輪黒洞城跡	66. 古川(船)城跡	81. 桜谷城跡
7. 三仏寺城跡	22. 保木ヶ尾城跡	37. 平城跡	52. 戸高城跡	67. 城見寺城跡	82. 炙坪城跡
8. 鶴山城跡	23. 岩田城跡	38. 大洞砦跡	53. 田谷城跡	68. 土(鬼ヶ)城跡	83. 楠尾山城跡
9. 松倉城跡	24. 牛首城跡	39. 梨打城跡	54. 堂殿城跡	69. 林林(玄蕃)城跡	84. 下呂森城跡
10. 高山城跡	25. 向牧戸(牧戸)城跡	40. 高堂城跡	55. 孝生茂城跡	70. 八幡山城跡	85. 宮地城跡
11. 石光山砦跡	26. 新瀬城跡	41. 寺洞砦跡群	56. 忍城跡	71. 高麗面防城上部遺構	86. 舟野城跡
12. のぞき城跡	27. 山下城跡	42. 広瀬(田中)城跡	57. 小屋利城跡	72. 高原腹防城跡	87. 保木山城跡
13. 岩井(和田)城跡	28. 白越城跡	43. 山崎城跡	58. 本堂山城跡	73. 洞(麻生野)城跡	88. 萩町城跡
14. 麓崎城跡	29. 久々野城跡	44. 中山城跡	59. 野口城跡	74. 石神(舟、二越)城跡	
15. 五味原城跡	30. 切手(城側)城跡	45. 薮ヶ平砦跡	60. 向小島城跡	75. 政元(山田)城跡	

第98図 飛驒地域の山城の分布

豪たちがぶつかる小競り合い程度の合戦しか行われず、しかも南部の益田郡・大野郡は三木氏以外に突出した土豪は現れなかった。この結果、城郭に立て籠もる籠城戦もあまり行われず、また、外部勢力がもたらす新技术も導入されなかった。従って城郭の縄張りは発達する必要もなく、巨大化して敵からの攻撃を防ぐ必要性もなかったのである。

それに対して、飛騨の霸権を最後まで争った、江馬氏と三木氏が激突した飛騨北部、特に国府・古川盆地周辺の城郭は、城郭の巨大化と縄張りの発達が著しい。小鷹利城・小島城・蛤城・野口城・向小島城・広瀬城・高堂城・梨打城と飛騨の名城はほとんどが吉城郡に集中する。最後まで生き残った飛騨の二大勢力（江馬氏と三木氏）が、財力と当時の最新技術を導入して城郭を大改修して飛騨の霸権を争い、最終的には金森長近の飛騨侵攻に備えて国運を賭けて改修したのだから当然と言えよう¹⁾。

三枝城は高山盆地の北西端に位置する。今回の調査範囲外にある主郭とその西側を含め、比較的広範囲にひろがるもの、縄張りは発達していない。また、防御性の観点からも、洗練されているとは言えない。縄張りがあまり発達しない飛騨南部の特徴をもつ城に位置付けられよう。三木氏に関係のある城は、三木氏の手によって畝状空堀群が作られることが多い。飛騨平定前の三木氏関連の城ばかりでなく、飛騨平定後も、金森長近の侵攻に備えて古川盆地の城を中心に畝状空堀群を構築している。三枝城は三木氏にゆかりのある城と考えられるにもかかわらず、そうした構造がみられない。

戦国時代の山城はそれぞれが独立して存在するのではなく、有機的な連携を持っていた。武将たちは自分の支配領域を拡大するたびに、それまでその地にあった山城と新たに築いた山城とを組み合わせ、支配の網を張ったのである。そうした山城のネットワークは当然、飛騨にもあったはずである。三枝城の場合は、高山盆地内部の城との連携が考えられる。高山盆地の北の最前線に位置し、寿美峰の動きを監視し、情報を発信する役割を果たしたことが想定される。三枝城より南東方向には、冬頭城・鮎崎城・三仏寺城・鍋山城が見渡せることと、三枝城の主郭平場下に狼煙場の可能性がある焼土痕が多数存在したことは、単なる偶然ではないであろう。また、東曲輪も北東曲輪も防御性の観点からは脆弱性がみられるにもかかわらず、寿美峰及び瓜巣街道の監視に関しては、死角を作らないよう尾根先まで平場を設けていることは見逃せない。三枝城は、城下を通る街道を監視し、北側の寿美峰からの敵に備えるための山城であったと考えられる。

三木氏が江馬氏を滅ぼして飛騨を平定する際には、国府・古川盆地まで攻め入り、荒城川が最前線となった。もし、江馬氏の勢力がより強大であったならば、三枝城近くの寿美峰が最前線となつたかもしれない。その場合、三枝城は、より大きな意味を持つ城として、後世にその名を残したであろう。

（中澤正樹）

第5章 第4節 注

- 1) 高山市教育委員会1999『三枝城跡発掘調査報告書』。
- 2) 岐阜県教育委員会2005『岐阜県中世城館跡総合調査報告書第4集(飛騨地区・補遺)』による。飛騨の中世城館を巡る近年の研究動向については、特に同書に収録された佐伯哲也氏の論考「飛騨国における中世城館の概要」に詳しい。
- 3) 注1) 文献のほか、以下の文献を参照した。
谷口研語2007『飛騨 三木一族』新人物往来社
森本一雄1987『定本 飛騨の城』郷土出版社

引用・参考文献

- 愛知県史編さん委員会2007『愛知県史 別編 窯業2 中世・近世 濑戸系』
- 石川県立埋蔵文化財センター1982『八田中遺跡』
- 石川県立埋蔵文化財センター1992『徳光一県営ほ場整備事業関係埋蔵文化財発掘調査報告書一』
- 金三津英則1999「下老子笛川遺跡出土の「大地型」壺について」『富山考古学研究一紀要第2号一』
- 上野川勝2006「山林寺院」『季刊 考古学』第97号、雄山閣
- 久保智康1999「国府をめぐる山林寺院の展開—越前・加賀の場合—」『国宝と歴史の旅3 神護寺兼
師如来像の世界』朝日新聞社
- 久保智康2001「古代山林寺院の空間構成」『古代』第110号、早稲田大学考古学会
- 岐阜県1969『岐阜県史 通史編 中世』
- 岐阜県2001『わかりやすい岐阜県史』
- 岐阜県教育委員会2005『岐阜県中世城館跡総合調査報告書 第4集（飛騨地区・補遺）』
- 岐阜県教育委員会2007『改訂版 岐阜県遺跡地図』
- 岐阜県教育委員会・財団法人岐阜県教育文化財団文化財保護センター2007『岐阜県新発見考古速報
2007』
- 岐阜県郷土資料刊行会1969『飛騨資料 飛州志（付）飛州軍乱記 飛州千光寺記 飛州三沢記』
- 岐阜県郷土資料刊行会1970『飛騨資料 飛騨国中案内（増補完本）』
- 岐阜県文化財保護センター2010『ウバガ平遺跡・ウバガ平古墳群』
- 小松市教育委員会2003『八日市地方遺跡I－小松駅東地区画整理事業に係る埋蔵文化財発掘調査報
告書－』
- 財団法人愛知県埋蔵文化財センター1992『山中遺跡』
- 財団法人愛知県埋蔵文化財センター1994『朝日遺跡V』
- 財団法人愛知県埋蔵文化財センター2001『八王子遺跡』
- 財団法人金森公顕彰会1986『飛騨 金森史』
- 財団法人岐阜県文化財保護センター1993『阿弥陀堂遺跡・深作裏垣内遺跡』
- 財団法人岐阜県文化財保護センター1995『西乙原遺跡・勝更白山神社周辺遺跡』
- 財団法人岐阜県文化財保護センター1998『牛垣内遺跡』
- 財団法人岐阜県文化財保護センター2000『冬頭城跡・冬頭山崎1号古墳・冬頭山崎2号古墳・冬頭山
崎1号横穴』
- 財団法人岐阜県教育文化財団文化財保護センター2005『太江遺跡II』
- 財団法人岐阜県教育文化財団文化財保護センター2006『西ヶ洞廐寺跡・中野山越遺跡・中野大洞平遺
跡・大洞平5号古墳』
- 財団法人岐阜県教育文化財団文化財保護センター2007『野内遺跡D地区』
- 財団法人岐阜県教育文化財団文化財保護センター2007『赤保木遺跡』
- 財団法人岐阜県教育文化財団文化財保護センター2007『野内遺跡A地区』

- 財団法人岐阜県教育文化財団文化財保護センター2008『平成19年度 年報』
- 財団法人岐阜県教育文化財団文化財保護センター2009『野内遺跡B地区』
- 齊藤孝正2000『越州窯青磁と緑釉・灰釉陶器』至文堂
- 佐伯哲也2005『飛驒国における中世城館の概要』『岐阜県中世城館跡総合調査報告書第4集(飛驒地区・補遺)』岐阜県教育委員会
- 鈴鹿市考古博物館2008『八重垣神社遺跡(第6次) 現地説明会資料』
- 鈴鹿市考古博物館2009『八重垣神社遺跡(第6次) 鈴鹿市立神戸中学校移転改築に係る発掘報告書』
- 千田嘉博2003『戦国の城を歩く』千曲書房
- 千田嘉博2003『戦国期城郭の空間構成』『国立歴史民族博物館研究報告』第108集
- 高山市教育委員会1975『飛驒国分寺瓦窯発掘調査報告書』
- 高山市教育委員会1993『前平山稜遺跡・赤保木遺跡発掘調査報告書』
- 高山市教育委員会1999『三枝城跡発掘調査報告書』
- 谷口研語2007『飛驒 三木一族』新人物往来社
- 戸沢充則1994『縄文時代研究事典』東京堂出版
- 富田禮彦1873『斐太後風土記』
- 永井宏幸1995「沈線紋系土器について」『考古学フォーラム』7
- 永井宏幸2007『条痕紋系土器様式の研究』『愛知県埋蔵文化財センター研究紀要』第8号
- 日本貨幣商協同組合1984『日本貨幣型録1984年版』
- 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター1999『福井県埋蔵文化財調査報告第43集 大味地区遺跡群一坂井大味地区低コスト化水田農業大区画圃場整備業に伴う調査ー』
- 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター2005『福井県埋蔵文化財調査報告第81集 坂井兵庫地区遺跡群II—県営担い手育成整備事業に伴う調査ー』
- 上枝村史編纂委員会2000『上枝村史』
- 美浜町誌編纂委員会2009『わかさ美浜町誌 美浜の文化 第6巻 捜る・使う』
- 湯尻修平1983『柴山出村式土器について』『石川県考古学研究会誌第26号 北陸の考古学』石川考古学研究会
- 吉岡勲ほか1987『図説 飛驒の歴史』郷土出版社
- 森本一雄1987『定本 飛驒の城』郷土出版社

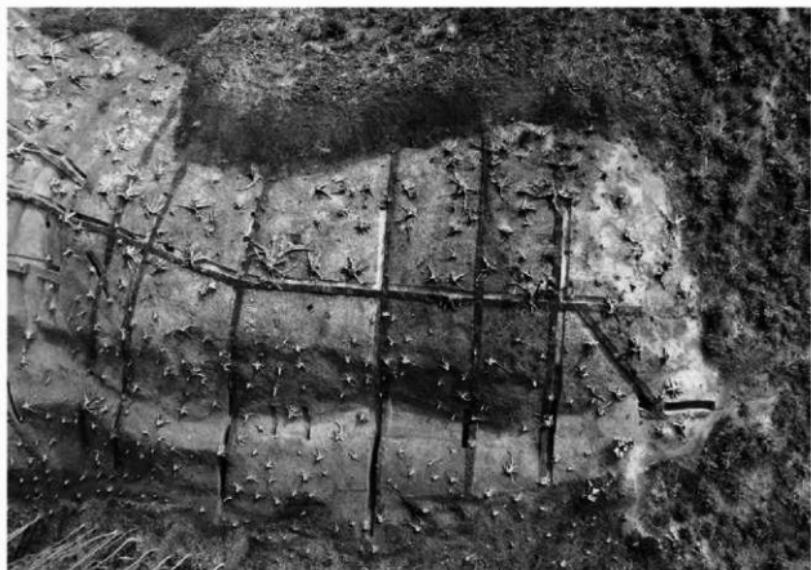
写 真 図 版



調査前状況（南から、平成16年12月撮影）



調査前状況（北東から、平成19年9月撮影、中央はウバガ平遺跡）



東曲輪I（上が南東）



堀切（北から）



横堀・土塁（北東から）



SII（北東から）



堀切（南から）



東曲輪Ⅱ（北から）



弥生土器（遺物5・6）出土状況①（東から）



弥生土器（遺物5・6）出土状況②（北から）



S I 2（南西から）



S I 3（南から）



北東尾根地区 全景（東から）



主郭下平場 断面（東から）



北東曲輪平場c（北東から）



北北曲輪（南西から）



灰釉陶器（遺物66・67）出土状況①（北西から）



灰釉陶器（遺物66・67）出土状況②（北西から）



S A 1（北東から）



S 1 4（北西から）



S 1 7（東から）



S 1 8（東から）



S 1 9（南から）



北東斜面平場群（南西から）



北東尾根南斜面（東から）



北東尾根南斜面（南から）



北東山麓地区 平場①～③（東から）



SH1 全景（西から）



SH1-P1 断面（東から）



SH1-P2 断面（西から）



SH1-P3 断面（東から）



SH1-P4 断面（西から）

図版8



S H 1 - P 5 断面（東から）



S H 1 - P 7 断面（東から）



S H 1 - P 8 断面（西から）



雁股鎌（遺物206）出土状況①（南西から）



雁股鎌（遺物206）出土状況②（西から）



須恵器托（遺物195）出土状況（西から）



北東山麓平場①からの眺望（西から）



S B 1 検出状況（北から）



S B 1 床面検出状況（北から）



S B 1 断面（東から）



SB 1-K 2 (西から)



SB 1 内カマド跡 (北東から)



SB 1 内カマド跡 遺物出土状況 (北東から)



SB 1 内カマド跡 石組み (北東から)



SB 1 内カマド跡 煙道部 (南から)



SB 1 内カマド跡 断面① (北東から)



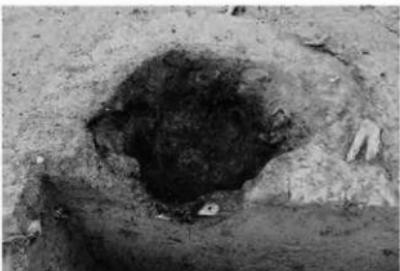
SB 1 内カマド跡 断面② (北東から)



SF 16 検出状況 (南から)



S F 16 断面（東から）



S F 16 完掘状況（東から）



S K 35（南西から）



北尾根地区造成地 断面（南から）



北尾根地区 全景（南東から）



5



6



65



67



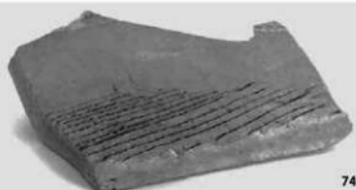
66



72

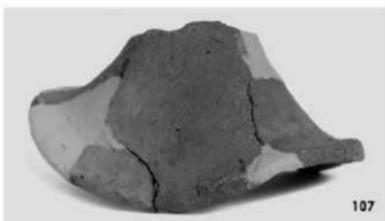


68

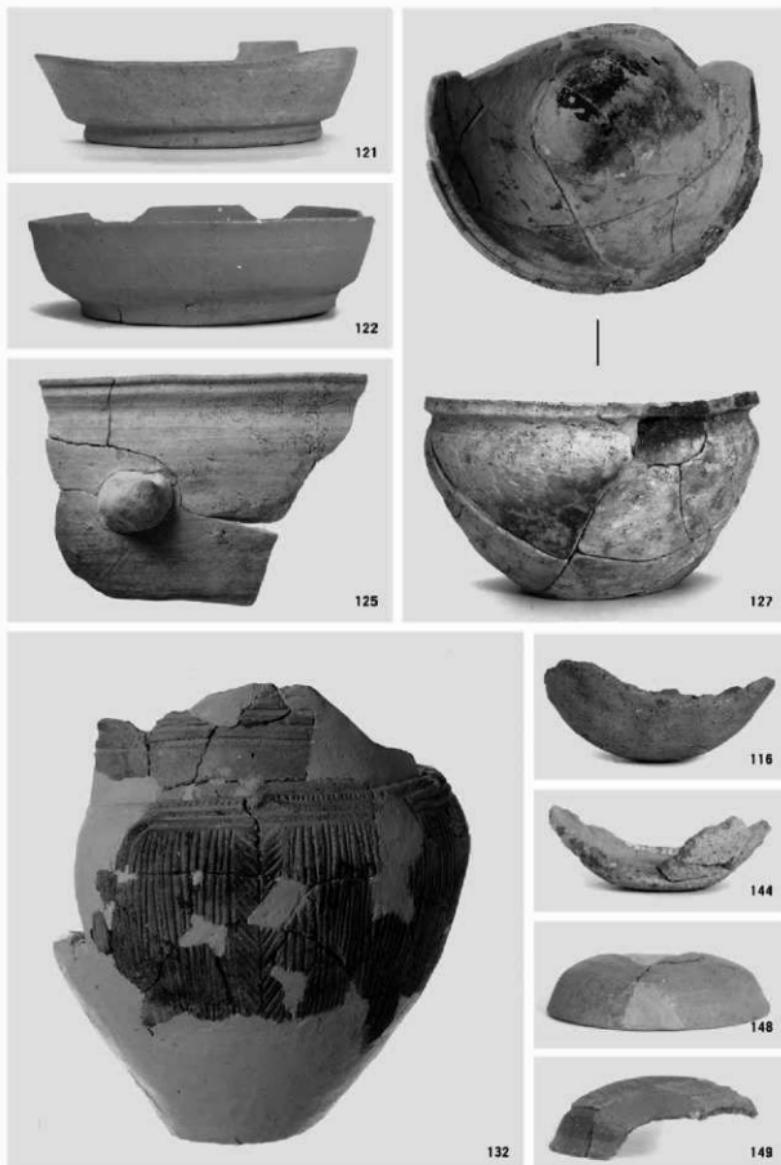


74

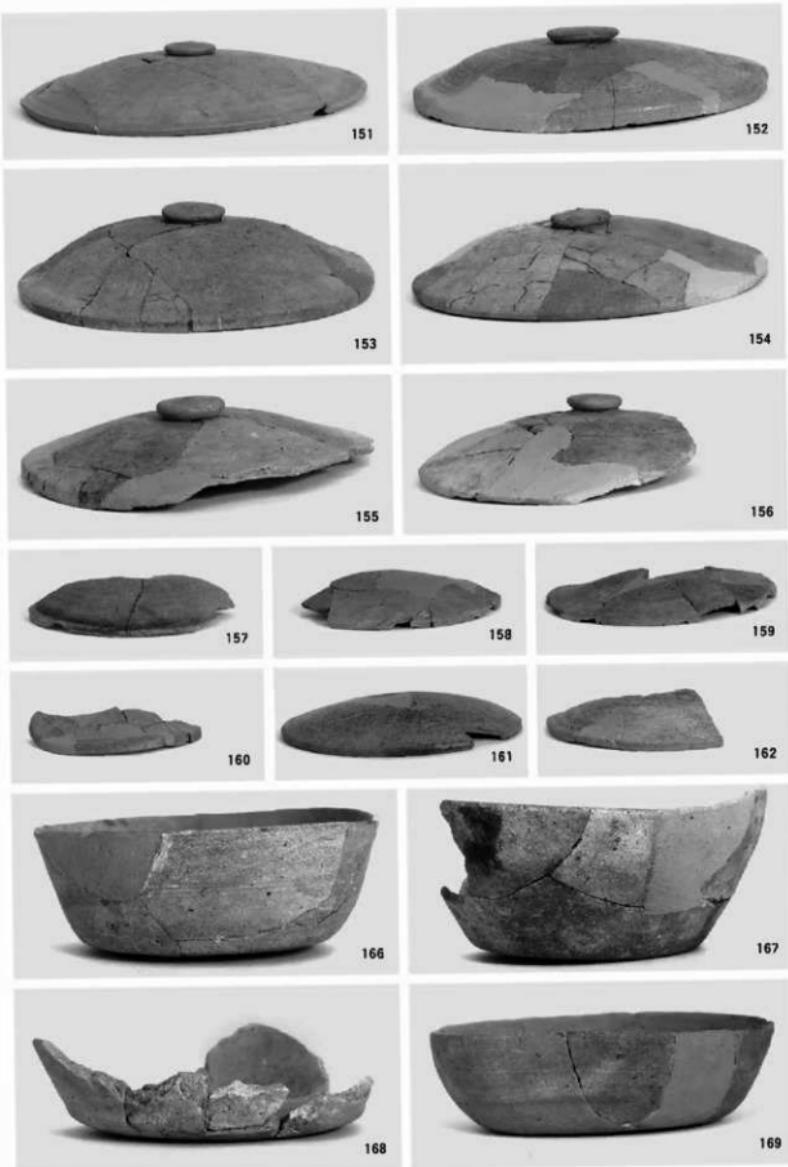
東尾根・北東尾根地区出土遺物



北東山麓地区SB1出土遺物（1）



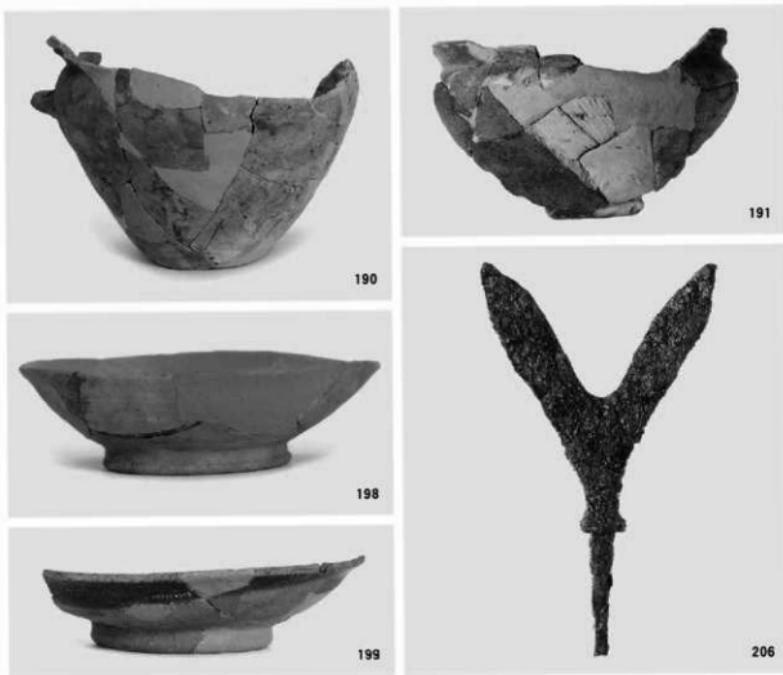
北東山麓地區 S B 1 出土遺物 (2)、SK38出土遺物、包含層出土遺物 (1)



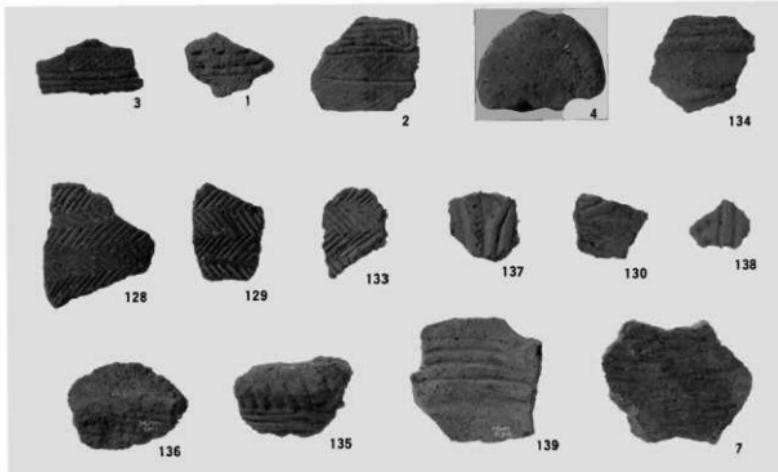
北东山麓地区包含层出土遗物（2）



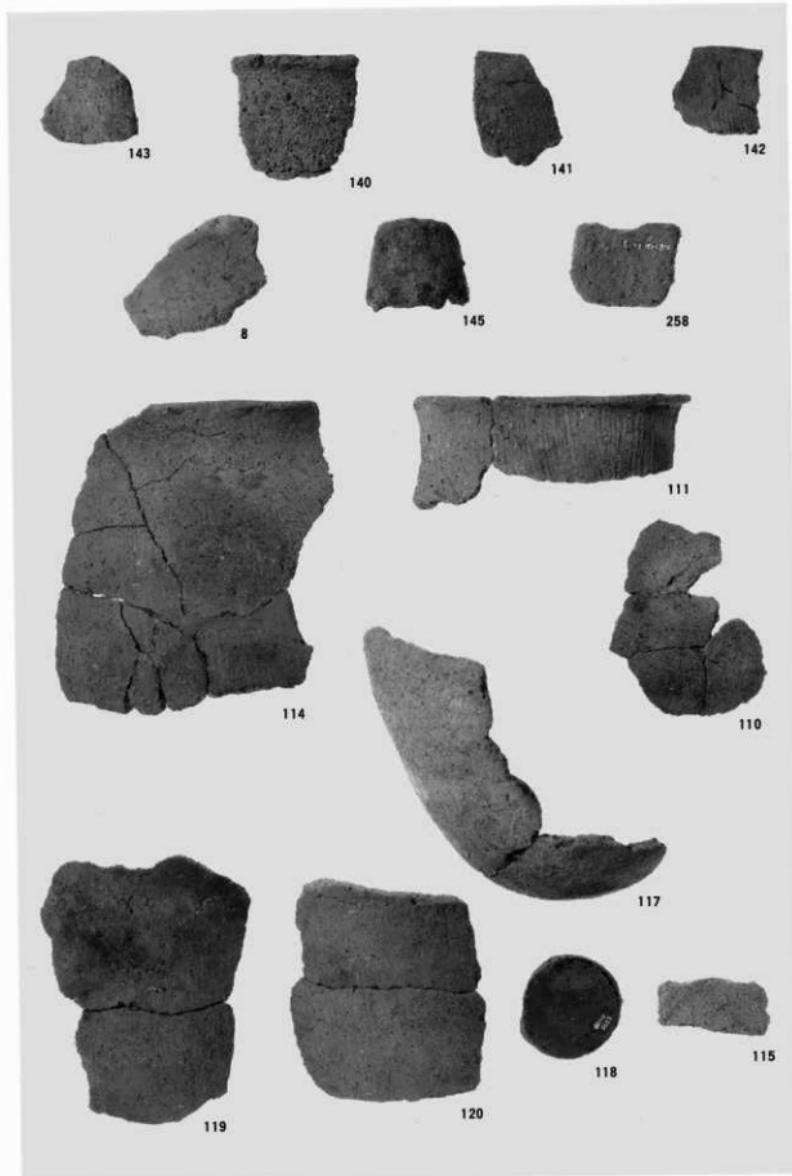
北東山墓地地区包含層出土遺物（3）



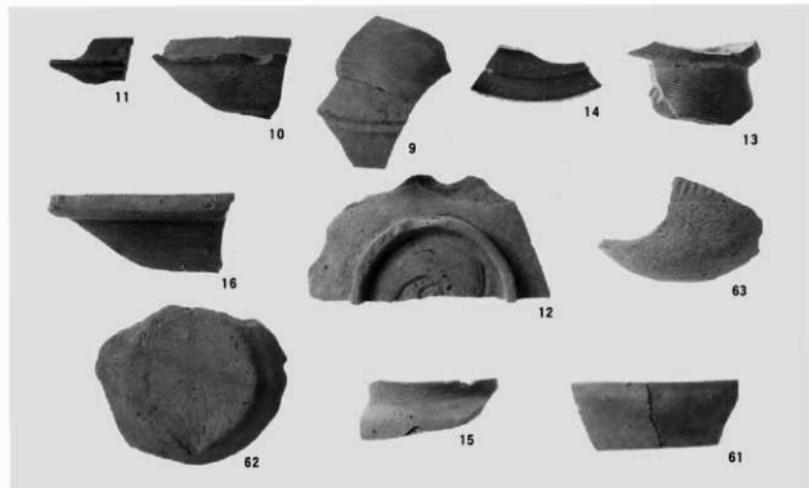
北东山麓地区包含层出土遗物（4）



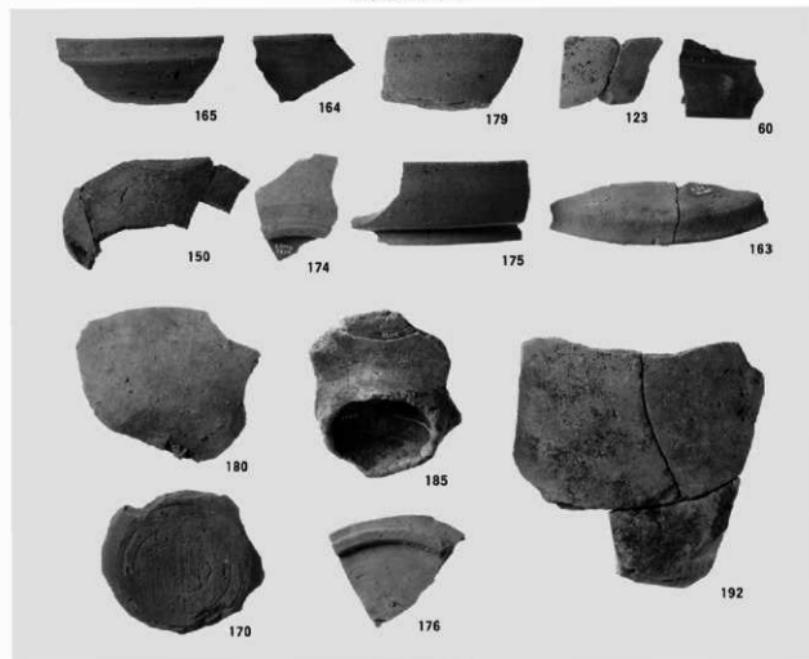
绳文土器・弥生土器破片



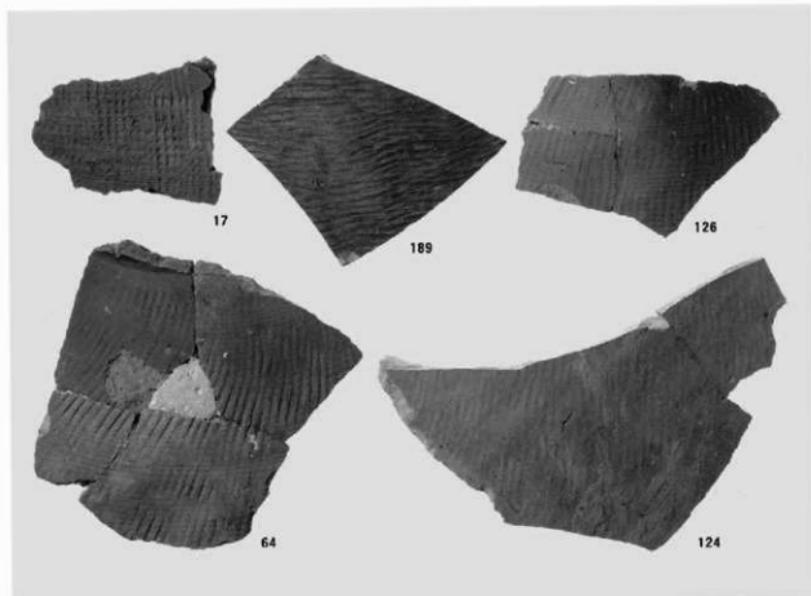
土器破片



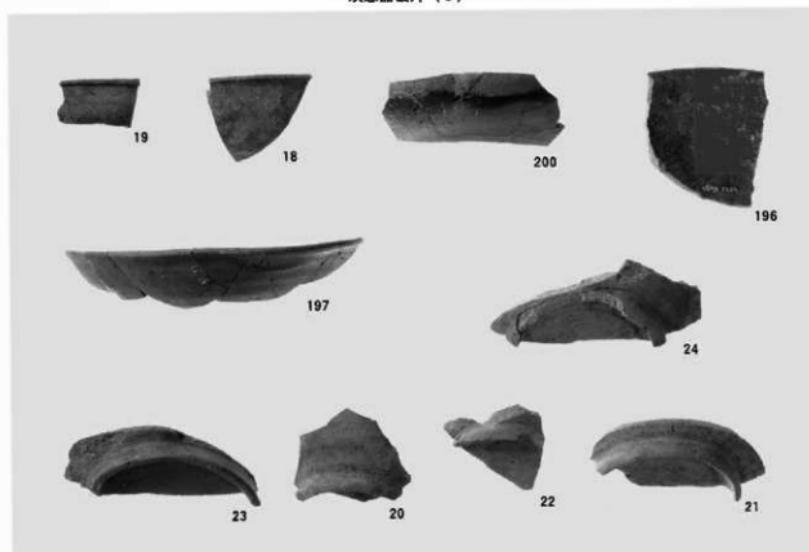
須恵器破片（1）



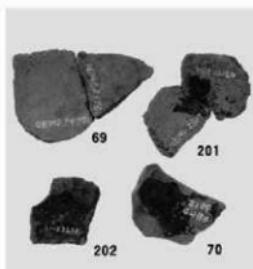
須恵器破片（2）



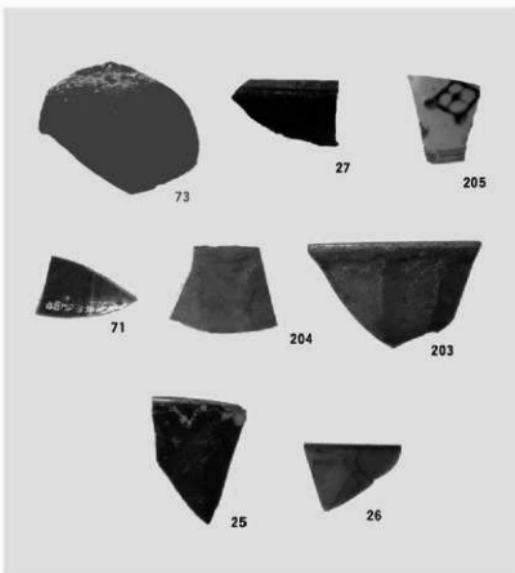
須惠器破片（3）



灰陶器破片

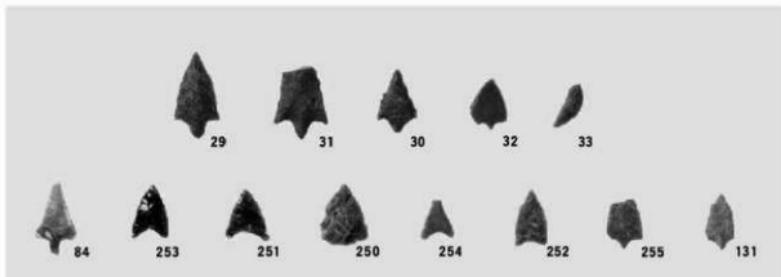
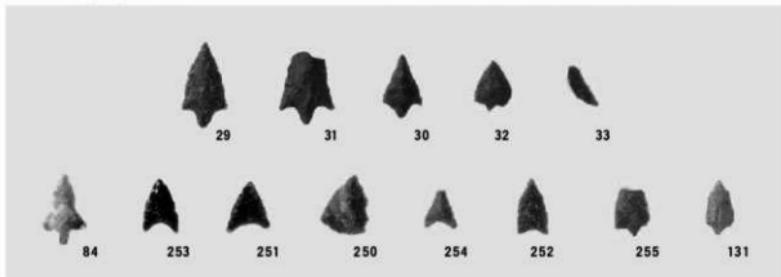


土師質土器



土師器（暗文土器）

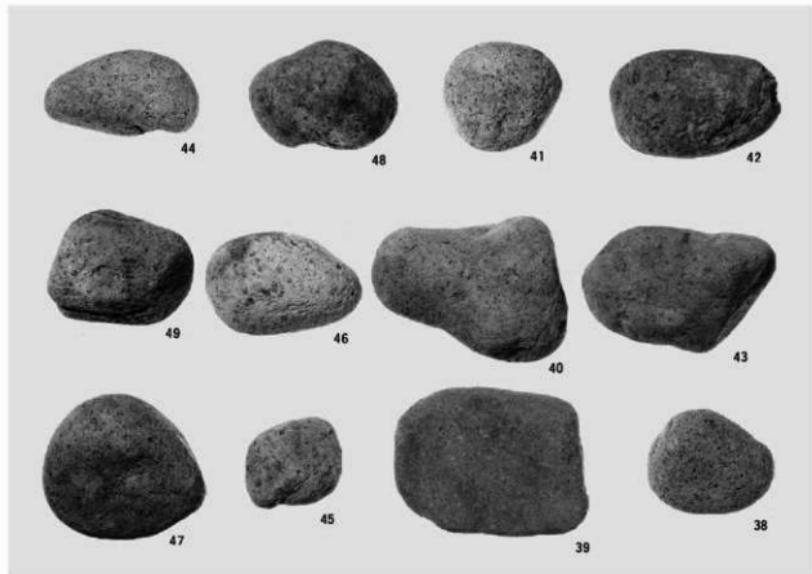
古瀬戸系施釉陶器・近世陶磁器・輸入磁器



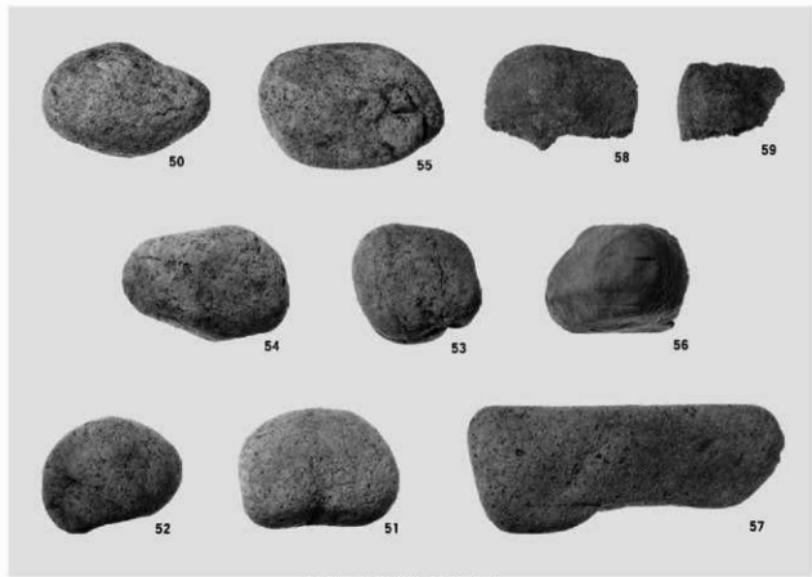
石鏃（上：表面、下：裏面）



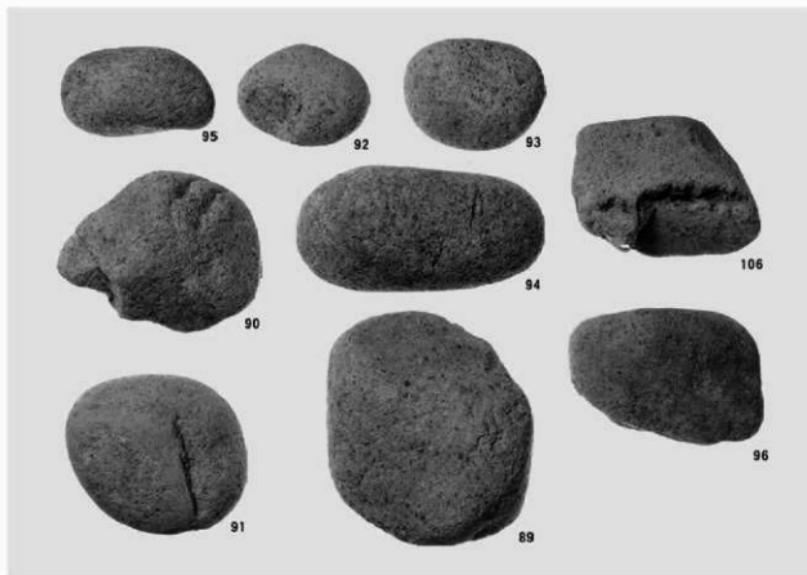
砾石



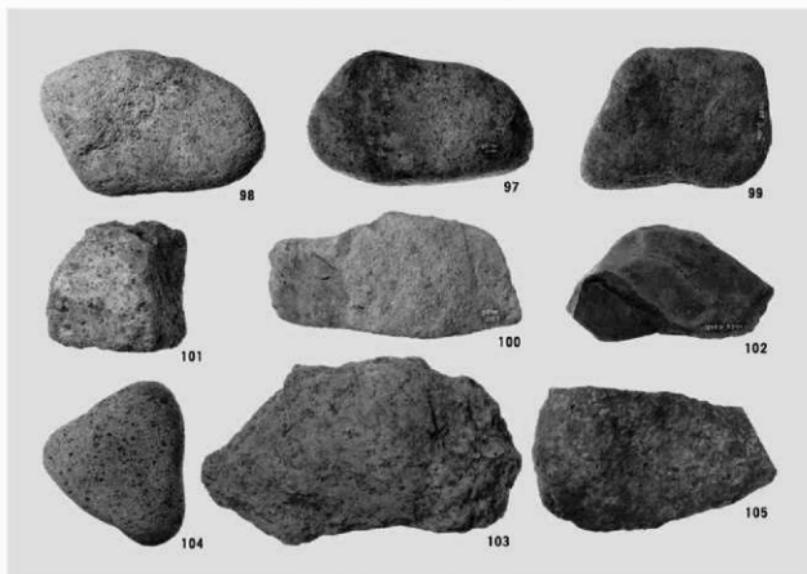
飛縄 東尾根地区出土 (1)



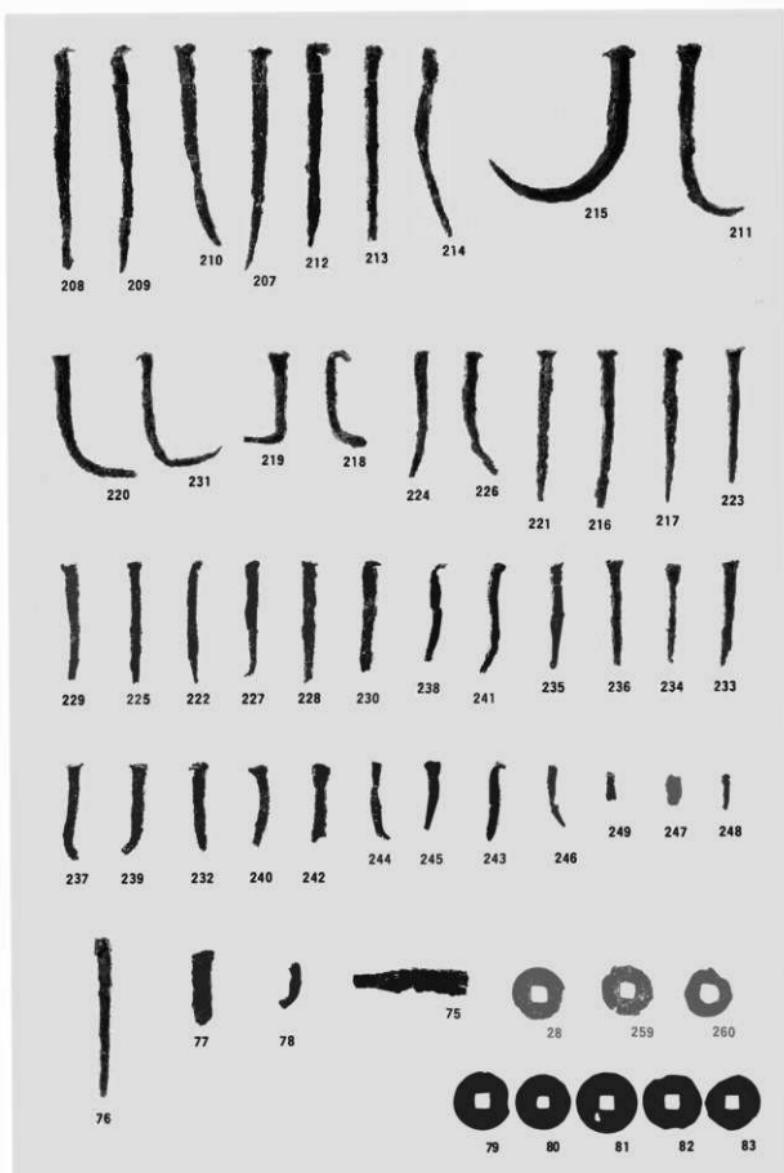
飛縄 東尾根地区出土 (2)



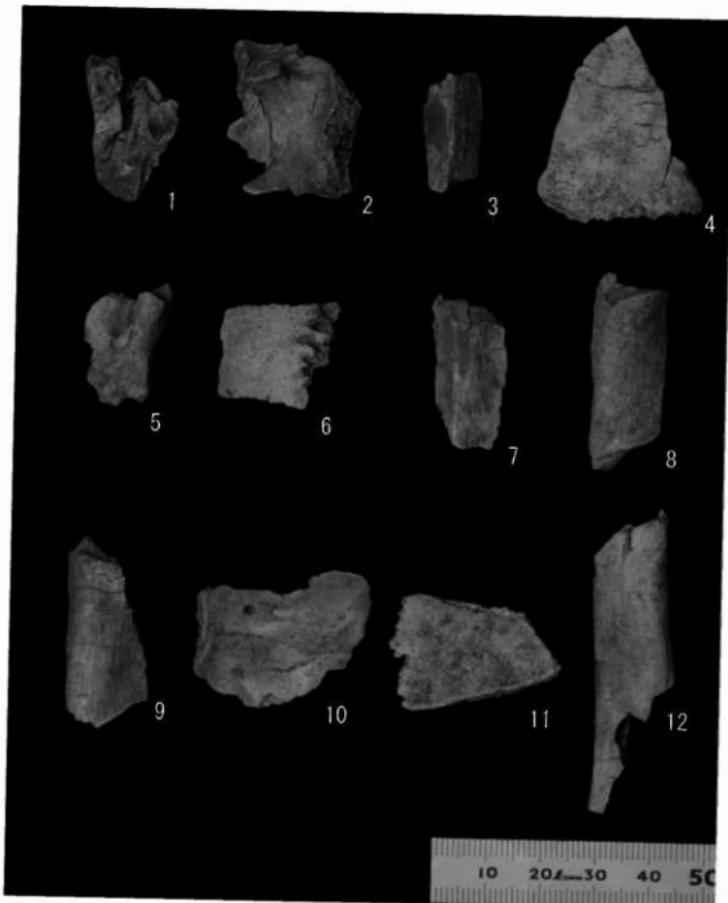
飛礫 北東尾根地区出土 (1)



飛礫 北東尾根地区出土 (2)



鉄釘・刀子・古銭



S Z 1~3 出土人骨

報告書抄録

ふりがな 書名	みえだじょうあと 三枝城跡					
シリーズ名	岐阜県文化財保護センター調査報告書					
シリーズ番号	第116集					
編著者名	小瀬忠司、中澤正樹、藤田英博、相馬重典					
編集機関	岐阜県文化財保護センター					
所在地	〒502-0003 岐阜市三田洞東1-26-1 TEL 058-237-8550					
発行年月日	西暦2011年3月9日					
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	北緯	東経	調査期間 調査面積	調査原因
三枝城跡	岐阜県 高山市 上切町	21203	06090	36° 10' 00"	137° 40"	20061003~ 20061128 20080513~ 20081129 9,510m ²
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項	
三枝城跡	城館跡	弥生時代 古代 中世	土坑（弥生時代） 礎石建物跡（古代） 竪穴住居跡（古代） 平場群（古代・中世） 堀切（中世） 横堀・土塁（中世） 柵跡（中世） 集石遺構（中世） 焼土堆積遺構（中世）	弥生土器 須恵器 土師器 灰釉陶器 青磁 土師質土器 古瀬戸系施釉陶器 鉄釘 鉄製雁股轍 古錢 砥石 飛碟	戦国時代の山城の 曲輪を確認し、飛 碟の集積や柵跡を 検出した。弥生時 代前期の壺1個体 が良好な状態で出 土した。古代の山 林寺院跡とみられ る平場群を検出し た。	
要約	三枝城跡は、飛驒の戦国大名三木氏にゆかりのある山城跡である。調査の結果、主郭の東方において東曲輪I・東曲輪IIを、主郭北東において北東曲輪を確認した。眺望に恵まれた東曲輪I・東曲輪IIは主に監視所としての役割を担ったのに対し、主郭に近い北東曲輪は防御機能に主眼がおかれたと考えられる。城内で検出した遺構には、飛碟の集積や柵跡、それに狼煙場跡の可能性がある焼土堆積遺構がみられる。 山城関連以外では、土坑内から弥生時代前期の柴山出村系土器の残存状態良好な個体が出土したことが注目される。また、山麓において検出した古代の平場群は、出土遺物に仏具類や雁股轍がみられることなどから、山林寺院跡と考えられる。					

岐阜県文化財保護センター調査報告書 第116集

三枝城跡

2011年3月9日

編集・発行 岐阜県文化財保護センター

岐阜市三田洞東1-26-1

印 刷 有限会社 もとすいんさつ